美沢川流域の遺跡群XVI

——新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

第2分冊

美々8遺跡低湿部

平成3年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

美沢川流域の遺跡群XVI

——新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

第2分冊

美々8遺跡低湿部

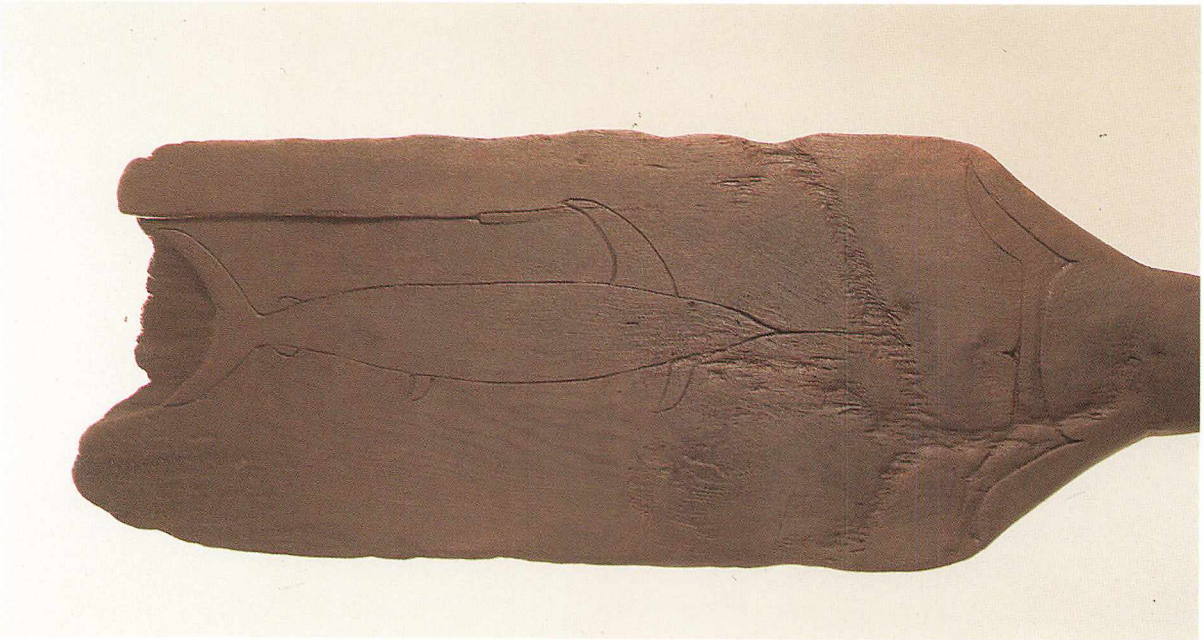
平成3年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

1　A′地区回転式離頭銛中柄部と魚突き鉤台部

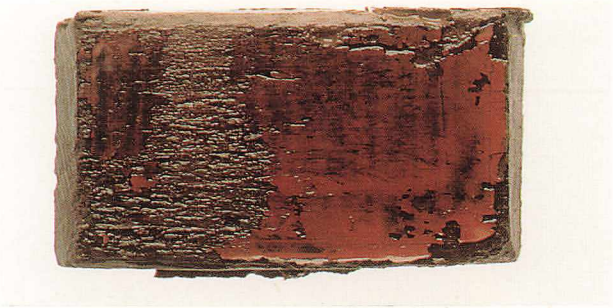
口絵　2

1　A′地区早櫂出土状況



2　メカジキの線刻画が描かれた早櫂水掻部

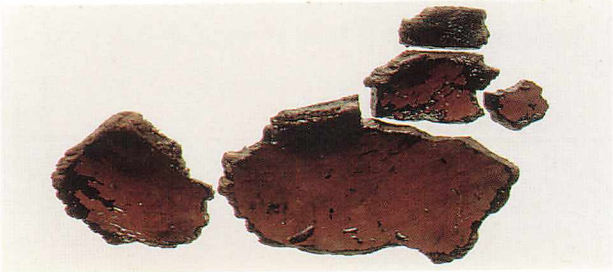
1　樹皮製鞘と山刀柄



A′429

CI黒
44

CI黒
45



同上
内面

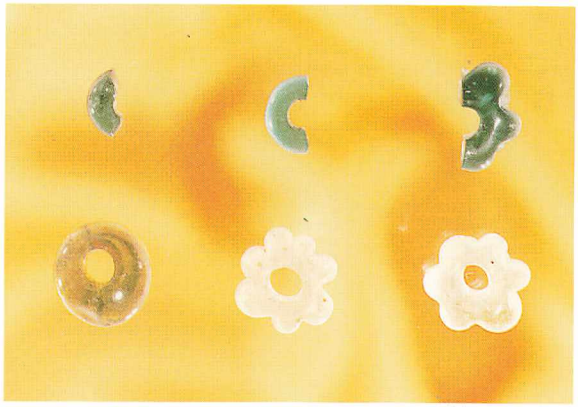
同上
底

2　漆塗椀・鉢・漆器類

口絵　4

1　C地区Ⅰ黒層漆塗椀(46)

2　A′地区伊万里焼碗（16）



3　A′地区ガラス玉（1～6）

4　A′地区信楽焼擂鉢（15）

5　キセル雁首・吸口

目　　次

口　絵
記号などの説明
V　美々8遺跡低湿部の調査（平成3年度）
1　調査の概要 …… 1
(1)　調査要項 …… 1
(2)　調査体制 …… 1
(3)　調査の経緯 …… 1
2　遺跡の位置と環境 …… 3
(1)　位置と環境 …… 3
(2)　遺跡の層序 …… 3
3　調査と整理の方法 …… 7
(1)　発掘区の設定 …… 7
(2)　調査の方法 …… 8
(3)　整理と保管の方法 …… 12
(4)　有機質遺物の保存処理 …… 15
(5)　金属製品の保存処理 …… 16
(6)　各種分析と試料のサンプリング …… 16
4　調査結果の概要 …… 17
5　A′地区の調査 …… 23
(1)　遺構とその遺物 …… 23
1)　建材群（木組） …… 23
2)　双礫・集石 …… 40
(2)　包含層の遺物 …… 41
1)　土器・陶磁器 …… 41
2)　石器・石製品、礫 …… 42
3)　ガラス製品 …… 52
4)　金属製品 …… 53
5)　木製品・樹皮製品・繊維製品 …… 56
6)　自然遺物 …… 132
6　B地区の調査 …… 133
(1)　包含層の遺物 …… 133
1)　土器 …… 133
2)　石器・礫 …… 133
3)　金属製品 …… 136
4)　木製品 …… 137
5)　自然遺物 …… 143

7　C地区の調査 ……144
(1)　表土層の遺構 ……144
1)　杭穴 ……144
(2)　第0黒色土層の遺構とその遺物 ……144
1)　建物跡 ……144
2)　木組 ……147
3)　立杭 ……147
4)　杭穴 ……153
5)　集石 ……153
6)　焼土 ……153
7)　クルミ集中 ……154
8)　炭化物集中 ……154
(3)　第0黒色土層の遺物 ……156
1)　石器・石製品、礫 ……156
2)　金属製品 ……156
3)　木製品・樹皮製品 ……157
4)　自然遺物 ……167
(4)　第Ⅰ黒色土層の遺構とその遺物 ……168
1)　立杭 ……168
2)　杭穴 ……168
3)　双礫 ……173
4)　集石 ……173
5)　炭化物集中 ……173
(5)　第Ⅰ黒色土層の遺物 ……175
1)　土器 ……175
2)　石器・石製品、礫 ……175
3)　金属製品 ……181
4)　木製品 ……181
5)　自然遺物 ……192
(6)　第Ⅱ黒色土層の遺物 ……192
8　各種分析 ……193
(1)　美々8遺跡低湿部出土の動物遺存体　千歳市教育委員会　高橋　理 ……193
(2)　植物遺存体について ……195
(3)　金属製品について ……196
(4)　樹種同定 ……197
9　まとめ ……199
(1)　遺構 ……199
(2)　遺物 ……200
引用・参考文献 ……202
写真図版
Ⅴ　美々8遺跡低湿部の調査 ……203

挿図目次

図Ⅴ－ 1　低湿部の位置 …… 2
図Ⅴ－ 2　A′・C地区地形図、土層断面位置図、土層模式図…… 4
図Ⅴ－ 3　A′・C地区土層断面図 …… 5
図Ⅴ－ 4　発掘区の設定…… 7
図Ⅴ－ 5　調査区現況図…… 9
図Ⅴ－ 6　安全対策と機材の配置…… 10
図Ⅴ－ 7　クラムシェル調査…… 11
図Ⅴ－ 8　水洗・保管・搬送状況…… 13
図Ⅴ－ 9　土層剝取りと保存処理…… 14
図Ⅴ－ 10　B地区遺物分布図…… 18
図Ⅴ－ 11　A′・C地区遺構位置図 …… 19
図Ⅴ－ 12　A′・C地区遺物分布図 …… 21
図Ⅴ－ 13　A′地区建材群出土状況図 …… 25
図Ⅴ－ 14　A′地区建材 (1) ……27
図Ⅴ－ 15　A′地区建材 (2)…… 29
図Ⅴ－ 16　A′地区建材 (3)…… 30
図Ⅴ－ 17　A′地区建材 (4)…… 31
図Ⅴ－ 18　A′地区建材 (5)…… 32
図Ⅴ－ 19　A′地区建材 (6)…… 33
図Ⅴ－ 20　A′地区建材 (7)…… 34
図Ⅴ－ 21　A′地区建材 (8)…… 35
図Ⅴ－ 22　A′地区建材 (9)…… 36
図Ⅴ－ 23　A′地区建材 (10)…… 37
図Ⅴ－ 24　A′地区双礫・集石 …… 40
図Ⅴ－ 25　A′地区土器・陶磁器 …… 41
図Ⅴ－ 26　A′地区石器・石製品 …… 43
図Ⅴ－ 27　A′地区礫グラフ・表 (1)…… 45
図Ⅴ－ 28　A′地区礫グラフ・表 (2)…… 46
図Ⅴ－ 29　A′地区礫グラフ・表 (3)…… 47
図Ⅴ－ 30　A′地区礫グラフ・表 (4)…… 48
図Ⅴ－ 31　A′地区礫グラフ・表 (5)…… 49
図Ⅴ－ 32　A′地区礫グラフ・表 (6)…… 50
図Ⅴ－ 33　A′地区礫グラフ・表 (7)…… 51
図Ⅴ－ 34　A′地区ガラス玉 …… 52
図Ⅴ－ 35　A′地区金属製品 (1)…… 54
図Ⅴ－ 36　A′地区金属製品 (2)…… 55
図Ⅴ－ 37　A′地区木製品 (1)…… 63
図Ⅴ－ 38　A′地区木製品 (2)…… 64
図Ⅴ－ 39　A′地区木製品 (3)…… 65
図Ⅴ－ 40　A′地区木製品 (4)…… 66
図Ⅴ－ 41　A′地区木製品 (5)…… 67
図Ⅴ－ 42　A′地区木製品 (6)…… 68
図Ⅴ－ 43　A′地区木製品 (7)…… 69
図Ⅴ－ 44　A′地区木製品 (8)…… 70
図Ⅴ－ 45　A′地区木製品 (9)…… 71
図Ⅴ－ 46　A′地区木製品 (10)…… 72
図Ⅴ－ 47　A′地区木製品 (11)…… 73
図Ⅴ－ 48　A′地区木製品 (12)…… 74
図Ⅴ－ 49　A′地区木製品 (13)…… 75
図Ⅴ－ 50　A′地区木製品 (14)…… 76
図Ⅴ－ 51　A′地区木製品 (15)…… 77
図Ⅴ－ 52　A′地区木製品 (16)…… 78
図Ⅴ－ 53　A′地区木製品 (17)…… 79
図Ⅴ－ 54　A′地区木製品 (18)…… 80
図Ⅴ－ 55　A′地区木製品 (19)…… 81
図Ⅴ－ 56　A′地区木製品 (20)…… 82
図Ⅴ－ 57　A′地区木製品 (21)…… 83
図Ⅴ－ 58　A′地区木製品 (22)…… 84
図Ⅴ－ 59　A′地区木製品 (23)…… 85
図Ⅴ－ 60　A′地区木製品 (24)…… 86
図Ⅴ－ 61　A′地区木製品 (25)…… 87
図Ⅴ－ 62　A′地区木製品 (26)…… 88
図Ⅴ－ 63　A′地区木製品 (27)…… 89
図Ⅴ－ 64　A′地区木製品 (28)…… 90
図Ⅴ－ 65　A′地区木製品 (29)…… 91
図Ⅴ－ 66　A′地区木製品 (30)…… 92
図Ⅴ－ 67　A′地区木製品 (31)…… 93
図Ⅴ－ 68　A′地区木製品 (32)…… 94
図Ⅴ－ 69　A′地区木製品 (33)…… 95
図Ⅴ－ 70　A′地区木製品 (34)…… 96
図Ⅴ－ 71　A′地区木製品 (35)…… 97

図Ⅴ－ 72　A′地区木製品 (36) …… 98
図Ⅴ－ 73　A′地区木製品 (37) …… 99
図Ⅴ－ 74　A′地区木製品 (38) ……100
図Ⅴ－ 75　A′地区木製品 (39) ……101
図Ⅴ－ 76　A′地区木製品 (40) ……102
図Ⅴ－ 77　A′地区木製品 (41) ……103
図Ⅴ－ 78　A′地区木製品 (42) ……104
図Ⅴ－ 79　A′地区木製品 (43) ……105
図Ⅴ－ 80　A′地区木製品 (44) ……106
図Ⅴ－ 81　A′地区木製品 (45) ……107
図Ⅴ－ 82　A′地区木製品 (46) ……108
図Ⅴ－ 83　A′地区木製品 (47) ……109
図Ⅴ－ 84　A′地区木製品 (48) ……110
図Ⅴ－ 85　A′地区木製品 (49) ……111
図Ⅴ－ 86　A′地区木製品 (50) ……112
図Ⅴ－ 87　A′地区木製品 (51) ……113
図Ⅴ－ 88　A′地区繊維製品・樹皮製品 …114
図Ⅴ－ 89　A′地区樹皮製品 ……115
図Ⅴ－ 90　B地区石器 ……133
図Ⅴ－ 91　B地区礫グラフ・表 (1) ……134
図Ⅴ－ 92　B地区礫グラフ・表 (2) ……135
図Ⅴ－ 93　B地区金属製品 ……136
図Ⅴ－ 94　B地区木製品 (1) ……138
図Ⅴ－ 95　B地区木製品 (2) ……139
図Ⅴ－ 96　B地区木製品 (3) ……140
図Ⅴ－ 97　B地区木製品 (4) ……141
図Ⅴ－ 98　C地区表土層遺構位置図 ……145
図Ⅴ－ 99　C地区0黒層遺構位置図 ……146
図Ⅴ－100　C地区0黒層立杭断面図 ……147
図Ⅴ－101　C地区0黒層立杭 (1) ……148
図Ⅴ－102　C地区0黒層立杭 (2) ……149
図Ⅴ－103　C地区0黒層立杭 (3) ……150
図Ⅴ－104　C地区0黒層集石 ……153
図Ⅴ－105　C地区0黒層焼土 ……154
図Ⅴ－106　C地区0黒層石器・石製品 …155
図Ⅴ－107　C地区0黒層礫グラフ・表 …155
図Ⅴ－108　C地区0黒層金属製品 ……156
図Ⅴ－109　C地区0黒層木製品 (1) ……159
図Ⅴ－110　C地区0黒層木製品 (2) ……160
図Ⅴ－111　C地区0黒層木製品 (3) ……161
図Ⅴ－112　C地区0黒層木製品 (4) ……162
図Ⅴ－113　C地区0黒層木製品 (5) ……163
図Ⅴ－114　C地区0黒層樹皮製品 ……164
図Ⅴ－115　C地区Ⅰ黒$_1$層立杭断面図 ……168
図Ⅴ－116　C地区Ⅰ黒$_1$層遺構位置図 ……169
図Ⅴ－117　C地区Ⅰ黒$_2$層遺構位置図 ……170
図Ⅴ－118　C地区Ⅰ黒層立杭 ……171
図Ⅴ－119　C地区Ⅰ黒層双礫・集石 ……174
図Ⅴ－120　C地区Ⅰ黒層土器 ……175
図Ⅴ－121　C地区Ⅰ黒層石製品 ……176
図Ⅴ－122　C地区Ⅰ黒層礫グラフ・表 (1) 177
図Ⅴ－123　C地区Ⅰ黒層礫グラフ・表 (2) 178
図Ⅴ－124　C地区Ⅰ黒層金属製品 (1) ……179
図Ⅴ－125　C地区Ⅰ黒層金属製品 (2) ……180
図Ⅴ－126　C地区Ⅰ黒層木製品 (1) ……183
図Ⅴ－127　C地区Ⅰ黒層木製品 (2) ……184
図Ⅴ－128　C地区Ⅰ黒層木製品 (3) ……185
図Ⅴ－129　C地区Ⅰ黒層木製品 (4) ……186
図Ⅴ－130　C地区Ⅰ黒層木製品 (5) ……187
図Ⅴ－131　C地区Ⅰ黒層木製品 (6) ……188
図Ⅴ－132　C地区Ⅰ黒層漆器(右下は
A′地区) ……189
図Ⅴ－133　C地区Ⅱ黒層土器・石器 ……192

8　各種分析 (1)　写真1　0F－1出土動物遺存体 ……194

表　目　次

表Ⅴ－ 1　A′地区掲載建材 (1) …… 38
表Ⅴ－ 2　A′地区掲載建材 (2) …… 39
表Ⅴ－ 3　A′地区双礫・集石計測値 …… 40
表Ⅴ－ 4　A′地区掲載土器・陶磁器 …… 42
表Ⅴ－ 5　A′地区掲載石器・石製品 …… 42
表Ⅴ－ 6　A′地区掲載ガラス製品 …… 52
表Ⅴ－ 7　A′地区掲載金属製品 …… 55
表Ⅴ－ 8　A′地区掲載木製品 (1) ……116
表Ⅴ－ 9　A′地区掲載木製品 (2) ……117
表Ⅴ－10　A′地区掲載木製品 (3) ……118
表Ⅴ－11　A′地区掲載木製品 (4) ……119
表Ⅴ－12　A′地区掲載木製品 (5) ……120
表Ⅴ－13　A′地区掲載木製品 (6) ……121
表Ⅴ－14　A′地区掲載木製品 (7) ……122
表Ⅴ－15　A′地区掲載木製品 (8) ……123
表Ⅴ－16　A′地区掲載木製品 (9) ……124
表Ⅴ－17　A′地区掲載木製品 (10) ……125
表Ⅴ－18　A′地区掲載木製品 (11) ……126
表Ⅴ－19　A′地区掲載木製品 (12) ……127
表Ⅴ－20　A′地区掲載木製品 (13) ……128
表Ⅴ－21　A′地区掲載木製品 (14) ……129
表Ⅴ－22　A′地区掲載木製品 (15) ……130
表Ⅴ－23　A′地区掲載木製品 (16) ……131
表Ⅴ－24　A′地区自然遺物 ……132
表Ⅴ－25　B地区掲載石器 ……133
表Ⅴ－26　B地区掲載金属製品 ……136
表Ⅴ－27　B地区掲載木製品 ……142
表Ⅴ－28　B地区自然遺物 ……143
表Ⅴ－29　C地区０黒層掲載立杭 ……151
表Ⅴ－30　C地区０黒層立杭 ……152
表Ⅴ－31　C地区０黒層杭穴 ……152
表Ⅴ－32　C地区０黒層集石計測値 ……153
表Ⅴ－33　C地区０黒層炭化物集中 ……154
表Ⅴ－34　C地区０黒層掲載石器・石製品 155
表Ⅴ－35　C地区０黒層掲載金属製品 ……156
表Ⅴ－36　C地区０黒層掲載木製品 ……165
表Ⅴ－37　C地区０黒層掲載木製品・樹皮製品 ……166
表Ⅴ－38　C地区０黒層自然遺物 ……167
表Ⅴ－39　C地区Ⅰ黒層掲載立杭 ……172
表Ⅴ－40　C地区Ⅰ黒層立杭 ……172
表Ⅴ－41　C地区Ⅰ黒層杭穴 ……172
表Ⅴ－42　C地区Ⅰ黒層炭化物集中 ……173
表Ⅴ－43　C地区Ⅰ黒層双礫・集石計測値 174
表Ⅴ－44　C地区Ⅰ黒層掲載土器 ……175
表Ⅴ－45　C地区Ⅰ黒層掲載石器・石製品 175
表Ⅴ－46　C地区Ⅰ黒層掲載金属製品 ……179
表Ⅴ－47　C地区Ⅰ黒層掲載木製品 ……190
表Ⅴ－48　C地区Ⅰ黒層掲載木製品・漆器 ……191
表Ⅴ－49　C地区Ⅰ黒層自然遺物 ……192
表Ⅴ－50　C地区Ⅱ黒層掲載土器・石器 …192

8　各種分析 (1)　表１　C地区０F－１出土動物遺存体 ……194
8　各種分析 (2)　表１　美々８遺跡遺構出土植物遺存体 ……195

口　絵　目　次

口絵１－１　A′地区回転式離頭銛中柄部と魚突き鉤台部
口絵２－１　A′地区早櫂出土状況
口絵２－２　メカジキの線刻画が描かれた早櫂水掻部
口絵３－１　樹皮製鞘・山刀柄
口絵３－２　漆塗椀・鉢・漆器類
口絵４－１　C地区Ⅰ黒層漆塗椀(46)
口絵４－２　A′地区伊万里焼碗(16)
口絵４－３　A′地区ガラス玉(1～6)
口絵４－４　A′地区信楽焼擂鉢(15)
口絵４－５　キセル雁首・吸口

図 版 目 次

V　美々8遺跡低湿部の調査

図版V－ 1－1　低湿部調査前状況 ……205
図版V－ 1－2　低湿部調査状況 ……205
図版V－ 2－1　調査準備工事状況 ……206
図版V－ 2－2　低湿部埋戻し状況 ……206
図版V－ 3－1　A′地区クラムシェルによる包含層採取 ……207
図版V－ 3－2　A′地区クラムシェルによる包含層採取 ……207
図版V－ 3－3　A′地区クラムシェルによる包含層堆積 ……207
図版V－ 4－1　A′地区クラムシェルにより採取した包含層の調査状況 ……208
図版V－ 4－2　A′地区完掘状況 ……208
図版V－ 5－1　A′地区人力調査状況 ……209
図版V－ 5－2　A′地区土層断面 ……209
図版V－ 5－3　A′地区土層断面 ……209
図版V－ 6－1　A′地区建材群調査状況 …210
図版V－ 6－2　A′地区建材群調査状況 …210
図版V－ 6－3　A′地区建材群調査状況 …210
図版V－ 6－4　A′地区建材 (1) ……210
図版V－ 7－1　A′地区建材 (2) ……211
図版V－ 8－1　A′地区建材 (3) ……212
図版V－ 9－1　A′地区建材 (4) ……213
図版V－10－1　A′地区建材 (5) ……214
図版V－11－1　A′地区土器 ……215
図版V－11－2　A′地区土器 ……215
図版V－11－3　A′地区土器 ……215
図版V－12－1　A′地区石器・石製品 ……216
図版V－13－1　A′地区鉄鍋(10)出土状況 …217
図版V－13－2　A′地区鉄鍋 ……217
図版V－14－1　A′地区鉄製品 ……218
図版V－14－2　A′地区銭貨 ……218
図版V－14－3　A′地区キセル雁首・吸口 ……218
図版V－14－4　A′地区刀装具・銅製品 …218
図版V－14－5　A′地区釘・薬莢 ……218
図版V－14－6　A′地区木製品出土状況 …218
図版V－15－1　A′地区調査状況 ……219
図版V－15－2　A′地区櫂(1)出土状況 ……219
図版V－15－3　A′地区回転式離頭銛中柄(30)出土状況 ……219
図版V－15－4　A′地区櫂(5)出土状況 ……219
図版V－16－1　A′地区横槌(62)出土状況 …220
図版V－16－2　A′地区漆器(429)出土状況 ……220
図版V－16－3　A′地区樹皮製小刀鞘(55)出土状況 ……220
図版V－16－4　A′地区縄(403)出土状況 …220
図版V－16－5　A′地区魚突き鉤台(38)出土状況 ……220
図版V－17－1　A′地区木製品 (1) ……221
図版V－18－1　A′地区木製品 (2) ……222
図版V－19－1　A′地区木製品 (3) ……223
図版V－20－1　A′地区木製品 (4) ……224
図版V－21－1　A′地区木製品 (5) ……225
図版V－22－1　A′地区木製品 (6) ……226
図版V－23－1　A′地区木製品 (7) ……227
図版V－24－1　A′地区木製品 (8) ……228
図版V－25－1　A′地区木製品 (9) ……229
図版V－26－1　A′地区木製品 (10) ……230
図版V－27－1　A′地区木製品 (11) ……231
図版V－28－1　A′地区木製品 (12) ……232
図版V－29－1　A′地区木製品 (13) ……233
図版V－30－1　A′地区木製品 (14) ……234
図版V－31－1　A′地区木製品 (15) ……235
図版V－32－1　A′地区木製品 (16) ……236
図版V－33－1　A′地区木製品 (17) ……237
図版V－34－1　A′地区木製品 (18) ……238
図版V－35－1　A′地区木製品 (19) ……239
図版V－36－1　A′地区木製品 (20) ……240
図版V－37－1　A′地区木製品 (21) ……241

図版Ｖ－38－1　A′地区繊維製品・樹皮製品 ……242
図版Ｖ－39－1　Ｂ地区クラムシェルによる包含層採取 ……243
図版Ｖ－39－2　Ｂ地区埋戻し状況 ……243
図版Ｖ－40－1　Ｂ地区クラムシェル足場造成状況 ……244
図版Ｖ－40－2　Ｂ地区包含層積載状況 …244
図版Ｖ－40－3　Ｂ地区水面下の包含層採取状況 ……244
図版Ｖ－40－4　Ｂ地区作業ヤード包含層搬入状況 ……244
図版Ｖ－40－5　Ｂ地区遺物出土状況 ……244
図版Ｖ－40－6　Ｂ地区遺物採取状況 ……244
図版Ｖ－40－7　Ｂ地区遺物出土状況 ……244
図版Ｖ－41－1　Ｂ地区石器 ……245
図版Ｖ－41－2　Ｂ地区金属製品 ……245
図版Ｖ－41－3　Ｂ地区木製品 (1) ……245
図版Ｖ－42－1　Ｂ地区木製品 (2) ……246
図版Ｖ－43－1　Ｃ地区準備工事状況 ……247
図版Ｖ－43－2　Ｃ地区準備工事状況 ……247
図版Ｖ－43－3　Ｃ地区冠水状況 ……247
図版Ｖ－43－4　Ｃ地区カマ場工事状況 …247
図版Ｖ－43－5　Ｃ地区調査状況 ……247
図版Ｖ－44－1　Ｃ地区調査状況 ……248
図版Ｖ－44－2　Ｃ地区完掘状況 ……248
図版Ｖ－45－1　Ｃ地区土層断面 ……249
図版Ｖ－45－2　Ｃ地区調査状況 ……249
図版Ｖ－46－1　Ｃ地区０黒層杭穴 39・50 土層断面 ……250
図版Ｖ－46－2　Ｃ地区０黒層立杭 19 土層断面 ……250
図版Ｖ－46－3　Ｃ地区０黒層立杭 24 土層断面 ……250
図版Ｖ－46－4　Ｃ地区０黒層立杭 26 土層断面 ……250
図版Ｖ－47－1　Ｃ地区０黒層木組・立杭 ……251
図版Ｖ－48－1　Ｃ地区０黒層　０Ｆ－1……252
図版Ｖ－48－2　Ｃ地区０黒層　０Ｆ－1 礫出土状況 ……252
図版Ｖ－49－1　Ｃ地区０黒層石器・石製品 ……253
図版Ｖ－49－2　Ｃ地区０黒層キセル吸口(1)出土状況 ……253
図版Ｖ－49－3　Ｃ地区０黒層角釘(2)出土状況 ……253
図版Ｖ－49－4　Ｃ地区０黒層金属製品 …253
図版Ｖ－50－1　Ｃ地区０黒層木製品出土状況 ……254
図版Ｖ－50－2　Ｃ地区０黒層アシ茎出土状況 ……254
図版Ｖ－50－3　Ｃ地区０黒層あか汲み(1)出土状況 ……254
図版Ｖ－50－4　Ｃ地区０黒層櫂握部(2)出土状況 ……254
図版Ｖ－50－5　Ｃ地区０黒層有孔板(43)出土状況 ……254
図版Ｖ－51－1　Ｃ地区０黒層木製品 (1) …255
図版Ｖ－52－1　Ｃ地区０黒層木製品 (2) …256
図版Ｖ－53－1　Ｃ地区０黒層木製品・樹皮製品 ……257
図版Ｖ－54－1　Ｃ地区Ｉ黒層　ＩＳ－2 …258
図版Ｖ－54－2　Ｃ地区Ｉ黒層立杭 20 土層断面 ……258
図版Ｖ－54－3　Ｃ地区Ｉ黒層立杭 39 土層断面 ……258
図版Ｖ－54－4　Ｃ地区Ｉ黒層立杭 ……258
図版Ｖ－55－1　Ｃ地区Ｉ黒層土器 ……259
図版Ｖ－55－2　Ｃ地区Ｉ黒層土器出土状況 ……259
図版Ｖ－56－1　Ｃ地区Ｉ黒層石製品(3)出土状況 ……260
図版Ｖ－56－2　Ｃ地区Ｉ黒層石製品 ……260
図版Ｖ－56－3　Ｃ地区Ｉ黒層鉄鍋 ……260
図版Ｖ－56－4　Ｃ地区Ｉ黒層鉄鍋(1)出土状況 ……260
図版Ｖ－57－1　Ｃ地区Ｉ黒層鉄鍋 ……261
図版Ｖ－57－2　Ｃ地区Ｉ黒層カスガイ …261
図版Ｖ－57－3　Ｃ地区Ｉ黒層鉄鍋(2)出土

状況 ……261
図版Ｖ－57－4　Ｃ地区Ｉ黒層山刀柄(2)
出土状況 ……261
図版Ｖ－57－5　Ｃ地区Ｉ黒層木製品(7)
出土状況 ……261
図版Ｖ－57－6　Ｃ地区Ｉ黒層漆器(46)出土
状況 ……261
図版Ｖ－58－1　Ｃ地区Ｉ黒層木製品 (1) …262
図版Ｖ－59－1　Ｃ地区Ｉ黒層木製品 (2) …263
図版Ｖ－59－2　Ｃ地区II黒層土器・
石器 ……263
図版Ｖ－60－1　A′地区櫂・建材出土
状況 ……264

V　美々8遺跡低湿部の調査（平成3年度）

本章は、平成3年度に発掘調査された低湿地部に関する埋蔵文化財発掘調査報告である。

1　調査の概要

(1)　調査要項

事　業　名　新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者　北海道開発局札幌開発建設部
所　在　地　千歳市美々1,292－133ほか
遺　跡　名　美々8遺跡（低湿部）　J－03－94
調査面積　1,161 m²
発掘期間　平成3年7月11日～平成3年10月20日
整理期間　平成4年4月12日～平成5年3月26日

(2)　調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

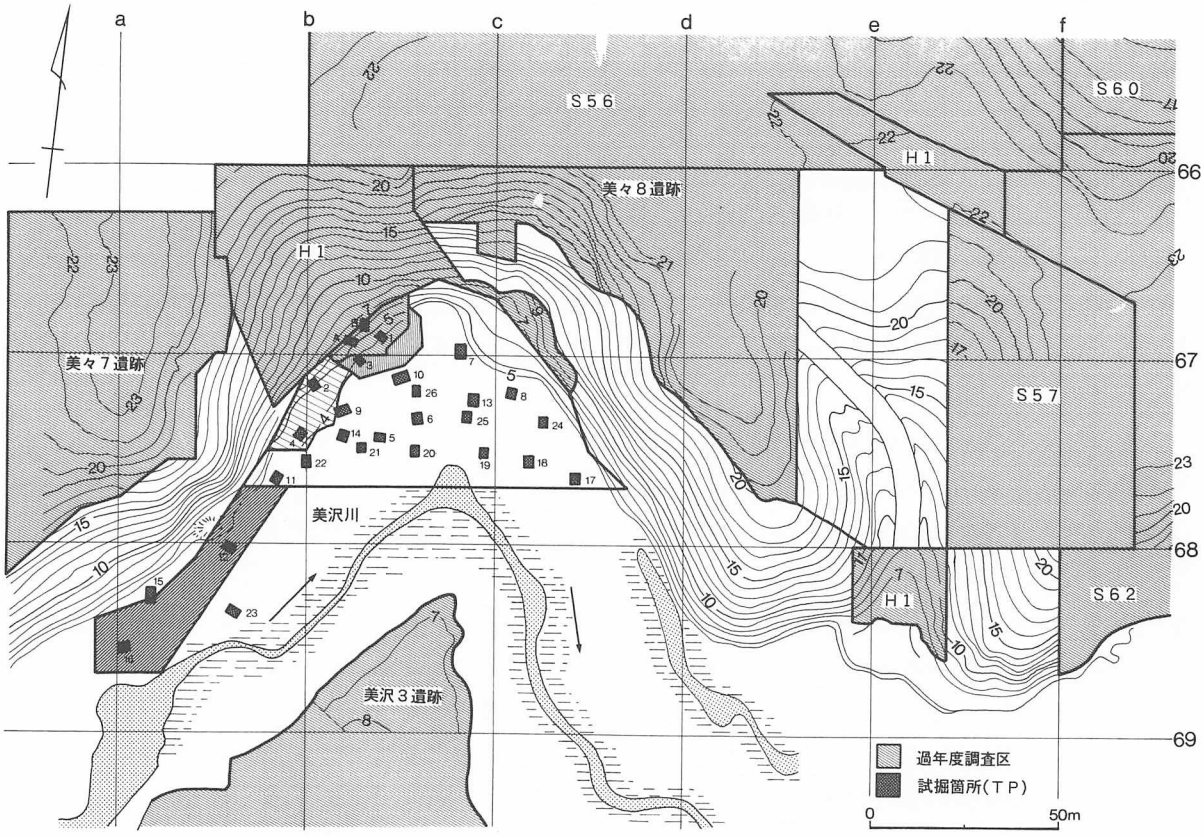
調査部長	森田　知忠	
調査第3課長	千葉　英一	（美々8遺跡発掘担当者）
主　任	西田　茂	（　〃　）
主　任	工藤　研治	（　〃　）
主　任	田口　尚	（　〃　、平成3年度分整理担当者）
主　任	葛西　智義	（　〃　）
嘱　託	皆川　洋一	
嘱　託	鈴木　信	
嘱　託	村田　大	
写真技師	菊池　慈人	

(3)　調査の経緯（図V－1）

美々8遺跡の発掘調査は昭和56年の台地部の調査が初年度であり、本年度で7年度目となる。そのうちの低湿部は美沢川左岸湾入部の現水面下に位置し、発掘調査が平成2年から実施され、本年度が2年度目にあたる。

北海道開発局は、新千歳空港B滑走路建設のために美沢川をボックスカルバート（函渠）切り替え、早急に低湿部の盛土転圧を行う予定であった。しかし、平成元年の美々8遺跡斜面部の発掘調査中に道跡や杭穴群が美沢川の水面下に続いていることが判明した。その報告を受けた北海道教育委員会（以下道教委）は、工期の切迫していることから直ちに北海道開発局と協議し、平成元年7月、低湿地部を埋立てバックホウによる試掘調査を実施した。その結果、江戸時代前葉から中葉（アイヌ文化期）のアイヌの民具を含む多量の木製品、繊維製品が検出され、美々8遺跡の低湿部として新たに4,375 m²を調査予定地に追加した。しかし、発掘調査に当たっては、豊富な湧水量はもとより包含層が流水性の高い火山灰層に挟まれていることや地下に支笏湖を起源とする被圧地下水が存在することなどが問題となり、発掘調査時の安全確保や調査の長期化が懸念された。試掘調査のみでは遺構の有無や膨大な出土量の予想される包含層の状態などに不明な点が多く、具体的な調査計画、遺物の整理・保管施設・保存処理計画の作成にはデータ不足であった。そこで道教委、北海道開発局、当センターの3

者は幾度も協議を重ね、具体的な低湿部内部のデータ収集と安全な調査工法の検討を含めた発掘を実施することで合意した。平成２年度は予備的調査として道跡や杭穴群が続く斜面部を含んだ低湿部縁辺を発掘区に設定し、215 m²（A 地区）の調査を実施した。発掘に先立ってコアボーリング調査を行い、包含層や湧水の状況の把握に努めた。調査工法については、腐植泥と火山灰が交互に重なる軟弱地盤であることから一般的な鋼矢板打設工法では被圧地下水の噴出を誘発させる危険があり、ウエルポイント工法で強制的に排水すると地盤沈下を誘発し現滑走路や建設中のボックスカルバート（函渠）に悪影響を与えることが予想された。各種工法を検討した結果、カマ場排水による法付オープンカット工法が採用された。発掘に先立って、安全確保ために準備工事を行い調査を実施した。その結果、低湿部の縁辺部においては、人力による発掘調査が可能と確認できた。そして、平成２年度は調査区を埋戻さずに冠水状態のまま越年させた。平成３年度は、低湿地部縁辺部に図Ⅴ－１のように３地区を設定し、各々の調査区の状況にあった各種調査方法を検討しながら 1,161 m²の調査を実施した。A′地区（143 m²）は、平成２年度のクリアランス部にあたり、冠水状態の越年のために軟弱地盤となっていることが予想された。そのため地盤の状況を判断しながら、人力調査とクラムシェルによる包含層採取調査を併用した。B 地区（797 m²）は、美々７遺跡崖下の美沢川河道に沿った細長い地区である。試掘調査やボウリング調査の結果から地盤が軟弱であり法面の安全確保が難しく、遺物も希薄と予想されたためクラムシェルによる包含層採取調査のみを実施した。C 地区（221 m²）は A′、B 地区に挟まれた低湿部の縁辺に位置し、平成２年度調査区に隣接する地点であることから法付オープンカット工法による人力調査が可能と判断された。本年度は各地区ごとに調査方法が異なり、調査面積も一挙に前年の約５倍となることから、北海道開発局、工事業者、当センターの３者が現地で調査工法、作業工程、機器の配置等について入念な打合せを幾度も行ない調査を実施した。　　（田口　尚）



平成３年度調査区・A 地区　　平成３年度調査区・B 地区　　平成３年度調査区・C 地区

図Ⅴ－１　低湿部の位置

2　遺跡の位置と環境

(1)　位置と環境

美々8遺跡周辺は、文献史料によると18世紀後半に「ユウフツ越」、「シコツ越」と呼ばれ、日本海側と太平洋側とを結ぶ交通路の中継点であった。このような状況は寛文7年（1667年）の頃までは遡れるようである。これまでの発掘調査では、本遺跡の下流側において、文化4年（1808年）頃から安政4年（1857年）にかけて物資の運搬に使われた道跡と小休所が発見され、文献史料の内容を裏づけている。低湿部では上述した時期を遡る遺構と遺物が存在しており、先駆的な様相を示す貴重な遺跡である。なお、本遺跡から太平洋までは直線距離で、約18 km程である。

(2)　遺跡の層序（図Ⅴ－2・3）

調査区は美沢川の現水面下の標高2.5 m～6 mの範囲にある。低湿部の層序は台地部分、斜面部分から連続している。そして、標高5 mを境にしてそれより上は斜面部分と同じで、それより下は0黒層、Ⅰ黒層が層厚を増して幾層にも分かれ、Us－b火山灰、Tm火山灰も認められて細分が可能になる。なお層名は従来と同じである。

盛土：平成元年度の試掘調査時に、重機の足場として埋められたもの。

流動したTa－a層：試掘調査時に押土された排土や増水時の二次堆積。

現表土：明褐色泥炭層。上部は草本の根、地下茎、葉梢、葉が腐植せずに残る。

流動したTa－a層：紡錘形を呈する薄層の斜交成層をなす。間歇的水流による二次堆積。

旧表土：褐色泥炭層。0B層より腐植は進んでいない。植物根、地下茎が残る。Ta－aを少量含む。平成4年度の調査では遺構と遺物が発見されており、台地上の表土－2層に相当する。

Ta－a層：樽前a降下火山灰層。1739年（元文4年）降下。層厚は20～40 cm。

0B層：褐色泥炭層。標高5 m位から泥炭化し始め、標高4.5 m以下から植物繊維が富む。腐植はやや進んでおり根、地下茎皮がよく残存している。炭化物と破砕されたようなTa－bパミスを含む。層厚は5～20 cm。C地区では南へ行くほど薄くなる。

Ta－b層：樽前b降下火山灰層。1667年（寛文7年）降下。層厚は2～4 cm。

IB_1層：褐色泥炭層。標高4.8 m以下から植物繊維が富む。腐植は進んでおり根が残存。層厚は10 cm前後でC地区中央、土層断面－2付近で厚くなる。

Us－b層：有珠b降下火山灰層。1663年（寛文3年）降下。IB_1層の上部に散布。層厚は約0.5 cm。

IB_2層：黒色泥層。標高4.8 m以下から発達する。腐植は進んでおり根はあまりみられない。C地区の北端ではあまり発達していないようである。1～2 mmの磨滅したTa－cパミスを含む。層厚は10～15 cm。C地区中央、土層断面－2付近で厚くなる。

Tm層：苫小牧火山灰層。10世紀中頃降下。標高4 m以下に薄層として残る。層厚は約2.0 cm前後。

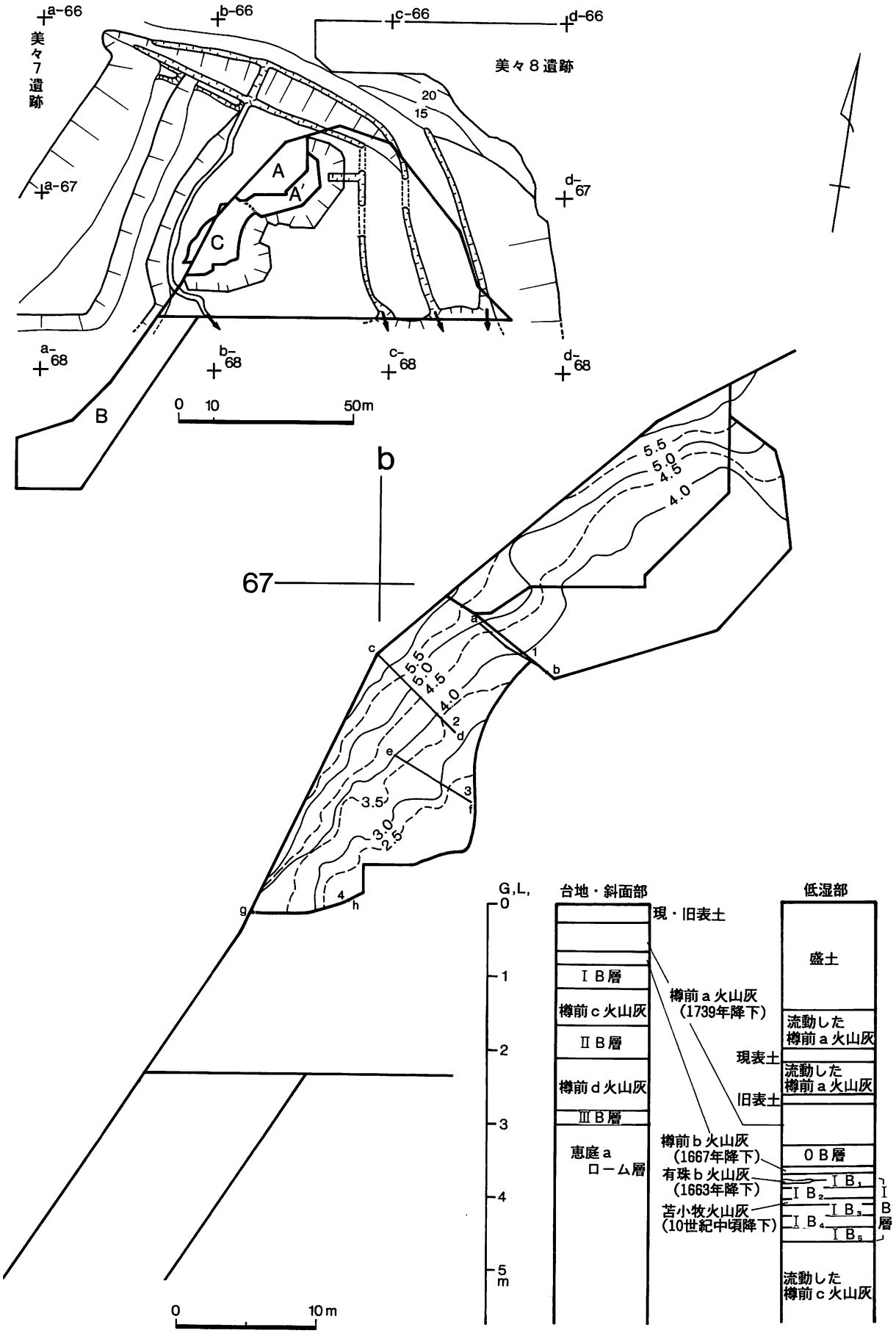
IB_3層：暗褐色泥炭層。標高4.8 m以下から植物繊維に富む。根が多く残存している。倒木が多くみられる。標高の高い部分では径2 mm～2 cmの磨滅したTa－cパミスを多く含む。層厚は5～50 cm。C地区の南へ行くほど厚くなる。

IB_4層：黒色泥層。標高4.2 m以下から発達する。腐植はよく進んでおり根はあまりみられない。層厚は5～50 cm。C地区の南へ行くほど厚くなる。

IB_5層：暗褐色泥炭層。標高4 m以下から植物繊維に富み、根が多く残存。標高の高い部分では径2 mm～2 cmの磨耗したTa－cをブロックで多く含む。層厚は10～50 cm。C地区中央で厚くなる。

Ta－c層：樽前c降下火山灰層。平成4年度の調査結果から標高2.5 m以下では水成の二次堆積層となっていることが判明した。

（鈴木　信）



図Ⅴ－2　A′・C地区地形図、土層断面位置図、土層模式図

Ta－a：樽前a火山灰、1739年降下。

ＯＢ層：褐色泥炭層、ⅠＢ₁層と同じ土色、木製品を多量に含む。

Ta－b：樽前b火山灰、標高5ｍ以下においては破砕されたような細片となる1667年降下。

Us－b：有珠b火山灰、緑灰色で粗粒、ⅠＢ₁層上部中に散布する。1663年降下。

ⅠＢ₁層：褐色泥炭層、ＯＢ層と同じ土色、木製品を多量に含む。

ⅠＢ₂層：黒色泥、ⅠＢ₄層と同じ土色、木製品はＯＢやⅠＢ₁に較べて少ない。下部には擦文土器と礫を含む。

Ｔｍ：苫小牧火山灰、明緑灰色で細粒、標高4ｍ以下において薄層として遺跡のほぼ全域に広がる。10世紀の中頃降下。

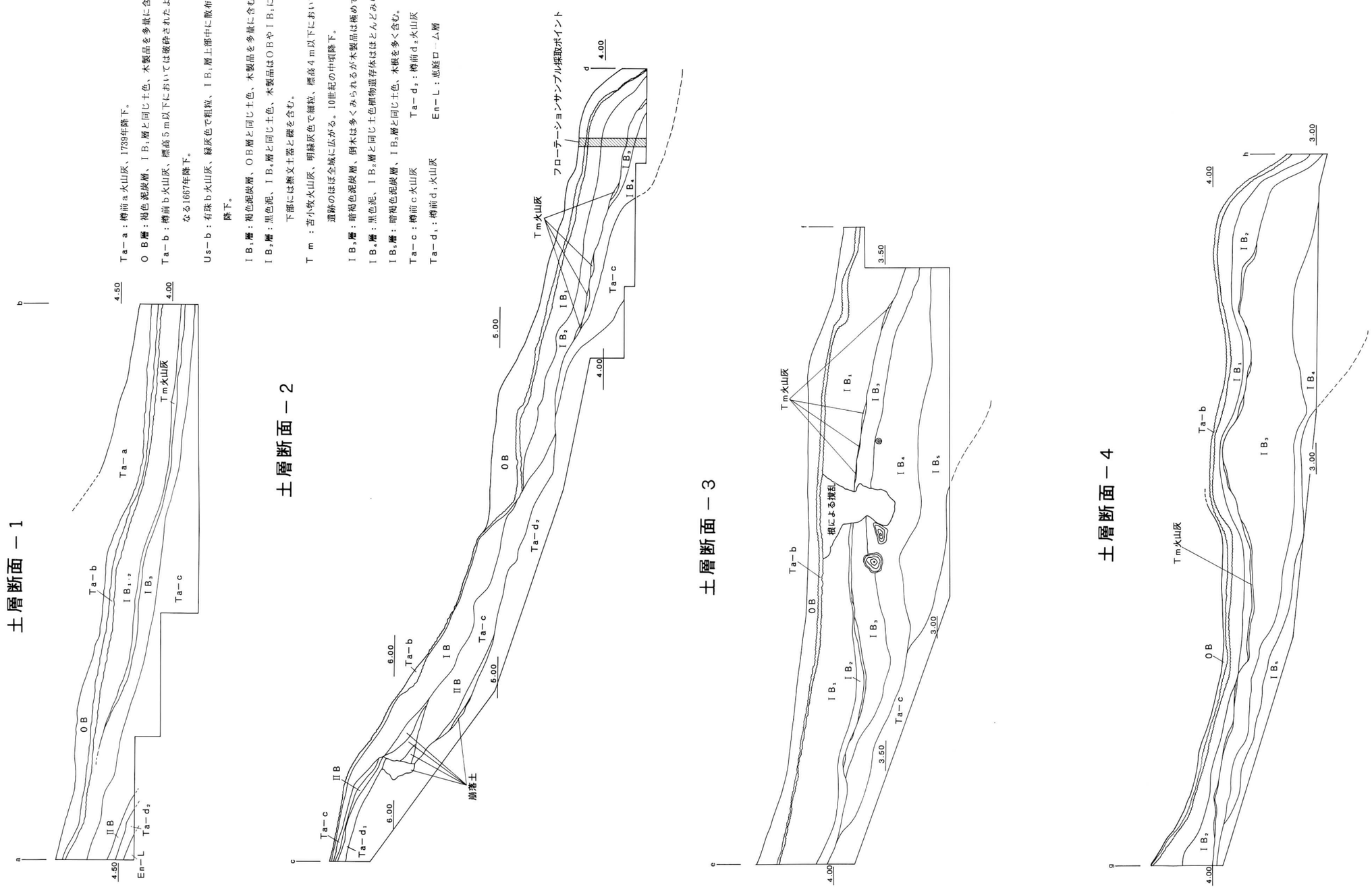
ⅠＢ₃層：暗褐色泥炭層、倒木は多くみられるが木製品は極めて少ない。

ⅠＢ₄層：黒色泥、ⅠＢ₃層と同じ土色植物遺存体はほとんどみられない。

ⅠＢ₅層：暗褐色泥炭層、ⅠＢ₃層と同じ土色、木根を多く含む。

Ta－c：樽前c火山灰　　Ta－d₂：樽前d₂火山灰

Ta－d₁：樽前d₁火山灰　　En－L：恵庭ロ　ム層



図Ⅴ－3　A′・C地区土層断面図

3　調査と整理の方法

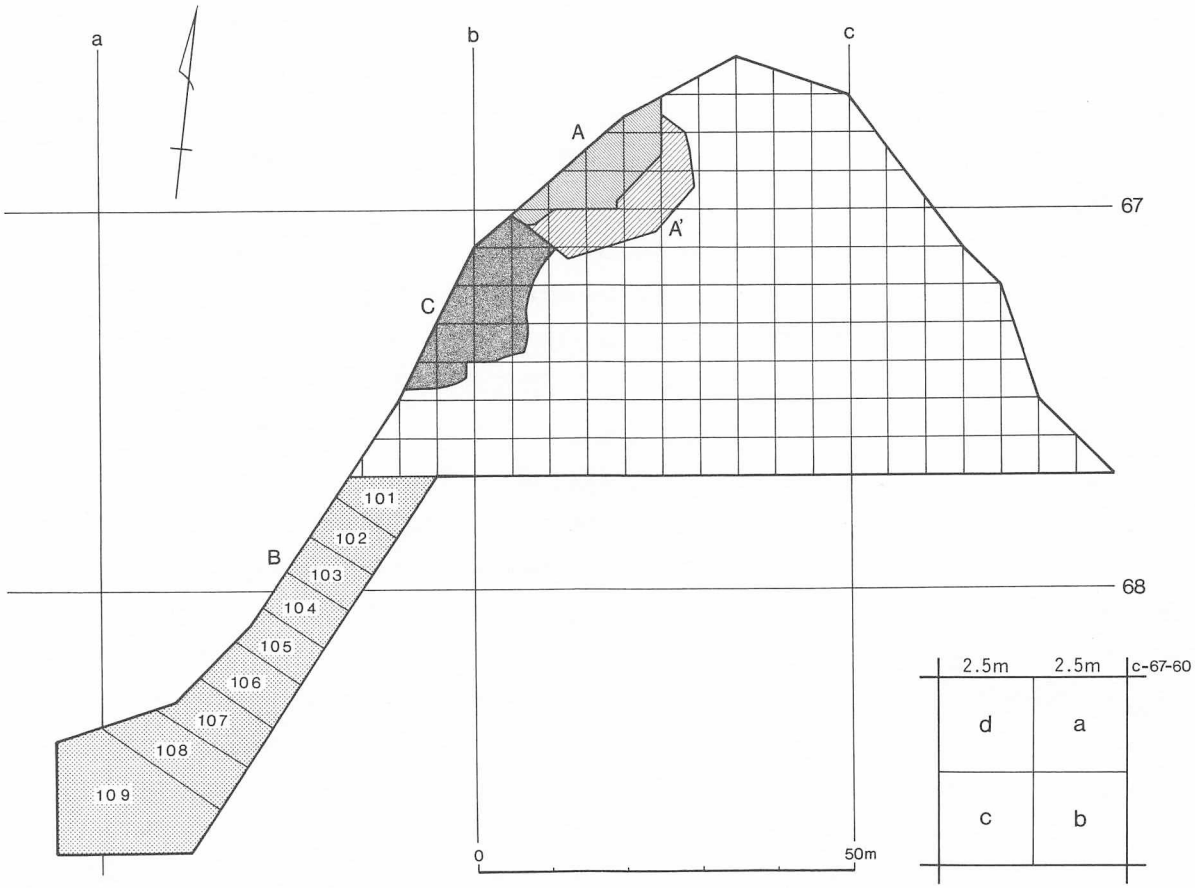
(1)　発掘区の設定（図Ⅴ－４）

調査区は平成２年度調査終了区をＡ地区とし、本年度は調査方法に合わせてＡ′地区（143 m²）、Ｂ地区（797 m²）、Ｃ地区（221 m²）の３地区に調査区を分割した。以下地区別に発掘区を説明する。

Ａ′地区：平成２年度調査区南側の退避、歩行、作業のためのクリアランス部分あたる。人力調査とクラムシェルによる包含層採取併用地区である。発掘区は従来どおり、50 m 四方の大区画を基本区画とした。それを５ m 四方の小区画に 100 分割したものを基本単位として「c－67－60」のように呼称した。遺物を土壌ごとに取上げた場合などは、小区画をさらに１ m 四方に 25 分割し「c－67－60－22」のように呼称した。また、クラムシェルによる包含層採取調査の精度を人力調査に近づけるためクラムシェルバケットの最大幅（約 2.5 m×1.0 m）に合わせて５ m 四方の小区画を 2.5 m 四方に４分割し、その区画に時計周りにａ、ｂ、ｃ、ｄと付して「c－67－60－a」のように呼称した。

Ｂ地区：美々７遺跡崖下の旧美沢川河道に沿った、基本区画に斜行した細長い地区である。クラムシェルによる包含層採取のみの地区である。泥水を貯めたままの調査となるため、水面への基本単位設定が困難であることや基本単位に従うと区画の大きさが不規則となり作業効率の低下を招くことから、対岸とクラムシェル足場を見通し、クラムシェルバケットの最大幅約３つ分（約 7.5 m）に合わせて北東から南西向かって「101 区」～「109 区」のように平行線で新たに９区画を設定した。

Ｃ地区：Ａ地区に隣接した低湿部縁辺部分の人力調査のみの地区である。Ａ′地区同様に従来どおりの 50 m 四方の大区画を基本区画とし、それをさらに５ m 四方の小区画に 100 分割したものを基本単位として「c－67－80」のように呼称した。なお、2.5 m 四方の区画は設定していない。（田口　尚）



図Ⅴ－4　発掘区の設定

(2)　**調査の方法**（図V－5・6・7、図版V－1～5、39・40）

遺跡の現況は、平成2年度とは大きく変化し、美沢川の表層水はボックスカルバート中に切り替えられ、対岸の美沢3遺跡側から美々8遺跡調査区間際まで盛土工事が行われている。残された湿地部分と小さな流路を旧美沢川と呼称する。

調査の方法は、平成2年度の実績や他府県の調査例を参考にした。以下、新たに実施されたクラムシェルによる包含層採取調査を中心に地区別に概略を説明する。

A′地区の調査

人力調査：平成2年度は冠水状態で越年したため、周辺の環境整備、排水溝の整備、排水を行った後、敷き詰められたブルーシートを剝がす作業から始めた。この地区は当初はクラムシェルによる包含層採取調査のみが予定されていた。地盤が予想以上に安定していたことから、状態を判断しながら0黒層の一部を人力で発掘調査した。調査用機材は昨年と大きく変わらない。平成2年度調査区に土嚢を積み排土場所としたため、ベルトコンベアは使用していない。カマ場は昨年度のものを利用した。微細遺物密集箇所の排土及び土壌はポンプ排水を利用して水洗選別した。

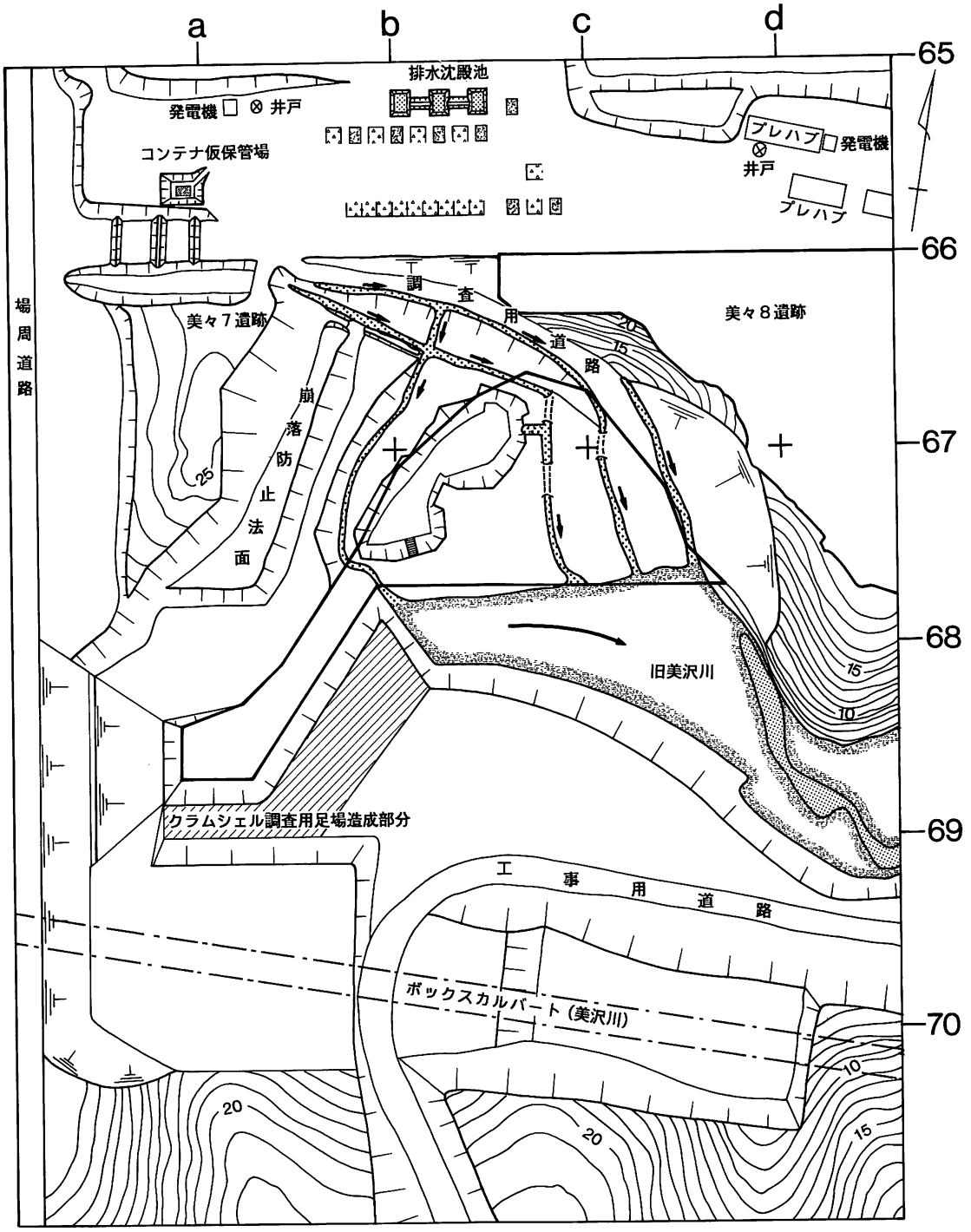
クラムシェル調査：人力調査終了直後に、クラムシェル通行のための調査用道路の補修・拡幅工事が始められた。足場設置のための盛土工事及び覆工板（鋼鉄板）の敷設工事は、旧美沢川付近の盛土が軟弱で、採取地点が足場から非常に近いことから特に慎重に行われた。包含層の採取には、小型無線機を付けた2名の調査員（以下調査員A、B）が立会い、次のような手順で実施された。①調査員Aが調査区内でクラムシェルに採取地点の指示を行い、盛土上の調査員Bに採取地点、層位、採取回数を無線連絡する。ポンプ排水を行いながらの採取であったので、採取地点を確認しながら設定した区画どおりに採取出来た。②調査員Bはクラムシェルに堆積場所を指示し、採取地点、層位を明記した旗（ピンポールに布粘着テープを貼ったもの）を立てる。なお、採取した包含層は、覆工板上、敷設した足場板上、盛土上に地点ごとに堆積した。③クラムシェル撤去後、遺物採取を行った。遺物採取後の排土はすべて水洗選別し微細遺物の検出に努めた。排土は基本的に低湿部のポンプ排水を利用して水洗し、残り一部はホイルローダーでトラックに積載し、台地上に運搬して井戸水で水洗選別した。

B地区の調査

準備工事：各地区の調査に先立って、B地区のクラムシェル用の足場造成工事が行われた。工事にはクラムシェルのアーム長、実用角度、旋回範囲を考慮し、盛土高、法面角度、掘削範囲を決定した。クラムシェルバケットの到達限界（約20m）を越えないように、調査範囲を法尻として足場を造成した。足場には覆工板を敷設し、強化した。盛土除去は試掘調査やボーリング調査時のデータから、層厚を推定して実施した。なお、ポンプ排水が出来なかったため、泥水中の深さの判断はバケットとワイヤーに付された1mごとのペンキで判断し、採取土壌中のTa－a層を盛土除去終了の判断とした。

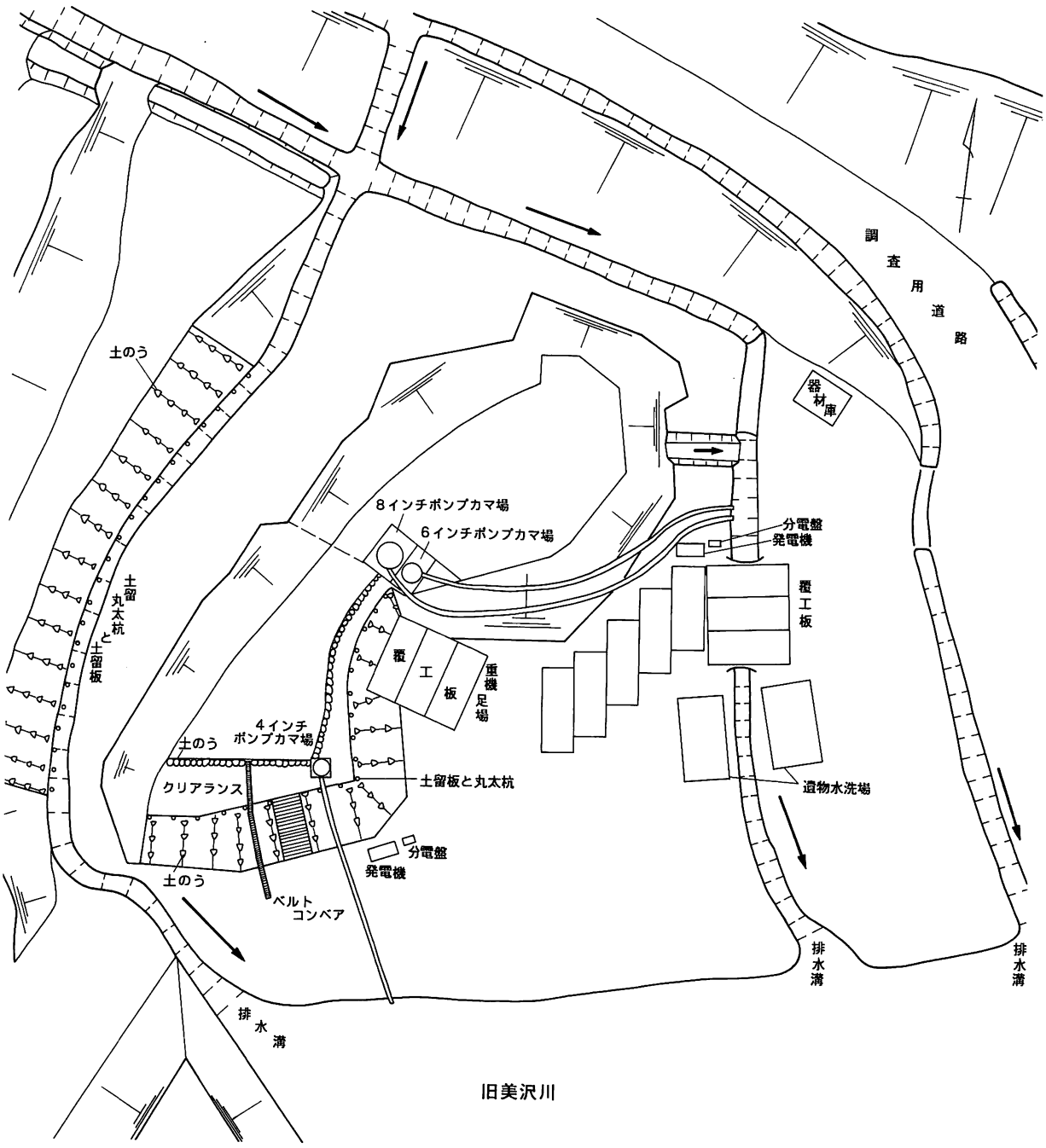
遺物の水洗および水漬保管のために、西側作業場所にも井戸を設置した。また、採取包含層がヘドロ状態となるため、足場板で「コ」の字に囲った区画を作成し、流失•混入を避けた。その周辺には、簡易プールを設置した。水交換、遺物水洗、土壌水洗選別による排水は、深掘りした3連の沈澱池で浸透させた。包含層の運搬はトラック1台にバケット2～4回分とし、4tトラック2台で行った。調査地点と作業場所が離れ、しかもジェット機や機器のなどの騒音がひどいことから、調査員3名（以下A、B、C）が小型無線機を使用して、細かな連絡を取りながら作業を進めた。

クラムシェル調査：クラムシェルの包含層採取作業の流れは、①クラムシェル足場に調査員Aが張り付き、トラック積載された包含層の状態、火山灰の種類、遺物の有無を確認し、次の地点、採取深度、採取完了の判断をする。②調査員Aはトラックに採取地点、深度、採取回数を明記した旗を手渡



図Ⅴ－5　調査区現況図

し、台地上の調査員Bにトラックの発進及び現在の進捗状況を連絡する。③包含層をトラックで台地上の作業区画まで運搬する。④調査員Bは、トラックの到着を調査員Aに連絡し、トラックに堆積場所を指示し、旗を立てる。また、包含層の堆積状況(量など)、区画の空きスペース、現在の進捗状況を調査員Aに連絡する。⑤調査員Cは作業員に遺物採取作業の区画、採取した遺物の水洗、遺物水漬用簡易プールの場所を指示し、プールに採取地点、深度、採取回数を明記した旗を立てる。⑥調査員Cはプール内の遺物の選別・分類を行い、終了した遺物からコンテナやシール容器に水漬されプレハブ



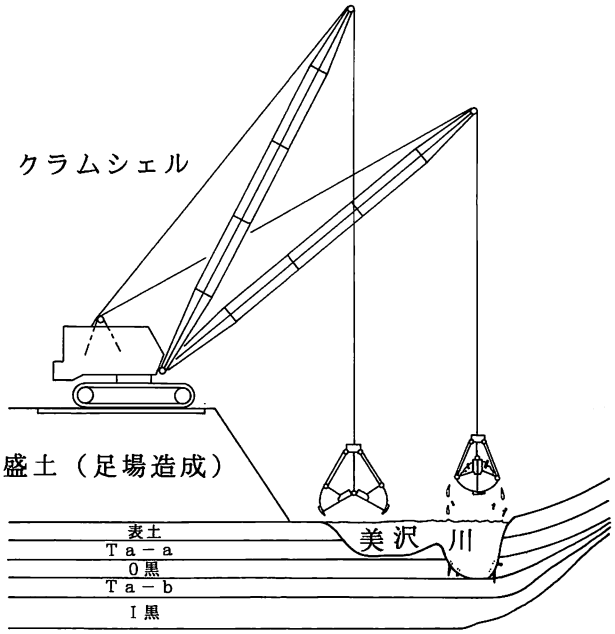
図V－6　安全対策と機材の配置

に運ばれる。プールは次の採取区画の水漬場所となるので、洗浄と水交換を行う。⑦採取された包含層が長時間放置される場合は、乾燥を避けるためブルーシートで覆う。また、水の蒸発及び腐敗に注意し、水交換や水位の調節を行う。なお、調査区は包含層採取後に直ちに埋め戻された。

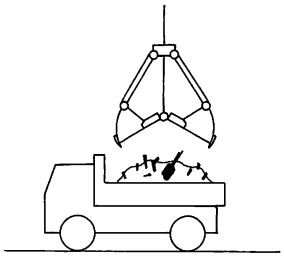
C地区の調査

準備工事：調査区が美々7遺跡の崖下となるため、崩落などの危険が予想された。そのため法面掘削にかかる美々7遺跡の調査を先に終了させ、危険防止のための大規模な法面掘削を行った。また、次年度の現調査用道路の切替えを考慮した措置でもある。調査区はA地区から続く低湿地縁辺であり、人力調査のみの調査内容であることから昨年度同様の法付オープンカット工法が採用された。したがって、発掘調査に先立つ準備工事も昨年度同様の手順で実施され、掘削工事、土留工事、法面養生、カマ場工事、水替・排水工事、ベルトコンベア設置工事の順で実施された。ただし、A・A′地区か

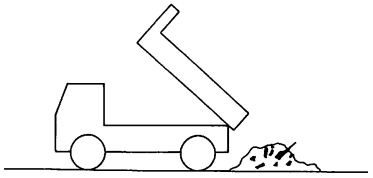
クラムシェルによる調査



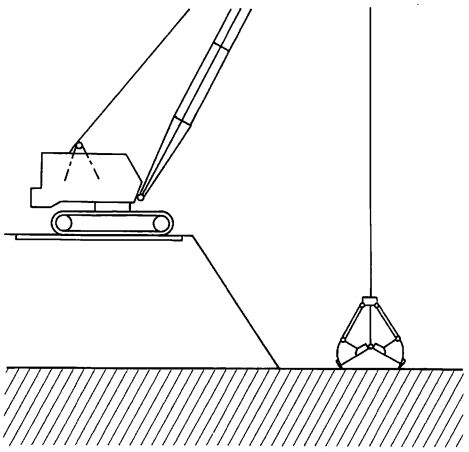
1 クラムシェルバケットで包含層を採取



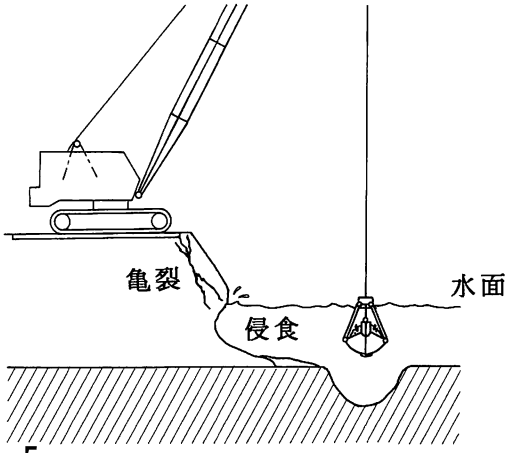
2 ４ｔトラックに積載し、台地上に運搬



3 台地上の作業ヤードに堆積



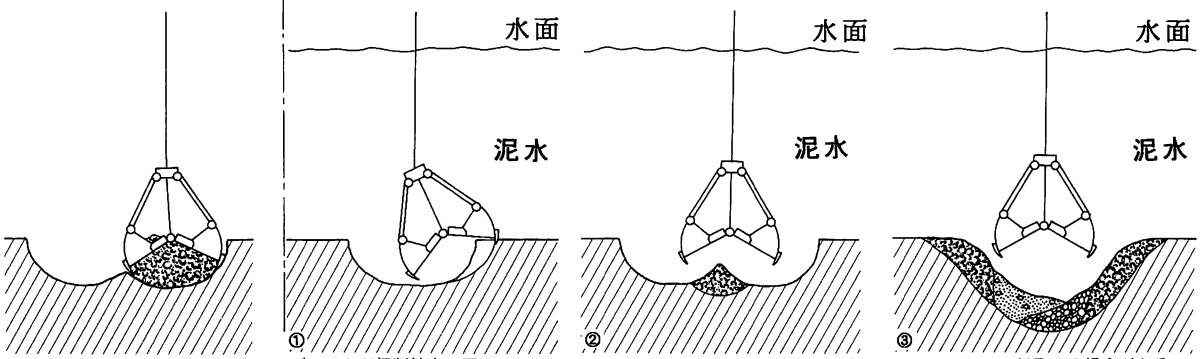
4 ポンプ排水による調査の場合



5 無排水による調査の場合

A　採取位置や土層が視認でき、ブロックで包含層を採取可能。

B　泥水のため採取位置や土層を視認できない。堆積土が緩み、ヘドロ状となる。積載時に土層を確認する。



①バケットが掘削地点の肩にひっかかり、傾く。少量の土壌しか採取できない。

②バケットが一度採取した地点に再度降りる。少量の土壌しか採取できない。調査対象外の 土壌を採取する場合がある。

③崩落土を何回も採取する場合がある。法尻が波動により抉られ、崩落や亀裂が 発生する。法面付近での土壌採取は避ける。

図Ｖ－7　クラムシェル調査

らの湧水が多量であったことからA′地区との境界に6・8インチのカマ場を事前に設置してからの準備工事となった。排土は、運搬捨土せずに、旧美沢川を埋立てるように徐々に廃棄した。

越年措置

本年度はポンプ排水を行いながら、カマ場や土留杭・板をすべて撤去し、本調査に向け調査区A′地区、B地区、C地区を完全に埋め戻し整地した。しかし、盛土上面まで湧水が噴出しているため非常に軟弱な地盤となった。

遺物の取上げ

美々8遺跡低湿部（北埋調報77）の方法に従い、遺物は基本的に写真撮影後、1／10の出土状況図を作成し、発掘区・層位・座標値等を記録後取り上げている。ただし、平成3年度A′地区の人力調査時の出土地点計測及び出土状況図作成は、大型建材、各種製品を中心として最低限にとどめた。その他遺物は、クラムシェルによる包含層採取と同様に2.5 m²四方のグリッド（区画）で取り上げた。B地区の出土遺物については、出土区画と深度を明記した。C地区については、切片・木端などの小片木製品を除いて出土地点計測及び出土状況図を作成した。遺物には土器・土製品（赤）、石器・石製品・礫・ガラス製品（青）、木製品・繊維製品（緑）、金属製品（黄）、自然遺物・その他（白）のように色別したカードをチャック付きビニール袋に入れ添付した。木製品等は出土後直ちに湿らせた不織布やスポンジ等で養生し、ストッキングとアンビタッチで遺物カードを結び付けた。小型のものや接合資料は穴あきビニール袋に入れ、それ以外は直接コンテナに水漬した。出土した各種製品、加工度の高い木製品はシール容器に別保管した。金属製品は、出土後直ちに取上げ、簡単なクリーニング後にアルコール脱水し、シリカゲルを入れたシール容器に密封保管した。　（田口　尚）

(3)　整理と保管の方法（図V－8）

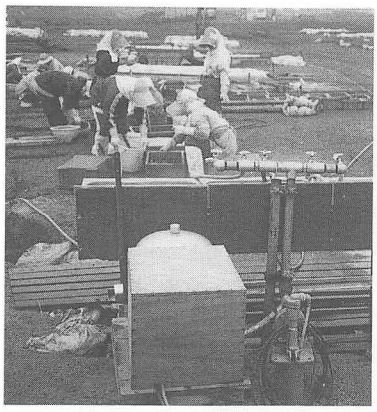
整理・保管は、美々8遺跡低湿部（北埋調報77）の方法に従い、遺物の状況に応じて新たな方法を検討している。また、本年度は遺物の種類、量とも昨年と比べて膨大なものとなっており、特に木製品等や自然遺物については未分類・未集計のものが残っている。今後、平成4年度以降の遺物と合わせて、整理を継続する予定である。

土器・陶磁器・石器・石製品・礫・ガラス製品：従来どおりの整理・保管方法を実施した。現場整理事務所では水洗、分類・注記まで行った。実測図の作成は、原寸を基本とした。石器・石製品・礫は石質・計測値を記録し集計した。土器・陶磁器の破片はビニール袋に、復元土器は段ボール箱に収納した。石器・石製品・ガラス玉はカードと共にチャック付ビニール袋及びプラスチックサンプルケースに収納した。礫などはコンテナに収納した。

木製品：現場では、分類・加工度・大きさ等で発掘終了まで各種シール容器・蓋をしたコンテナに水漬し、プレハブ及び屋外に積み置きした。大型遺物は搬送用の木箱ができるまで簡易プール（約3.6 m×1.8 m×0.4 mに土嚢袋を四角く積上げ、ブルーシートで覆って水を貯めたもの）で保管した。

水洗・水漬・水交換は井戸を掘削し地下水を使用した。脆弱遺物・重要遺物については、随時札幌のセンターに搬送し整理作業・保存処理を開始した。搬送にはコンテナ・木箱収納台帳を作成し、コンテナ内の養生、水抜き後に8 tトラック2台、木箱は4 tのユニック車2台に積載された。搬入されたコンテナ等には水道水を給水し、数段重ねで保存処理室、廊下の棚、廊下の棚隙間、屋外水槽、ユニットプレハブに水漬保管した。

実測図は基本的に原寸で作成し、樹皮・炭化・塗彩などを色分けし、観察記録や計測値なども同時に記載している。写真撮影は基本的に実測図作成後に行っているが、重要遺物や脆弱な遺物ついては随時撮影している。

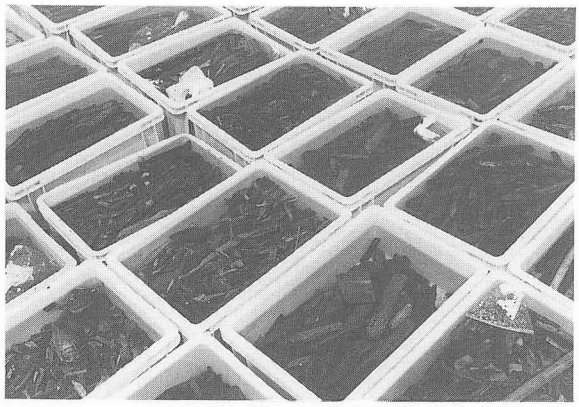


1　台地上に井戸設置

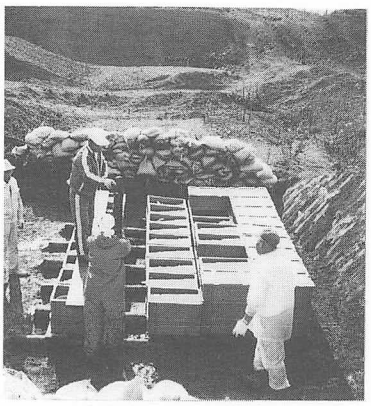
2　台地上の遺物水洗・水洗選別

3　ポンプ排水による水洗選別

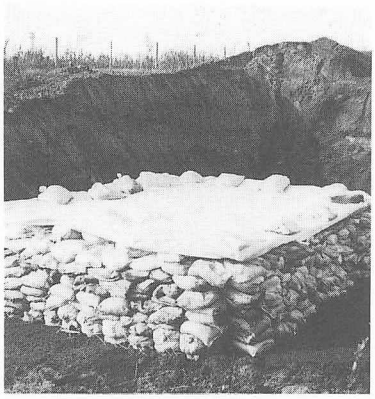
4　簡易プールによる木製品の水漬保管



5　コンテナによる木製品の水漬保管



5　埋納保管実験の準備



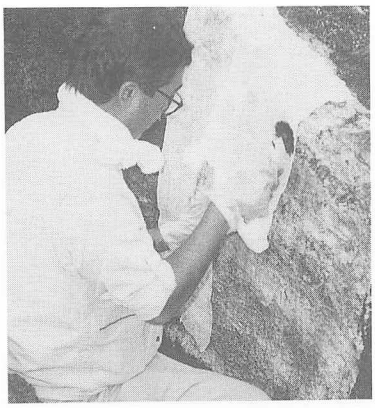
6　周囲の補強

7　埋納作業

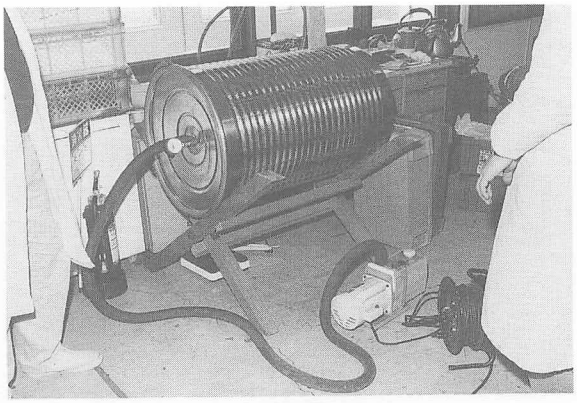
8　8ｔ車による木製品搬送

9　ユニック車による大型木製品の搬送

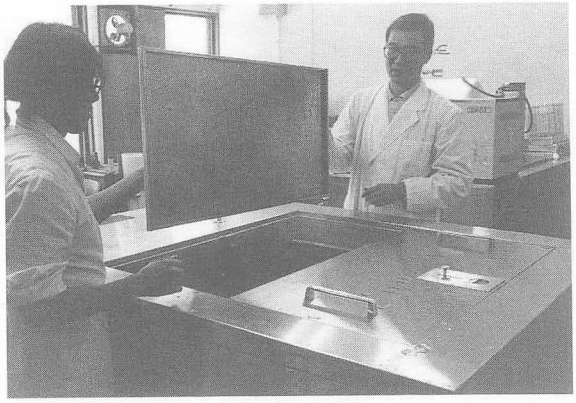
図Ⅴ－8　水洗・保管・搬送状況



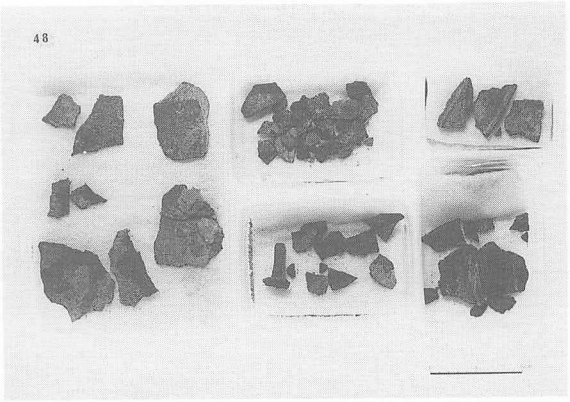
1　土層剝取り作業



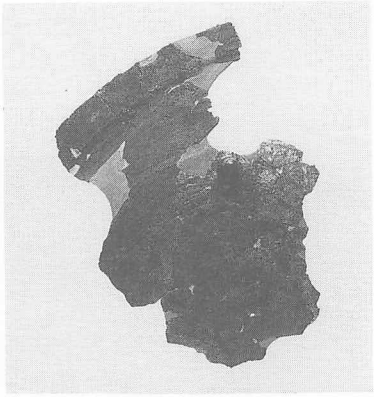
2　金属製品の樹脂減圧含浸装置



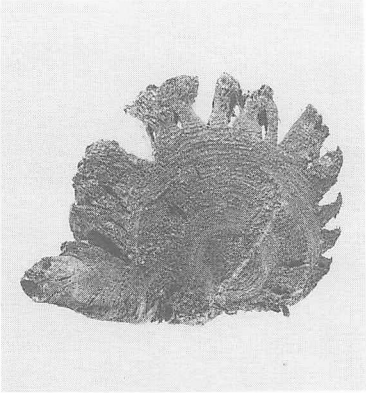
3　木製品のＰＥＧ含浸槽２号機



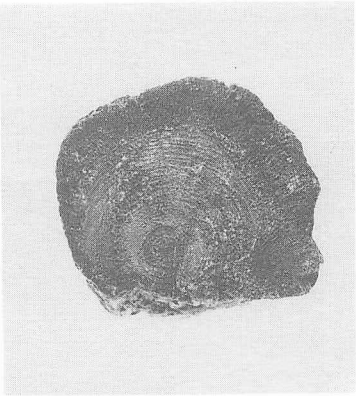
4　鉄鍋の保存処理前



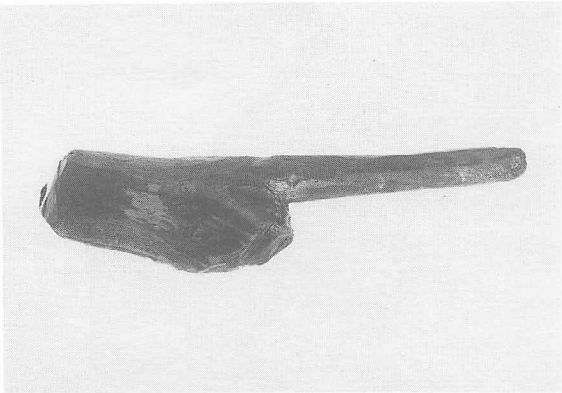
5　鉄鍋の保存処理後



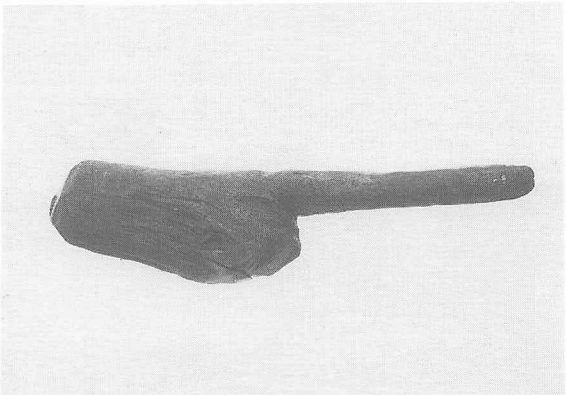
6　水浸出土材の自然乾燥



7　同一材のＰＥＧ含浸後



8　木製品のＰＥＧ含浸前



9　木製品のＰＥＧ含浸後

図Ⅴ－9　土層剝取りと保存処理

金属製品：湿気を避けるためシリカゲルを入れたシール容器やポリシーラーで密封保管し、木製品とは別の温度差の少ない部屋を選び、保管している。実測図は原寸で作成し、観察記録や計測値なども同時に記載した。写真撮影は保存処理前と処理後を撮影し、修復時の参考にしている。また、必要に応じてX線透視撮影も実施し、クリーニングや構造調査の参考としている。

自然遺物：獣骨・堅果類・硬質菌類、貝殻皮は日陰で風乾後に泥等を落した。現場で十分な乾燥を出来なかったものは、恒温乾燥器を使用し強制的に乾燥させた。土壌とともに小ブロックで採集した遺物は、水洗選別（ウォーターセパレーション）や浮遊選別（フローテーション）を実施し、微細試料の抽出に努めた。抽出した遺物はカードと共に、薬用カプセル、チャック式ビニール袋、プラスチックサンプルケース、フィルムケースに収納してコンテナで保管した。一部の試料については同定及び集計が完了しているが、まだ充分な整理が出来ていない。基本・比較試料を揃え、平成4年度以降の遺物と合わせて継続して整理・分類・集計を行う予定である。

冬期の保管：木製品などの水漬遺物は凍結の危険性があり、廊下、保管室にはビニールシートを張り、中にオイルヒーターを置き5℃以上の温度を保つようにしている。屋外水槽には断熱材を浮かべ、ユニットプレハブにもオイルヒーターを設置している。また、急激な温度変化などを事前に察知できるように毎日、気温・水温を記録している。

平成3年度は木製品保管の一手段として、現場埋納保管実験（図V－8－5～6）を試みた。千歳空港敷地内の冬期間の凍結深度は、地表面から－1.0～1.2mと言われており、これ以上の深さで木製品を埋納すれば冬期間の凍結や急激な温度変化もなく、多量の木製品の保管が可能との仮説であった。自然木や雑木を蓋付コンテナに入れ、水漬(多量、少量)、ホウ酸＋ホウ砂溶液漬、泥漬の各状態に置きブールーシートで覆い、2m程の盛土をして越年実験した。結果は、いずれも良好なものではなかった。腐朽菌を繁殖させ、通常の保管に比べ劣化が著しかった。なお、泥漬のものは完全に腐敗していた。今後は地中の温度計測などを含めた総合的な実験が必要であろう。　（田口　尚）

(4)　有機質遺物の保存処理（図V－9）

有機質遺物の保存処理は、基本的に美々8遺跡低湿部（北埋調報77）の方法に従っている。

木製品・繊維背品・樹皮製品は、保存処理作業のための木製品番号（木No.）を別に与え、台帳と観察カードを作成して各作業工程の管理に使用している。木製品のラベルはパウチラミネートで半永久的なものとし、さらに写真撮影した遺物のシール容器には、ラミネートした写真を添付している。

保存処理にはポリエチレングリコール含浸法を採用し、1号機（内寸長さ175cm×幅70cm×深さ70cm）、2号機（内寸長さ100cm×幅100cm×深さ70cm）、3号機（内寸長さ175cm×幅70cm×深さ70cm）の3台のPEG含浸槽が稼働している。さらに大型建材などの処理を目的とした4号機（内寸長さ400cm×幅120cm×深さ100cm）を導入する予定である。また、真空凍結乾燥機を導入してマンニトール(20%)とPEG 4000(40%)を使用した真空凍結乾燥法を実施し、多量の小型遺物を短期間に処理する予定である。繊維製品は、小型のビニールハウスをPEG含浸槽の上に置き、その余熱と赤外線ランプによりPEG 4000の100%を加熱して含浸させている。樹皮製品については、PEG 4000を60～70%まで含浸後、徐々に乾燥させるている。漆器類については、未処理であり、純水を入れたシール容器で密閉して冷蔵庫に保管している。

図V－9－6・7は水浸出土材（ナナカマド属　含水率 407%）の自然乾燥とPEG 4000処理後の比較である。6は著しく収縮し、周囲に深い亀裂がはいり、原形を留めていない。7はPEGの含浸により黒色化したが、大きな収縮や変形は認められない。8・9は木製品（リンゴ属？　股木で芯持ち材）の保存処理前とPEG 4000処理の比較である。9の表面には処理前に比べ亀裂が認められる。このよう

に芯持ち材の場合は、処理後に若干の収縮や亀裂が認められるが自然乾燥とは比較にならないほど良好な処理結果である。また、PEG処理後の重量変化記録から、完全な乾燥に最低2～3か月を要することが判った。したがって、その間は収縮などに注意し、出来る限り安定した保管環境に置くことが望ましい。

また、現場終了後の土層断面の検討材料として土層断面剝ぎ取りを行っている。　（田口　尚）

(5)　金属製品の保存処理（図V－9）

金属製品の保存処理は、基本的に美々8遺跡低湿部（北埋調報77）の方法を用いた。

金属製品には保存処理作業のための金属製品番号（金No.）を別に与え、台帳と観察カードを作成し、各作業工程の管理に使用している。今回の鉄製品の処理には作業の簡単なプライマルMV－1を使用した。鉄分の溶脱した鉄鍋などは、パラロイドB72を含浸・塗布した。銅製品・真鍮製品はベンゾトリアゾール入りアクリル樹脂（インクララック）を塗布した。

図V－9－4・5は鉄分の溶脱した鉄鍋（図V-124－1）の保存処理前と保存処理後である。復元・補修にはエポキシ樹脂とフェノール樹脂マイクロバルーンを混合したペーストを使用した。処理後の遺物は、シリカゲルを入れたシール容器に密封保管した。小型や器厚の薄いものは脱気パックし脱酸素剤を同時に封入し保管している。

今後のクリーニング作業には、エアーブレイシブや集塵器等を導入し、作業の効率化をはかる予定である。

（田口　尚）

(6)　各種分析と試料のサンプリング（図V－9）

ガラス製品材質調査：破片試料3点を奈良国立文化財研究所　肥塚　隆保氏に分析依頼している。

金属材質調査：岩手県立博物館　赤沼　英男氏に依頼した。鉄製品は鋳造品と鍛造品から、それぞれ小型電動彫刻機で小片を採取して解析試料とした。銅・真鍮製品は螢光X線分析を行った。

浮遊選別（フローテーション）：C地区の焼土、炭化物集中、クルミ集中からは土壌サンプルをすべて採取した。これらの比較試料としてc－67－91ベルトから各層位の土壌を採取した。試料の抽出はフローテーションマシンを用いて、プロジェクト・シーズ方式（プロジェクト・シーズ　1989年）で行った。

水洗選別（ウォーターセパレーション）：A′地区の人力調査の一部とクラムシェルによる包含層採取調査の全土壌について実施した。方法は4 mmメッシュの洗浄カゴを用い、ポンプ排水や井戸水で水洗した。

2つの方法で得られた試料のうち、植物遺存体を北海道大学文学部　吉崎　昌一氏に、動物遺存体を千歳市教育委員会　高橋　理氏に依頼した。

樹種同定：農林水産省森林総合研究所　平川　康彦氏に依頼し、製品及び加工度の高い木製品について切片を採取して同定した。

なお、平成4年度は当センターに走査型電子顕微鏡が導入され、樹種同定をはじめ各種分析に活用している。

（田口　尚）

4　調査結果の概要

低湿部の遺構・遺物は水陸交通の分岐点として、あるいは美沢川で行われたサケ・マス漁や太平洋でのメカジキ漁などの生業、そして低地部で営まれた日常生活と深く関わるものである。

A′地区の調査（図Ⅴ－11・12）

層位は、先述した調査方法のために0黒層とⅠ黒層が混在し、斜面部付近ではⅡ黒層も含まれる。人力調査による出土遺物の主体は0黒層であり、わずかにⅠ黒層上位のものが混入する。

遺構は平成元年度の斜面部調査時の道跡の繋がりを想定し、精査したが道跡を確認出来なかった。それに変わって、道跡の延長線を遮るように倒壊した建物跡の建材群が0黒層から検出された。桁材には等間隔に抉りがあり、柱材には桁や梁の受部がある。これらに母屋、垂木、それらの補助木と考えられる建材が折り重なっていた。他の遺構には双礫1ヶ所、非常に小規模な集石3ヶ所がある。C地区の例からⅠ黒$_2$層と推測される。

遺物は土器・陶磁器41点、石器・石製品33点、礫・礫片2,589点、ガラス製品6点、金属製品55点が出土したほか、アイヌの木製民具を含む木製品・繊維製品・樹皮製品が約63,000点出土した。

陶磁器、ガラス製品、金属製品、木製品等は、17世紀末～18世紀前葉のアイヌ文化期に相当する遺物である。土器は縄文時代早期の東釧路Ⅳ式土器、続縄文時代の土器・北大式土器、内黒の土師器などの擦文時代のものがある。北大式土器はB地区の破片と接合した。陶磁器は近世の伊万里焼の碗、信楽焼の擂鉢片が建材群の分布域から出土した。石器・石製品は石鏃、つまみ付ナイフ、石斧が斜面部から出土した。すり石、大小の砥石は擦文時代以降のものであり、火打石は近世のものであろう。礫は砂岩、片麻石、泥岩の楕円礫、楕円扁平礫、棒状楕円礫が多い。ガラス製品には、所謂アイヌ玉と呼ばれる蜜柑玉、平玉がある。金属製品は建材群の分布域から出土し、内耳主体の鉄鍋片、刀子などの茎、キセル雁首・吸口、刀の鎹（はばき）のほか、北宋銭の天禧通宝、景祐元宝、嘉祐通宝、元豊通宝、明銭の洪武通宝などがある。木製品は多種多様であり、土木・建築材、交通具、漁撈具、狩猟具、切截具、農耕具、食用具、燈火暖房用具、加工具、漆器類が出土した。紐や縄、樹皮製の結束具、木材加工時の削り屑や木端もある。生活用具の多くはアイヌの民具であるが、本州から搬入された和産物も含まれる。その再加工も行われていた。注目される遺物にはメカジキの線刻画の描かれた早櫂（サッカイ）をはじめ、車櫂（カンチ）、舟のあか汲み（ワッカケㇾ）、魚突き鉤台（マレㇾ・ニヒピ）、回転式離頭銛（キテ）の中柄・柄（オㇾ）・指掛部（オㇾケシ）、小刀（マキリ）樹皮製鞘、鉤形の木鍬（ニシッタㇾ）、焼けた筒状シラカバ樹皮（チノイェタッ）と燈火用樹皮挟み木（スネニ）、ヒキリ板、横槌（トウチ）などがある。これらの分布域も建材群の周辺に集中している。土壌の水洗選別では、ガラス玉、銭貨などのほかカワシンジュガイ殻皮、オニクルミ、クリ、スモモ、キハダなど多量の自然遺物が検出されている。

B地区の調査（図Ⅴ－10）

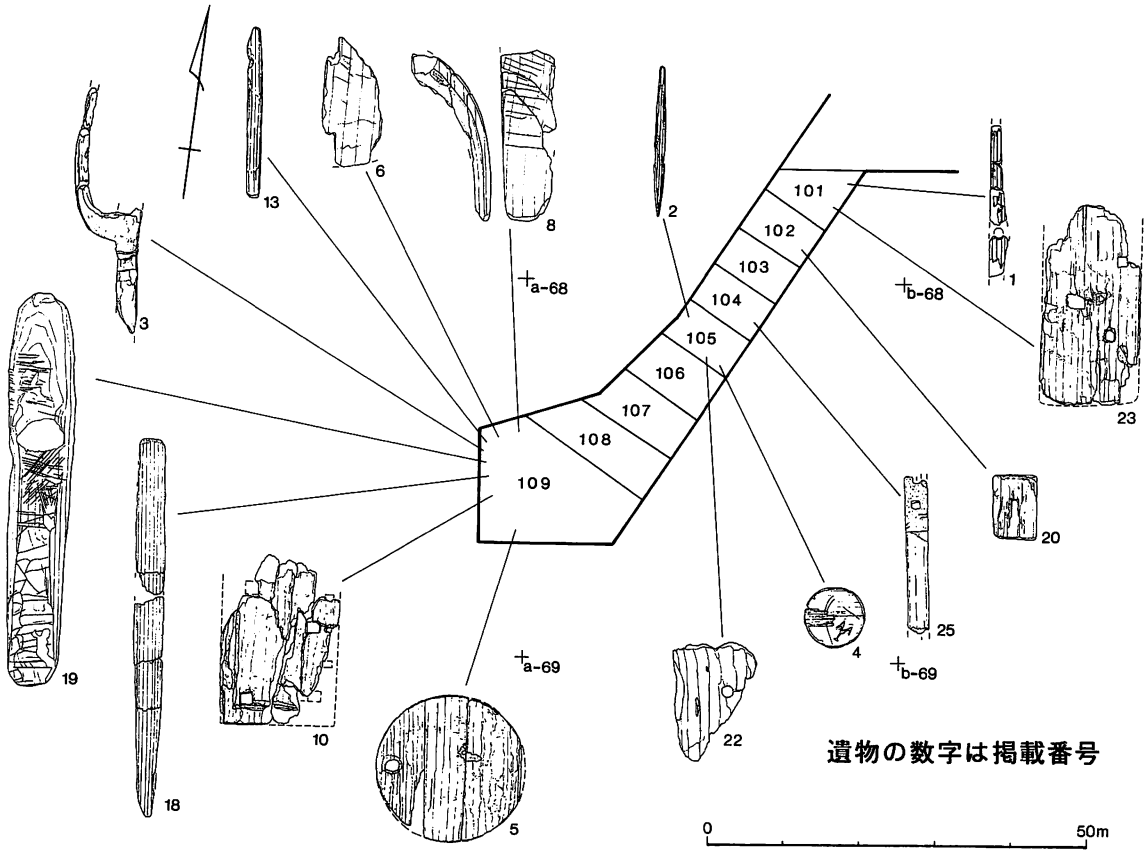
クラムシェル足場法面の保護や排水なしの調査ため包含層全部を採取できなかった。遺物の所属層位は不明である。木製品は予想以上に多く、昨年の美々7遺跡0黒層の道跡や以前に表採された伊万里焼の磁器片などから裾部分に、A′地区同様に生活空間があったものと考えられる。

土器7点、石器4点、礫・礫片288点、金属製品4点、木製品等約6,000点、自然遺物が検出された。遺物には、縄文時代の土器、A′地区の破片と接合した北大式土器、擦文時代の土器、石鏃、つまみ付ナイフ、散弾銃の薬莢、ボルトなどがある。木製品には車櫂受軸部（タカマ）、回転式離頭銛の中柄状のもの、曲げもの底、樽の蓋、箸状製品、容器片、鉈などの作業台、縁付有孔角板材、薄柾目棒状板、有孔板材、建材などがある。礫は砂岩、チャート、泥岩の楕円礫、楕円扁平礫が多い。

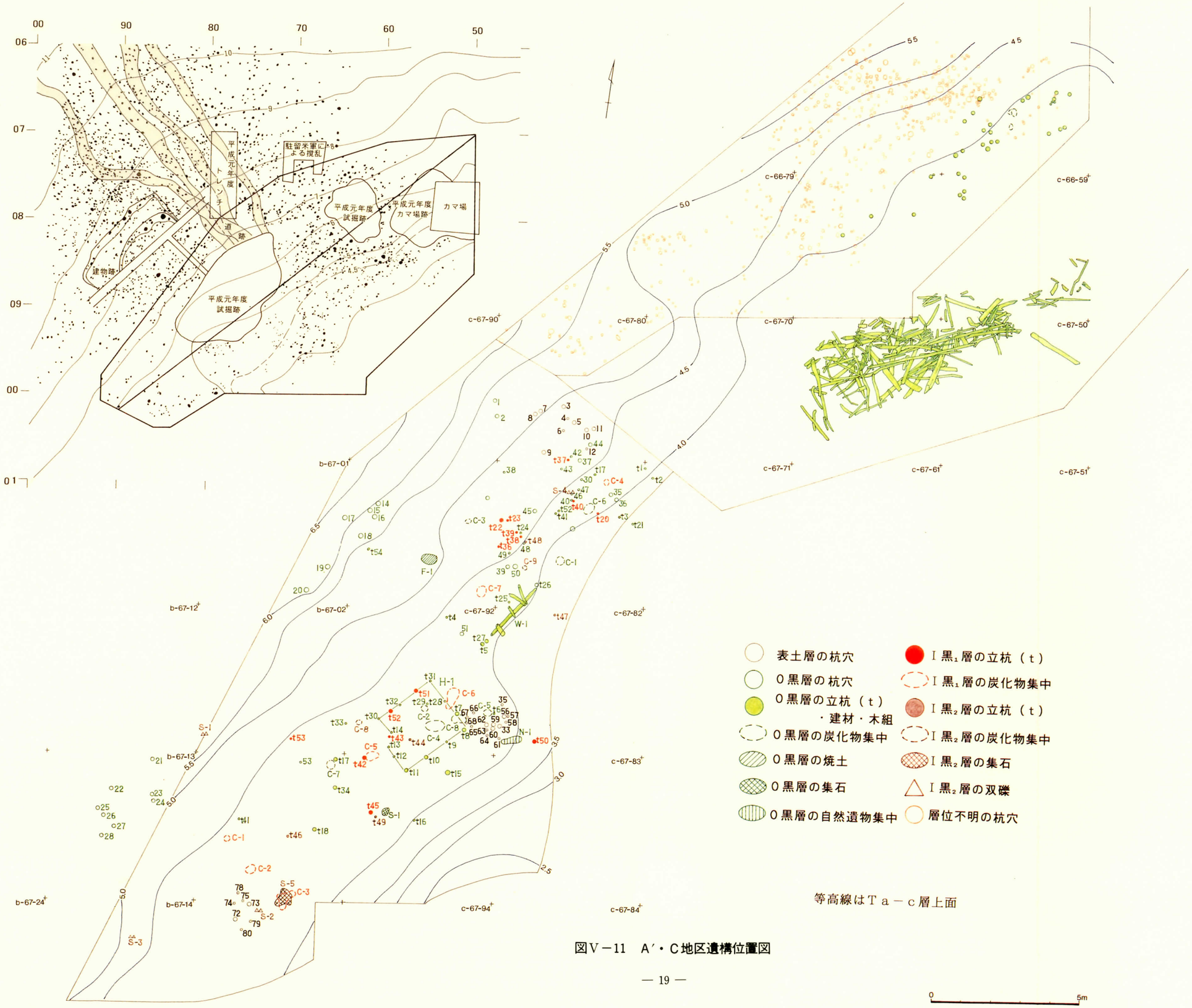
C地区の調査(図V－11・12)

土器21点、石器・石製品9点、礫・礫片825点、金属製品161点、木製品等約24,000点のほかに、フローテーション等により多量の自然遺物が検出された。調査ではⅠ黒層がⅠ黒$_1$層～Ⅰ黒$_5$層の5層に細分され、表土～Ⅰ黒$_3$層の各層から遺構・遺物が確認された。木製品がⅠ黒$_1$層以下にも残存し、今後の調査で分層発掘も可能であることが判明した。なお、Ⅰ黒$_1$層はTa－b層に近い年代と推測される。

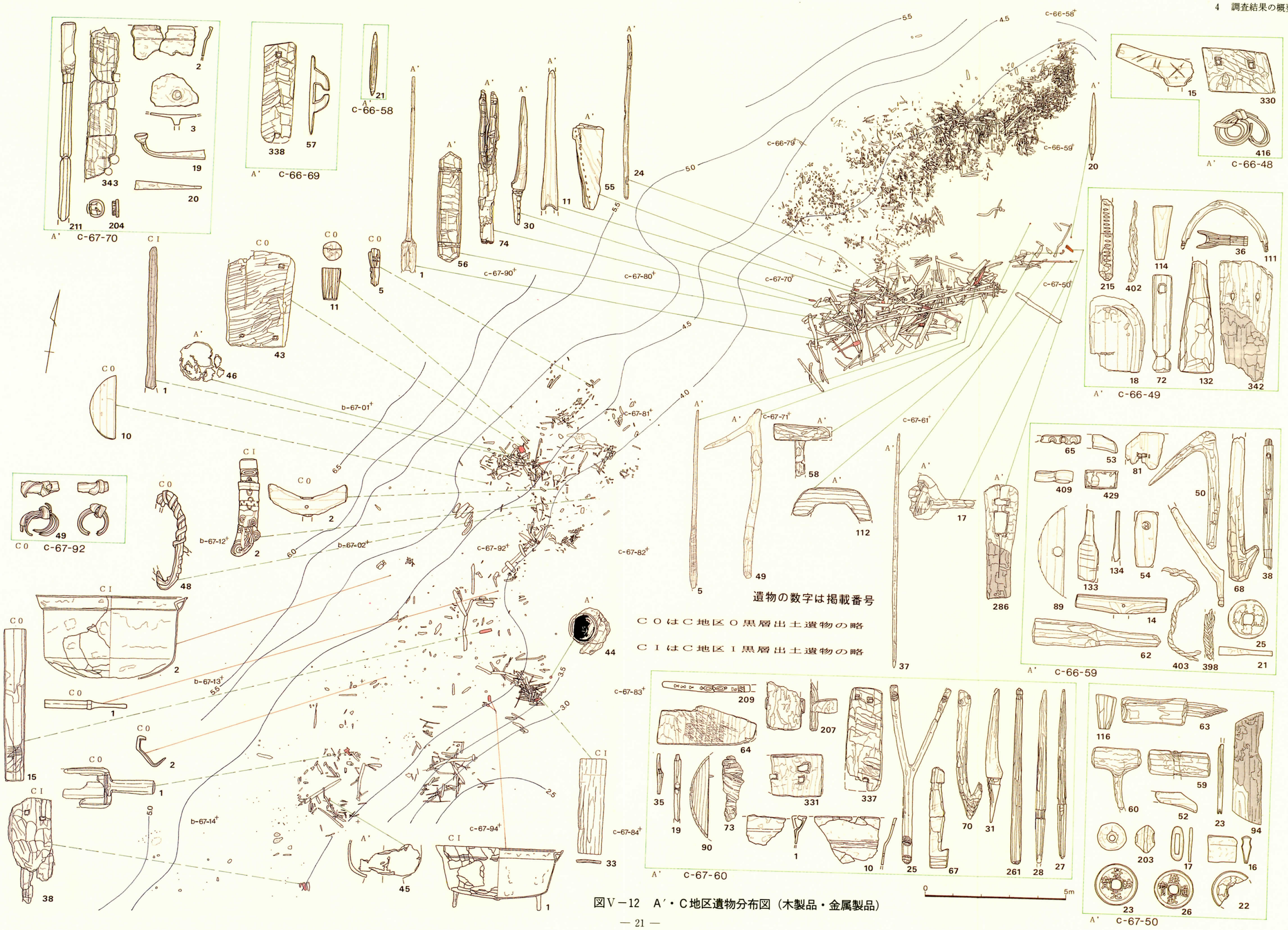
表土層からは、杭穴33か所が確認されたが遺物は出土していない。0黒層からは、柱の残る掘建柱建物跡1か所、立杭と横木による木組1か所、立杭33か所、杭穴37か所、集石1か所、焼土1か所、クルミ集中1か所、炭化物集中8か所が確認された。焼土(0F)－1からはサケ、マイワシ、コイなどの骨片とアワ、キハダ等の種子が検出された。炭化物集中(0C)－6からはヒエ、ハマナス、キチゴ、ブドウ等が検出された。遺物には火打石、たたき石、軽石製火皿？があり、断面6角形で古式の水ロキセルに似た真鍮製吸口も出土した。礫は泥岩や砂岩の楕円礫、楕円扁平礫が多い。木製品には餌入れ（オイペッ）、櫂握部、樽の栓、樽側板、箸状製品、串状製品、有孔板材、樹皮製把手等がある。Ⅰ黒からは、Ⅰ黒$_1$層で立杭15か所、杭穴1か所、炭化物集中7か所、Ⅰ黒$_2$層で立杭5か所、双礫4か所、集石1か所、炭化物集中2か所が確認された。炭化物集中（IC)－5からはマタタビ、タラノキ、ブドウ等の種子が検出された。遺物には擦文時代の土器、砥石、加工痕のある軽石、棒状の礫のほか、内耳鉄鍋、カスガイがある。Ⅰ黒$_1$層の礫は泥岩、砂岩、片麻岩の楕円礫、楕円扁平礫が多く、Ⅰ黒$_2$層では泥岩の楕円礫、楕円扁平礫が多い。木製品にはアイヌ文様の彫刻がある山刀（タシロ）の柄、底に「上」と朱書きされた漆塗椀、箸状製品、串状製品、有孔板材などがある。Ⅱ黒層からは縄文時代早期のコッタロ式土器、石鏃、石斧、礫が出土した。　（田口　尚）



図V－10　B地区遺物分布図



図Ⅴ－11　A′・C地区遺構位置図



図Ⅴ－12　A′・C地区遺物分布図（木製品・金属製品）

5　A′地区の調査

当初はクラムシェルによる包含層採取のみが予定されていたことは、調査の方法でも説明した。ここで若干の補足をする。人力調査は遺物の折損や破損を最小限とし、少しでも調査記録を採集する目的から急遽、実施されたものである。日程の合間を縫って、遺物の密集地点のみを10日間程の日程で調査（遺物採集のみの部分もある）した。その結果、平成2年度の調査以上に大型の建材やメカジキの線刻画の描かれた早櫂をはじめ、魚突き鉤台、回転式離頭銛の中柄・棹・指掛部、小刀樹皮製鞘などの木製品を良好な状態で取上げることができた。さらにガラス玉、銭貨、自然遺物等の微細遺物の存在が判明したため、採取した包含層をすべて水洗選別してその検出に努めた。しかし、このような調査方法であったため、遺構と遺物の検出層位についての充分な確認はできなかった。人力調査地点の遺構や遺物が0黒層主体で、わずかにⅠ黒層上位のものを含むと判断されたのみである。クラムシェル採取の包含層については0黒層とⅠ黒層のものが混在し、斜面部付近の一部ではⅡ黒層のものまでを含んでいる。したがって、人力調査以外で検出され土器、石器・石製品、礫・礫片等の所属時代については、型式・形態の判るもの以外は特定できていない。陶磁器、木製品類、金属製品、ガラス製品等については、C地区の調査やこれまでの調査結果から17世紀中葉～18世紀前葉の時代が主体と考えられる。また、Ⅰ黒層上面の遺物については、木製品や金属製品の種類や状態からTa－b火山灰（1667年　寛文7年）の降下年代に非常に近いと推定される。

以上の経過を経て、遺構は建材群（木組）1か所、双礫1か所、集石3か所確認され、遺物は土器・陶磁器41点、石器・石製品33点、礫・礫片2,589点、ガラス製品6点、金属製品55点の他、木製品・繊維製品・樹皮製品等約63,000点を採集することができた。木製品類、自然遺物などの有機性遺物については、分類・集計を継続中である。

(1)　遺構とその遺物

1)　建材群（木組）（図Ⅴ－13～23、表Ⅴ－1・2、図版Ⅴ－6～10）

位置　平成2年度のクリアランス部分。c－66－59、c－67－50、c－66－69、c－67－60

規模　斜面の等高線とほぼ並行するように、柱、桁・梁と考えられる建材群が折り重なり約11.0m×約3.5mの範囲に細長く分布する。ただし、調査地点が平成2年度の作業スペースであったことから、踏み込みなどによる折損が多くあり、両端の加工部を欠損しているものは自然木と区別がつかず取り上げてしまった場合もある。また、法面下付近は、出水及び崩落の危険から充分な調査ができていない。建材は法面下に何本も突き刺さっている状態であったので、建材群の分布は図示した範囲より広いものと推定される。長短太細合わせておよそ300本以上の規模であったのであろう。

確認　既に平成2年のc－67－50の4インチポンプのカマ場掘削時に出土した柱頭に受部構造のある柱材（北埋調報77　図Ⅵ－35）が報告されており建材の存在は知られていた。今年度はトレンチを兼ねた排水溝の掘削作業中に枝払い痕のある大型の建材の重なりを発見した。Ta－a層（昨年のクリアランス部分はTa－a層を除去していない。昨年度の数回の冠水による二次堆積を含む）を除去しながら、その重なりの面（0黒層）を追い範囲を広げた結果、アイヌの家屋（チセ）の柱材や桁材に似た多数の建材が横たわっていることを確認した。

特徴　多数の杭状材のほか、上部に受け部構造を持つ柱と考えられる数本の材、桁や梁のような表裏に抉りのある材、屋根の垂木状の材などが、一見すると不規則とも思える配置の中にある程度方向性を持つことを確認できた。建材はすべて枝払いされている。

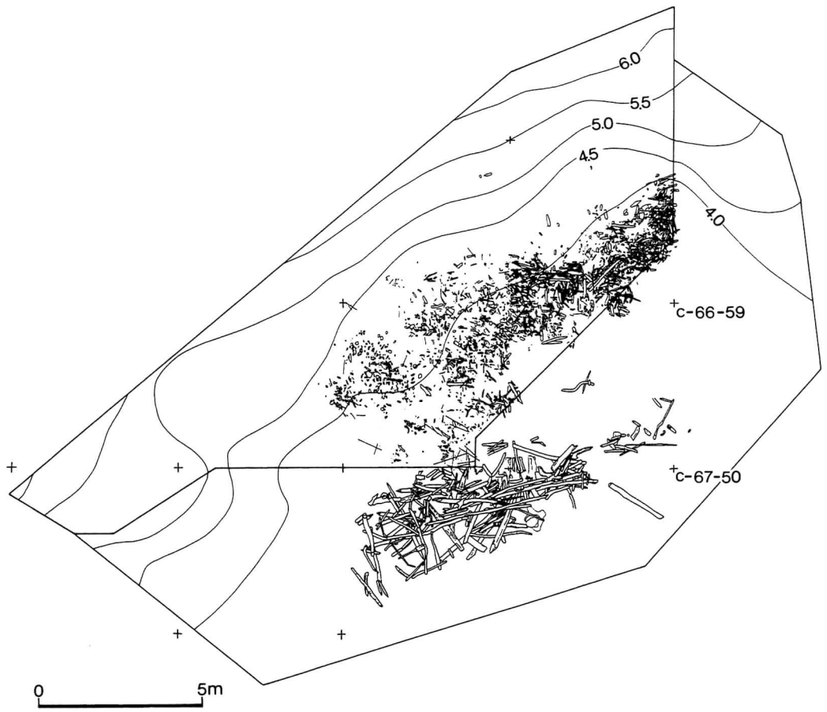
1～3・5・15・17などの長尺の建材は棟木材、桁・梁材と考えられ、建材群の中央を貫くように東西方向に配置されている。他の材の上に乗っていたように建材群の上段に位置する傾向がある。11・

14・16は柱材で、柱頭を建材群中央を貫く棟木材、桁・梁材の方向に向けている。これらと同様に柱材の多くは、捻じれ込みながら倒壊したように柱頭を建材群の中央へ向け、尖端部を外に向けて倒れている場合が多い。また、西側に分布する8・9・12・21・34等の柱材は尖端部を西に向けて東西方向に倒れ、それと直角をなすように柱材の19・33が南北方向に倒れている。33には抉り部があり柱材の12と直交して組合う。33は柱としたが抉りがあるため桁或いは梁とも考えられる。6・8・13・19・34等の径15cm以上の柱は、主柱と考えられる。24・29等は建材群中央を貫く棟木材、桁・梁材と直交しており、垂木と考えられる。20・32等は母屋と考えられ、20は29の下に位置し直行している。母屋・垂木としたものの径は5 cm前後で、折損しているものが多い。少し離れた東側の柱材の13は昨年度の柱材（北埋調報77　図VI－35）と対になるものであろう。また、法面下の建材との関係するかもしれない。これらの建材の位置や方向性から、最初に中央の柱がねじれるように内に倒れだし、続いて西側から東側に向かって倒れ、上部の棟木・桁が最後に落ちたと推測できそうである。

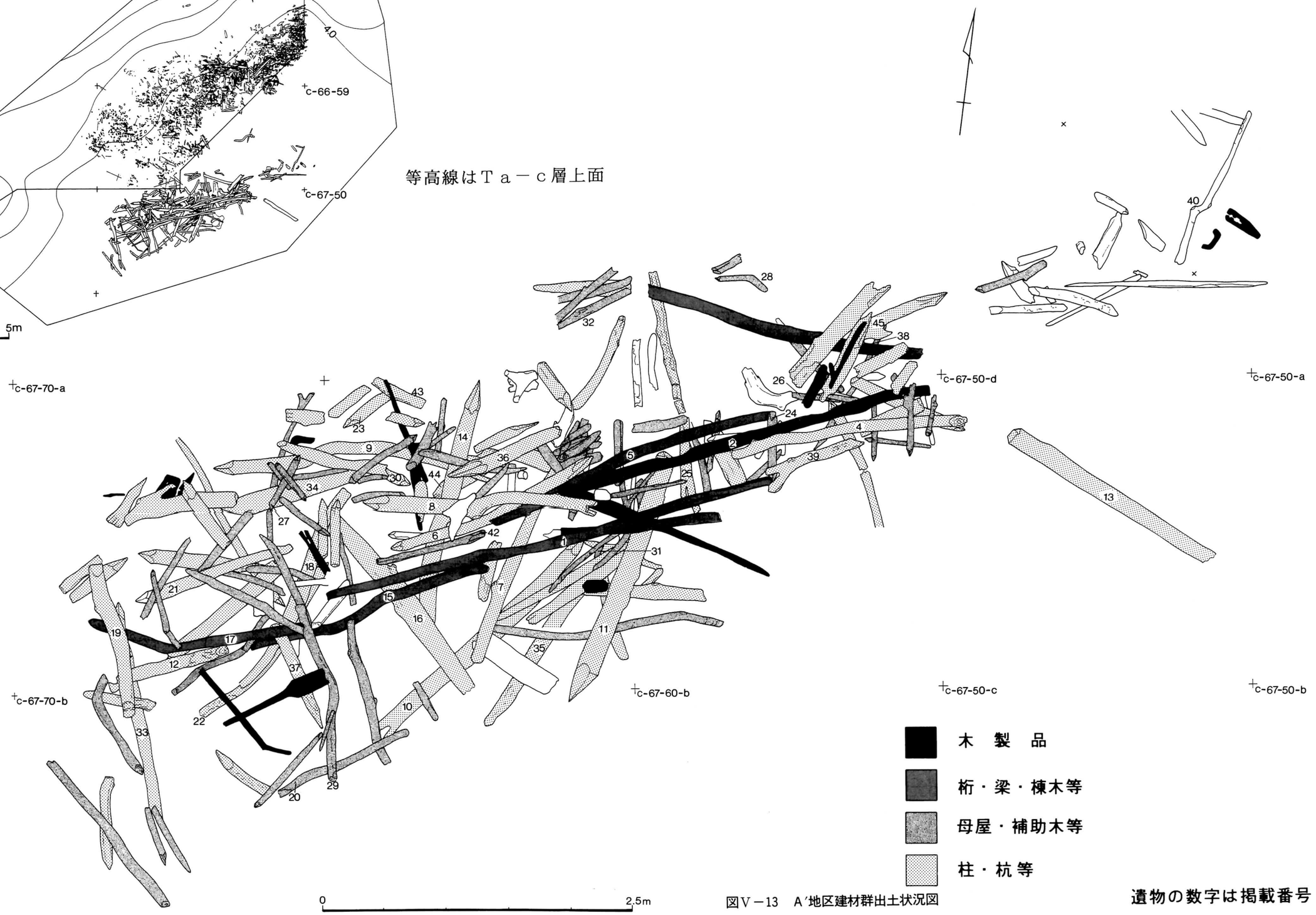
建材の長さ、太さ、量や構造から判断して、アイヌの片流れ屋根の構造を持つもの（ニアッチセ）や拝み屋根の小屋（エウカオマㇷ゚、ムネウカオマㇷ゚）よりは構造的にしっかりしている。通常の「チセ」等と比較すると貧弱な構造と考えられる。しかも、屋根を葺いた萱が確認できなかった。ここでは、萱葺き以外（樹皮、ササ、ゴザ、ムシロ等）の「チセ」に近い構造の建物と考えておく。C地区では押しつぶれたアシの茎（図V－50－2）が一定方向に並んで検出されている。

周辺からは、建材群とともに陶磁器、木製生活用具、漁撈具、加工具、燈火・暖房用具、内耳鉄鍋、キセル、銭貨等の金属製品、ガラス玉等が出土しており住居の可能性もある。縄や紐、結束部のある樹皮は建材や用具を縛ったり、各種生活用具を釣下げるためのものと考えられる。また、昨年出土した早櫂（北埋調報77　VI－20－1）や板綴舟片（北埋調報77　VI－20－2・3）もc－67－50出土であり、本年度もメカジキの描かれた早櫂はじめ、各種の櫂、舟用具が建材群と共に出土していることから、舟着場にかかわる舟小屋あるいは小休所とも考えられる。

建材（表V－1・2参照）：材の名称は出土状況から判断されたものである。1は棟木である。最大の長さもつ材で、両端が鋭角に削りだされ、片側1方に約150cmの平坦面が削り出されている。材をさらに長く繋ぐための接合面の可能性がある。2・3・5・15・17・33は桁・梁と考えられる両端部加工の材である。2は2か所に表裏の抉りがある。棟木、桁・梁など材は樹皮が剝き取られ、長さが140～365cmもあるにもかかわらず、径6～11cmと比較的に細い。20は母屋と考えられ、側面に刻目列が認められる。24・29・40は垂木と考えられる。4・6～14・16・18・19・21・22・25・34・35・39は柱材と考えられる。表面に樹皮が残こされたものが多い。18は尖端加工がなく桁・梁の可能性もある。7は角釘やカスガイが打ち込まれたような断面四角錐の孔が多数あけられ、尖端部は角孔を切っている。再利用された材であろう。4・18・21・22・25・33・35・39は径8～10cmのもの、9・10・11・12・14・16・25は径10cm以上のもの、6・8・13・19・34は径15cm以上のものであり、15cm以上の柱材は主柱を成すと考えられる。杭頭に受部構造をもつものには6・8・9・10・25・39のように股木部分利用して「Y」字状の受部としたものと11・12・13・19のように対面する2面削りにより「Λ」字状の受部としたものがある。先端部加工の多くは、2面削りや3面削りで極鋭角となっており、受け部の構造のあるものは、多面削りとなっている場合が多い。その他、26～28・32は両端部加工の50cm前後の補助木である。32には階段状の抉りがある。37・38・43～45のような割杭や23・30・31・36のような杭状材も多数検出された。23・30・36は部分的に炭化している。41・42のような長い先端部をもつ棒状の材もある。端部側には平坦面が作出されている。　（田口　尚）

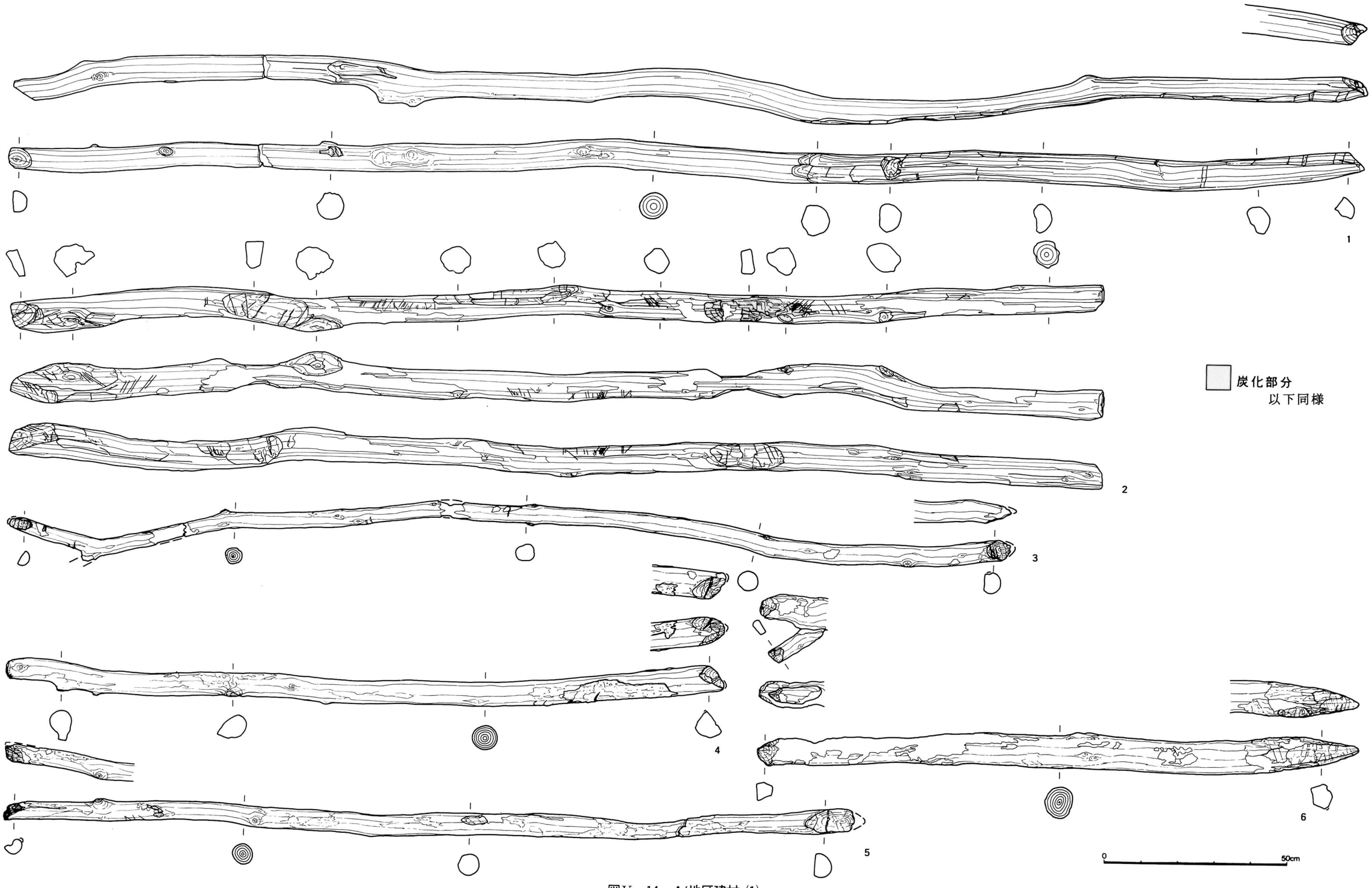


等高線はＴａ－ｃ層上面

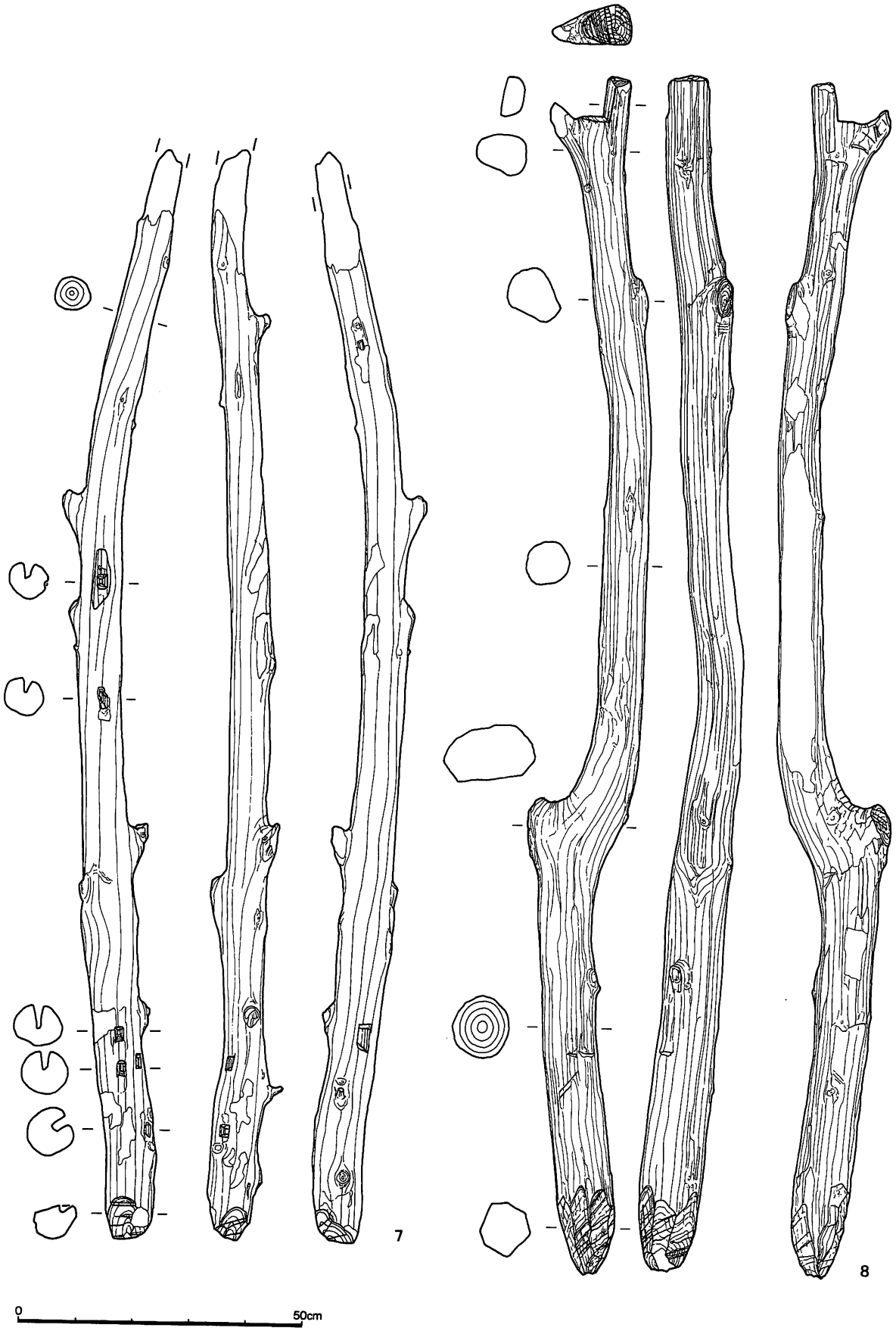


図Ⅴ－13　A′地区建材群出土状況図

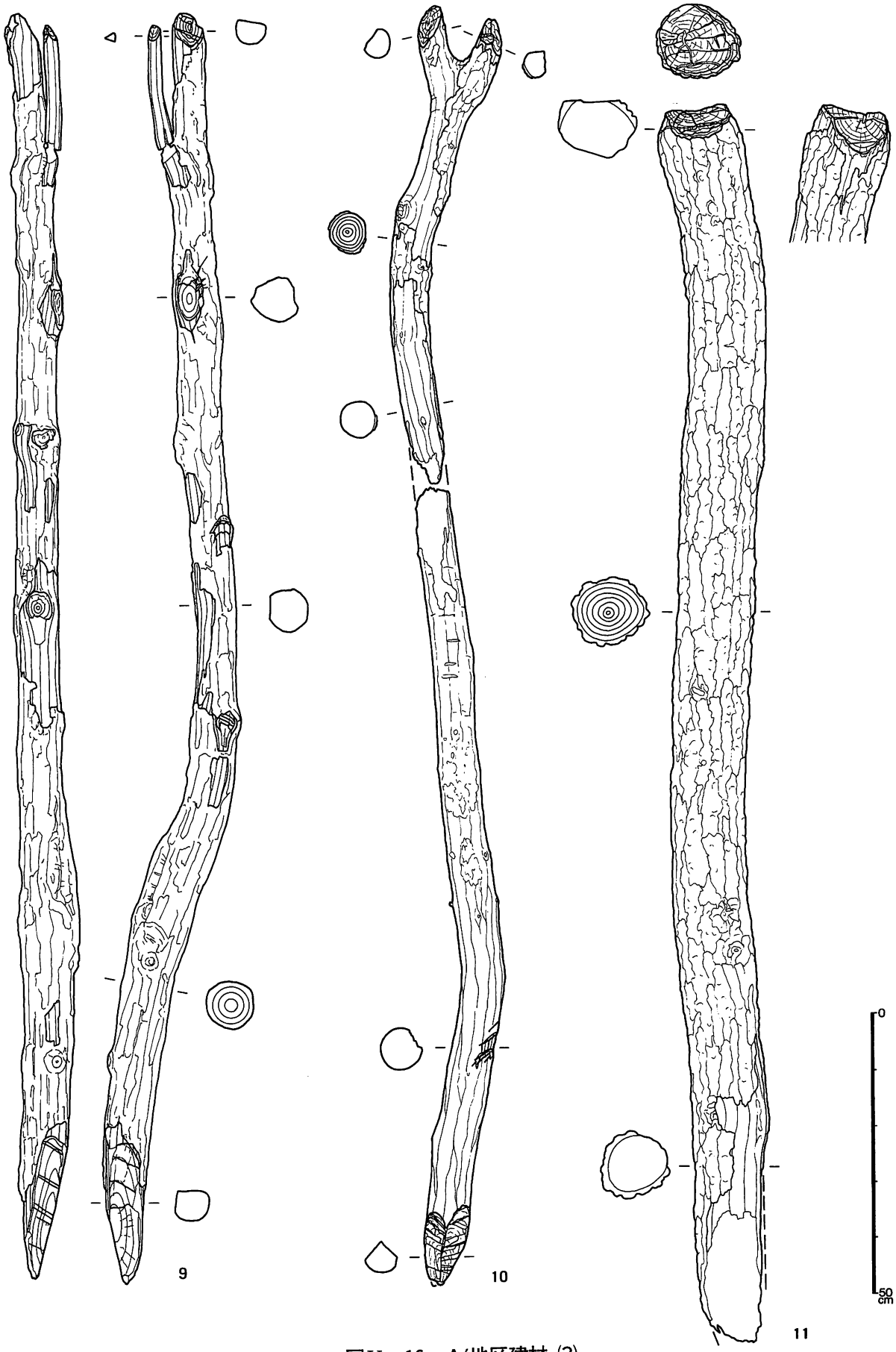
遺物の数字は掲載番号



図Ⅴ－14　A′地区建材 (1)

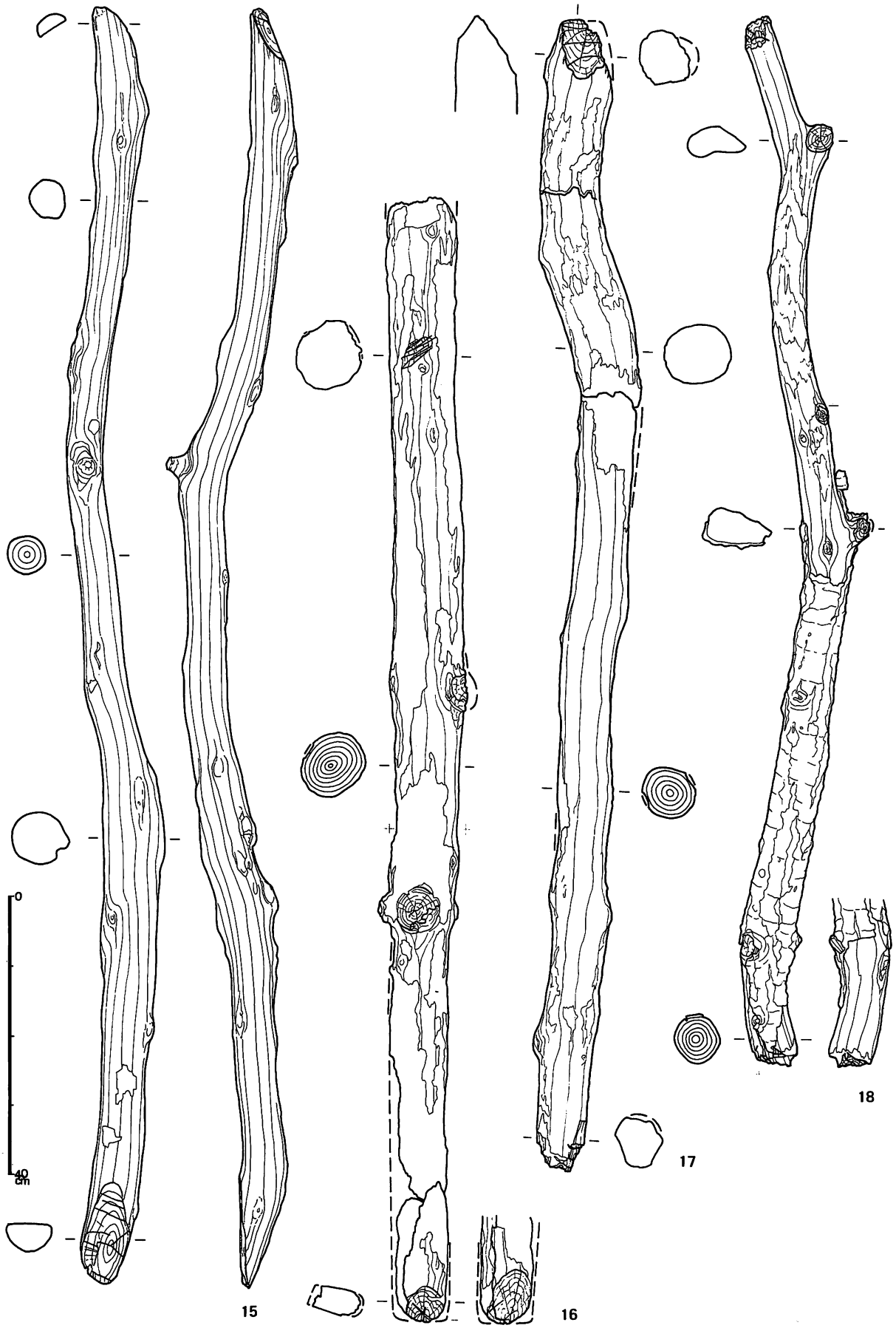


図Ⅴ－15　A′地区建材 (2)

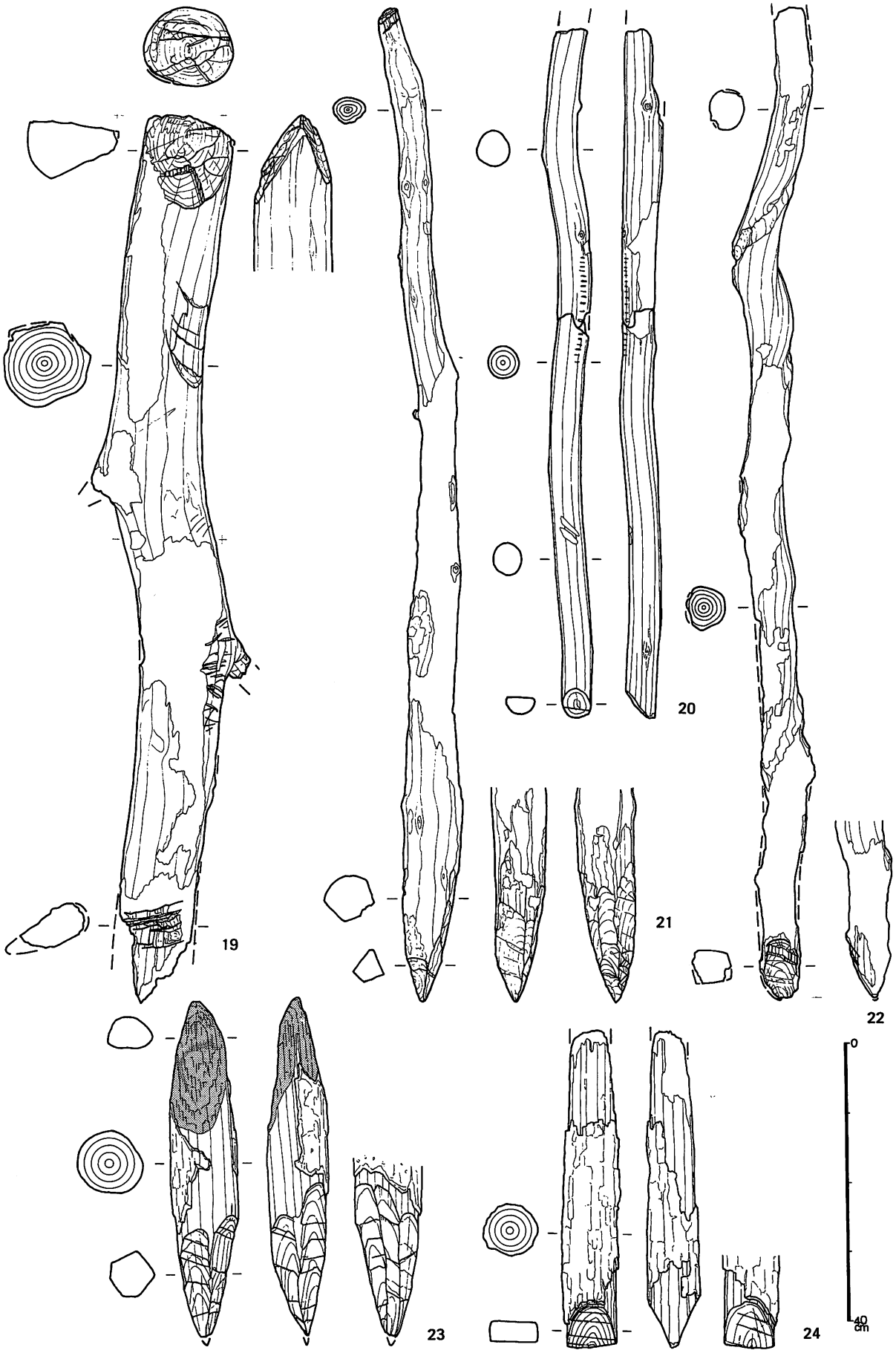


図Ｖ－16　Ａ′地区建材 (3)

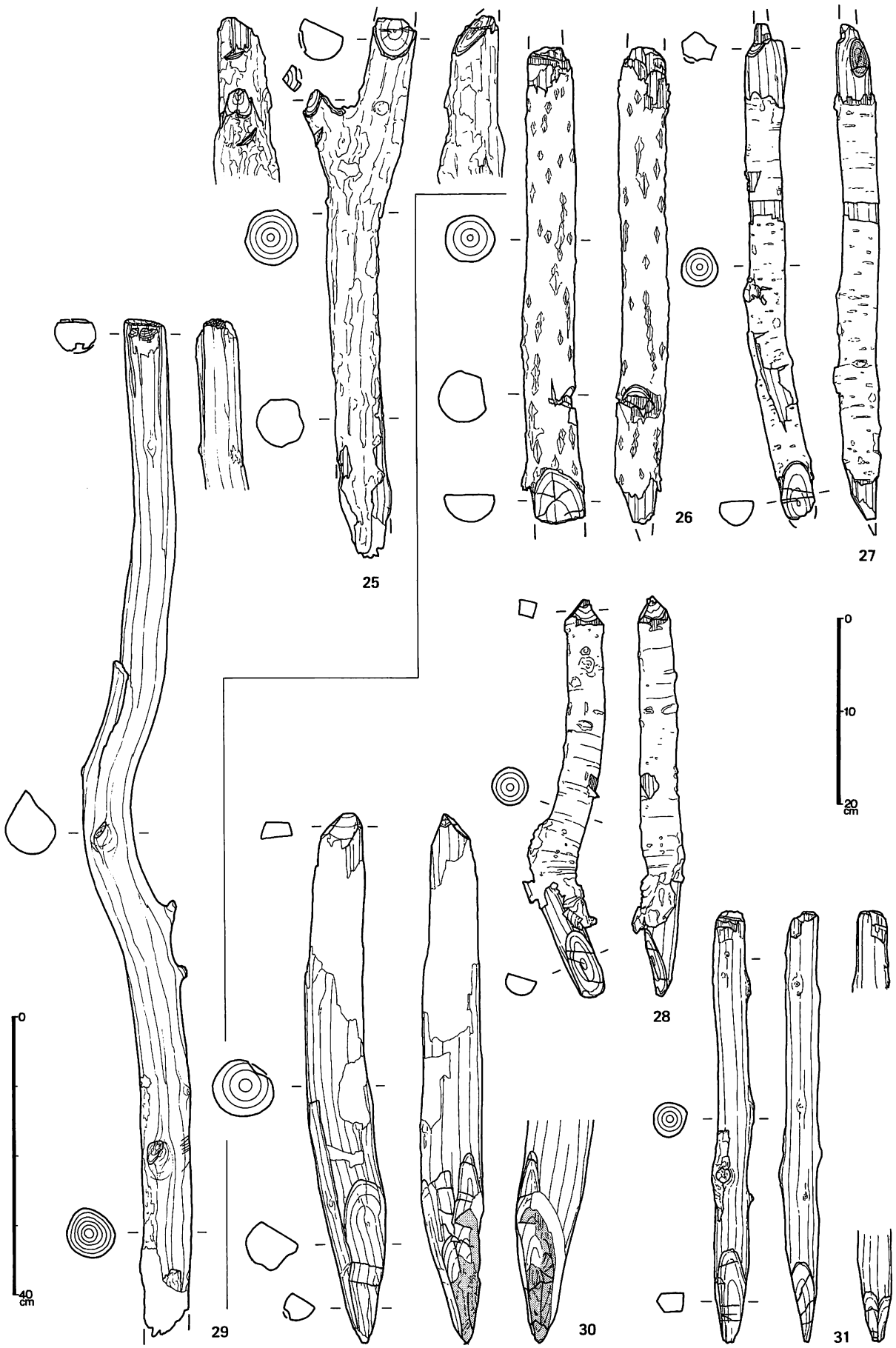
図Ⅴ－17　A′地区建材 (4)



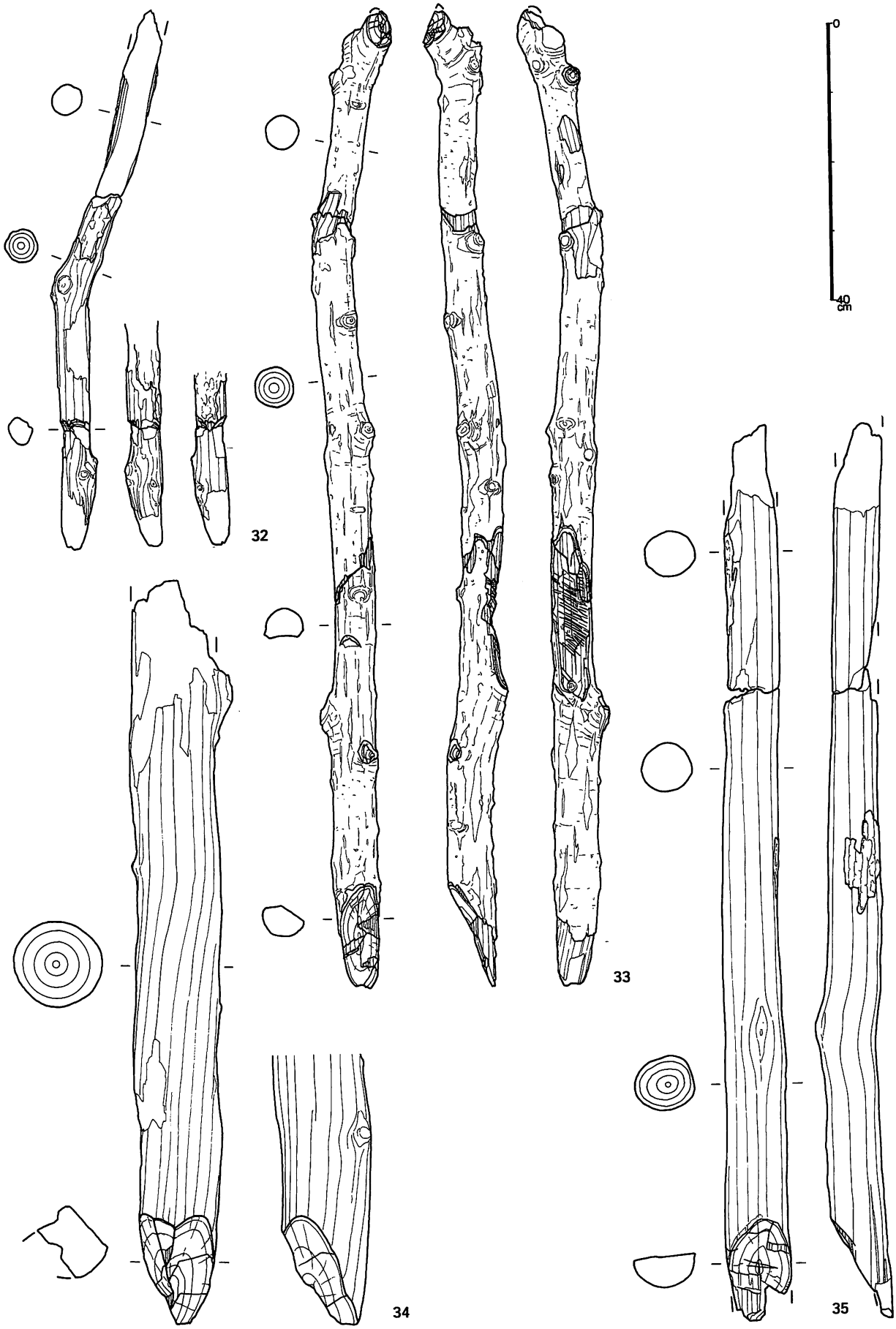
図Ｖ－18　A′地区建材 (5)



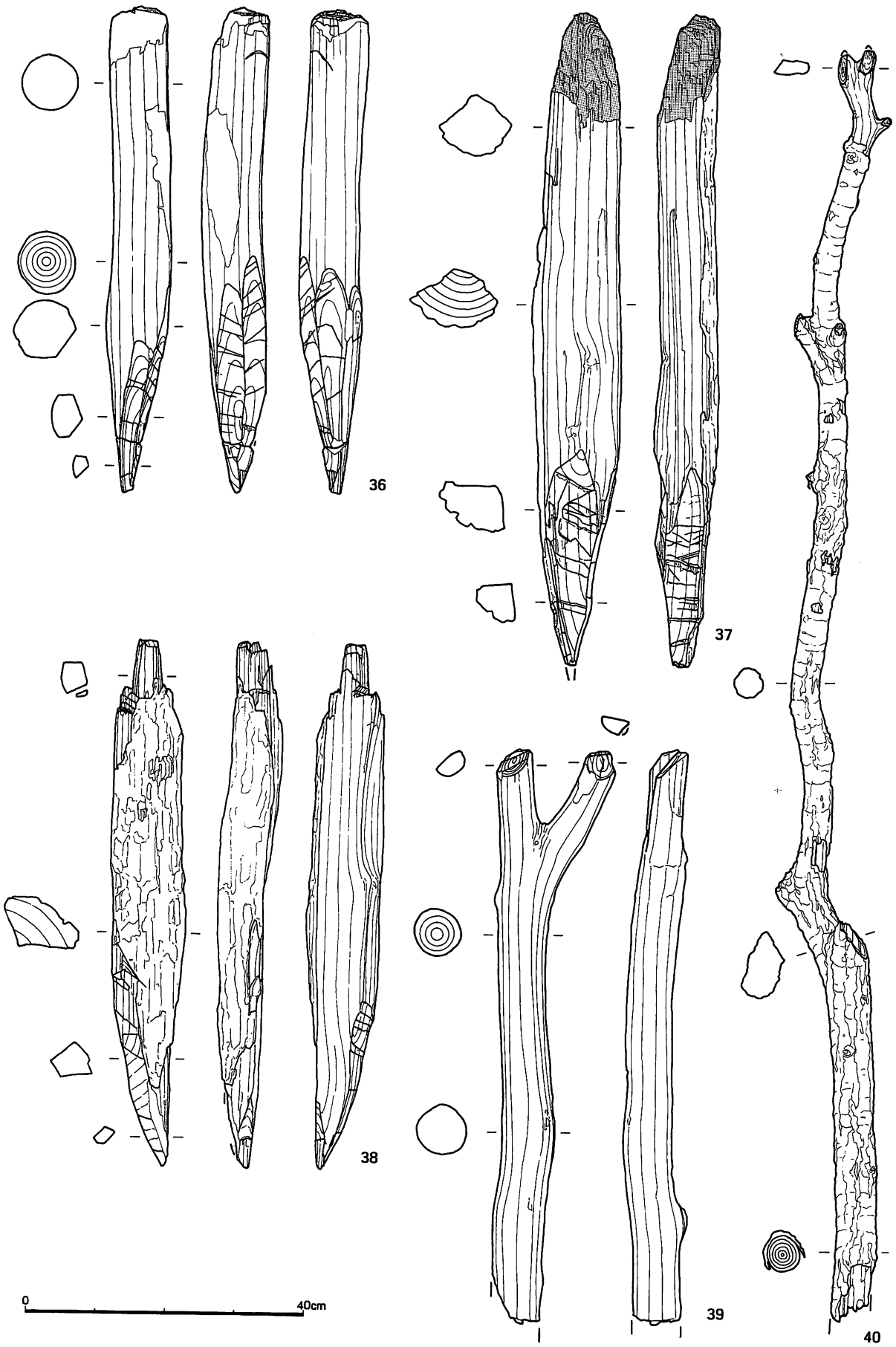
図Ⅴ－19　A′地区建材 (6)



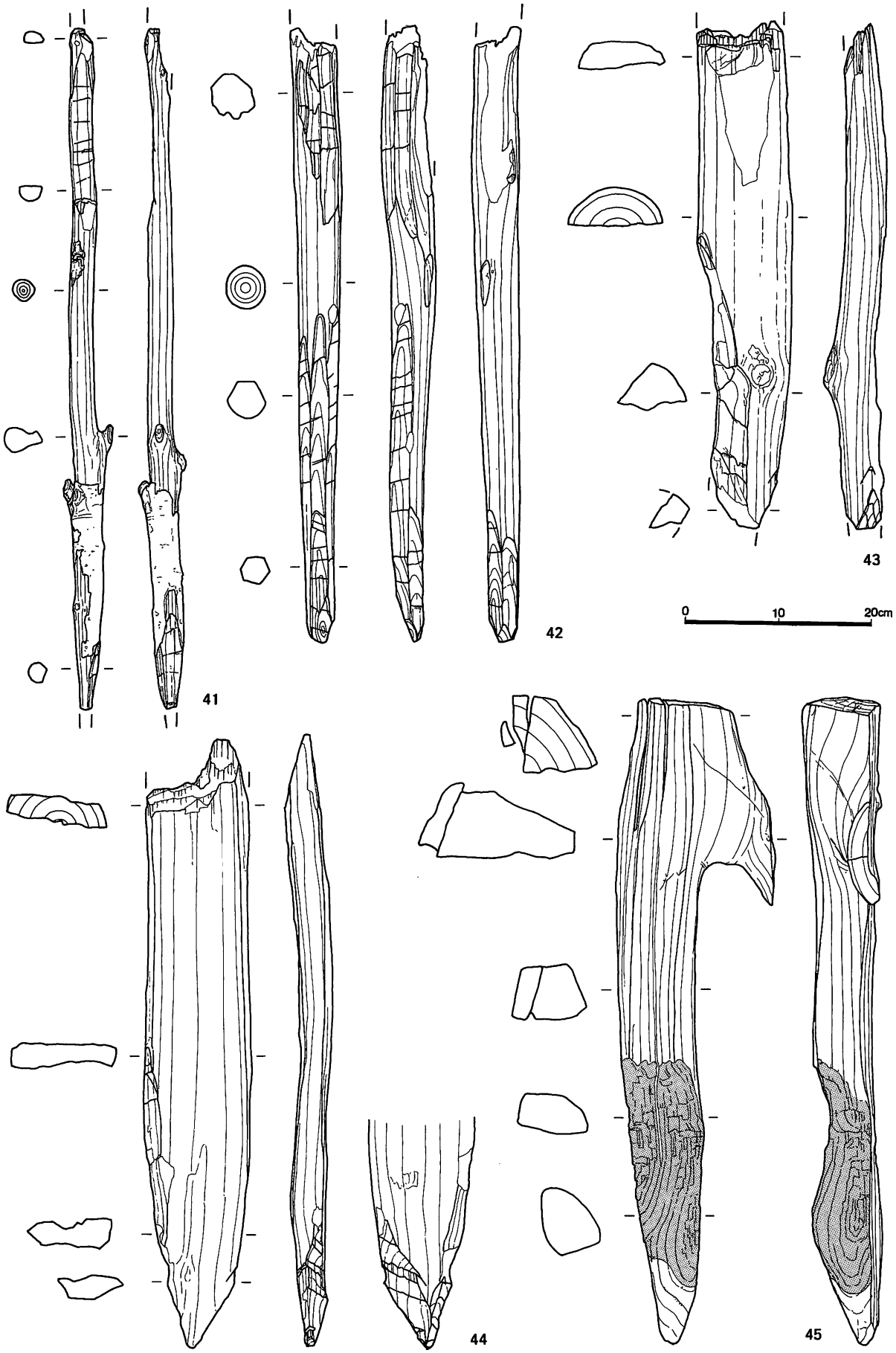
図Ⅴ－20　A′地区建材（7）



図Ⅴ－21　A′地区建材 (8)



図Ｖ－22　A′地区建材 (9)



図Ⅴ－23　A′地区建材　(10)

表Ｖ－１　Ａ′地区掲載建材（1）

Ｇはグリッド取上げ。　＊は接合資料。　※は中間部をわずかに欠損する。数値は推定値。

通番	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値（cm）長さ	幅	厚さ	湿重量（g）	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
1	8201	768	棟木	c-67-50・60	11	*365.0	8.5	11.0	14500.0			丸木		2	両端部加工で１面削り・２面削り。一方に平坦面作出。
2	8202	742	桁・梁	c-67-50・60	20	295.9	9.3	10.8	13500.0			丸木		1	両端部加工で平坦・２面削り。２か所に表裏抉りある。
3	8203	766	桁・梁	c-67-60-c	G	(271.5)	5.9	6.1	4790.0			股木		1	一端股木で欠損。１面削り。
4	8204	767	柱	c-67-50-a・d	18	195.0	8.0	7.8	6250.0	○		丸木		1	両端部加工で平坦・２面削り。
5	8205	710	桁・梁	c-67-50・60	49	(229.8)	6.4	6.4	5014.0	○	○	丸木		3	両端部加工で２面削り・２面削り。
6	8206	717	柱	c-67-60-a	16	162.9	*18.4	8.6	7852.0	○		股木		2	柱頭「Y」字状。尖端部５面削り、極鋭角。
7	8207	797	柱または桁	c-67-60-a	109	(191.4)	10.8	11.2	8500.0			丸木		1	角釘、カスガイの打込痕。尖端部３面削り、緩鋭角。
8	8208	741	柱	c-67-60-a	14	207.2	18.0	11.0	12930.0			股木		1	柱頭「Y」字状、受部角形。尖端部７面削り、極鋭角。
9	8209	763	柱	c-67-60-a・d	157	222.0	10.8	10.6	10450.0	○		股木		1	柱頭「Y」字状。尖端部交差する２面削り、極鋭角。
10	8210	703	柱	c-67-60-a・b	197	※224.0	14.6	7.7	8399.0	○		股木		2	柱頭「Y」字状。尖端部交差する２面削り、極鋭角。
11	8211	746	柱	c-67-50・60	67	(219.0)	14.7	13.1	28500.0	○		丸木		1	柱頭「Λ」字状、対面２面削り鈍角。尖端部欠損。
12	8212	745	柱	c-67-60-d	54	(107.0)	10.6	10.0	5100.0	○		丸木		3	柱頭「Λ」字状、対面２面削り鋭角。尖端部欠損。
13	8213	769	柱	c-67-50-a	196	(182.5)	17.5	15.5	28000.0	○		丸木		1	柱頭「Λ」字状、対面２面削り鈍角。尖端部欠損。
14	8214	762	柱	c-67-60-a	131	(192.5)	13.9	12.9	14500.0	○		丸木		1	柱頭欠損。尖端部３面削り、極鋭角。
15	8215	761	桁・梁	c-67-30-a・d	10	180.5	8.7	8.6	5950.0			丸木		1	両端部加工で１面削り・一面削り。
16	8216	765	柱	c-67-60-a・b・d	191	(159.8)	11.2	12.7	9280.0	○		丸木		2	柱頭欠損。尖端部対面する２面削り、鋭角。
17	8217	738	桁・梁	c-67-60-d	65	(165.2)	10.2	9.9	8450.0			丸木		2	両端部加工で２面削り・１方は粗い削り切痕多数。
18	8218	764	柱または桁	c-67-60-a・c・d	182	148.8	9.6	8.9	3950.0	○		丸木		1	両端部加工で１面削り・１方は粗い削り切痕多数。
19	8219	744	柱	c-67-60-c・d	51	(125.9)	16.0	12.0	11860.0	○		丸木		1	柱頭「Λ」字状、対面２面削り鈍角。抉り、傷痕。
20	8220	728	母屋	c-67-60-b・c	3	*(97.2)	5.1	5.3	1556.0			丸木		2	一端欠損。１面削り緩鋭角。表面に刻目列ある。
21	8221	706	柱	c-67-60-d	151	139.3	8.6	7.7	3629.0	○	○	丸木		1	尖端部４面削り、極鋭角。柱頭切痕多数。
22	8222	711	柱	c-67-60-a・d	183	(139.2)	7.6	7.0	3584.0	○		丸木		1	尖端部対面する２面削り、鋭角。表面分解顕著。
23	8223	721	杭	c-67-60-a	179	48.3	9.6	8.7	2000.0	○		丸木		1	尖端部６面削り、極鋭角。端部炭化。
24	8224	740	垂木	c-67-50-d	78	(45.5)	8.2	7.5	1565.0	○		丸木		2	尖端部対面２面削り鋭角。端部欠損
25	8225	737	柱	c-67-50-d	69	(76.0)	14.5	9.1	3060.0	○		股木		1	柱頭「Y」字状。尖端部欠損。
26	8226	724	補助木	c-67-50-d	84	(50.5)	5.5	5.0	965.0	○		丸木		1	両端部加工で１面削り・切痕多数。
27	8227	720	補助木	c-67-60-d	161	52.6	4.6	4.5	591.0	○		丸木		1	両端部加工で１面削り・凸形の削りだし。
28	8228	734	補助木	c-66-59-c	60	42.5	5.0	4.4	482.0	○		丸木		1	両端部加工で１面削り・４面削り。

表Ⅴ－2　A′地区掲載建材 (2)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
29	8229	712	垂木	c-67-60-b・d	1	(143.5)	10.4	9.3	4634.0	○		丸木		1	一端欠損。１面削りの平坦面。
30	8230	723	杭	c-67-60-a	194	56.7	6.9	6.5	1420.0	○	○	丸木		1	尖端部２面削り極鋭で炭化。端部２面削り。補助木？
31	8231	725	杭	c-67-60-a	111	45.9	4.1	4.1	402.9	○		丸木		1	尖端部４面削り極鋭。端部切痕多数。
32	8232	735	母屋	c-66-69-b	62	*(76.8)	5.4	5.9	1200.0	○		丸木		2	両端部欠損。一方に抉り部作出。分解顕著。
33	8233	749	柱または桁・梁	c-67-60-c・d	138	*139.5	8.0	7.0	3930.0	○		丸木		3	両端部加工で１面削り・枝払い痕。抉りに刃の傷多数。
34	8234	732	柱	c-67-60-a・d	188	(108.5)	14.5	16.3	11150.0			丸木		1	杭頭欠損。尖端部２面削り緩鋭角。
35	8235	748	柱	c-67-60-a・b	198	(128.0)	9.2	8.8	6000.0	○		丸木		2	杭頭欠損。尖端部１面削り緩鋭角。
36	8236	726	杭	c-67-60-a	15	68.2	8.9	8.7	3010.0			丸木		1	尖端部４面削り緩鋭角。端部平坦切痕多数。
37	8237	729	割杭	c-67-60-c・d	8	92.0	12.6	9.1	5200.0	○	○	1/4割		1	尖端部２面削り緩鋭角。端部炭化。
38	8238	750	割杭	c-66-59・67-50	24	74.3	10.4	7.2	2890.0	○		1/4割		1	尖端部２面削り緩鋭角。端部凸形の削出し。
39	8239	731	柱	c-67-50-d	17	(81.7)	8.2	8.2	3080.0			股木		1	柱頭「Y」字状。尖端部欠損。
40	8240	715	垂木	c-66-59-b	31	(179.0)	7.7	8.2	3013.0	○		丸木		1	一方欠損。一端は枝払い痕。
41	8241	736	杭状木製品	c-67-50・60	66	(71.9)	3.3	3.3	378.0	○		丸木		1	尖端部交差する２面削り緩鋭角。一方に平坦面作出。
42	8242	730	杭状木製品	c-67-60-a	13	(64.6)	5.0	5.1	840.0			丸木		1	尖端部６面削り緩鋭角。一方に平坦面作出。
43	8243	733	割杭	c-67-60-a	177	(53.6)	10.0	5.6	1165.0	○		偏割		1	両端部欠損。尖端部１面削りか？
44	8244	722	割杭	c-67-60-a	172	(64.4)	11.3	3.8	1390.0			板目		1	尖端部３面削り。端部欠損。
45	8245	727	割杭	c-66-59-b・c	22	68.4	16.7	7.7	2820.0		○	1/4割		1	尖端部炭化。端部平坦。ペグのようなものか？

2)　**双礫・集石**（図V－24、表V－3）

双礫

位置　c－67－60－a

規模　1が1,276g、2が4,426g

調査　建材群の下位で検出。

特徴　珪岩の亜角礫と安山岩の亜角礫によって構成されている。1が1,276g、2が4,426gで2は1の3.5倍の重量を持ち、双礫としては重量差が大きく、特異な例である。

集石

位置　c－67－50－a、c－67－60－d

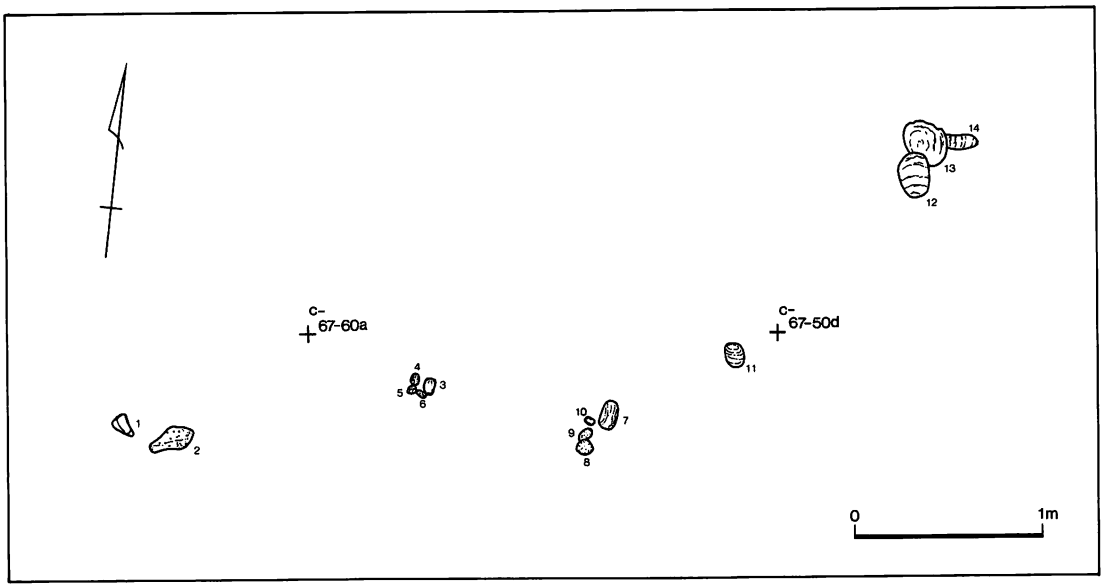
規模　3～6は42.6g～687g、7～10は20.7g～1,519g、12～14は826g～1,795g

調査　建材群の下位で検出。双礫に較べてやや下位の層順から出土している。

特徴　3～6・7～10・12～14が3ヶ所に集まっている。集石としては礫の数が少なく、特異な例である。集石ごとの特徴は12～14の重量が極めて重いことのほかはみあたらない。各集石とも岩質は砂岩と片麻岩が多く、形態は楕円礫と円扁平礫が多い。　（鈴木　信）

表V－3　A′地区双礫・集石計測値

図番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材・石質	備考	図番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材・石質	備考
1	14.41×12.35× 5.49	1276	珪岩　亜円礫	楕円扁平礫	8	9.82× 8.38× 3.07	383.2	砂岩　円礫	円扁平礫
2	25.00×13.22×12.95	4426	安山岩　亜円礫	楕円礫	9	5.62× 3.80× 1.74	46.0	砂岩　円礫	楕円扁平礫
3	10.12× 8.46× 5.26	687	泥岩　円礫	楕円礫	10	3.70× 2.76× 1.66	20.7	珪岩　円礫	楕円礫
4	6.68× 4.39× 2.02	94.4	片麻岩　円礫	楕円扁平礫	11	14.64×10.58× 3.90	902	片麻岩　円礫	楕円扁平礫
5	6.30× 4.33× 1.52	68.9	片麻岩　円礫	楕円扁平礫	12	17.00×12.51× 4.45	1795	片麻岩　円礫	楕円扁平礫
6	6.15× 2.74× 1.51	42.6	砂岩　円礫	棒状楕円礫	13	16.64× 9.17× 5.22	1074	片麻岩　亜円礫	楕円礫
7	17.03× 8.35× 6.97	1519	片麻岩　円礫	棒状礫	14	17.30× 7.24× 3.55	826	片麻岩　円礫	棒状扁平礫



図V－24　A′地区双礫・集石

(2) 包含層の遺物

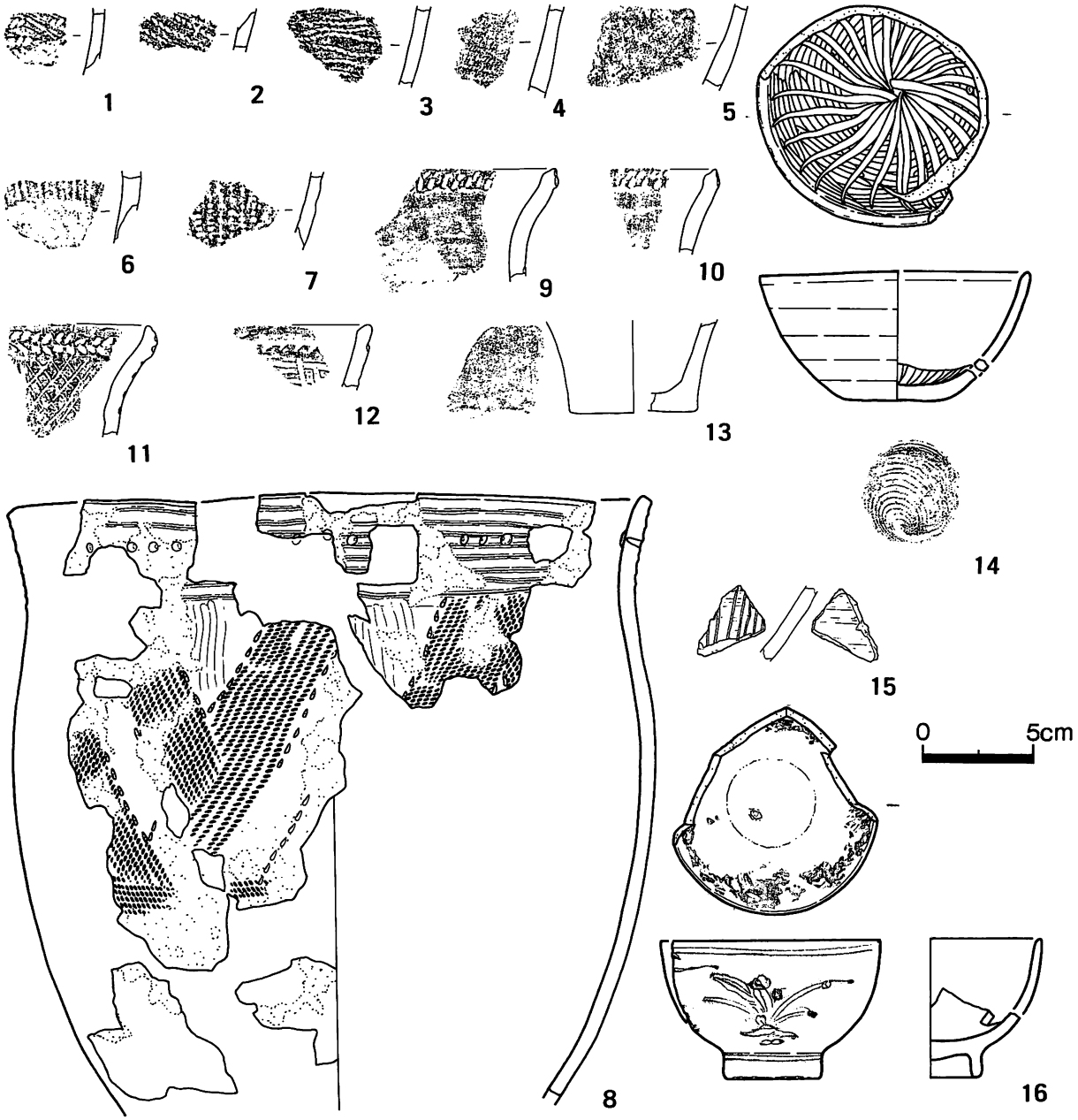
1)　土器・陶磁器（ロ絵４－２・４、図Ⅴ－25、表Ⅴ－４、図版Ⅴ－11）

縄文土器が12点、続縄文土器が4点、擦文土器が8点、近世の陶磁器が2点、不明が15点出土している。擦文土器は調査区東側のc－66－47、c－66－48に集中する。

縄文時代早期の土器（１～５）：全体がやや摩耗している東釧路Ⅳ式の深鉢胴部片である。

続縄文時代の土器（６～８）：６・７の縄文は縦走している。８は北大Ａ式（田才　1983）に分類されるもの。この土器はＢ地区の102区・105区からも接合資料が出土している。

擦文時代の土器（９～14）：９～12は深鉢の口縁部。いずれも口縁部に刺突文を施す。13は深鉢の底部、外面はタテミガキ。14は内黒の土師器碗、底部には回転糸切り痕が付く。内面はヨコヘラミガキの後に放射状のヘラミガキが放射状に施される。体部外面に補修孔をもつ。



図Ⅴ－25　A′地区土器・陶磁器

近世の陶磁器（15•16）：15は擂鉢の体部上半で、内面は摩耗していない。内外面に鉄釉を施す。胎土に大粒の長石が多量に含まれる。これらの特徴は信楽焼の製品と酷似する。16は伊万里焼の碗。呉須は全体に薄いが藍色によく発色している。高台畳付の釉を拭わず砂が熔着している。全体的に厚手で外底面は兜巾状に削りだされている。内面にはタールのようなものが付着している。17世紀後半のものか。

（鈴木　信）

2）　石器・石製品、礫（図V－26～33、表V－5、図版V－12）

石器が15点、フレイク等が12点、石製品が6点出土しておりc－66－48に多く出土している。礫は1,078点、礫片は1,511点出土しておりc－66－59a・b、c－67－60a・bから多く出土している。

石器・石製品：1～3は黒曜石製の石鏃ですべて凹基である。2は片面に主要剝離面を残す。4は頁岩製つまみつきナイフ。横長剝片を素材とする。腹面の打点側には厚みを減じるため調整が施される。周縁の調整は一側縁のみに施される。5は緑色泥岩製石斧。両主面には調整が施されず素材面を残す。基部側の破片で刃部からの衝撃によって折れている。6・7は片麻岩製すり石で扁平楕円礫の一端を使用している。6は風化が著しい。8・9はすり石で、8は泥岩、9は細粒砂岩。扁平楕円礫の一主面を使用している。1～9は形態の特徴から続縄文時代以前の石器とおもわれる。

10～13は暗赤色のチャートを素材とし、14はやや透明のメノウの転石を素材とした火打石。15は白色の珪岩を素材とした火打石。これらの使用部分は鋭角に交わる稜の長さが比較的長い部分を選択している。稜は使用によってつぶれている。16•17は凝灰岩製砥石。16は薄い板状の両主面を使用している。17は断面角柱状の2面を使用している。10～17は擦文時代以降の石器である。

礫（図V－27～33）：グラフはA′地区出土の完形の礫1,078点（礫片1,511点）についての形態を岩質別に示した。縦軸は長さ／幅で平面を表し、横軸は厚さ／幅で断面形を表す。よって、縦軸の値が大きくなると平面形は棒状に近くなり、横軸の値が小さくなると断面形は扁平に近くなる。従って、グラフの破線で区画された領域は形態の違いを表している。

形態の名称は、初めに平面形の名、次に断面形の名を付け、それらを組合わせることで礫の名称が立体的になるようにし、略号としてアルファベットを付した。

横軸値0.8～1.0、縦軸値2.0以上の形態が棒状礫で略号はa。横軸値0.5～0.8、縦軸値2.0以上の

表V－4　A′地区掲載土器・陶磁器

図番号	名称	発掘区	備考	図番号	名称	発掘区	備考
1	深鉢体部	c－66－48	Ib-4（東釧路Ⅳ）	9	深鉢口縁	c－66－47c	Ⅶ（擦文）
2	深鉢体部	c－66－48	Ib-4（東釧路Ⅳ）	10	深鉢口縁	c－66－48a	Ⅶ（擦文）
3	深鉢体部	c－66－48a	Ib-4（東釧路Ⅳ）	11	深鉢口縁	c－66－49d	Ⅶ（擦文）
4	深鉢体部	c－67－70a	Ib-4（東釧路Ⅳ）	12	深鉢口縁	c－66－49c	Ⅶ（擦文）
5	深鉢体部	c－67－70a	Ib-4（東釧路Ⅳ）	13	深鉢底部	c－67－50d	Ⅶ（擦文）
6	深鉢体部	c－67－50c	Ⅵ	14	碗	c－67－50d	Ⅶ（土師器）
7	深鉢体部	c－67－70d	Ⅵ	15	擂鉢	c－66－49c	陶器（信楽）
8	深鉢口縁～体部	c-67-70a・b・c・d B地区102・105区	Ⅵ（北大A類）	16	染付碗	c－67－50a・b	磁器（伊万里）

表V－5　A′地区掲載石器・石製品

図番号	名称	発掘区	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材質	図番号	名称	発掘区	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材質
1	石鏃	c-67-60a	(20.8)×14.5×3.2	(0.9)	黒曜石	10	火打石	c-66-50d	19.1×17.1×16.0	4.6	チャート
2	石鏃	c-66-47c	24.2×13.0×3.2	0.7	黒曜石	11	火打石	c-66-48b	26.5×22.9×23.5	12.2	チャート
3	石鏃	c-66-48c	19.5×16.0×3.0	0.7	黒曜石	12	火打石	c-66-48d	33.1×23.0×26.0	17.9	チャート
4	つまみ付ナイフ	c-66-47c	62.0×36.5×12.0	18.9	頁岩	13	火打石	c-67-60d	31.8×19.2×26.5	11.2	チャート
5	石斧	c-66-47c	59.0×44.2×12.0	42.8	緑色片岩	14	火打石	c-66-48c	32.2×27.1×29.3	23.9	珪岩
6	すり石	c-67-60b	61.1×58.1×14.8	78.9	砂岩	15	火打石	c-66-48b	39.0×37.5×26.5	39.1	メノウ質頁岩
7	すり石	c-66-59b	69.5×71.1×28.0	229.3	片麻岩	17	砥石	c-66-48b	124.0×56.0×39.5	424.6	凝灰岩
8	すり石	c-67-70c	72.0×60.0×30.0	193.0	泥岩	16	砥石	c-67-50a	28.0×35.0×11.0	13.7	凝灰岩
9	すり石	c-66-48d	42.5×67.5×14.0	74.3	砂岩						

形態が棒状楕円礫で略号はb。横軸値0.5以下、縦軸値2.0以上の形態が棒状扁平礫で略号はc。横軸値0.5～1.0、縦軸値1.2と横軸値0.5～0.8、縦軸値1.0～1.2の形態が楕円礫で略号はd。横軸値0.5以下、縦軸値1.0～1.2の形態が円扁平礫で略号はe。横軸値0.8～1.0以下、縦軸値1.0～1.2の形態が球礫で略号はf。また、ドット記号に付くアンダーラインは礫の円磨度を表し、実線は亜円礫、線を付していないドットは円礫を表す。以下グリッドごとに特徴を述べてゆくことにする。

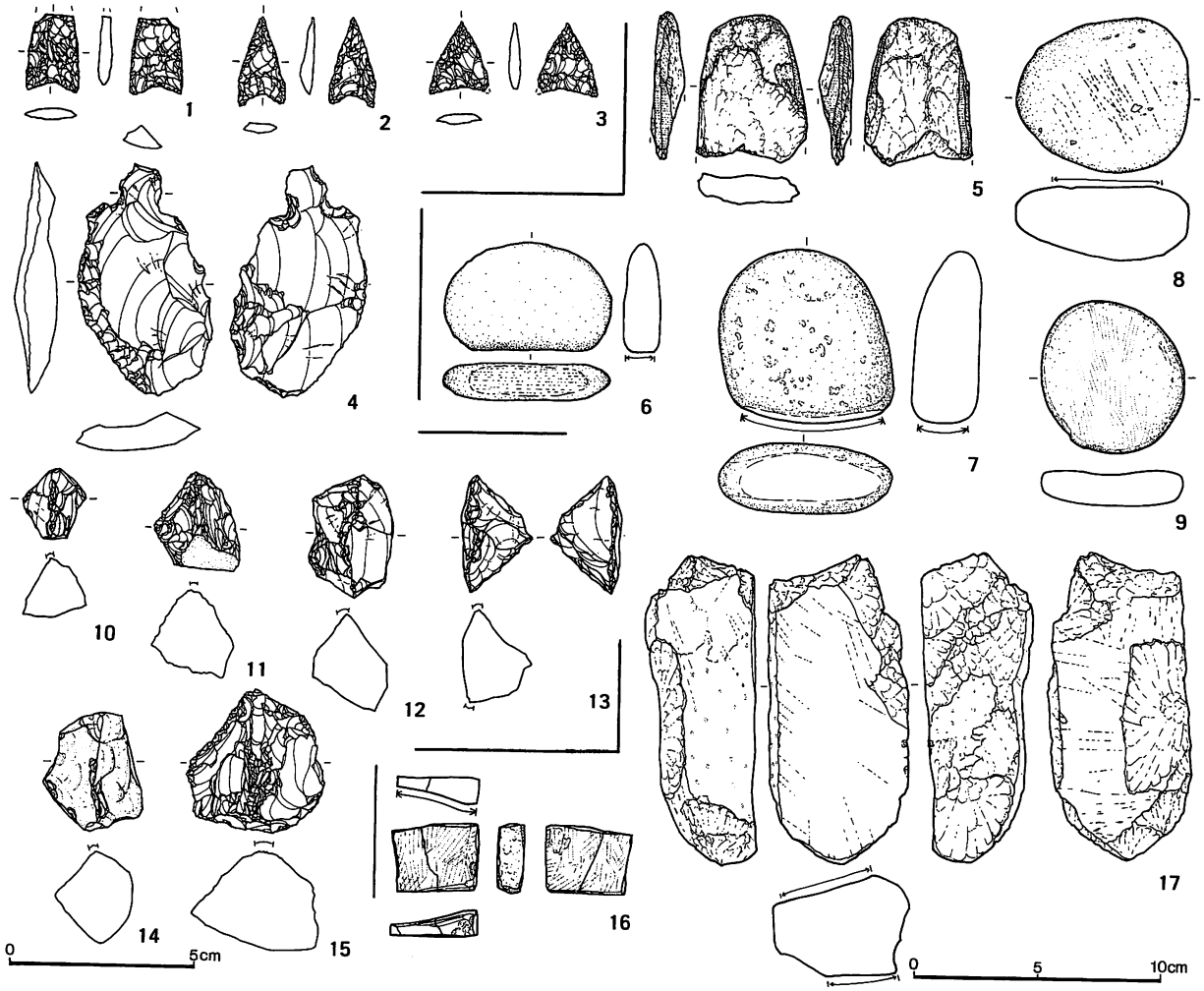
c－66－47：礫全体の特徴は、横軸値0.3～0.8、縦軸値1.1～1.8付近に散在し、礫の形態は、棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫・球礫がある。

砂岩は横軸値0.66～0.35、縦軸値1.23～1.64に集中し、主に楕円礫(52.9%)・楕円扁平礫(29.4%)によって構成されている。泥岩の横軸値・縦軸値は砂岩よりも分散し、主に楕円礫(60.0%)によって構成されている。片麻岩の横軸値・縦軸値は泥岩よりも分散し、棒状礫・球礫を除いた形態が存在する。チャートの横軸値・縦軸値は泥岩と同様に分散し、主に楕円礫(75.0%)より構成されている。

岩質ごとの形態別重量については、砂岩と泥岩とチャートのピークがいずれも0～20gの範囲にあり、またこの範囲の中においても楕円礫が多い。

c－66－48：礫全体の形態の特徴は横軸値0.3～0.8、縦軸値1.2～2.0付近に集中し、棒状礫・棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫・球礫がある。

砂岩は横軸値0.33～0.76、縦軸値1.22～1.88に集中し、主に楕円礫(39.6%)・楕円扁平礫(50.0%)によって構成されている。泥岩は横軸値0.28～0.7、縦軸値1.15～1.8に集中し、主に楕円礫



図Ⅴ－26　A′地区石器・石製品

(41.3%)・楕円扁平礫(39.1%) によって構成されており、砂岩と同じ形態が多い。片麻岩は横軸値0.28～0.52、縦軸値1.30～2.02に集中し、主に楕円扁平礫(68.0%)によって構成されている。チャートは横軸値0.33～0.76、縦軸値1.10～1.55に集中し、主に楕円礫(66.7%)によって構成されている。

岩質ごとの形態別重量については、砂岩は0～80gの間に集中し、ピークは0～20gにある。泥岩は0～20gの間に集中し、ピークも0～20gにある。片麻岩は60～80gの間に集中し、ピークは20～60gのゆるやかなものとなる。チャートは0～20gの間に集中し、ピークも0～20gの範囲にある。

c－66－49：礫全体の形態の特徴は、横軸値0.25～0.65、縦軸値1.0～1.9付近に集中し、棒状礫・棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫がある。

砂岩は横軸値0.25～0.58、縦軸値1.00～1.82に集中し、主に楕円礫(21.4%)・楕円扁平礫(46.2%)・円扁平礫(23.2%) により構成されている。泥岩は横軸値0.30～0.72、縦軸値1.20～1.76に集中し、主に楕円扁平礫(53.3%) により構成されている。片麻岩は横軸値0.25～0.52、縦軸値1.00～1.56に集中し、主に楕円扁平礫(68.0%)により構成されており、砂岩と同じ形態が多い。チャートは横軸値0.40～0.90、縦軸値1.00～1.64に集中し、主に楕円礫(69.2%) により構成されている。

岩質ごとの形態別重量は、砂岩は0～120gの間に集中し、ピークは0～20gにある。泥岩は0～20gの間に集中し、ピークも0～20gにある。片麻岩は20～80gの間に集中し、ピークは20～40gにあるが比較的緩やかである。チャートは0～20gの間に集中し、ピークも0～20gにある。

c－66－59：礫全体の形態の特徴は、横軸値0.19～0.80、縦軸値1.0～2.04付近に集中し、棒状礫・棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫がある。

砂岩は横軸値0.19～0.66、縦軸値1.00～2.01に集中し、主に楕円礫(29.5%)・楕円扁平礫(44.3%)によって構成されている。泥岩は横軸値0.28～0.62、縦軸値1.15～2.04に集中し、主に楕円扁平礫(55.6%) によって構成されている。片麻岩は横軸値0.20～0.63、縦軸値1.12～2.00に集中し、主に楕円扁平礫(60.8%)によって構成されており、泥岩と同じ形態が多い。チャートは横軸値0.32～0.80、縦軸値1.00～1.92に集中し、主に楕円礫(52.1%) によって構成されている。

岩質ごとの形態別重量については、砂岩は0～160gの間に集中し、ピークは20～80gにある。泥岩は20～80gの間に集中し、ピークは40～60gにある。片麻岩は20～180gの間にやや集中し、ピークは40～60gにある。チャートは20～80gの間に集中し、ピークは20～40gにあるが高くない。

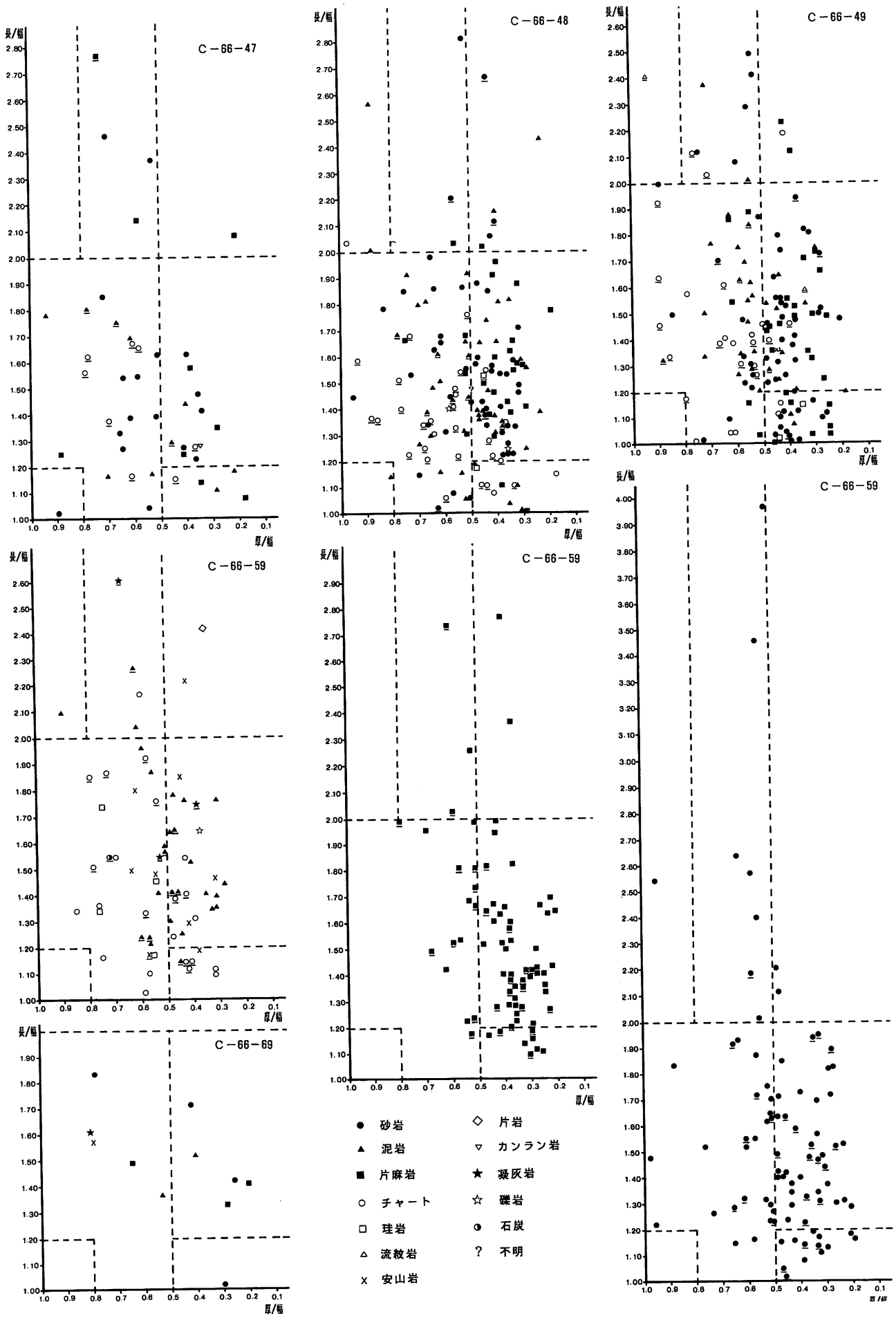
c－66－69：礫全体の形態の特徴は、横軸値0.20～0.81、縦軸値1.33～1.84付近に分散し、楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫がある。岩質ごとの形態別重量については、いずれの岩質についても集中、ピークはみられない。

c－66－50：礫全体の形態の特徴は、横軸値0.20～0.80、縦軸値1.00～2.44付近に集中し、棒状礫・棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫・球礫がある。

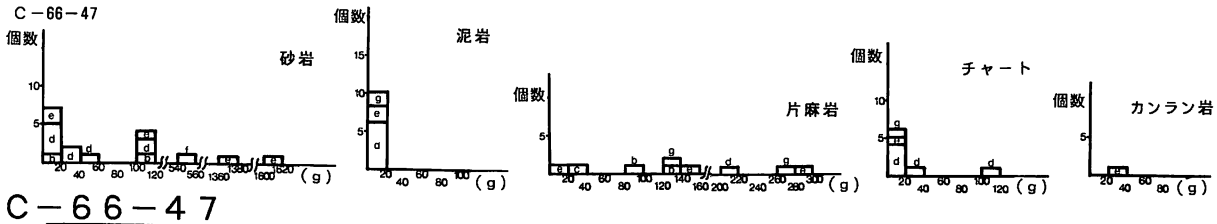
砂岩は横軸値0.22～0.71、縦軸値1.23～1.94に集中し、主に楕円礫(27.8%)・楕円扁平礫(40.3%)によって構成されている。泥岩は横軸値0.27～0.62、縦軸値1.23～1.98に集中し、主に楕円礫(44.1%)・楕円扁平礫(26.5%) によって構成されている。片麻岩は横軸値0.22～0.51、縦軸値1.05～1.81に集中し、主に楕円扁平礫(54.5%) によって構成されている。チャートは横軸値0.46～0.88、縦軸値1.00～1.56に集中し、主に楕円礫(54.2%) によって構成されている。

岩質ごとの形態別重量については、砂岩ピークは0～20gにある。泥岩は20～100gの間に集中し、ピークは0～20gにある。チャートは0～80gの間に集中し、ピークは0～20gにある。片麻岩のピークは60～80gにある。

c－66－60：礫全体の形態の特徴は、横軸値0.20～0.75、縦軸値1.00～1.90付近に集中し、棒状礫・



図Ⅴ－27　A′地区礫グラフ・表 (1)



C－66－47

砂岩　１７個(全体の37.8%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１７個 100%	棒状楕円礫	2	１１．８
		楕　円　礫	9	５２．９
		楕円扁平礫	5	２９．４
		球　　礫	1	５．９

泥岩　１０個(全体の22.2%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	７個 70.0%	楕　円　礫	4	５７．１
		楕円扁平礫	1	１４．３
		円　扁平礫	2	２８．６
亜円礫	３個 30.0%	楕　円　礫	2	６６．７
		楕円扁平礫	1	３３．３

片麻岩　９個(全体の20.0%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	８個 88.9%	棒状楕円礫	1	１２．５
		棒状扁平礫	1	１２．５
		楕　円　礫	1	１２．５
		楕円扁平礫	3	３７．５
		円　扁平礫	2	２５．０
亜円礫	１個 11.1%	棒状楕円礫	1	１００

チャート　８個(全体の17.8%)				
円磨度		形態	個数	百分率
亜円礫	８個 100%	楕　円　礫	6	７５．０
		楕円扁平礫	1	１２．５
		円　扁平礫	1	１２．５

カンラン岩　１個(全体の 2.2%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１個 100%	楕円扁平礫	1	１００

a－棒状礫　　e－楕円扁平礫
b－棒状楕円礫　　f－球礫
c－棒状扁平礫　　g－円扁平礫
d－楕円礫

C－66－48

砂岩　４８個(全体の31.0%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	４３個 89.6%	棒状楕円礫	1	２．３
		棒状扁平礫	1	２．３
		楕　円　礫	１８	４１．９
		楕円扁平礫	２３	５３．５
亜円礫	５個 10.4%	棒状楕円礫	1	２０．２
		棒状扁平礫	2	４０．０
		楕　円　礫	1	２０．０
		楕円扁平礫	1	２０．０

泥岩　４６個(全体の29.7%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	３９個 84.8%	棒　状　礫	2	５．１
		棒状扁平礫	2	５．１
		楕　円　礫	１３	３３．３
		楕円扁平礫	１７	４３．６
		球　　礫	1	２．６
		円　扁平礫	4	１０．３
亜円礫	７個 15.2%	楕　円　礫	6	８５．７
		楕円扁平礫	1.	１４．３

チャート　３１個(全体の20.0%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	６個 19.4%	棒　状　礫	1	１６．７
		楕　円　礫	2	３３．３
		楕円扁平礫	1	１６．７
		円　扁平礫	2	３３．３
亜円礫	２５個 80.6%	楕　円　礫	１８	７２．０
		楕円扁平礫	3	１２．０
		円　扁平礫	4	１６．０

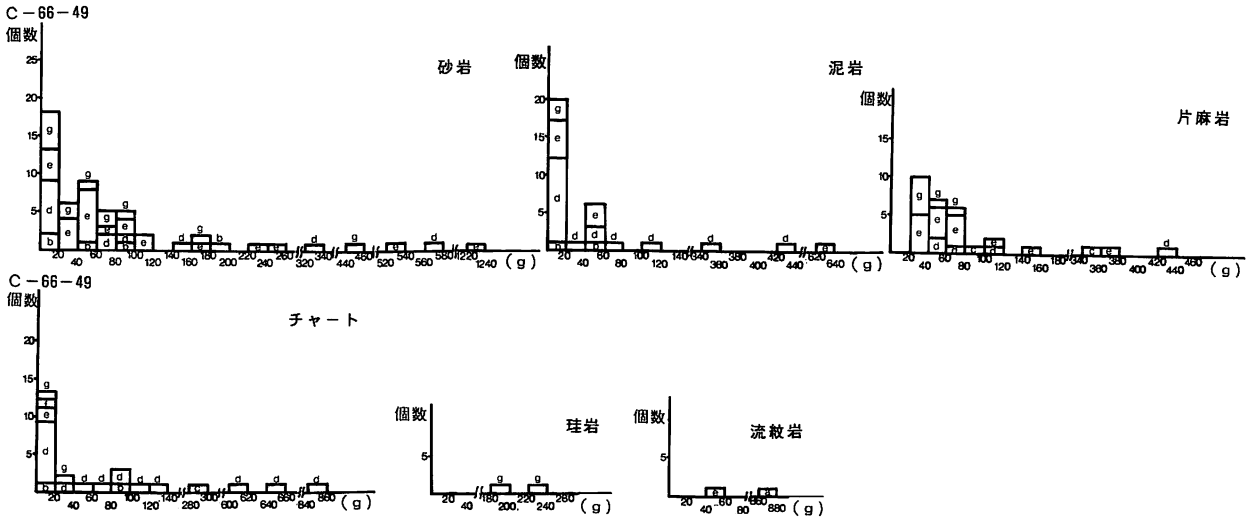
片麻岩　２５個(全体の16.1%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	２５個 100%	棒状楕円礫	1	４．０
		棒状扁平礫	1	４．０
		楕　円　礫	4	１６．０
		楕円扁平礫	１７	６８．０
		円　扁平礫	2	８．０

珪岩　２個(全体の 1.3%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１個 50.0%	円　扁平礫	1	１００
亜円礫	１個 50.0%	楕円扁平礫	1	１００

礫岩　２個(全体の 1.3%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	２個 100%	楕　円　礫	1	５０．０
		楕円扁平礫	1	５０．０

その他　１個(全体の 0.6%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１個 100%	楕　円　礫	1	１００

図Ⅴ－28　A′地区礫グラフ・表 (2)



C－66－49

砂岩　56個(全体の37.8%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円	52	棒状楕円礫	5	9．6
	個	楕　円　礫	11	21．2
礫	92.9	楕円扁平礫	24	46．2
	%	円　扁平礫	12	23．1
亜	4	楕　円　礫	1	25．0
円	個	楕円扁平礫	2	50．0
	7.1	円　扁平礫	1	25．0
礫	%			

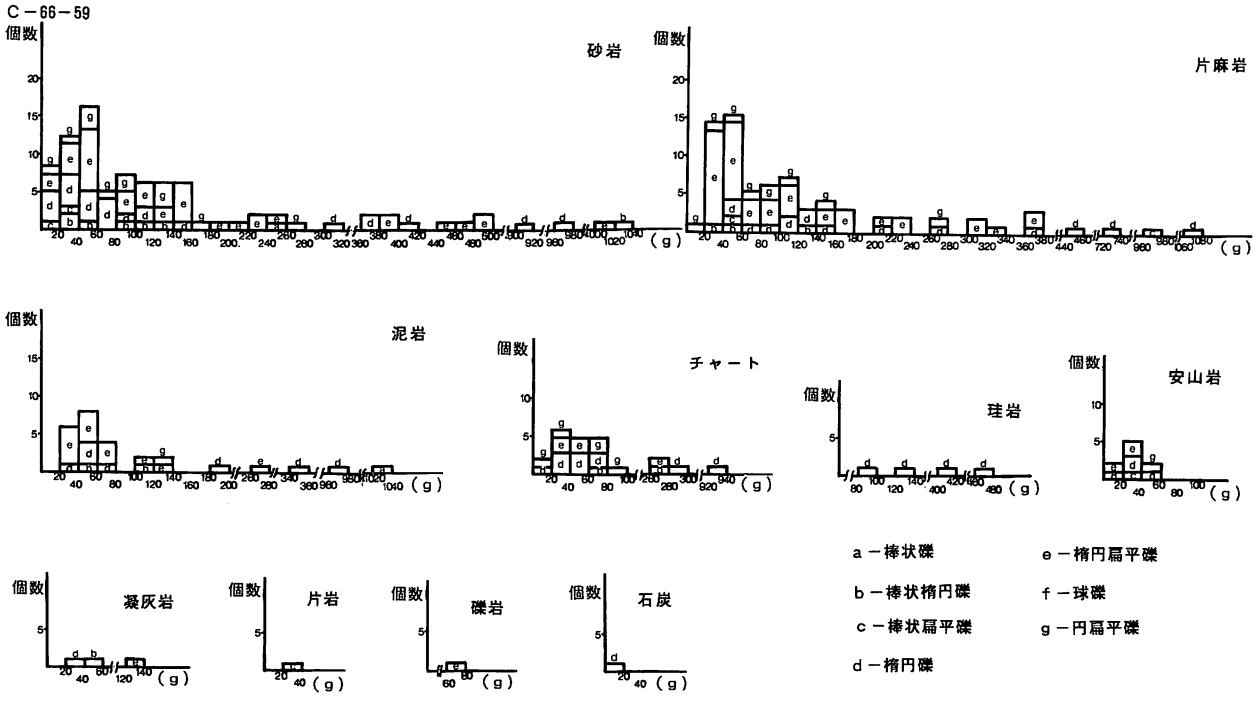
泥岩　32個(全体の21.6%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円	28	棒状楕円礫	2	7．1
	個	楕　円　礫	15	53．6
礫	87.5	楕円扁平礫	8	28．6
	%	円　扁平礫	3	10．7
亜	4	楕　円　礫	3	75．0
円	個	楕円扁平礫	1	25．0
	12.5			
礫	%			

片麻岩　30個(全体の20.3%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円	30	棒状扁平礫	2	6．7
	個	楕　円　礫	5	16．7
礫	100	楕円扁平礫	16	53．3
	%	円　扁平礫	7	23．3

流紋岩　2個(全体の 1.4%)				
円磨度		形態	個数	百分率
亜	2	棒　状　礫	1	50．0
円	個	楕円扁平礫	1	50．0
	100			
礫	%			

チャート　26個(全体の17.6%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円	11	棒状扁平礫	1	9．1
	個	楕　円　礫	8	72．7
礫	42.3	円　扁平礫	2	18．2
	%			
亜	15	棒状楕円礫	2	13．3
円	個	楕　円　礫	10	66．7
	57.7	楕円扁平礫	2	13．3
礫	%	球　　礫	1	6．7

珪岩　2個(全体の 1.4%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円	1	円　扁平礫	1	100
	個			
礫	50			
	%			
亜	1	円　扁平礫	1	100
円	個			
	50			
礫	%			



図Ⅴ－29　A′地区礫グラフ・表 (3)

棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫・球礫がある。

砂岩は横軸値0.23～0.65、縦軸値1.00～1.91に集中し、主に楕円礫(32.6%)・楕円扁平礫(41.6%)によって構成されている。泥岩は横軸値0.25～0.70、縦軸値1.00～1.96に集中し、主に楕円礫(43.2%)・楕円扁平礫(27.3%)によって構成されている。片麻岩は横軸値0.15～0.48、縦軸値1.16～1.88に集中し、主に楕円扁平礫(55.5%)によって構成されている。チャートは横軸値0.43～0.82、縦軸値1.11～1.60に集中し、主に楕円礫(73.1%)によって構成されている。

岩質ごとの形態別重量については、砂岩は20～100ｇの間に集中し、ピークは60～80ｇにある。泥岩は0～140ｇの間に集中し、ピークは20～40ｇにある。片麻岩は0～200ｇの間に集中し、ピークは

Ｃ－６６－５９

砂岩　８８個(全体の38.1%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 ６２ 個	棒状礫	1	1.6
	棒状楕円礫	6	9.7
	棒状扁平礫	2	3.2
	楕円礫	19	30.7
礫 70.5 %	楕円扁平礫	25	40.3
	円扁平礫	9	14.5
亜円 ２６ 個	棒状楕円礫	1	3.9
	楕円礫	7	26.9
29.5	楕円扁平礫	14	53.8
礫 %	円扁平礫	4	15.4

片麻岩　７４個(全体の32.0%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 ４７ 個	棒状楕円礫	2	4.3
	棒状扁平礫	1	2.1
	楕円礫	6	12.8
礫 63.5 %	楕円扁平礫	33	70.2
	円扁平礫	5	10.6
亜円 ２７ 個	棒状楕円礫	2	7.4
	楕円礫	9	33.3
36.5	楕円扁平礫	12	44.4
礫 %	円扁平礫	4	14.8

泥岩　２７個(全体の11.7%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 １９ 個	棒状礫	1	5.3
	棒状楕円礫	1	5.3
礫 70.4 %	楕円礫	5	26.3
	楕円扁平礫	12	63.2
亜 ８ 個	棒状楕円礫	1	12.5
円	楕円礫	3	37.5
29.6	楕円扁平礫	3	37.5
礫 %	円扁平礫	1	12.5

珪岩　４個(全体の 1.7%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 ４ 個	楕円礫	4	100
礫 100 %			

チャート　２３個(全体の10.0%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 １２ 個	棒状楕円礫	1	8.3
	楕円礫	6	50.0
礫 52.2 %	楕円扁平礫	3	25.0
	円扁平礫	2	16.7
亜 １１ 個	楕円礫	6	54.5
円	楕円扁平礫	2	18.2
47.8	円扁平礫	3	27.3
礫 %			

安山岩　９個(全体の 3.9%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 ８ 個	棒状扁平礫	1	12.5
	楕円礫	3	37.5
礫 88.9 %	楕円扁平礫	3	37.5
	円扁平礫	1	12.5
亜 １ 個	楕円礫	1	100
円			
11.1			
礫 %			

礫岩　１個(全体の 0.4%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 １ 個	楕円扁平礫	1	100
礫 100 %			

凝灰岩　３個(全体の 1.3%)

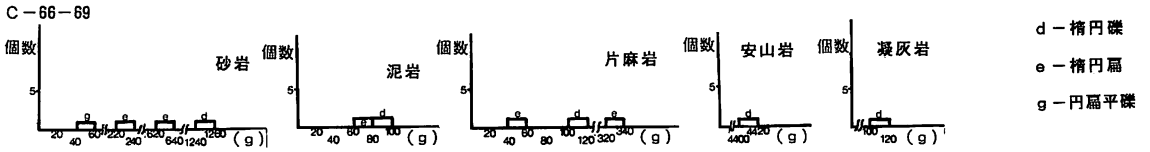
円磨度	形態	個数	百分率
亜 ３ 個	棒状楕円礫	1	33.3
円	楕円礫	1	33.3
100	楕円扁平礫	1	33.3
礫 %			

片岩　１個(全体の 0.4%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 １ 個	棒状扁平礫	1	100
礫 100 %			

石炭　１個(全体の 0.4%)

円磨度	形態	個数	百分率
亜 １ 個	楕円礫	1	100
円			
100			
礫 %			



Ｃ－６６－６９

砂岩　４個(全体の36.4%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 ４ 個	楕円礫	1	25.0
	楕円扁平礫	2	50.0
礫 100 %	円扁平礫	1	25.0

泥岩　２個(全体の18.2%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 ２ 個	楕円礫	1	50.0
	楕円扁平礫	1	50.0
礫 100 %			

片麻岩　３個(全体の27.3%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 ３ 個	楕円礫	1	33.3
	楕円扁平礫	2	66.7
礫 100 %			

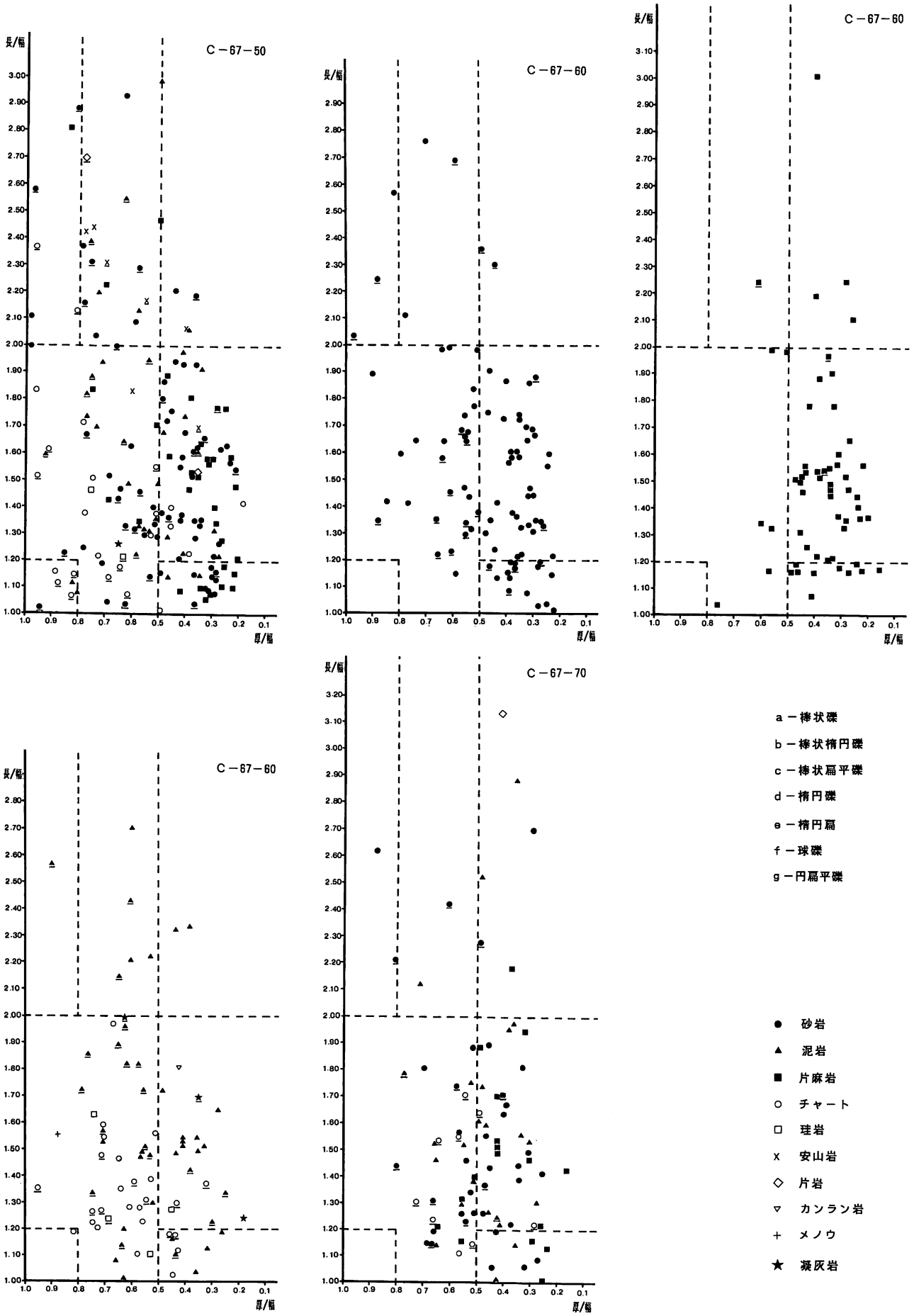
安山岩　１個(全体の 9.1%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 １ 個	楕円礫	1	100
礫 100 %			

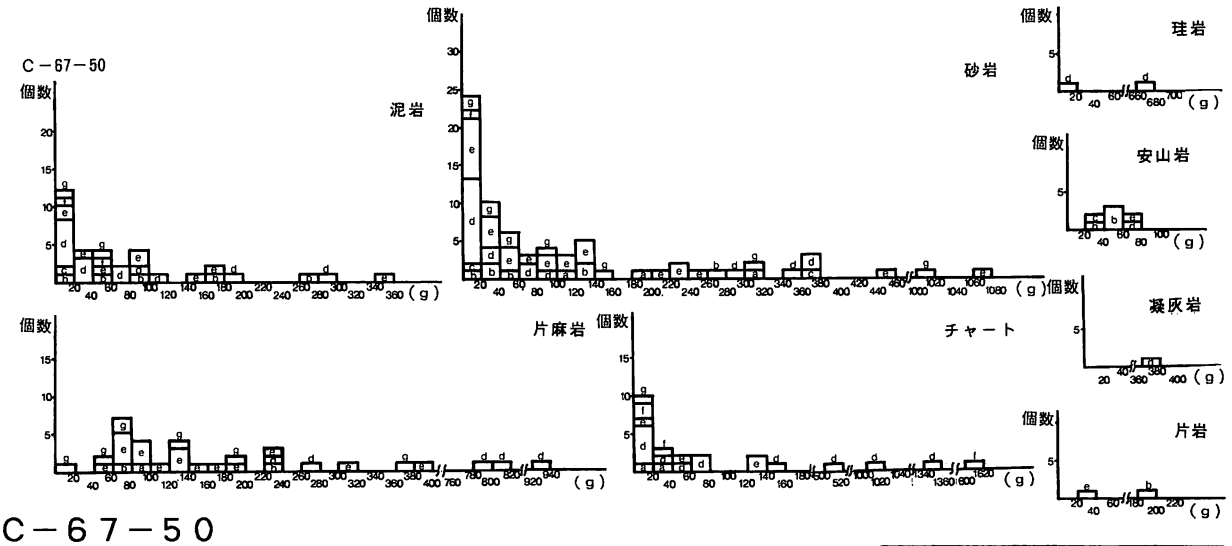
凝灰岩　１個(全体の 9.1%)

円磨度	形態	個数	百分率
円 １ 個	楕円礫	1	100
礫 100 %			

図Ｖ－30　Ａ′地区礫グラフ・表 (4)



図Ⅴ－31　A′地区礫グラフ・表 (5)



C－６７－５０

砂岩　７２個(全体の41.1%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	４９個 61.8%	棒状礫	1	2.0
		棒状楕円礫	4	8.2
		棒状扁平礫	1	2.0
		楕円礫	11	22.4
		楕円扁平礫	24	49.0
		円扁平礫	8	16.3
亜円礫	２３個 31.9%	棒状礫	2	8.7
		棒状楕円礫	3	13.0
		棒状扁平礫	1	4.3
		楕円礫	9	39.1
		楕円扁平礫	5	21.7
		球礫	1	4.3
		円扁平礫	2	8.7

泥岩　３４個(全体の19.4%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	２５個 73.5%	棒状楕円礫	3	12.0
		棒状扁平礫	1	4.0
		楕円礫	9	36.0
		楕円扁平礫	8	32.0
		球礫	2	8.0
		円扁平礫	2	8.0
亜円礫	９個 26.5%	棒状楕円礫	2	22.2
		楕円礫	6	66.7
		楕円扁平礫	1	11.1

片麻岩　３３個(全体の18.9%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	３２個 97.0%	棒状礫	1	3.1
		棒状楕円礫	2	6.3
		楕円礫	4	12.5
		楕円扁平礫	17	53.1
		円扁平礫	8	2.5
亜円礫	１個 3.0%	楕円扁平礫	1	100

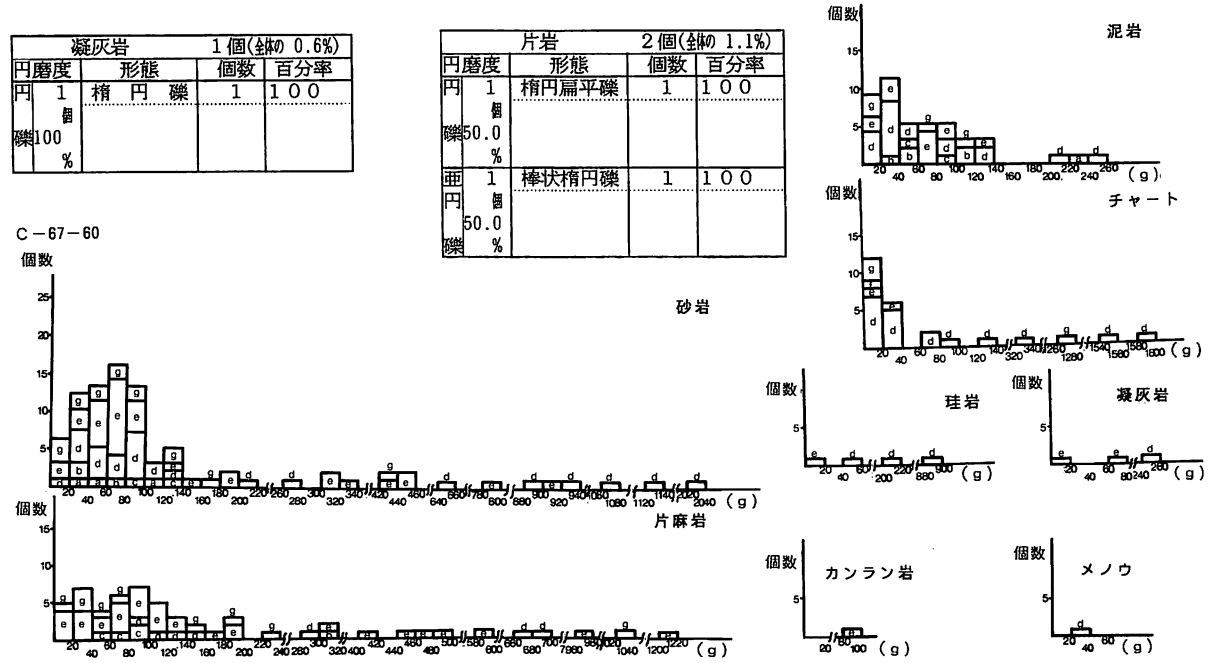
チャート　２４個(全体の13.7%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１３個 54.2%	楕円礫	7	53.8
		楕円扁平礫	4	30.8
		球礫	1	7.7
		円扁平礫	1	7.7
亜円礫	１１個 45.8%	棒状礫	2	18.2
		楕円礫	6	54.5
		球礫	3	27.3

珪岩　２個(全体の 1.1%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１個 50.0%	楕円礫	1	100
亜円礫	１個 50.0%	楕円礫	1	100

安山岩　７個(全体の 4.0%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	４個 57.1%	棒状楕円礫	2	50.0
		棒状扁平礫	1	25.0
		楕円礫	1	25.0
亜円礫	３個 42.9%	棒状楕円礫	2	66.7
		楕円扁平礫	1	33.3

凝灰岩　１個(全体の 0.6%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１個 100%	楕円礫	1	100

片岩　２個(全体の 1.1%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	１個 50.0%	楕円扁平礫	1	100
亜円礫	１個 50.0%	棒状楕円礫	1	100



図Ⅴ－32　A′地区礫グラフ・表 (6)

20～40ｇ・80～100ｇにある。チャートは20～40ｇの間に集中し、ピークは0～20ｇにある。

c－66－70：礫全体の形態の特徴は、横軸値0.23～0.70、縦軸値1.06～1.98付近に集中し、棒状礫・棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫がある。

砂岩は横軸値0.25～0.70、縦軸値1.06～1.90に集中し、主に楕円礫(27.8%)・楕円扁平礫(40.3%)によって構成されている。泥岩は横軸値0.27～0.65、縦軸値1.15～1.75に集中し、主に楕円礫

C－67－60

砂岩　89個(全体の39.6%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 67個 75.3%	棒状礫	1	1.5
	棒状楕円礫	2	3.0
	楕円礫	18	26.9
	楕円扁平礫	35	52.2
	円扁平礫	11	16.4
亜円礫 22個 24.7%	棒状礫	2	9.1
	棒状楕円礫	1	4.5
	棒状扁平礫	2	9.1
	楕円礫	11	50.0
	楕円扁平礫	2	9.1
	円扁平礫	4	18.2

泥岩　44個(全体の19.6%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 25個 56.8%	棒状楕円礫	3	12.0
	棒状扁平礫	2	8.0
	楕円礫	7	28.0
	楕円扁平礫	9	36.0
	円扁平礫	4	16.0
亜円礫 19個 43.2%	棒状礫	1	5.3
	棒状楕円礫	2	10.5
	楕円礫	12	63.2
	楕円扁平礫	3	15.8
	円扁平礫	1	5.3

片麻岩　57個(全体の25.3%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 54個 94.7%	棒状扁平礫	4	7.4
	楕円礫	6	11.1
	楕円扁平礫	34	63.0
	円扁平礫	10	18.5
亜円礫 3個 5.3%	棒状楕円礫	1	33.3
	楕円扁平礫	2	66.7

チャート　26個(全体の11.6%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 16個 61.5%	楕円礫	13	81.3
	球礫	1	6.3
	円扁平礫	2	12.5
亜円礫 10個 38.5%	楕円礫	6	60.0
	楕円扁平礫	2	20.0
	円扁平礫	2	20.0

珪岩　4個(全体の1.8%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 3個 75.0%	楕円礫	2	66.7
	楕円扁平礫	1	33.3
亜円礫 1個 100%	楕円礫	1	100

凝灰岩　3個(全体の1.3%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 2個 66.7%	楕円扁平礫	2	100
亜円礫 1個 33.3%	楕円礫	1	100

カンラン岩　1個(全体の0.4%)

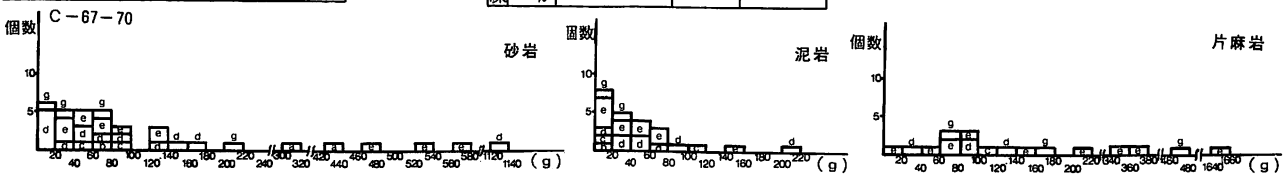
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 100%	楕円扁平礫	1	100

B8低A′地区C67－60

メノウ　1個(全体の0.4%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 100%	楕円礫	1	100

a－棒状礫　d－楕円礫
b－棒状楕円礫　e－楕円扁平礫
c－棒状扁平礫　g－円扁平礫



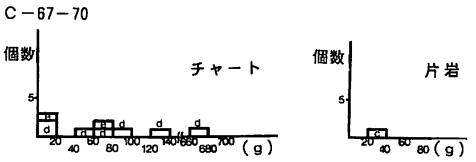
C－67－70

砂岩　36個(全体の40.9%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 27個 75.0%	棒状礫	1	3.7
	棒状扁平礫	1	3.7
	楕円礫	9	33.3
	楕円扁平礫	12	44.4
	円扁平礫	4	14.8
亜円礫 9個 25.0%	棒状礫	1	11.1
	棒状楕円礫	1	11.1
	棒状扁平礫	1	11.1
	楕円礫	5	55.5
	楕円扁平礫	1	11.1

泥岩　24個(全体の27.3%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 22個 91.7%	棒状楕円礫	1	4.5
	棒状扁平礫	2	9.1
	楕円礫	7	31.8
	楕円扁平礫	10	45.5
	円扁平礫	2	9.1
亜円礫 2個 8.3%	楕円礫	1	50.0
	楕円扁平礫	1	50.0



片麻岩　18個(全体の20.5%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 17個 94.4%	棒状扁平礫	1	5.9
	楕円礫	4	23.5
	楕円扁平礫	9	52.9
	円扁平礫	3	17.6
亜円礫 1個 5.6%	楕円扁平礫	1	100

チャート　9個(全体の10.2%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 11.1%	楕円礫	1	100
亜円礫 8個 88.9%	楕円礫	6	75.0
	楕円扁平礫	2	25.0

片岩　1個(全体の1.1%)

円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 100%	棒状扁平礫	1	100

図Ⅴ－33　A′地区礫グラフ・表 (7)

(44.1%)・楕円扁平礫(26.5%) によって構成されている。片麻岩は横軸値0.23～0.55、縦軸値1.13～1.54に集中し、主に楕円扁平礫(55.5%) によって構成されている。チャートは横軸値0.27～0.74、縦軸値1.12～1.70に散在し、主に楕円礫(66.7%) によって構成されている。

岩質ごとの形態別重量については、砂岩は0～100gの間に集中している。泥岩は0～80gの間に集中し、ピークは0～20gにある。片麻岩は60～100gの間に集中している。　（鈴木　信）

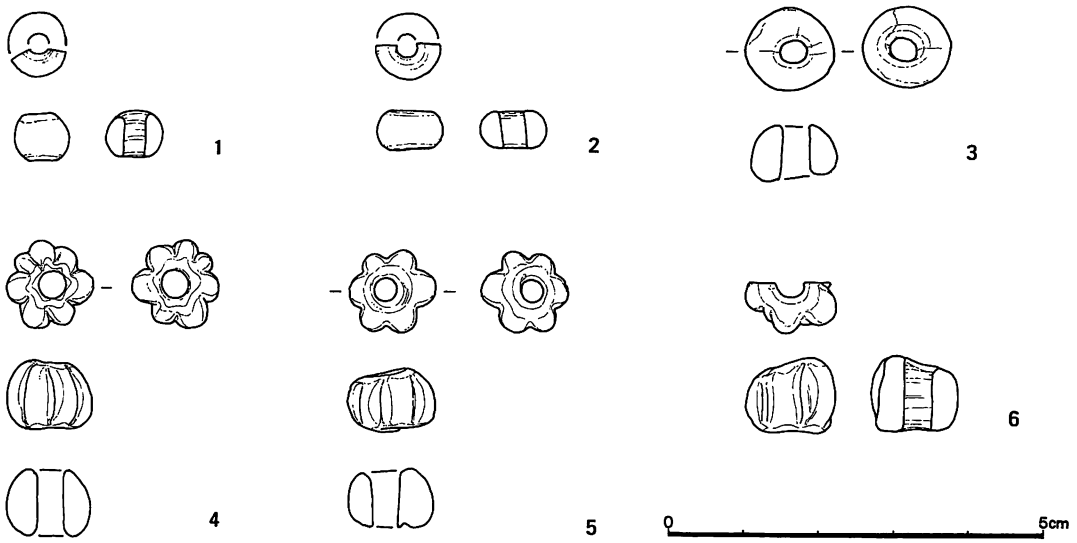
3)　ガラス製品（口絵4－3、図V－34、表V－6）

ガラス玉

所謂アイヌ玉（トンボ玉）が6点検出された。玉は色や筋のつけられたガラス製小玉で、紐を通す穴のあいた刺玉である。ガラス玉は、建材群の分布範囲を取り巻くように出土している。微細遺物のため、排土の水洗選別によって検出されたものが多い。

1は半分を欠損した、深緑色の丸玉に近い平玉である。2は半分を欠損した、水色の平玉である。3は半透明のうぐいす色で、丸みをもつ平玉である。4は筋の切れ目をやや不規則につけた、7房の透明な蜜柑玉である。側面はやや丸みをもつ。5は筋の切れ目をやや不規則につけた、6房の少し濁った白色透明の蜜柑玉である。側面はやや平たい。6は半分に欠損した、深緑色の蜜柑玉である。筋の切れ目はやや不規則であり6房と推定される。側面は他と比較して高く、不整形となっている。

低湿部から検出された玉は、昨年のガラス玉、風化した琥珀丸玉をあわせると計8点となる。また、蜜柑玉（筋玉）は、筋の切れ目が不規則で少ないものが古いとされる。5・6はやや古手のものであろうか。なお、1・2・6は現在、奈良国立文化財研究所　肥塚　隆保氏に材質分析をお願いしている。　（田口　尚）



図V－34　A′地区ガラス玉

表V－6　A′地区掲載ガラス製品

図番号	名　　称	発　掘　区	遺物番号	計測値 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　　考
1	平玉（丸に近い）	c-66-49-c	G	0.70	(0.33)	0.60	0.22	奈文研材質分析
2	平　　玉	c-66-59-b	130	0.80	(0.45)	0.50	0.27	奈文研材質分析
3	平　　玉	c-67-60-a	G	1.10	1.05	0.70	1.15	
4	蜜　柑　玉	c-67-50-c	G	1.10	1.05	0.90	1.80	
5	蜜　柑　玉	c-67-60-c	G	1.13	1.04	0.80	1.22	奈文研材質分析
6	蜜　柑　玉	c-67-50-d	G	1.13	(0.64)	1.00	0.96	

4)　金属製品（ロ絵４－５、図Ⅴ－35・36、表Ⅴ－７、図版Ⅴ－13・14）

A′地区全体では55点出土している。金属製品の分布は調査区南側のc－67－50, c－67－60, c－67－70に集中する。出土金属製品の中では鉄鍋が全体の61.8％と多数を占めている。また、中国銭はc－67－50に4点出土しており今までにない傾向を見せている。

鉄鍋（１～13）：１は内耳鉄鍋。口縁端面は内斜する。口唇は、断面が玉縁に近い三角形で内側に肥厚する。外帯は急角度に外反し、内面側の屈曲部分が段状になる。耳は断面が円形で割合と細い。２は口縁端面がほぼ水平である。口唇は、断面三角形で内側に肥厚する。外帯の屈曲はややゆるく段になる。３は足付きの鉄鍋の底部。足は断面が楕円形で、面取りが施されている。４は外帯と体部の境目の破片。内面側の屈曲は１と２の中間くらい。５は口縁端面がわずかに外斜する。口唇は、断面が玉縁に近い長方形で内側に肥厚する。外帯は急角度に外反し、内面側の屈曲部分が段状になる。６は口縁端面がほぼ水平である。口唇は、断面三角形で内側に肥厚する。外帯の屈曲はややゆるく段になる。７は鉄鍋の外帯部分をふくむ体部。外帯の屈曲はゆるく段は不明瞭である。８は口縁端面が外斜する。口唇は、断面が三角形で内側に肥厚する。外帯は外反し、内面側の屈曲部分が段状になる。この鍋はほかのものに較べて重量があるので、鉄分の溶脱が少なかったのであろう。９は口縁端面がほぼ水平である。口唇は、断面三角形で内側に肥厚する。外帯は急角度に外反し、内面側の屈曲部分が段状になる。10は口縁端面がほぼ水平である。口唇は外側に肥厚尖りぎみにする。外帯の屈曲はゆるく段は不明瞭である。段が不明瞭であること、外帯部分が肥大していることより吊り耳鉄鍋の可能性がある。11は鉄鍋の底部を含む体部。底部と体部との屈曲は明瞭で、135°位で交わる。底部は丸底。この鍋も８と同様に重量があるので、鉄分の溶脱が少なかったのであろう。12は鉄鍋の底部。13は鉄鍋の底部。

不明鉄製品（14・15）：14の両面には木質痕が着いている。刀子の茎か。15はやや厚みがある。

刀装具（16・17）：16は銅製の鎹（はばき）。17は銅製の縁金具。

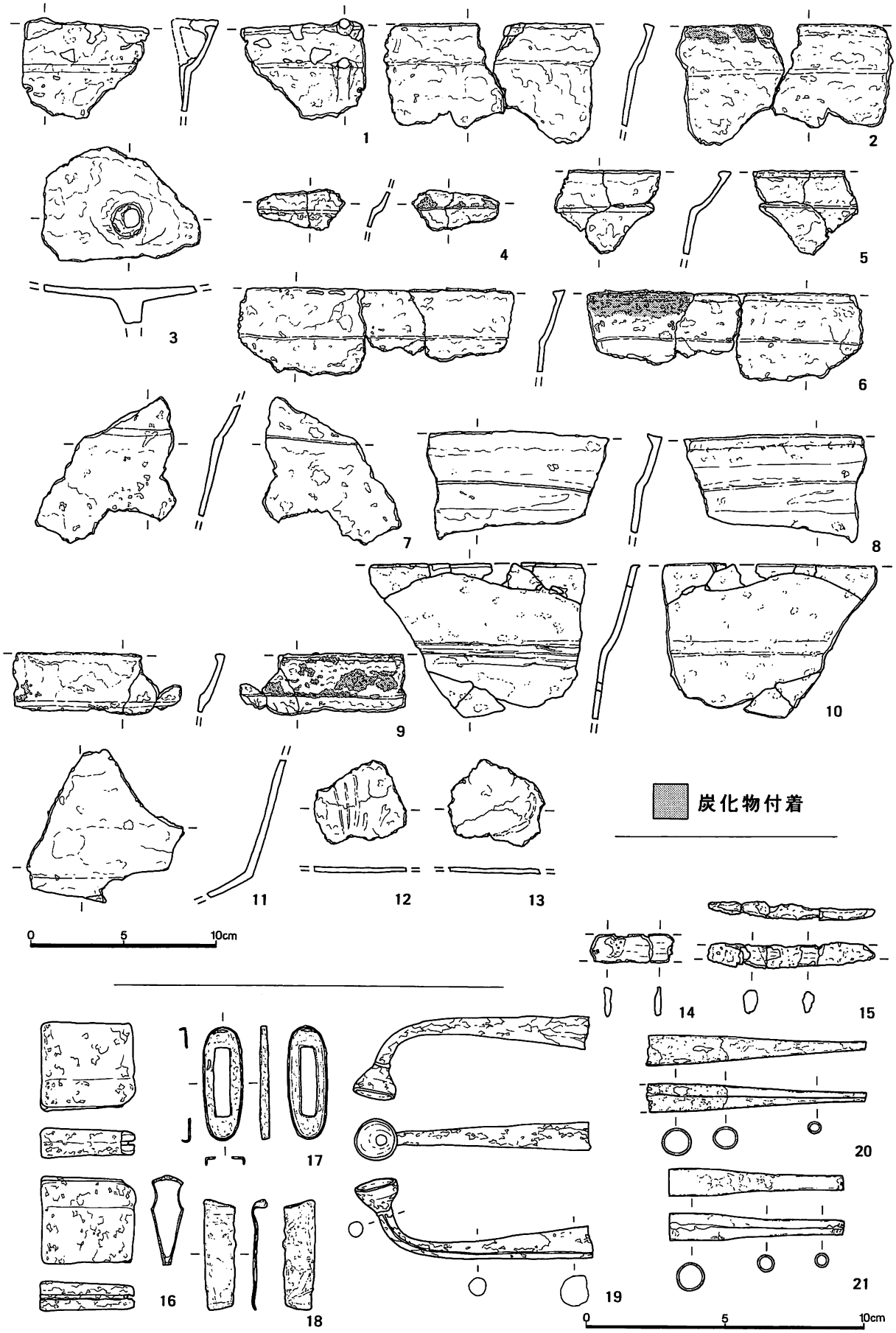
不明銅製品（18）：18は非常に薄い。刀装具の一部か。

キセル（19～21）：19は真鍮製？雁首。脂がえしの湾曲が大きく、補強帯が付かないことから古泉分類の雁首第Ⅱ類Ｂに入るもの。使用による脂がえし背面のつぶれや打撃痕は見られない。ラウとの接合部が少しつぶれている。20は真鍮製吸口で古泉分類の吸口第Ⅱ類Ｂ。19の真鍮製？雁首と組み合わされていたものか。21は真鍮製？吸口で古泉分類の吸口第Ⅱ類Ｂ。20よりもやや厚手で肩がはっている。20の材質鑑定は赤沼氏による。

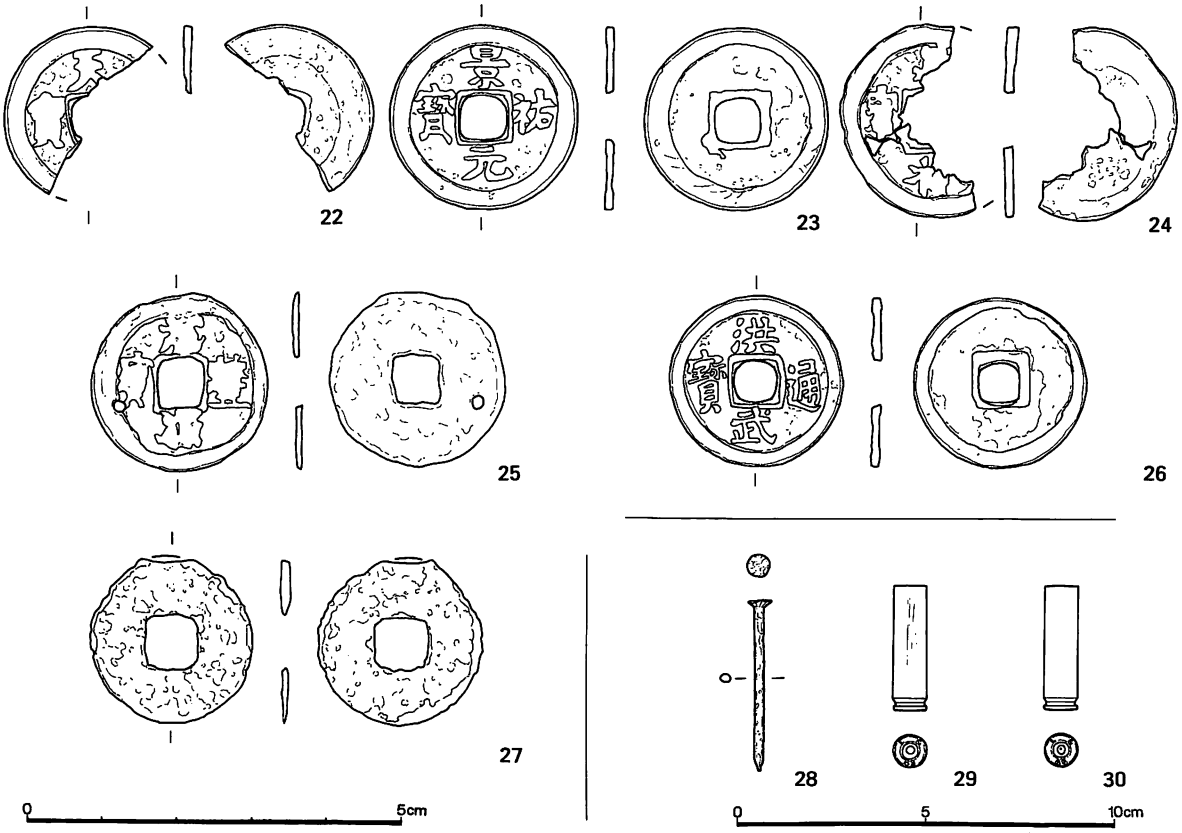
銭貨（22～27）：22は約½が残存し両面も摩耗しているので、銭名は判然としないが「天禧通寶」と判読できる。北宋銭で1017年初鋳。23は「景祐元寶」、北宋銭で1034年初鋳。24は約⅓が欠損しているが、面文の残りがよく文字が輪読の位置関係にあるので「嘉祐通寶」、北宋銭で1056年初鋳。25は全体的に摩耗しているので、銭名は判然としないが「元豊通寶」と判読できる。北宋銭で1078年初鋳。穿孔は垂飾に転用した際のものであろうか。26は「洪武通寶」、明銭で1368年初鋳。27は両面の腐食が著しく、銭名は判読できない。

鉄釘（28）：洋釘、重量があるので、鉄分の溶脱が少なかったのであろう。

薬莢（29・30）：朝鮮戦争当時にアメリカ軍が演習で残したものであろう。　　（鈴木　信）



図Ⅴ－35　A′地区金属製品（1）



図Ⅴ－36　A′地区金属製品 (2)

表Ⅴ－7　A′地区掲載金属製品

図番号	金属番号	名　称	調査区	遺物番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量 (g)	破片数	材質	備考
1	30	内耳鉄鍋口縁部	c－67－60b	G	(5.4) (6.8) 0.3	(22.0)	7	鉄	パラロイドB72処理
2	25-①・26	鉄鍋　口縁部	c－67－70a	G	(6.5) (11.7) 0.3	(43.0)	3	鉄	パラロイドB72処理
3	25-①	鉄鍋　底部脚付	c－67－70a	G	(6.1) (8.5) 0.4	(46.0)	1	鉄	パラロイドB72処理
4	25-③	鉄鍋　口縁部	c－67－70a	G	(2.2) (4.7) 0.3	(4.0)	2	鉄	パラロイドB72処理
5	31	鉄鍋　口縁部	c－67－60b	G	(4.5) (5.7) 0.3	(14.0)	3	鉄	パラロイドB72処理
6	24-①・②	鉄鍋　口縁部	c－67－70a	G	(4.7) (14.8) 0.3	(42.0)	3	鉄	パラロイドB72処理
7	24-③	鉄鍋　胴　部	c－67－70a	G	(7.9) (7.6) 0.3	(28.0)	1	鉄	パラロイドB72処理
8	33	鉄鍋　口縁部	c－67－50d	G	(5.7) (9.7) 0.8	(79.0)	1	鉄	プラマイルMV－1減圧含浸
9	32	鉄鍋　口縁部	c－67－60c	G	(3.5) (9.0) 0.3	(19.0)	1	鉄	パラロイドB72処理
10	28	鉄鍋　口縁部	c－67－60d	202	(8.3) (11.5) 0.4	(58.0)	9	鉄	パラロイドB72処理
11	27	鉄鍋　底　部	c－67－60d	181	(8.2) (8.5) 0.5	(62.0)	1	鉄	プラマイルMV－1減圧含浸
12	37-①	鉄鍋　底　部	排　土	G	(4.4) (5.0) 0.2	(10.0)	1	鉄	パラロイドB72処理
13	37-③	鉄鍋　底　部	排　土	G	(4.6) (5.2) 0.2	(9.0)	1	鉄	パラロイドB72処理
14	41-①・②	不明　鉄製品	c－67－60a	G	(1.1) (3.0) 0.2	(2.0)	2	鉄	パラロイドB72処理
15	29	不明　鉄製品	c－67－60b	G	(6.0) (1.0) 0.5	(3.0)	4	鉄	パラロイドB72処理
16	63	鈴祖	c－67－50a	G	3.2 3.4 1.1	17.5	1	銅	インクララック処理
17	73	緑　金　具	c－67－50d	G	4.1 1.5 0.3	2.3	1	銅	インクララック処理
18	67	不明　銅製品	c－67－50b	G	4.0 1.2 0.1	1.6	1	銅	インクララック処理
19	66	キセル　雁首	c－67－70a	G	8.6 1.2 1.0	6.5	1	真鍮？	インクララック処理
20	65	キセル　吸口	c－67－70a	G	7.9 1.3 1.1	3.4	1	真鍮	インクララック処理
21	62	キセル　吸口	c－67－59d	G	6.3 1.0 1.0	4.4	1	真鍮？	インクララック処理
22	70	天禧通寶	c－67－50a	G	2.2 (2.0) 1.1	(0.7)	1	真鍮？	インクララック処理
23	64	景佑元寶	c－67－50a	G	2.5 2.5 0.1	2.8	1	銅	インクララック処理
24	69	嘉佑通寶	表　採	G	2.5 (1.8) 0.2	(1.3)	1	銅	インクララック処理
25	68	元豊通寶	c－67－59a	G	2.4 2.4 0.1	1.6	1	銅	インクララック処理
26	71	洪武通寶	c－67－50a	G	2.3 2.3 0.1	1.8	1	銅	インクララック処理
27	74	古　銭	c－67－50d	G	2.2 2.2 0.1	1.3	1	銅	インクララック処理
28	38	釘	c－67－49b	G	4.5 0.7 0.6	1.6	1	鉄	プラマイルMV－1減圧含浸
29	61	薬　莢	c－67－70a	G	3.3 0.9 0.9	4.6	1	真鍮	インクララック処理
30	72	薬　莢	c－67－49a	G	3.3 0.9 0.9	4.6	1	真鍮	インクララック処理

5）　木製品・樹皮製品・繊維製品（ロ絵１～４、図Ｖ－37～89・132、表Ｖ－8～23、図版Ｖ－14～38）

遺物の分布密度は、建材群やその周辺に濃く、建材群と共に出土したものが多い。計測値及び樹種は一覧表に記してある。ただし、樹種同定は、抽出した一部の製品のみしか行えていない。今後、継続して実施する予定である。

早櫂（１～５）：１は柄が３つに折れた状態で出土したが、全長 193.9 cm、柄部長 158.4 cm、柄部径 3.4 cm の完全な状態に復元できた。水掻部は肩の張出す幅広の形態で、断面は凸レンズ形である。水掻部の長さ 35.5 cm、幅 14.1 cm、厚さ 2.5 cm で、柄に近い表裏にアイヌ文様が彫刻が施されている。表面には、メカジキの長い吻体を柄側に向けた全体像が精密な線刻画として描かれている。最初に胴部から尾鰭を描き、後で背鰭などをつけている。線刻画の大きさは長さ 22.9 cm、幅 6.8 cm で、背鰭が短く、腹鰭がないことからメカジキと確認できた。水掻部の先端部は尾鰭部分から剝がれ、欠損している。断面の厚さから後１～２ cm 程度長くなると考えられる。また、柄部末端に近い部分には２本組の短刻に挟まれた「X」字状の祖印（イトゥパ）が刻まれている。末端部は断面長方形でやや摩耗していることから、櫂握部が装着されていたと考えられる。木取りは板目で、樹種はサクラ属である。柄部が非常に長いことから外洋型ともなる板綴舟等の舟の櫂と考えられる。２～４は水掻部の肩が張出す形態の櫂の破損品である。２は１のような形態の柄と水掻部肩部分の破片と考えられる。３は水掻部の肩から柄にかけての破片であり、表面が炭化している。４は３と同様の部分で、他に比べて厚い。４の樹種はスギ属であることから和舟の櫂の可能性もある。５はほぼ完全な形で出土した、肩のない細長い水掻部の早櫂である。水掻部の先端をわずかに欠損しているが全長 143 cm、柄の径 2.9 cm、水掻部幅 6.5 cm である。水掻部は全体の中央部付近から水掻部先端に向かって平坦面が徐々に削り出されており、断面は隅丸長方形となっている。水掻部の表面には削り出し時の工具の刃傷痕が多数残存している。柄部末端は細い楕円形で、わずかに摩耗していることから櫂握部が装着されていたと考えられる。樹種はコナラ属である。６は肩の張出さない細長い水掻部の破片である。水掻部は柄部を削り込んで作出している。水掻部の断面は凸レンズ型である。７・８は肩の張出しのない細長い早櫂あるいは車櫂の水掻部の可能性がある。表面には削り出し時の工具の刃傷痕が多数残存している。

車櫂（９～13）：いずれも軸差込孔から欠損した柄部分であり、断面は隅丸の長方形となっている。９・10 は軸差込部が幅広となるものであり、軸差込孔が２か所に存在する。軸差込孔は使用により表裏で径が異なり、断面が円錐台形となっている。９は縦方向に割れたもので、２か所とも径約 3.0 cm と推定される。10 は９ほど軸差込部が幅広とならない。軸差込孔は欠損した方が径約 3.0 cm、その上が 3.5 cm×3.0 cm の楕円形となっている。11～12 は柄部から徐々に軸差込部が幅広となるものである。軸差込孔は１か所と推定される。11 の柄部は残存している。軸差込孔は径約 3.8 cm と推定され最大である。12 の軸差込孔は径約 2.6 cm、13 の軸差込孔は径 2.8 cm と推定される。木取りは２か所に軸差込孔のある９・10 が板目で、１か所の軸差込孔の 11～13 は柾目である。

櫂柄握部（14～16）：早櫂の柄末端に装着される握部で、形態が「T」字形となるものと「Y」字形になるものがある。14 は「T」字形である。柄挿入部は長方形で、表裏から目釘が打ち込まれ内部で交差している。15 は片側端を欠損した「Y」字形である。柄挿入部は長方形で上部がやや狭くなっており、１本の目釘打ち込まれている。側面には２本組の縦、斜めの短刻と「X」字状のイトクパが刻まれている。16 は緩い「Y」字形であり、柄挿入部は長方形であったと推測される。

舟あか汲み（17・18）：17 は先端部を欠損する。一木を横木取りして汲みだし部から握部までを刳り出している。表面及び内面に刳り及び削り痕が顕著に認められる。握部の断面は長方形である。器厚

が厚く、底面が丸いことから動物の餌入れ等の可能性もある。18は1/3程を欠損している。側縁は「く」の字状に斜めに立上り、欠損した尾部に向かってやや厚みを増す。内面の奥に小さな炭化部分がある。開口部は器厚は薄く、側縁部及び裏面の縁辺は斜めに摩耗している。当初は箕と考えていたが、小型で開口部の幅が狭く、欠損した尾部に握部が付く可能性もあるためあか汲みとした。

矢中柄部（19～22）:19の先端部は鉛筆先のように、円錐形に削られている。胴部の返しのある平坦部には、「X」字状のイトクパが刻まれている。20•21の断面は丸く、尖端部に向かって徐々に細くなる。尖端部は使用により摩耗し、薄く剝げている。20の茎部は一段細く作出され、装着による摩耗が認められる。22は断面が角形となるものである。茎部は胴部から鋭く作出されている。

矢柄部（23）:「U」字状に抉られた矢筈部を残す矢柄である。樹芯をもつ丸木の表面を研磨したものである。先端部は刃物により切截されており、樹種はモミ属である。

弓状抉入付製品(24)：丸木材の両端部及び中央部に抉りがある。中央部の抉りはやや平坦となっている。上端と中央部は同一面が抉られ、下端部の抉りはそれらと約90°ずれている。当初は、仕掛け弓の弓部を想定したが、樹種がモクレン属であることから別の用途を検討する必要がある

抉入付Y字状製品（25）:「Y」字状の枝材の両上端・下部に抉りがあるものである。抉りの裏には平坦面が作出されている。上端部は稜を落すように削られ平坦となっている。Y字下部の先端は粗く削りだされ緩い鋭角となっている。

抉入付半割股木製品（26）：股木材のつけ根を半截し、下端部にコケシ頭状の抉りを作出している。下端部には巻縛った痕跡が認められる。上端部は欠損しているが、表面の面取り調整と摩耗が認められ、何かに装着したと考えられる。

回転式離頭銛中柄部（27～35）：27•28は一本式の中柄である。尖端部の断面はいずれも楕円形である。基部は槍部と密着させるための平坦面が削りだされ、樹皮や紐などで固定するための抉り部が作出されている。27の尖端部は摩耗し、28の尖端部は折損している。銛先を装着し、漁に使用された痕跡であろう。29は同様の中柄である。尖端部の断面は円形で、基部には抉りのほかに短刻が刻まれている。基部は極端に短く、意図的に切截された可能性がある。30・31は二本組合式の中柄である。尖端部の断面は円形である。基部の密着面は平坦で共に抉りが廻り、表面に刻目列が付けられている。縛った紐などがずれないように工夫したものであろう。30の尖端部は摩耗し、31の尖端部はわずかに欠損しており使用痕と考えられる。32•33は形態が中柄部に似た粗い作りのものである。32の基部には紐を巻きつけた痕跡が認められる。2点とも非常に細く、ヤス等の可能性もある。34は尖端部を欠損しており、基部に刻目が付けられている。35は回転式離頭銛中柄部の二本組合式の片側のミニチュアである。表面にイトクパのような「H」字状の刻みが認めれらる。

回転式離頭銛指掛部(36)：柄部の最後部に装着される指を引っ掛ける部分である。銛を投げる際の支点及び力点となる。

回転式離頭銛柄部(37)：一端を欠損し、表面の劣化が著しい。上部に中柄部を接合するための表面加工とコケシ頭状の加工が認められる。

魚突き鉤台部(38)：石突き部分は一段細く加工され、楔が打ち込まれている。石突き部を保護するために鹿角や金属製のリングがはめられていたと考えられ、その下部には樹皮などが巻かれていた痕跡が認められる。先は使用によりややささくれ、斜めにつぶれている。鉄鉤が乗る舟部分は、長さ10.5 cm、深さ7 mmで、上部に径7.5 mmの孔がある。舟部直下に紐がずれないように浅い段が作出されている。基部には平坦部を作出し、柄との接合面としている。表面から側縁にかけて、樹皮や紐で柄部と固定するための幅2 cmの帯状の浅い抉りがある。

柄・棹との接合部（39～48）：魚突き鉤台部または回転式離頭銛中柄の柄や棹との接合部（基部）である。いずれも柄に装着するための抉り部と裏面に平坦面が作出されている。抉り部は40・44～47のように帯状となるものと39・41～43のように両側縁だけの抉りのものとがある。41には抉り部の下に斜めの刻目がある。48は抉り部から切截されている。

鉤形木鍬(49～51)：股木を利用した木鍬である。49は先端部のみを削りだしたもので、先は使用によりやや摩耗している。上部や下部は切截下したままの状態で、表面に樹皮が残る。50は表面の調整加工が丹念に施され、握り部分がやや細くなるように加工されている。先端部には使用により摩耗している。51は柄部が欠損している。49同様に先端部のみの加工である。

小刀柄（52・53）：いずれも縁部を欠損し、緩く湾曲した柄部の破片である。断面は楕円形で、柄頭は斜めにやや細く削り出されている。

小刀鞘（54）：二枚合わせの鞘の片側と思われるものである。表面に径1.4 cmの巴文が非常に細い線で刻まれている。

小刀樹皮製鞘(55)：一枚のシラカンバの樹皮を短軸方向に1回折り重ねた後、さらに長軸方向に1回折り畳んで鞘としている。縁は16か所の穿孔部を縫合し、さらに凸部は2か所の穿孔部を縫い留めている。数か所に縫合のための撚紐が残存していた。

鞘部材(56)：山刀等の鞘板と考えられる。表面の上部と下部には樹皮などで鞘を縛り、固定するための幅約1.1 cmの帯状の溝が掘り込まれている。

鞘帯執部（57）：山刀等の鞘にサクラの樹皮等で装着し固定された、帯に引掛ける突起部分である。装着面には、上下にイトクパと考えられる「γ」字状の線刻が施されている。

縦槌（58～61）：58・59は柄を挿入する槌頭である。58は角形の断面の槌頭で楔の打ち込まれた長方形の柄が残存している。59は丸形の断面の槌頭で楔の打ち込まれた角形の柄が残存している。60・61は股木を利用して、幹を頭部、枝を柄としている。両端の敲打面に使用痕が顕著である。

横槌(62)：丸木を横長に粗く面取り加工し、敲打部から比較的滑らかに柄部を削り出している。敲打部には、つぶれや摩耗等の使用痕が認められる。

台木（作業台）（63・64）：63は敲打部から柄部を一回り細く削りだした横槌の形態である。敲打部には平坦面が作出され、平坦面には鉈等の切截具を使用した切傷痕が多数残存する。64は厚板の平坦面中央に、小刀・鉈等の刃を打ち当てた無数の線状切傷痕が残存する。俎板の可能性もある。

木製発火具（65・66）：65は長さ7.8 cm、幅1. 4 cmの断面平行四辺形のヒキリ板である。摩擦面と板底面が水平となるように加工しており、「V」字状の刻みのあるヒキリウスが板にたいして斜めに3か所に認められる。1か所は発火前に加工された摩擦中のヒキリギネの脱落防止用の凹み痕であり、中央2か所はウスの底面の周縁が凹み、中央部が盛り上がる断面となっている。アジサイ属等の髄の軟らかな樹種をヒキリギネとして使用した結果と考えられる。ヒキリ板の断面の形状からキリモミ式の可能性が強い。66は両端を欠損したヒキリ板である。いずれも樹種はイヌエンジュ属である。

炉鉤（67～71）：67はコケシの頭状に抉りだされた板材のものである。68・69は表面加工された股木材のものである。68は鉤部分の周辺が炭化している。70は表面に樹皮を残す、股木材のものである。上部は節目のためやや太くなっている。71は角材の下端部を、鉤状に抉り出している

抉入付有孔板製品(72)：上端部に角孔あけられ、下端部は両側縁から抉られている。角孔に紐を通して抉り部に縛り、材の上下で炉鉤に付けられた紐の長さを調節するものであろうか。

燈火用筒状樹皮（73）：筒状に巻き縛られた炭化したシラカンバ樹皮である。

燈火用樹皮挟木（74～77）：74は丸木の表裏に平坦面を作出し、上部から割裂いて楔を挟んでいる。

75～77 は丸木が割裂かれ、割れ口の内面から表面にかけて炭化している。

有孔棒状製品（78）：棒状の丸木材の両端の表裏を抉り、角孔が開けられている。

有孔板製品（79）：楕円形板材の上部には円孔があけられ、下部に角孔があけられている。

曲物・折敷片（80～88）：80・86 は薄い柾目板である。曲物が伸びたものであろうか。81 は折敷の板で、サクラの樹皮が縫い込まれている。82・83 は曲物の薄い柾目板の破片で、木釘が残存する。表面に切傷痕が多数認められる。84・87 は薄い板目板であり、84 には側面に木釘穴がある。85 は木釘の残存する柾目板である。88 は柾目板で木釘穴がある。

桶・樽（89～110）：89 は樽の蓋で円孔があいており、側面に目釘穴がある。90～94 は桶ないし樽の蓋あるいは底板である。90 は柾目板であり、側面に木釘が残存する。91～94 は板目板であり、94 の表裏は炭化している。91・93 の側面には木釘穴があり、94 の側面には目釘が残存する。95・96・98・99 は木釘穴や木釘の残存する桶ないし樽を再加工して細くしたものである。97 は表面加工の粗い樽の底である。101 は柾目板であることから桶の側板片と考えられる。102～110 は板目板であることから樽の側板と考えられる。103 は内面に焼痕と底板をはめた痕跡が残る。104・105 は口が開く桶と考えられる。107～110 は側板を再加工し、口縁部分を残した破片である。

把手（111～113）：111 は湾曲した丸木の両端をコケシ頭状に抉ったものである。樹皮製容器の把手部分と考えられる。112 は曲物の容器の把手部分であり、両側とも抉り部分を欠損している。113 は端部に抉りがつけられた把手状のものである

栓（114～127）：114～116 は縦断面が円錐台形となるものである。頭部と挿入部の先が平坦となり、樽の鏡板に差し込まれたものと考えられる。117～127 はコケシ頭状の握部と挿入部に分化したものである。酒樽等の栓の可能性がある。117・119・121・123～127 は頭部直下の挿入部が摩耗しやや細くなっている。120 は挿入部の先端部が摩耗している。122 は軸部分の面取り加工が顕著であり未製品と考えられる。なお、コケシ頭状の握部と挿入部に分化したものは、車櫂受軸部の軸部分の可能性も考慮しなければならない。

杓子（128・129）：杓子の皿状頭部の破片である。129 の上部には小孔が認められる。

箆（130～134）：130～132・134 は撥形の箆と考えられる。130 は先端部を欠損し、両側面に 2 か所の刻みが認められる。131 は端部が角棒状となる細身のもので、箆先を欠損している。132 は丹念に面取り加工され、箆先が片刃となるように削り出されている。133 は左右比対称なしゃもじ形のものである。早櫂のミニチュアの可能性がある。134 はミニチュアである。

箸状製品（135～179）：用途や機能を限定したものではなく、箸、刺し串、楊枝、かんじきに付けられる横軸等が含まれる可能性がある。全面に面取り加工を施し、幅・厚さ（胴部最大径）は 0.5 cm 以上 1.5 cm 以下で、その比が 1.5 以下となる断面が丸形に近いものを取りまとめた。

A～C 類の 3 タイプに便宜的に分類した。さらに A 類は 3 つ、B 類は 4 つに細分している。

A 類（135～152）：所謂両口箸で、胴部を太くして両端に向かって徐々に細く削ったものである。A_1 類（135・136・138～140・144・146）は両端部を平らにしたもの、A_2 類（147～152）は両端部を細く尖らせたものである。A_3 類（137・141～143・145）は一方の端部を平らにし、もう一方の端部を細く尖らせたものである。

B 類（153～175）：所謂片口箸で、端部の一方（基部）が太く、もう一方（先端部）を端部に向かって細く削り出したものである。B_1 類（153～157）は基部端を削り尖らせたもの、B_2 類（158～163）は基部端を平らに削ったもの、B_3 類（164～169）は基部端を丸く加工したもの、B_4 類（170～175）は基部端を斜めに削ったものである。

C類：胴部と両端部がほぼ同径で寸胴箸となるものである。A•B類の中に近い形態のもの認められるが、材を削りだした明瞭な寸胴は確認できていない。ササ属やアシ属等を切截し、寸胴箸としたものがある思われる。端部を欠損したり、腐朽したものが多く明瞭なものを確認できていない。

D類(176～179)：先端部のみを鉛筆先状に削りだしたものである。かんじきの枠の小孔に差し込まれる横木の可能性がある。

断面の形態は、当初の素材形態、加工度、部位によって異なる。樹種はこれまで同定からスギ属とアジサイ属に大きく2分されている。割裂性の良いスギ属等の針葉樹材の木取りでは、柾目取り及び板目取りとなるものが多く、桶や樽の材を細割し再加工したものと考えられる。アジサイ属の木取りでは1/3～1/4割取りが多く、枝材等を蜜柑割したものと考えられる。いずれの属も形態を整えるために稜線を削っているものが多い。

串状製品(181～202)：箸状製品と同様に用途を限定したものではない。刺し串、挾み串、竹串に似る極端に細いもの、扁平•幅広のもの、加工の中心が尖端部分となるもの等をまとめた。幅•厚さ（胴部最大径)が2.0 cm以下で、比は1.5以上のものである。断面形と尖端部加工を中心にA～H類の8タイプに便宜的に分類した。

A類（181）は焼き鳥串ほどに細く面取り加工したものである。**B類**（181～185）は断面形が長方形のものである。184は先端が斜め削りである。185は非常に長く先端部に焼痕が認めれれる。**C類**(186•187）は先端部を尖らせずに、2面削りで薄く幅広にしたものである。**D類**（188～191）は断面形が扁平な楕円形となるものである。**E類**(192～193)は断面形が半円形となるものである。**F類**(194～196)は断面形が扁平な多角形となるものである。**G類**(197～199)は丸木材の尖端部のみを鋭く削り出したものである。199は上先端が2面削り、下先端1面削りである。**H類**（200～202）はタケ•ササを割裂き、薄くしたものである。樹種の選択は箸状製品同様である。

木玉（203）：中央が穿孔された算盤玉形のものである。表面に放射状の削りが認められる。

根付•緒締等（204～206）：204は表裏の大きさの異なる滑車形のものである。加工形態が段状となることから、火口あるいは煙草入れの嵌め込み式の蓋の可能性もある。205は柾目板の断面を楕円形に加工し、小孔を穿孔したものである。両端は水平に加工されている。206は丸木の表裏を削り、断面を楕円形に加工している。両端は水平に加工され、樹芯部が穿孔されている。

下駄状製品（207）：上面観が長方形となる両歯を有する連歯下駄の半損品であろうか。鼻緒孔がなく、製作過程あるいは作業台の可能性もある。横木取りされ、歯の下部が樹芯部となっている。

円板（208）：表裏が平行面となるように平坦に加工されている。

宝刀ミニチュア（209）：わずかに反った刀鞘部分で、柄部分は欠損する。表面には栗形や返角を模したと考えられる凸部が浮き彫りされ、「8」の字形、頂点が向いあった大小の扇形等の文様が彫刻されている。裏面には文様がない。鞘尻は山形となるように、削りだされている。

木幣（210•211）：210は下端に抉り部の付けられた角棒状の材である。削りかけは残っていない。両側縁の稜線には、斜め下から上方向に、2.5～4 cm程の間隔で切り込みが連続している。211は平坦な頭部をもつものである。頭部の直下には、下から上方向に薄く削った痕跡がややめくれ上がったように多段となってめぐっており、削りかけの痕跡と考えられる。軸部の断面は八角形に近く、下方の裏面に平坦面が作出されている。

短刻付製品（180・212～218）：180・213は箸状の材に二本組の短刻が斜めに付けられる。213は短刻が二段付けられており、二本の目釘が残存する。212は斜め二本組の短刻を挾むように水平の短刻がめぐる。214の端部側には二本組の短刻が水平にめぐる。215は丸木の正面と横に約5 mm間隔の短刻

列が二列ある。暦や算木の可能性がある。216 は頭部に水平の短刻がめぐる。217 は頂点の向い合う大小の扇形等の文様が彫刻されてる。218 には細い短刻列がある。

ピン状製品（219～223•234～242）：219～223 は太い端部側から尖端部に向かって全面を粗く削りだしたものである。219 は丹念に調整加工されている。220•221 の断面は角形である。223 の先端部はやや幅広い。234～242 は先端のみを削りだしたものである。236～238 は平らな削りだしにより楔形の尖端部を作出している。239 は長い削りにより尖端部を作出している。端部には切傷痕が多数認められる。御座を止めたり、獣皮を引き延ばすときの止め針のようなものであろうか。

軸状製品（224～233）：224～228・230 は太い端部側から先端部に向かって丹念に削り細くなるものである。224・226・228 は断面が楕円形となるものである。227・228 は端部に摩耗痕が認められる。断面の丸い 225・227 は車櫂受部の軸の可能性がある。229・231～233 は中央部から両端部に向かって徐々に細く加工されている。孔等に挿入し、何かを繋いたものであろう。

楔付製品（243・244）：243 は断面の丸い軸状の木製品に楔が打ち込まれたものである。244 は角形の頭部に楔が打ち込まれたものである。軸部の断面は七角形である。

楔形製品（245・246）：245 は先の丸いものであり、断面は半円形である。246 は先の鋭角に尖るものであり、断面は長方形である。いずれも端部に敲打痕が認められる。

方形頭付丸棒状製品（247～251）：248•250•251 は方形の頭部の角孔に木釘が残存するものである。248 の頭部直下は摩耗により細くなっている。247・249 は角孔のないものである。

有孔丸棒状材（252～255）：252 は上端部に三角形の小孔がある。253 は上部の表裏の平坦面に縦長の角孔があり、下端は炭化している。254 は上端部の表裏に溝があり、円孔と繋がっている。欠損した下端部には、溝が認められる。255 の上端部は断面楕円形で小孔に木釘が残存する。

抉入付丸棒状材（256～261・263・268・270・281・291）：256～261・268 はコケシ頭状の抉りのあるものである。259 は瘤状に加工されている。261 は丹念に面取り調整されており、再加工された弓の筈部の可能性がある。263 は茸形の頭部をもち、下端部に孔が開けられていた痕跡を残す。270・291 は杭状の材を抉って鉤形としたものである。281 には一方向からの深い抉りがある。

抉入付割棒状材（264・267・272・283）：264・267 は半割材にコケシ頭状の抉りがある。264 の表面は丹念に面取り調整されている。272 は偏割材の端部を溝状に抉ったものである。

抉入付楕円棒状材（265•277•279）：265 の端部は山形に削られており、抉りは一面だけである。277 は側面から抉られ、両側面に平坦面が作出されている。279 は幅のある側面部分に抉りがある。283 は両側縁が抉られている。

抉入付蒲鉾棒状板材（266）：コケシ頭状の抉りのある丸棒状材を縦に切截したものである。

抉入付角棒状材（262・269・271・273～276・278・280・282・284）：262・271 は端部にコケシ頭状の抉りがある。269・274 は隅丸長方形の材の端部を瘤状としたものである。273 は下端部が側面から抉られている。275 は表裏に平坦部を作出し、頭部としている。下端部には焼痕が残存する。276 は斜めに溝状の抉りがある。278 は表面中央部に角形の抉りがある。280 は下端部に「V」字状の抉りがある。282・284 は平坦面の作出により階段状となっている。

凸形頭付丸棒状材(285)：端部周辺に数か所の平坦面を削りだし、一回り細い凸形に加工している。

角孔付丸材(286～289)：286 は端部表裏に平坦面を作出し、横長と縦長の角孔を開けている。下端部は炭化している。287～289 は角孔部分から切截された縦槌頭部の可能性がある。

抉入付角材(290)：上端部に角形の抉りがある。下端部は炭化している。

丸棒状材（292～300）：292 の上端部は炭化している。293 は上端部の平らな杭状製品である。

295～297は丸木材で、回転式離頭銛や魚突き鉤等の柄・棹の可能性がある。298は上端部が湾曲している。300は裏面と両端部に平坦面が作出されている。

角棒状材（301～303•306）：断面が多角形になるものが多い。301は平坦面に加工時の刃傷痕が多数認めれる。303は六角柱に近いものである。

楕円形棒状材（304・305・307・308）：304・305は面取り加工時の刃傷痕が多数認めれる。307は上端部と下端部に炭化部分がある。木取りは柾目となるものが多い。

紡錘形棒状板材（309～312•324）：309の表面は炭化し、裏面の下端にも炭化部分がある。312は上端部に小孔がある。下端部は表裏から切出されており、篦の可能性がある。324には加工時の刃傷痕が多数認めれる。木取りは柾目となるものが多い。

蒲鉾形棒状板材（313～323）：313・314は端部の尖ったものである。316～321は端部が角形となるものである。木取りは柾目となるものが多い。322は半割材である。323は板目である。

薄柾目棒状板材(325～327)：325の下端部は斜めに削りだされている。326の上端部は幅広である。

竹材（328・329）：タケを偏割し、内面を削っている。表面に刃傷痕が多数認めれる。

有孔板材（330～345）：表面に加工時の顕著な削り痕が残存し、角孔の開けられたものが多い。330～342は角孔の開けられたものである。角孔はどちらか一方の面から開けられたもので、孔口の大きさが表裏で異なる。333•344は角孔と側縁に抉りがある。335•339は角孔部分を破損している。337•338はわずかに湾曲し、板の中央に削り痕による稜線がある。滑走式の回転式離頭銛のスキー状板の可能性を考慮する必要がある。340には円孔と角孔の両方が存在する。342の角孔は樹皮あるいは紐などで縛られた痕跡を残し、楕円に近い角孔となっている。裏の半分程が炭化している。341は台形の厚板に左右対称に角孔が配置されている。343の図中丸破線部は角孔痕とも考えられ、角孔が配列もっていた可能性がある。341・343は舟等の構造材の一部と考えておきたい。

抉入付板材（346～355）：346は上端部に突起部作出され、側縁に2か所の抉りがある。347は薄い板の側縁に小さな刻み認められる。348は角孔部から欠損したものである。351は曲物把手部の抉り部破片と考えられる。352は板の隅が角形に加工されている。354は長辺側に突起が付いている。348～350・353・355は側縁に抉りがある。350は曲物の把手部の可能性がある。

板材（356～363）：356～361・363は柾目板である。362は柾目板である。359の側縁は丸い。362・363は炭化している。

建材（364～372）：364～366は枝分かれ部を受部とした柱材と考えられる。367～369は上端部を欠損するが鋭角な先端部をもつことから柱材と考えられる。367の表面には浅い抉りがある。369の太い中央部は面取り加工され、刃先の傷痕が多数認められる。370は鋭角な尖端部を持つことから柱材と考えられる。371・372の先端部角度はやや緩く、垂木や母屋材の可能性がある。

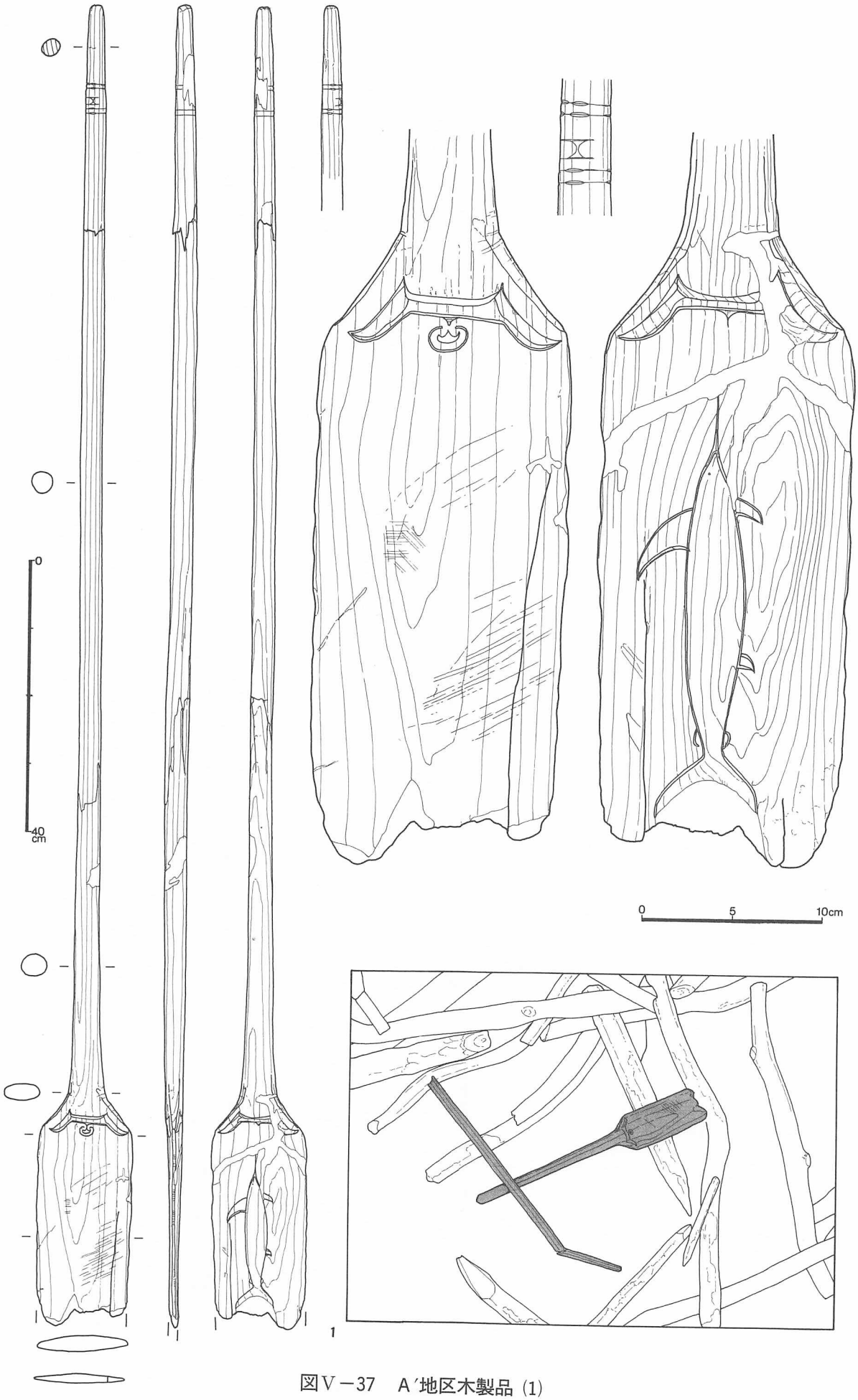
両端杭先状加工材（373～380•382～384）：両端部の先端角度が緩く加工され、長さは45～60 cmの範囲に纏まりがある。各種建材の補助木の可能性がある。また、378のように上端部には斜め上方からの切截痕が多数認められるものがあり、建材の長さ調整のために切り落された部分かもしれない。383には刃傷痕の多数残る平坦面が作出されている。384は長さ28.3 cmと短い。

杭状材（385～388）：先端部は鋭角で、端部には斜め上方からの切截痕が多数認められる。

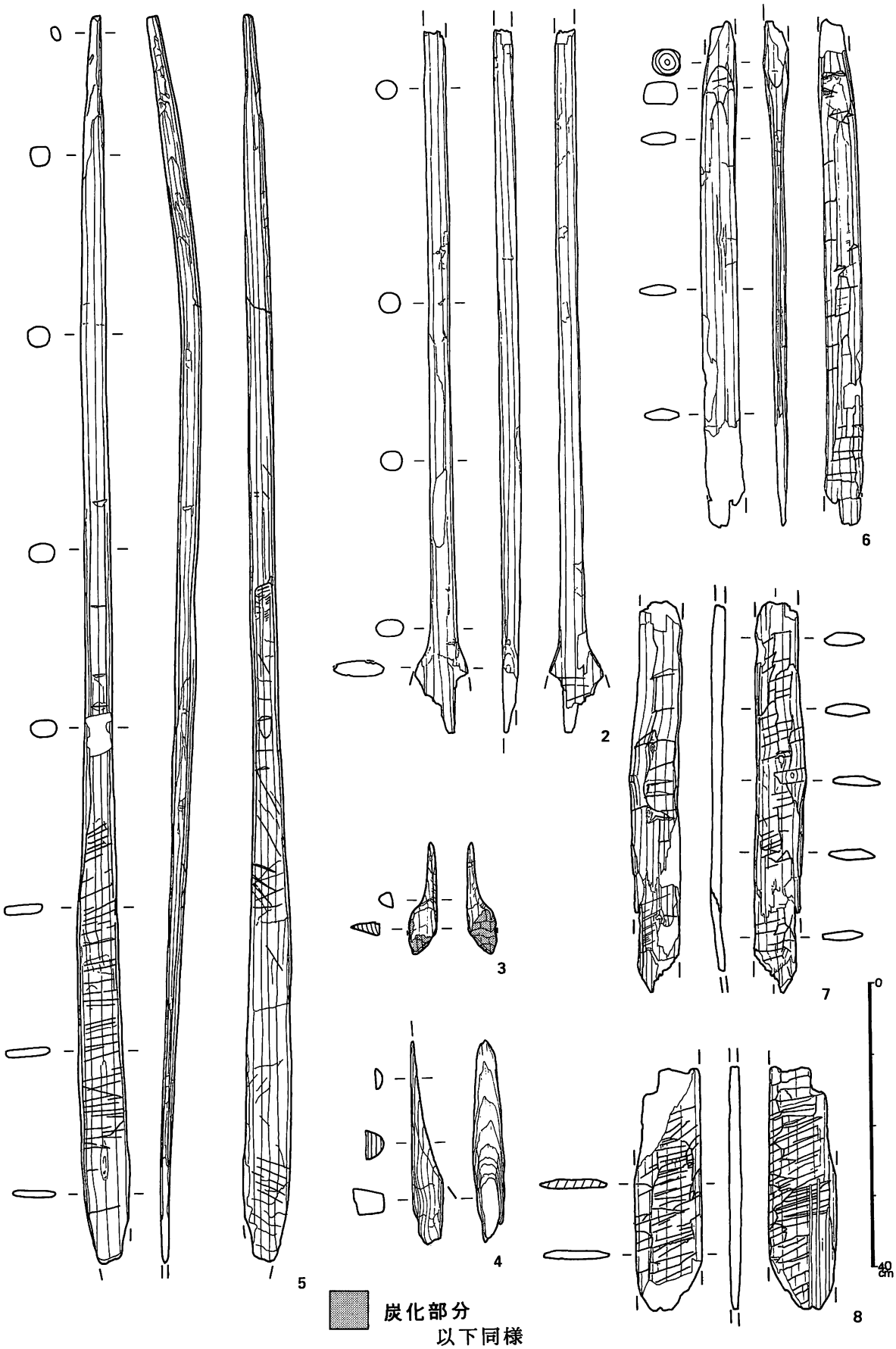
枝切痕材（381・397）：枝払いされた材で、切り口は鋭角な一面削りとなっている。

木端（389～393）：建材や各種部材の長さ調整のために切截され木片で、多数の切截痕がある。

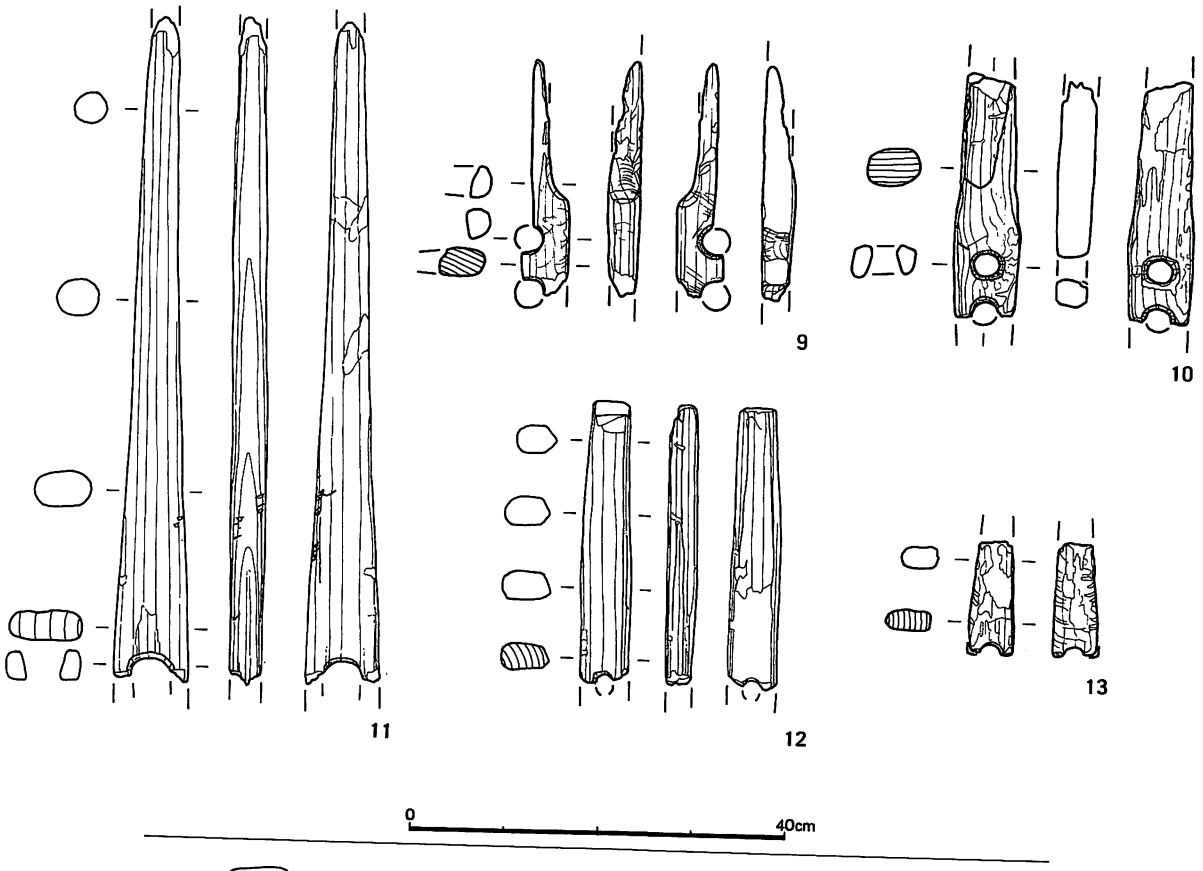
炭化材（394～396）：394は丸木材の上端部が炭化したものである。395は1/4割材の下端部が炭化している。296は偏割材の上端部が炭化している。

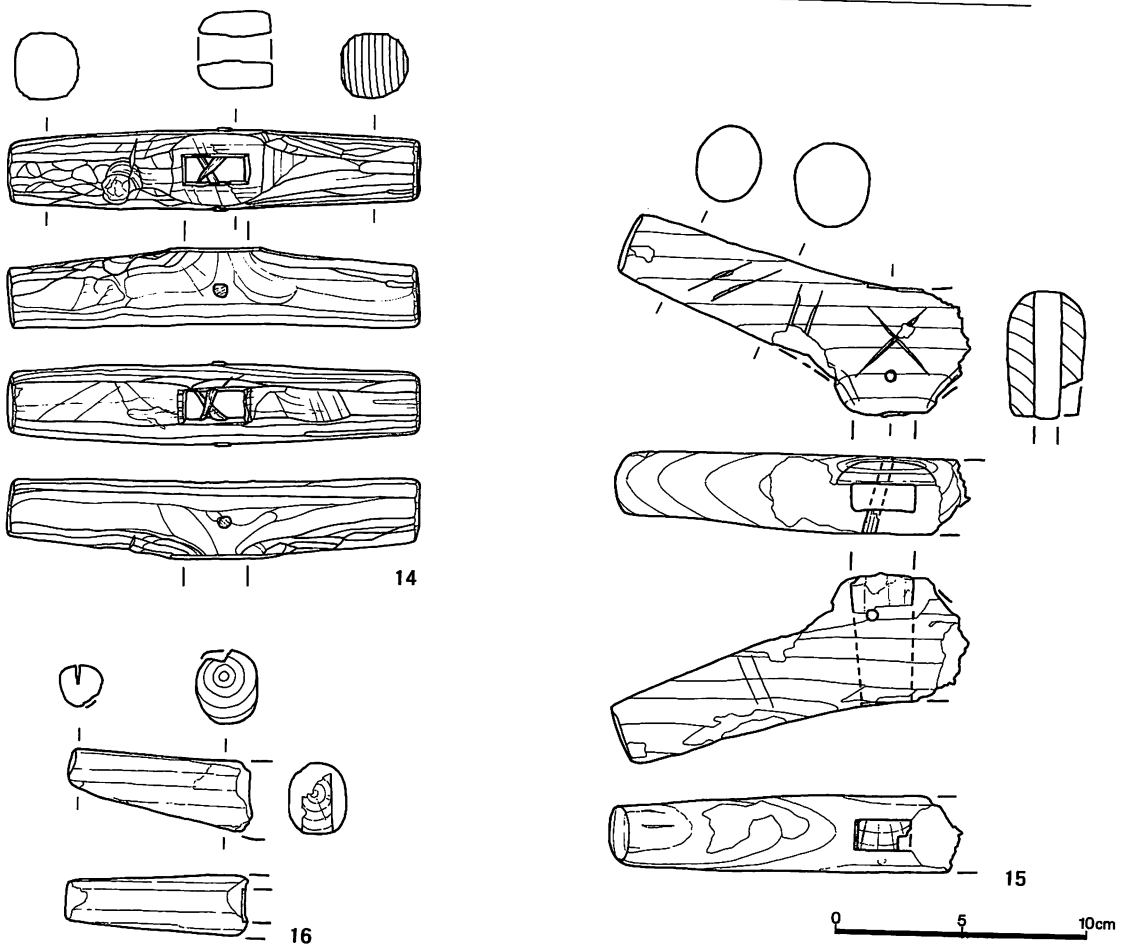


図Ⅴ－37　A′地区木製品 (1)

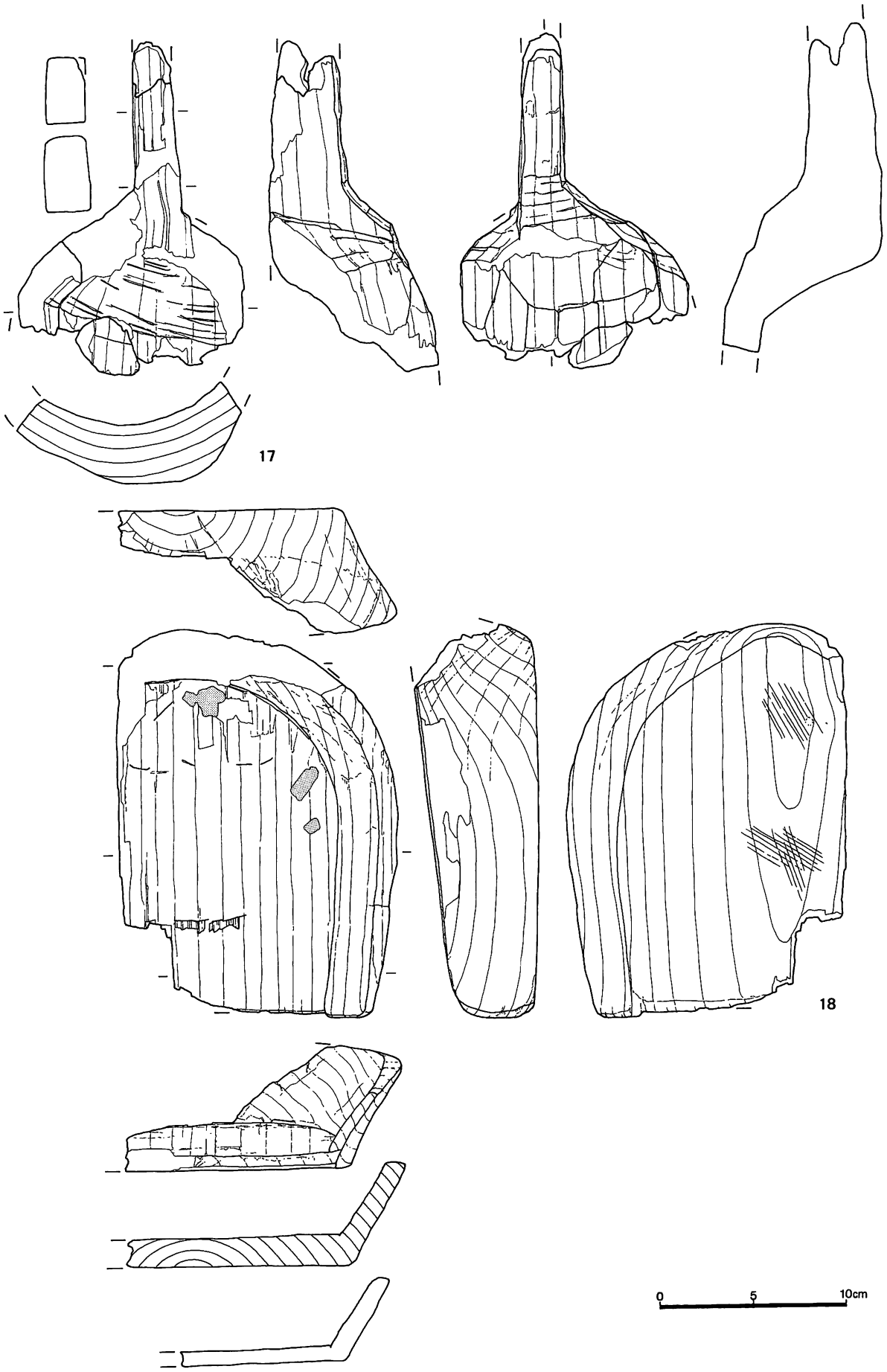


図Ｖ－38　Ａ′地区木製品 (2)

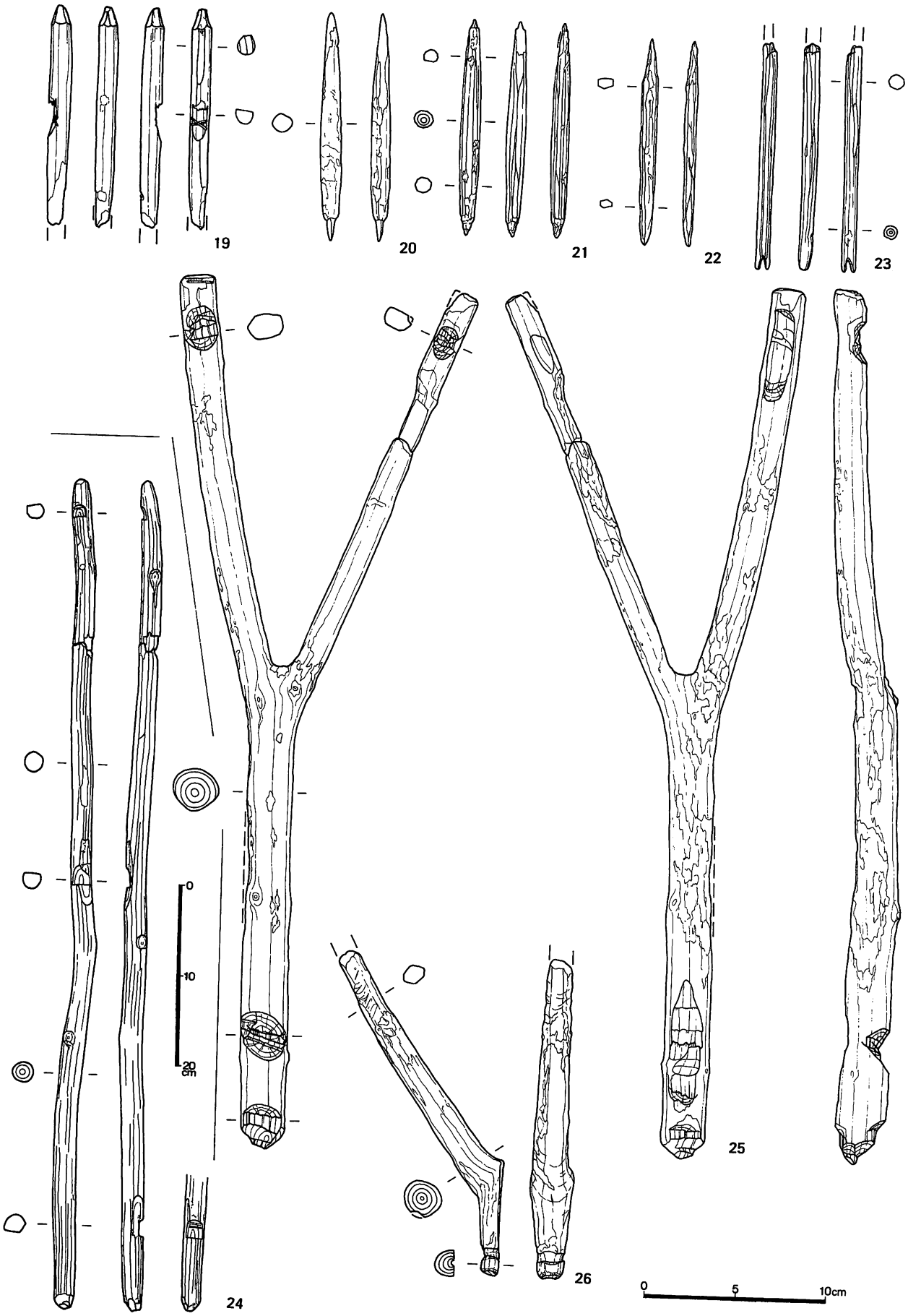




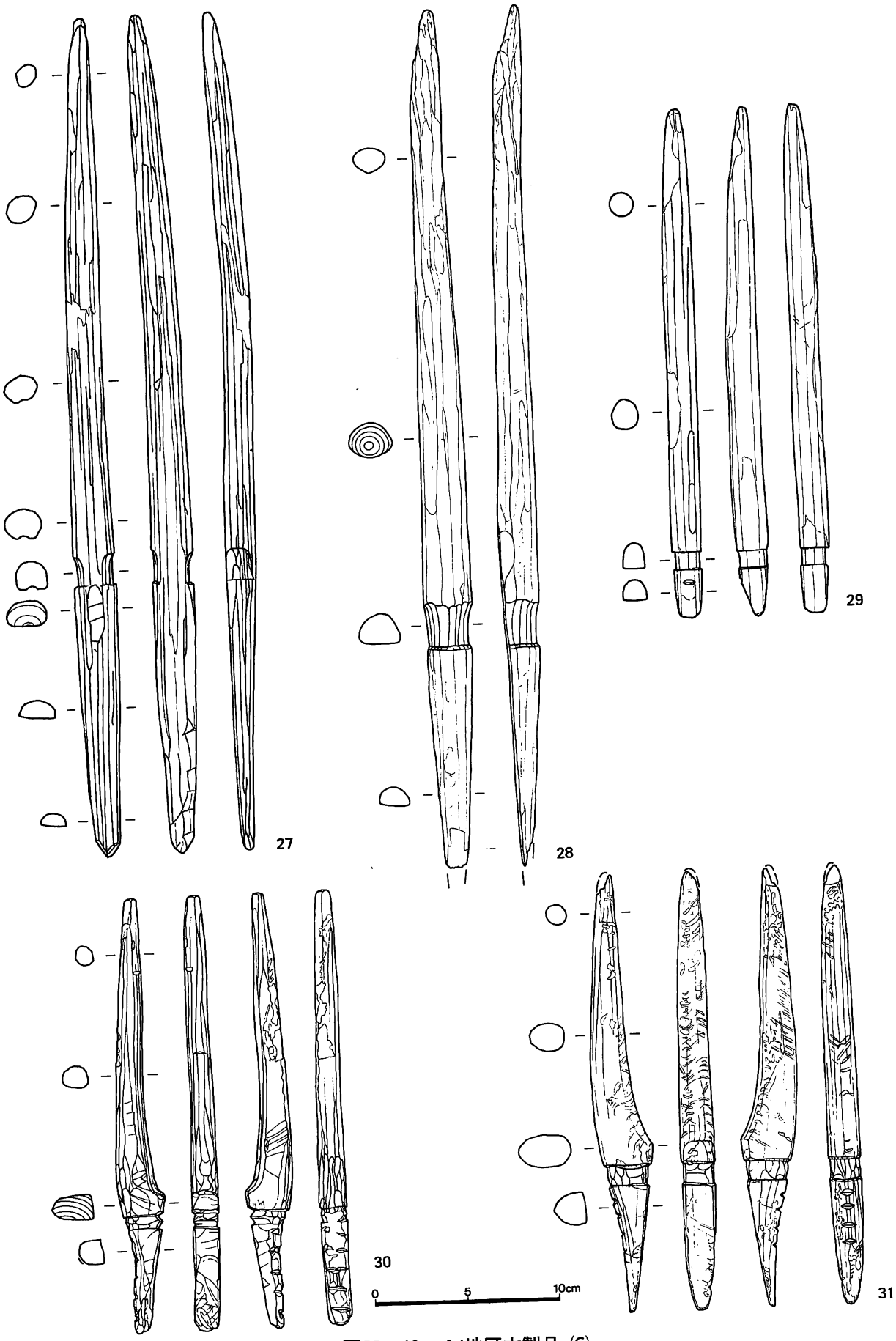
図Ⅴ－39　A′地区木製品 (3)



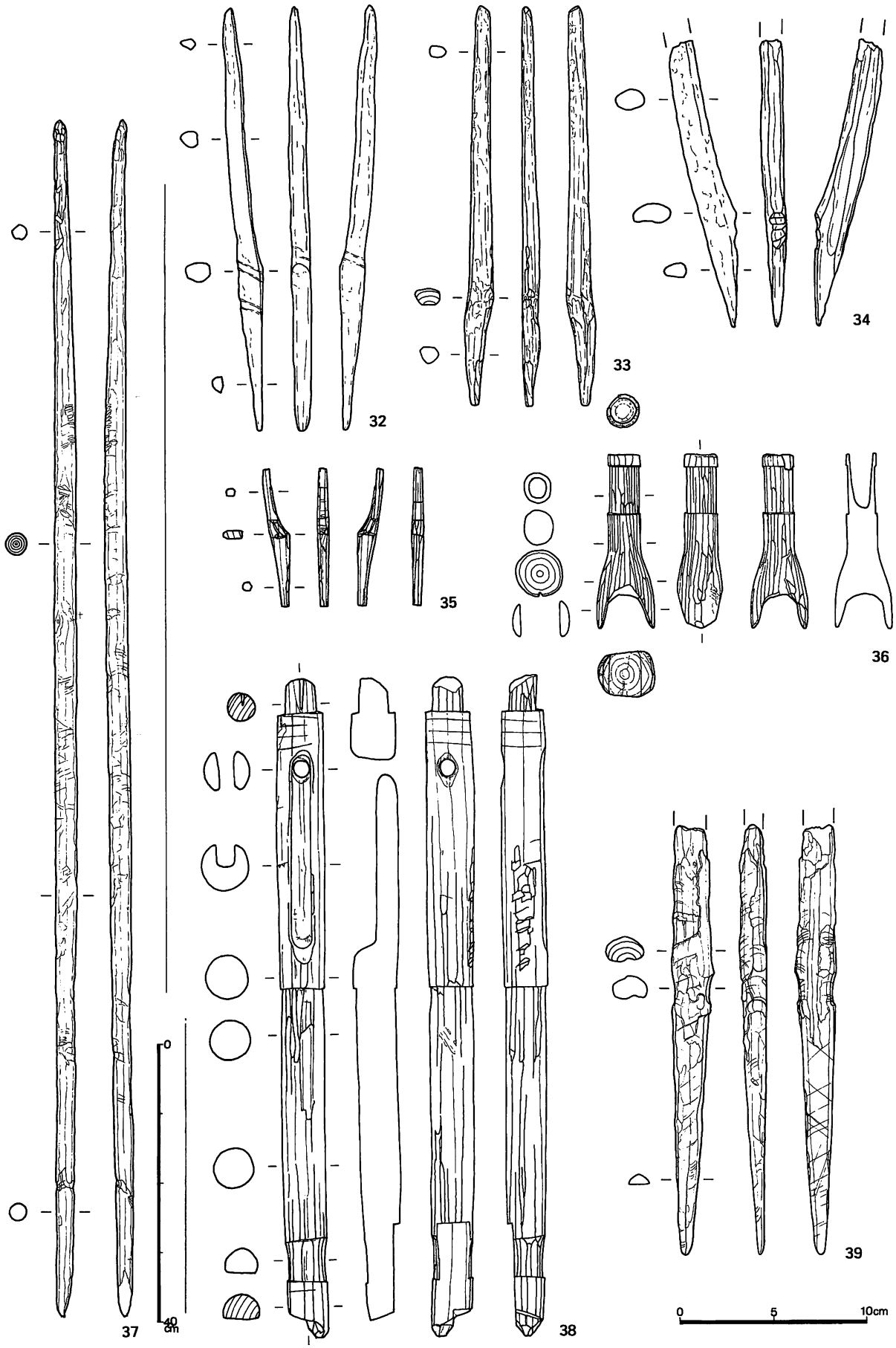
図Ｖ－40　Ａ′地区木製品 (4)



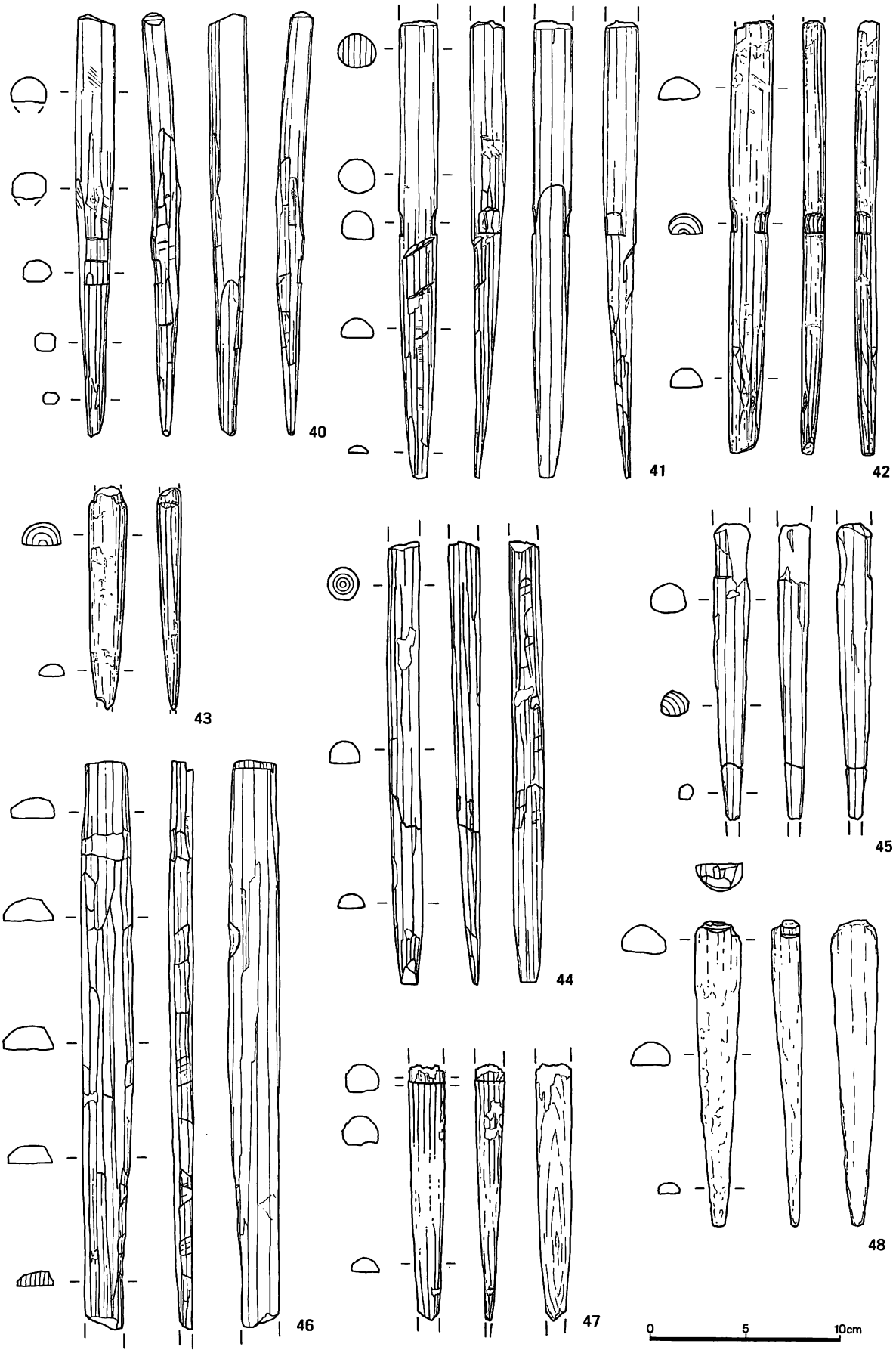
図Ⅴ－41　A′地区木製品 (5)



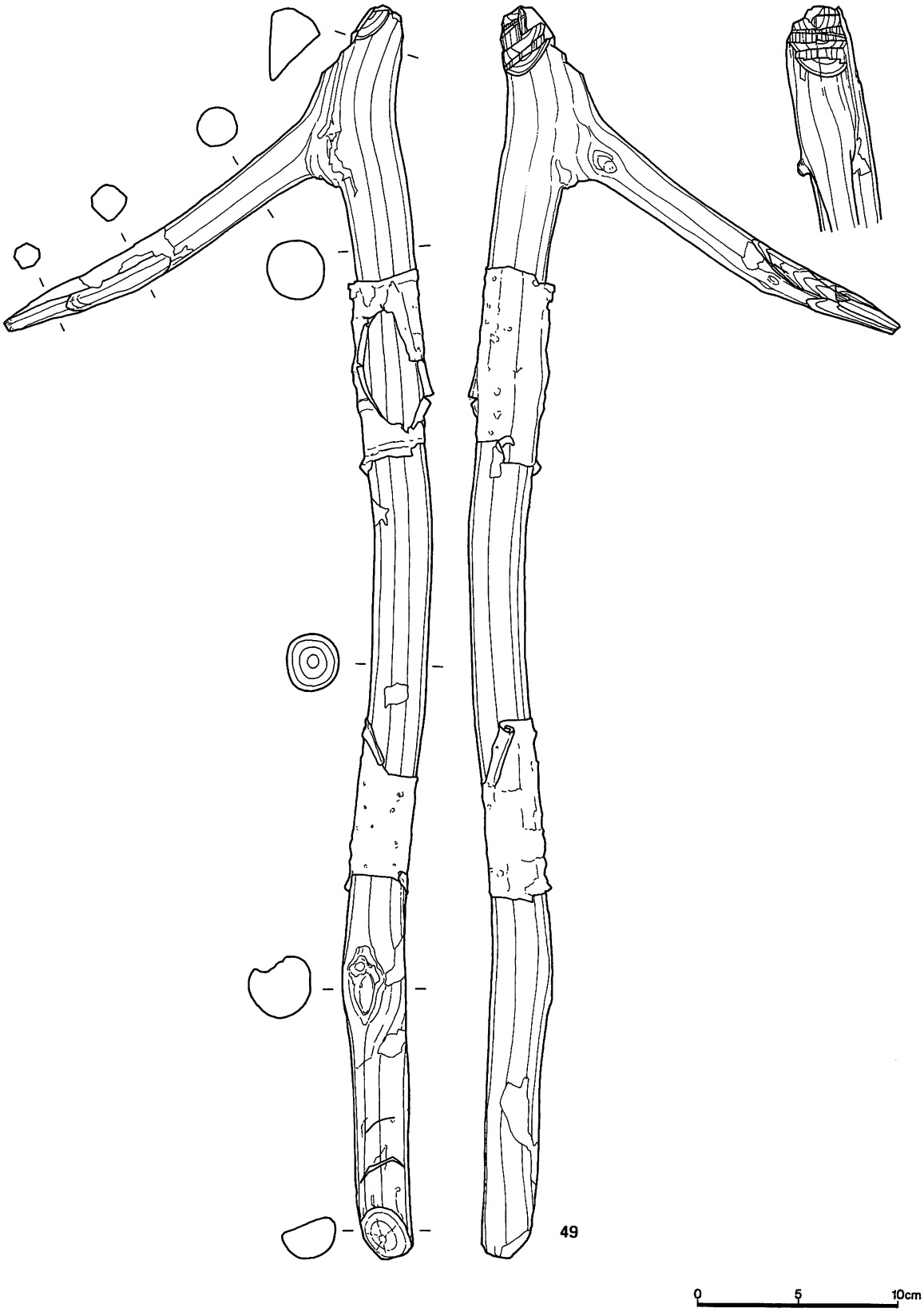
図V－42　A′地区木製品 (6)



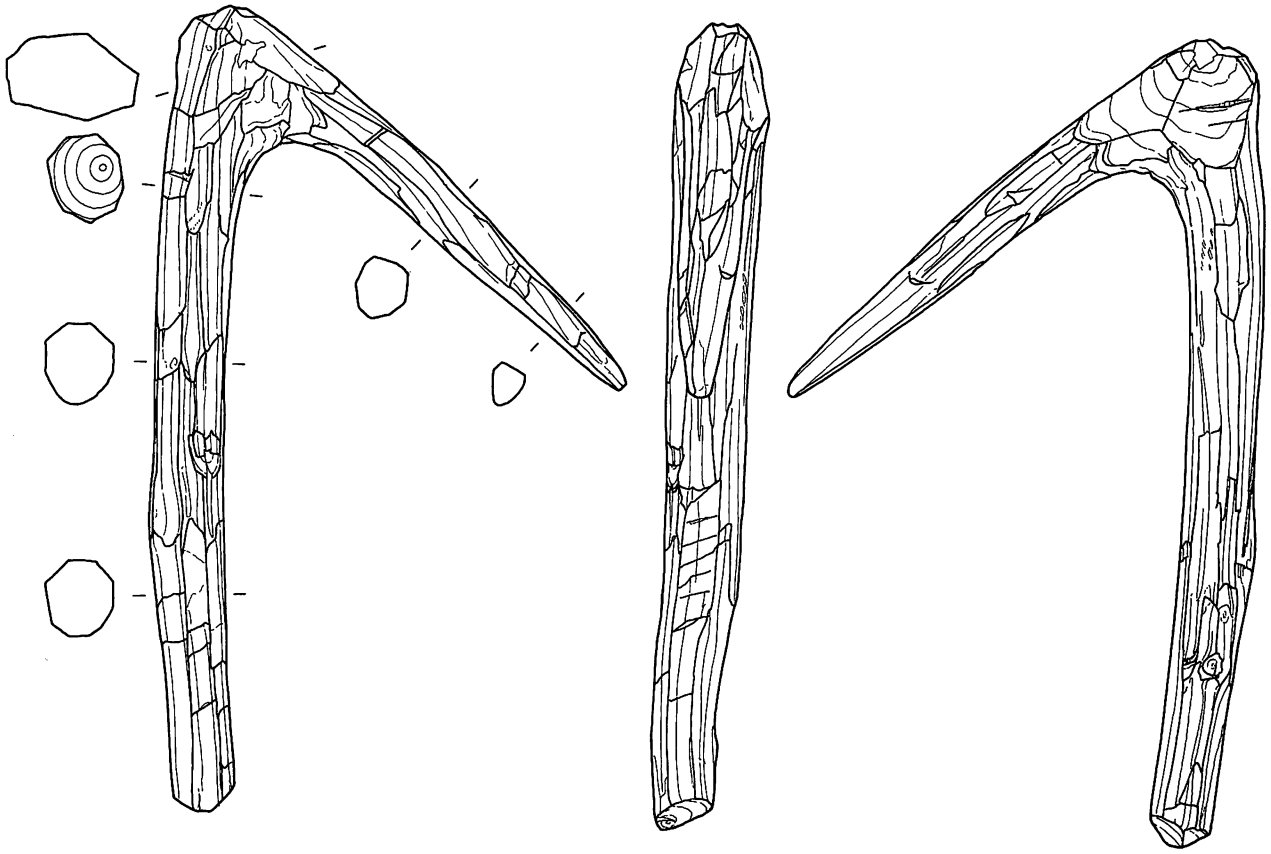
図Ⅴ－43　A′地区木製品 (7)

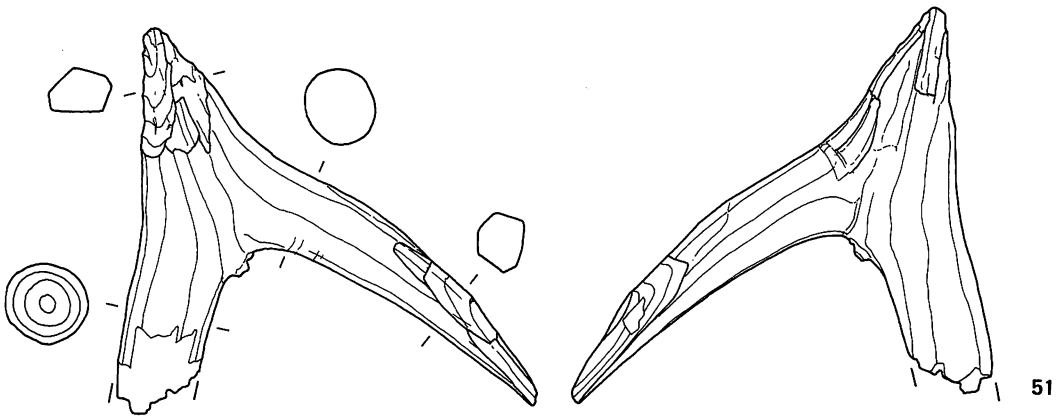


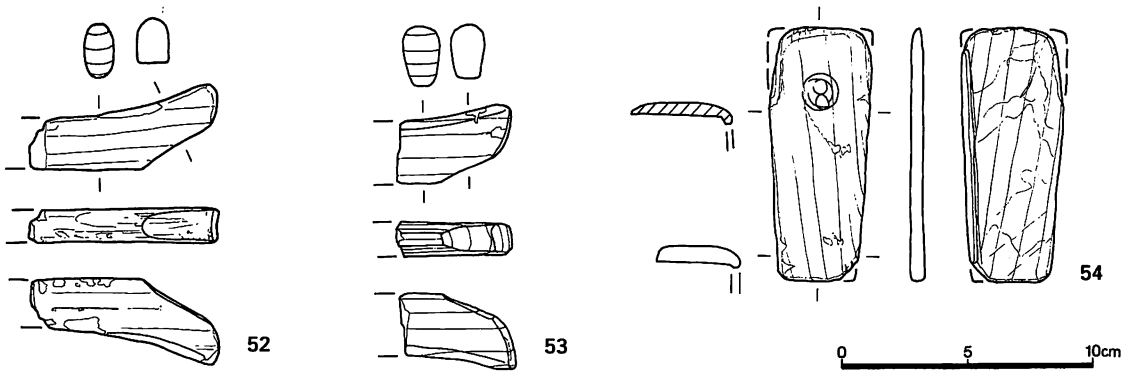
図Ⅴ－44　A′地区木製品 (8)



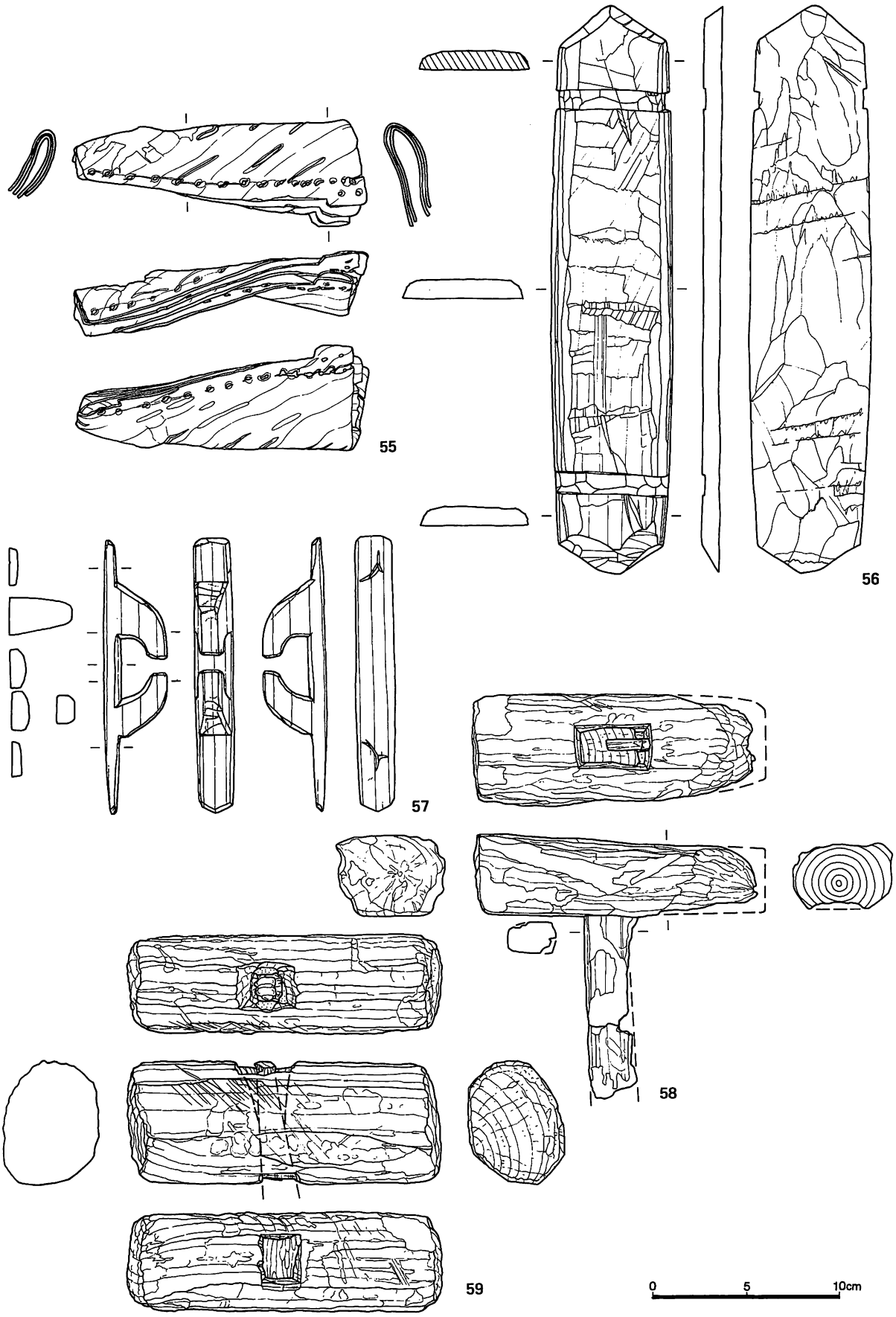
図Ⅴ－45　A′地区木製品 (9)



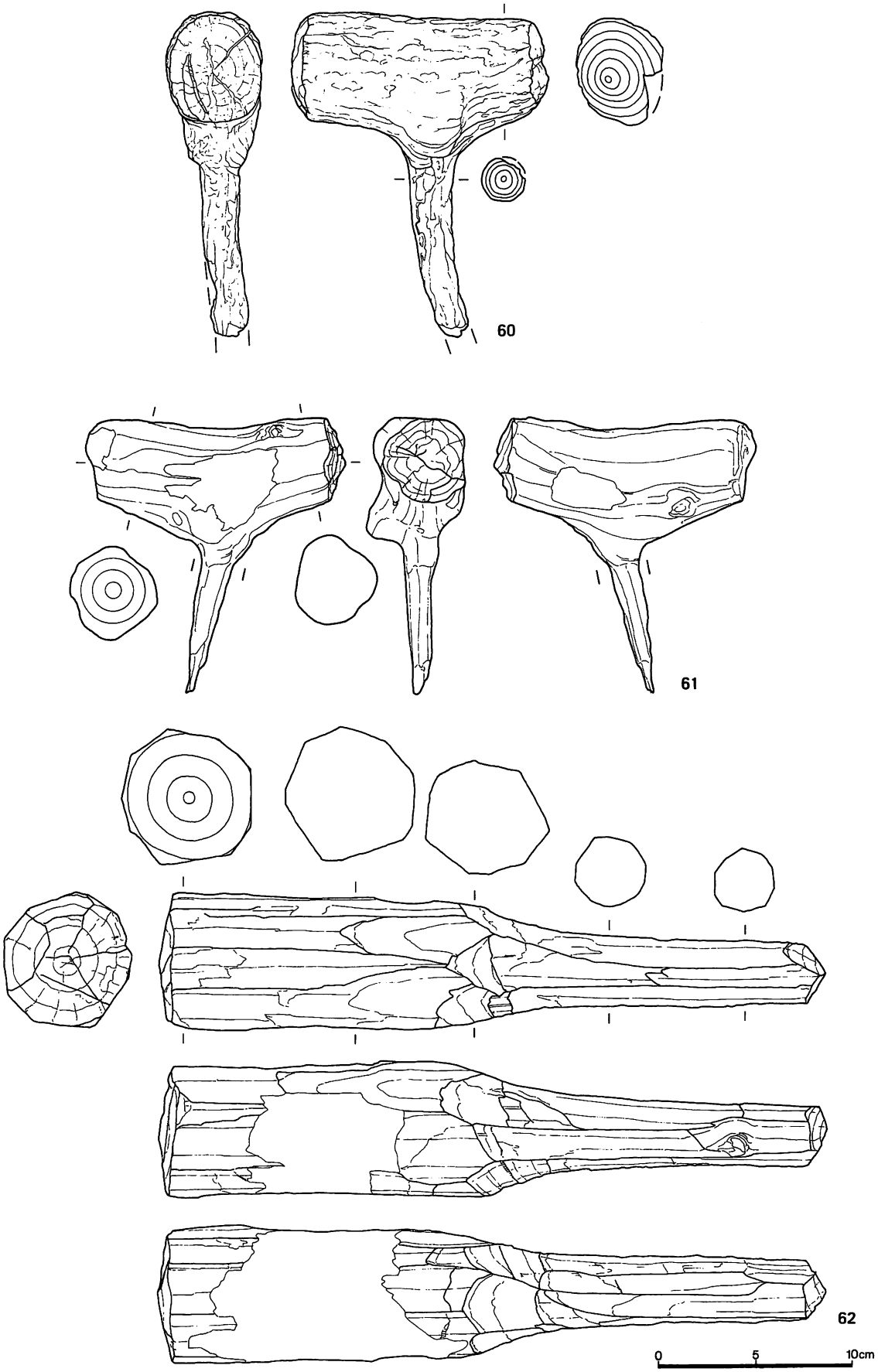




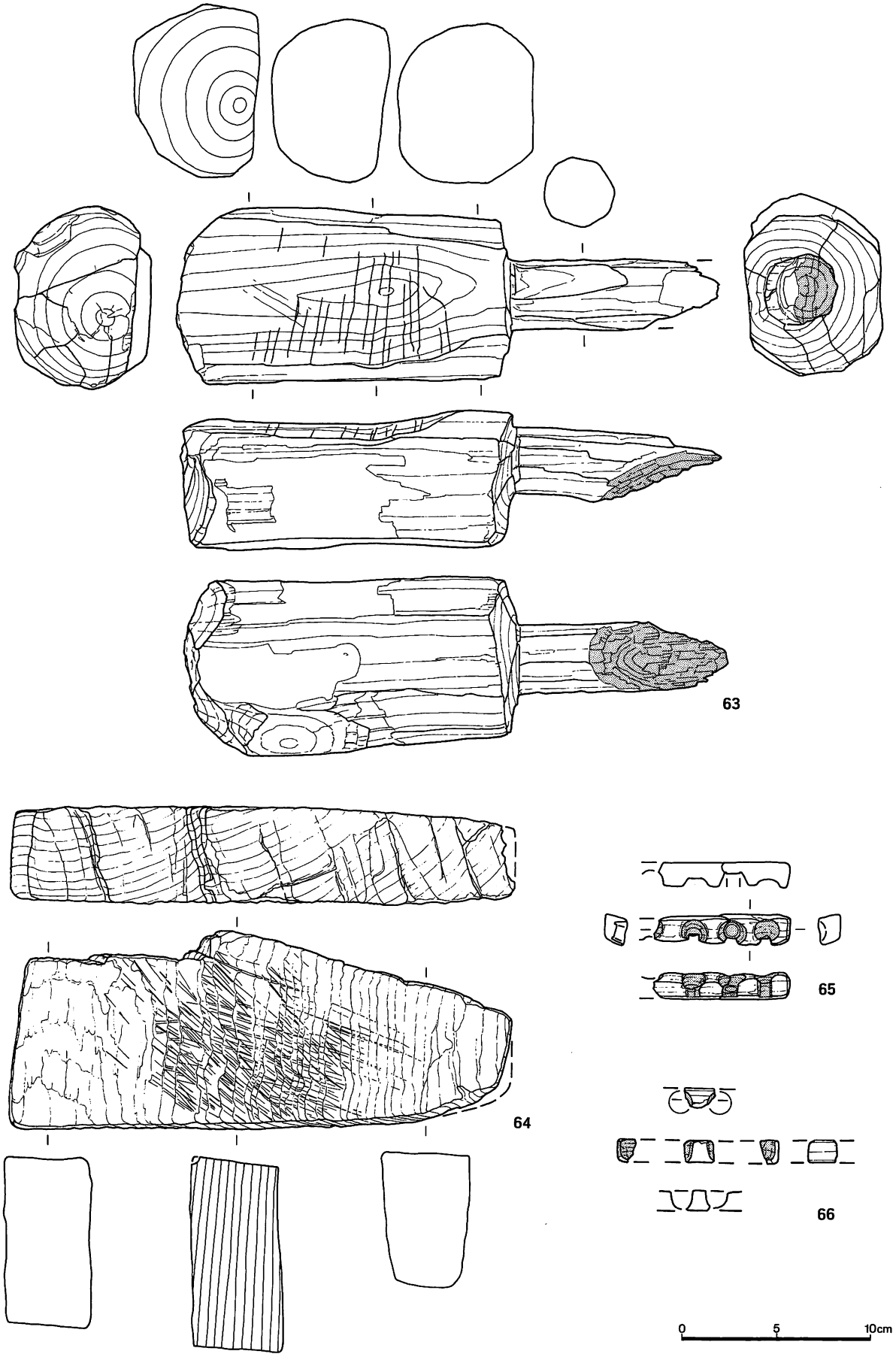
図Ⅴ－46　A′地区木製品 (10)



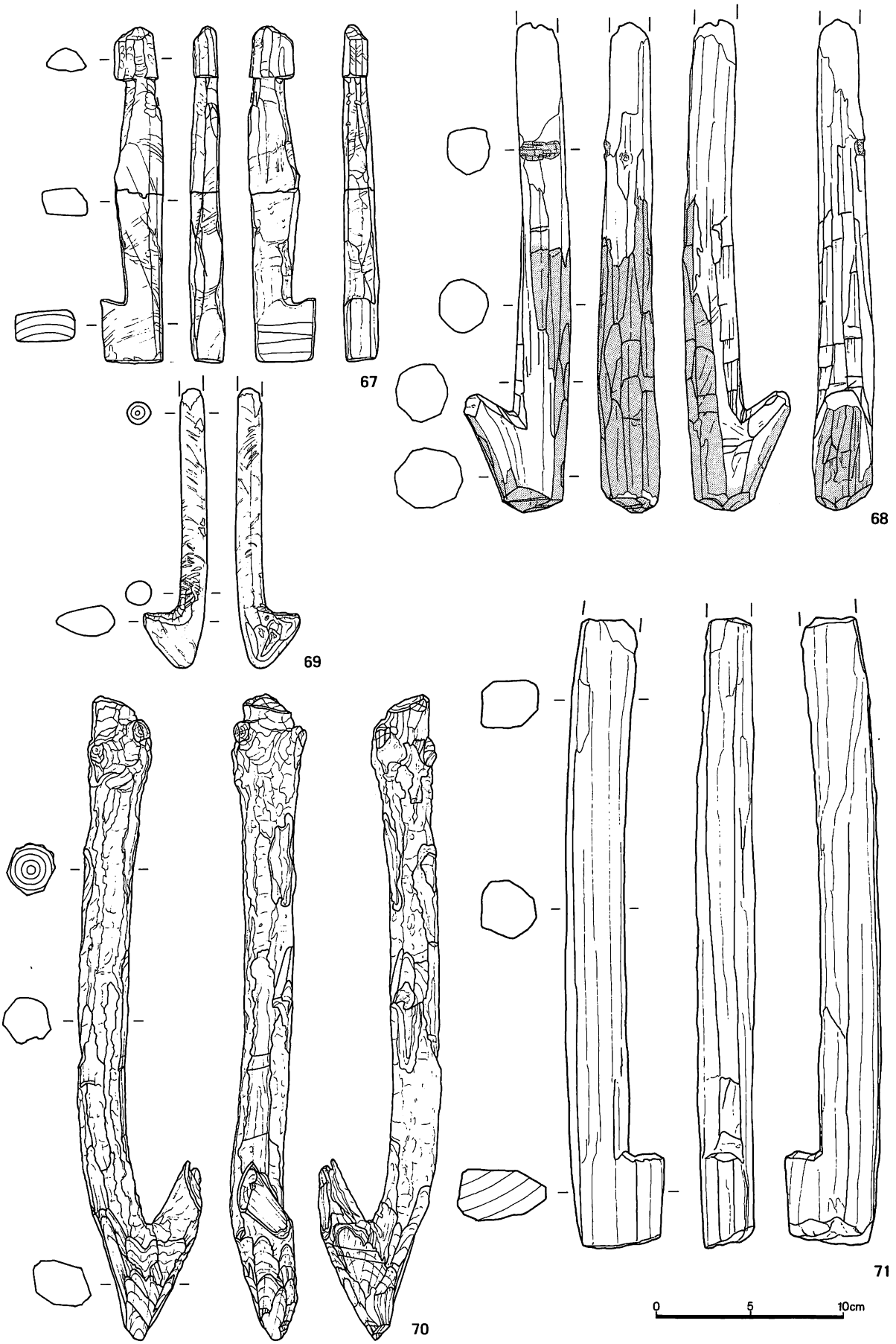
図Ⅴ－47　A′地区木製品 (11)



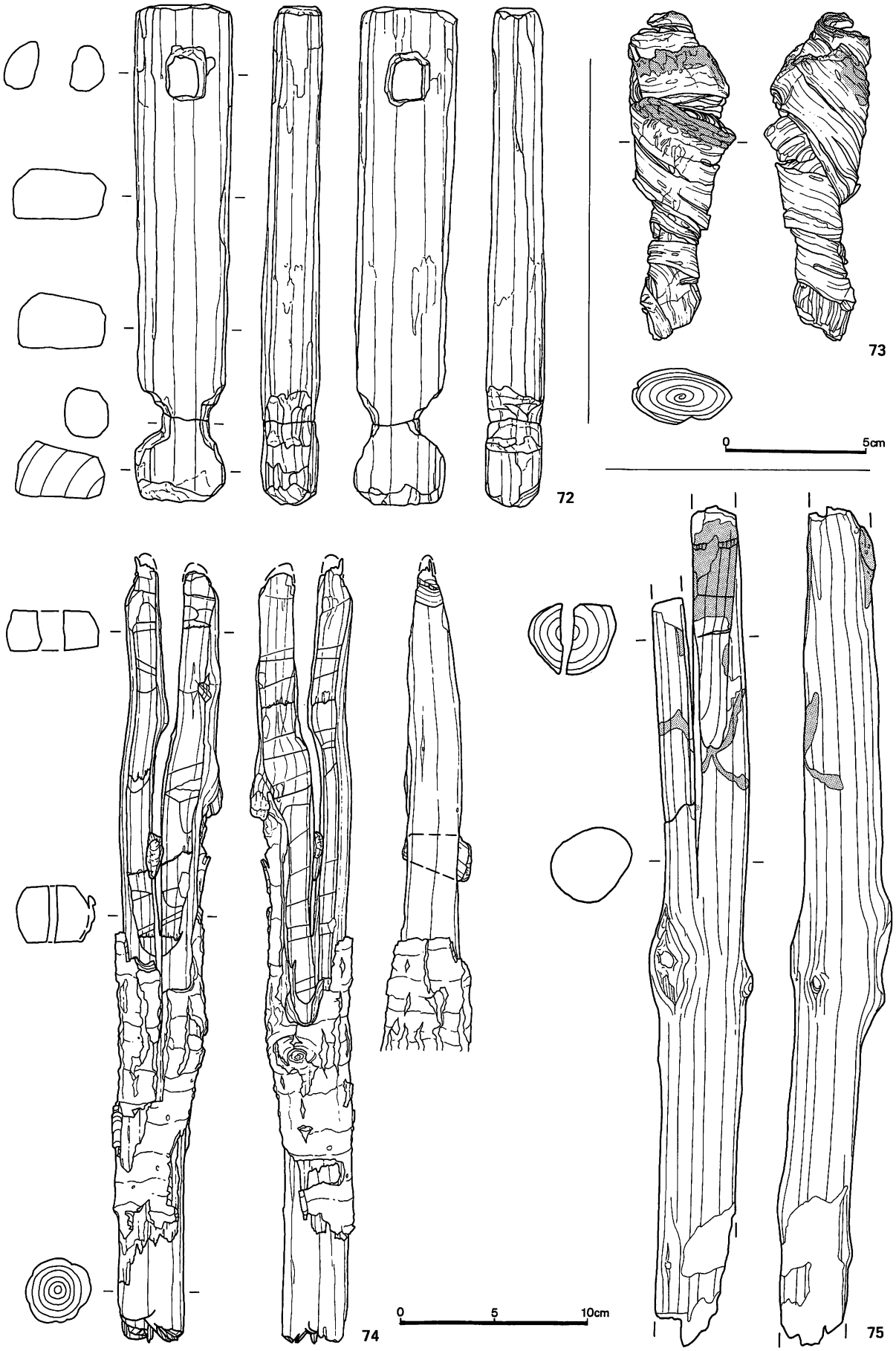
図Ｖ－48　Ａ′地区木製品 (12)



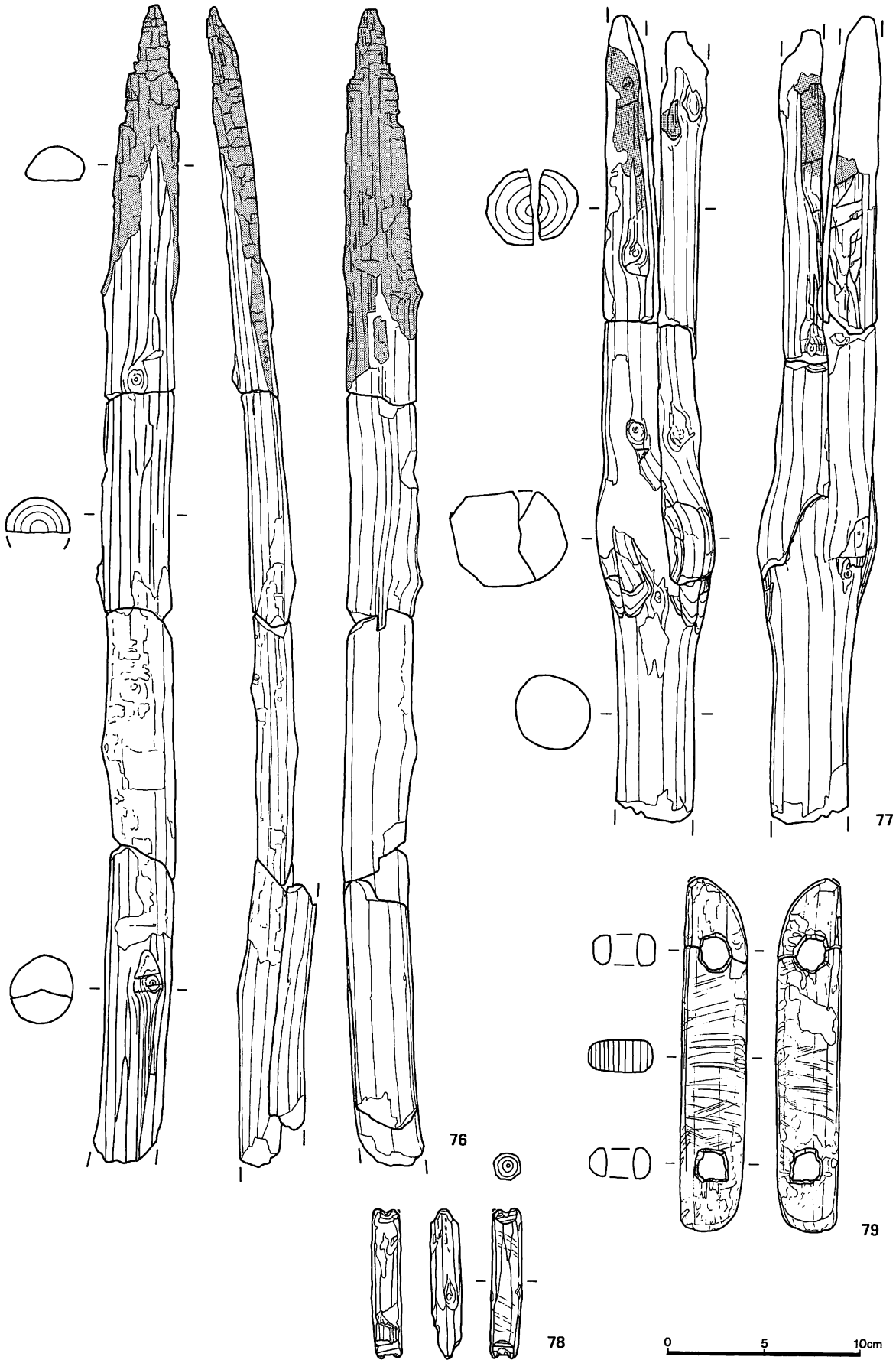
図Ⅴ－49　A′地区木製品 (13)



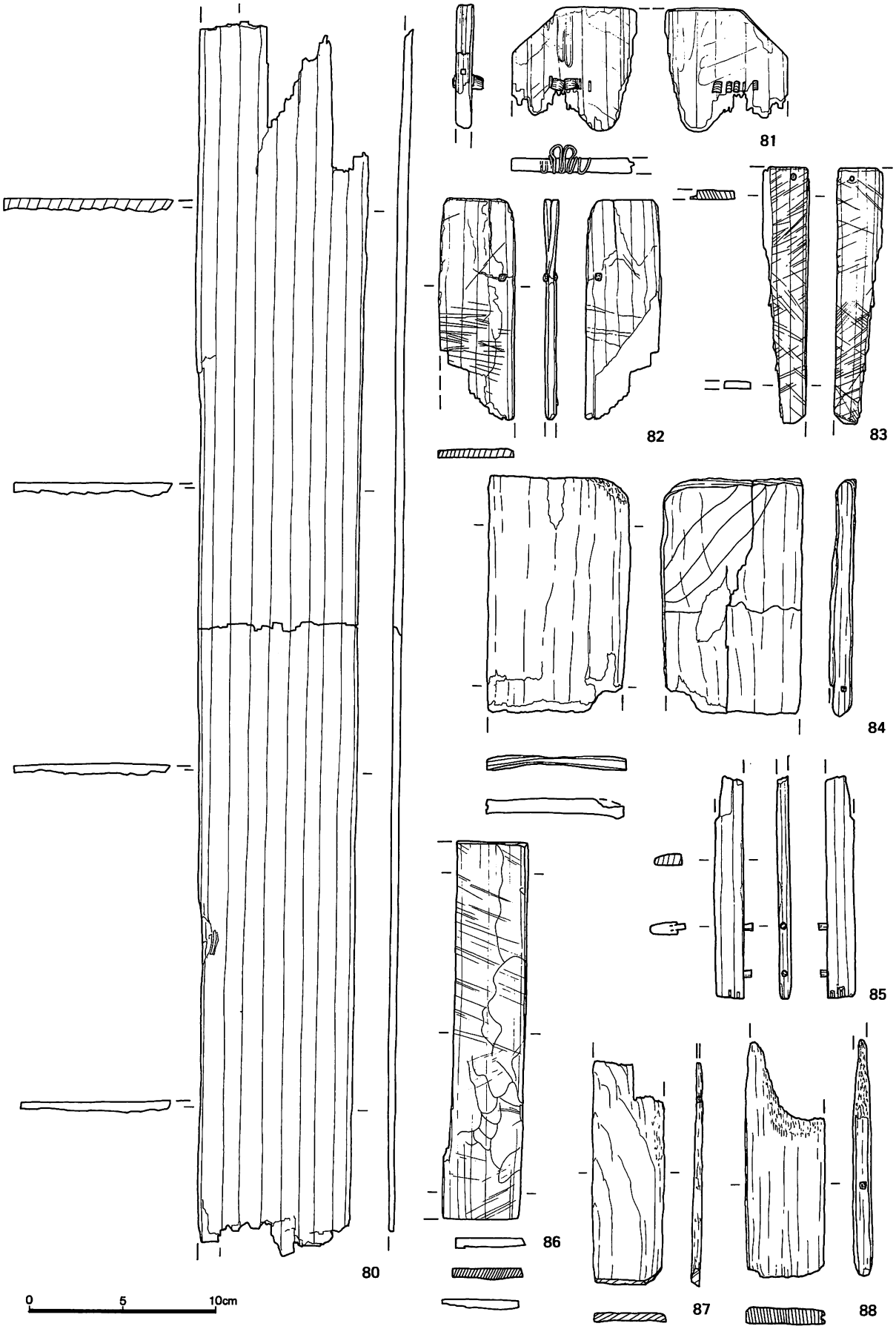
図Ｖ－50　Ａ′地区木製品 (14)



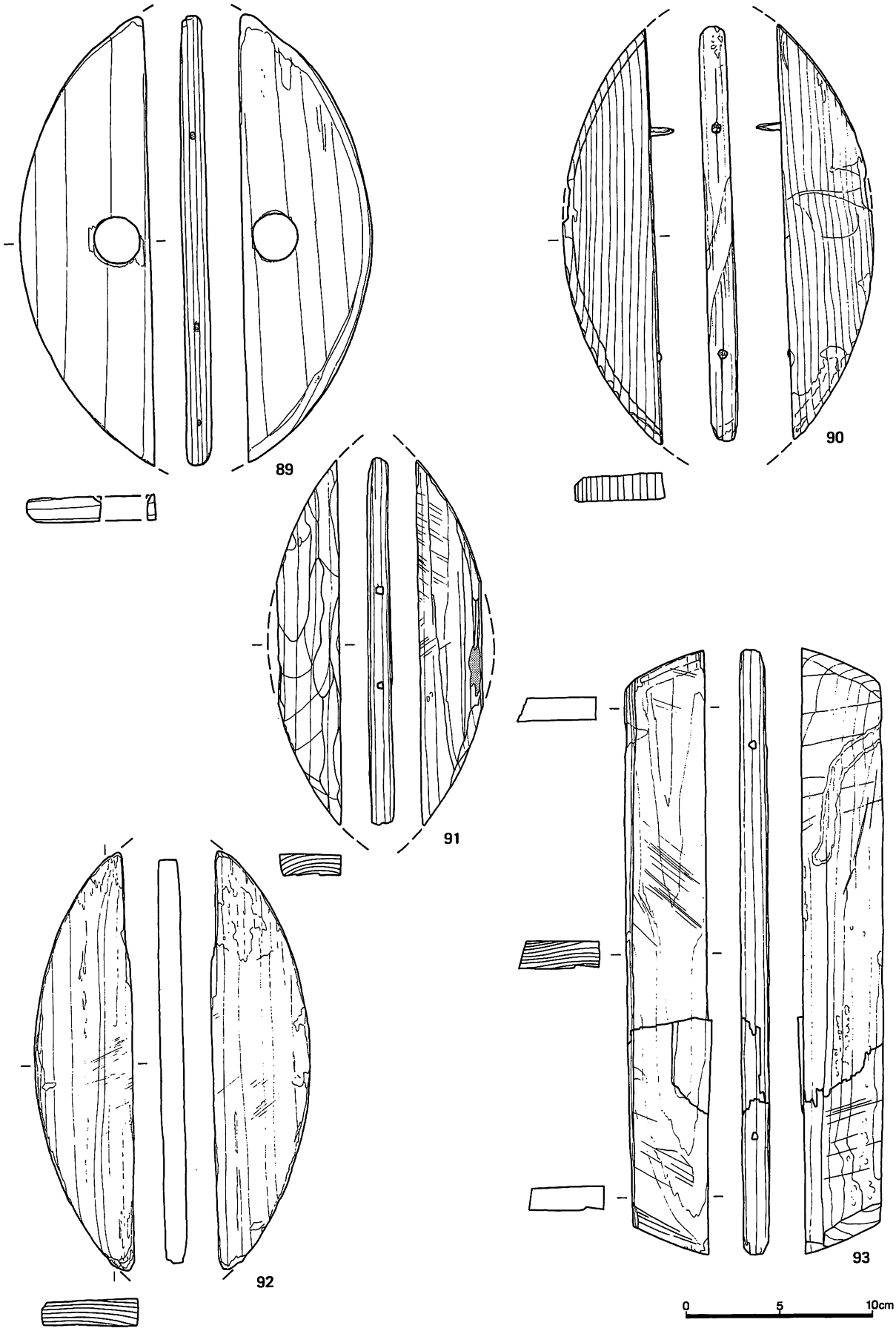
図Ⅴ－51　A′地区木製品 (15)



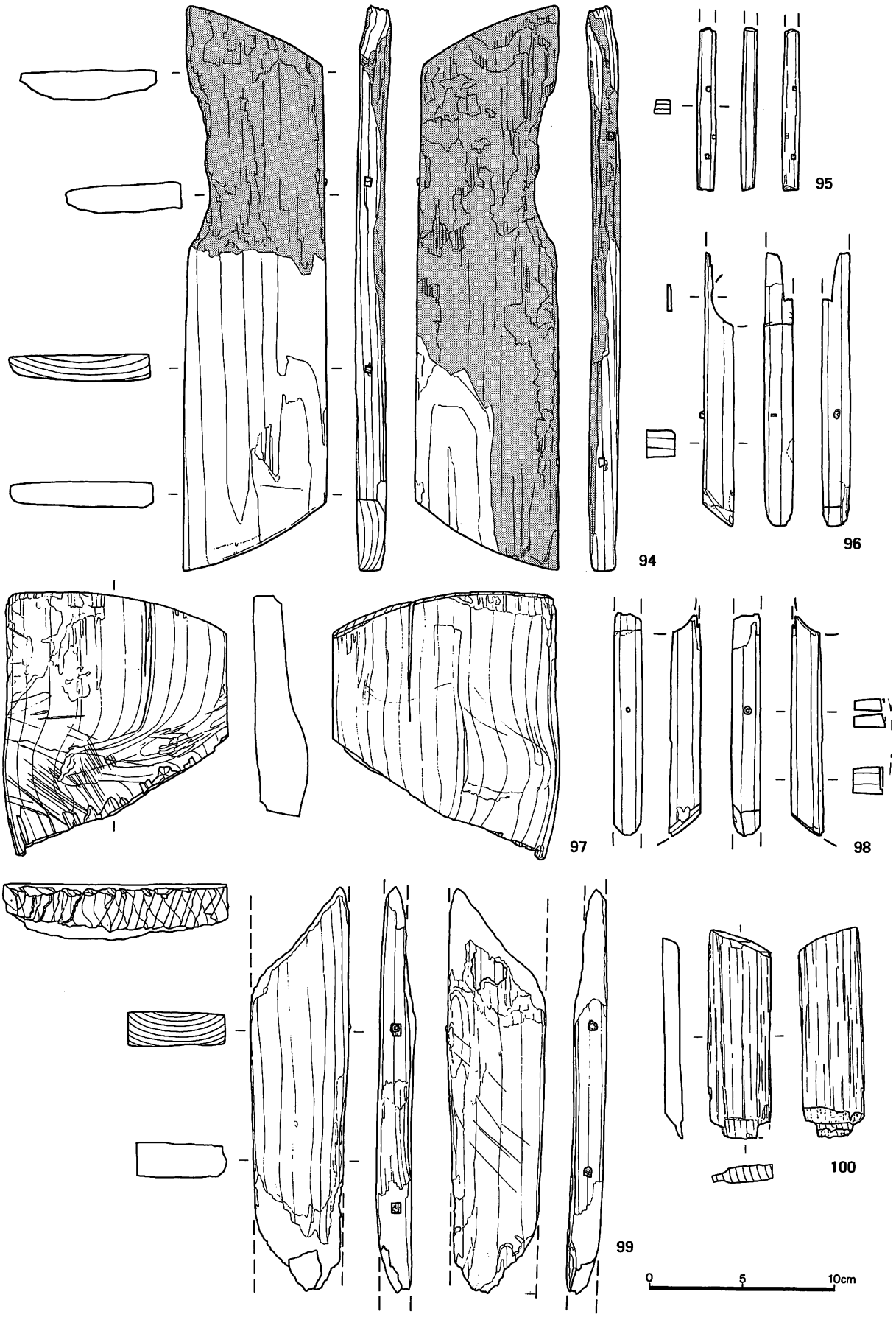
図Ｖ－52　Ａ′地区木製品 (16)



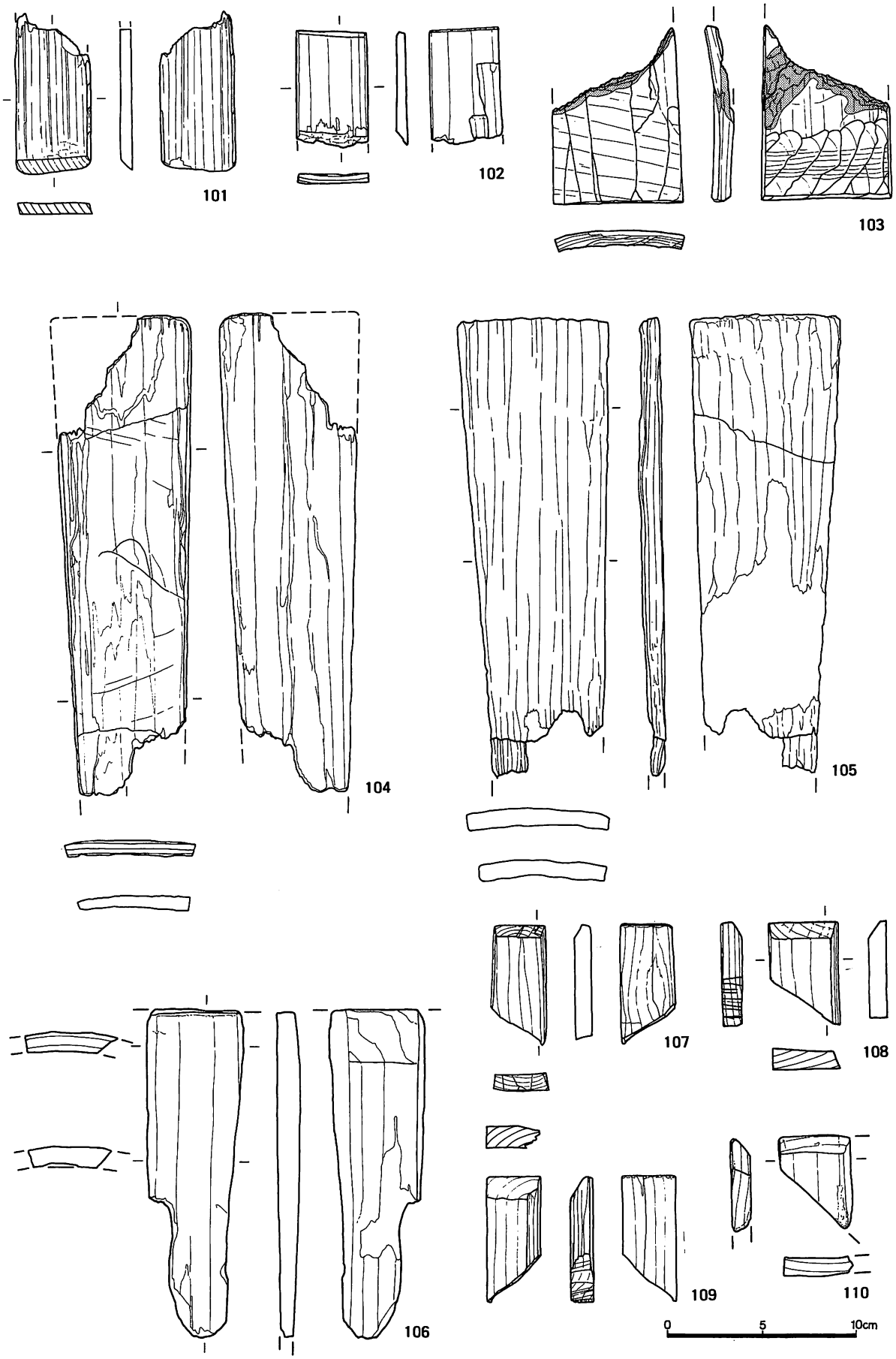
図Ⅴ－53　A′地区木製品 (17)



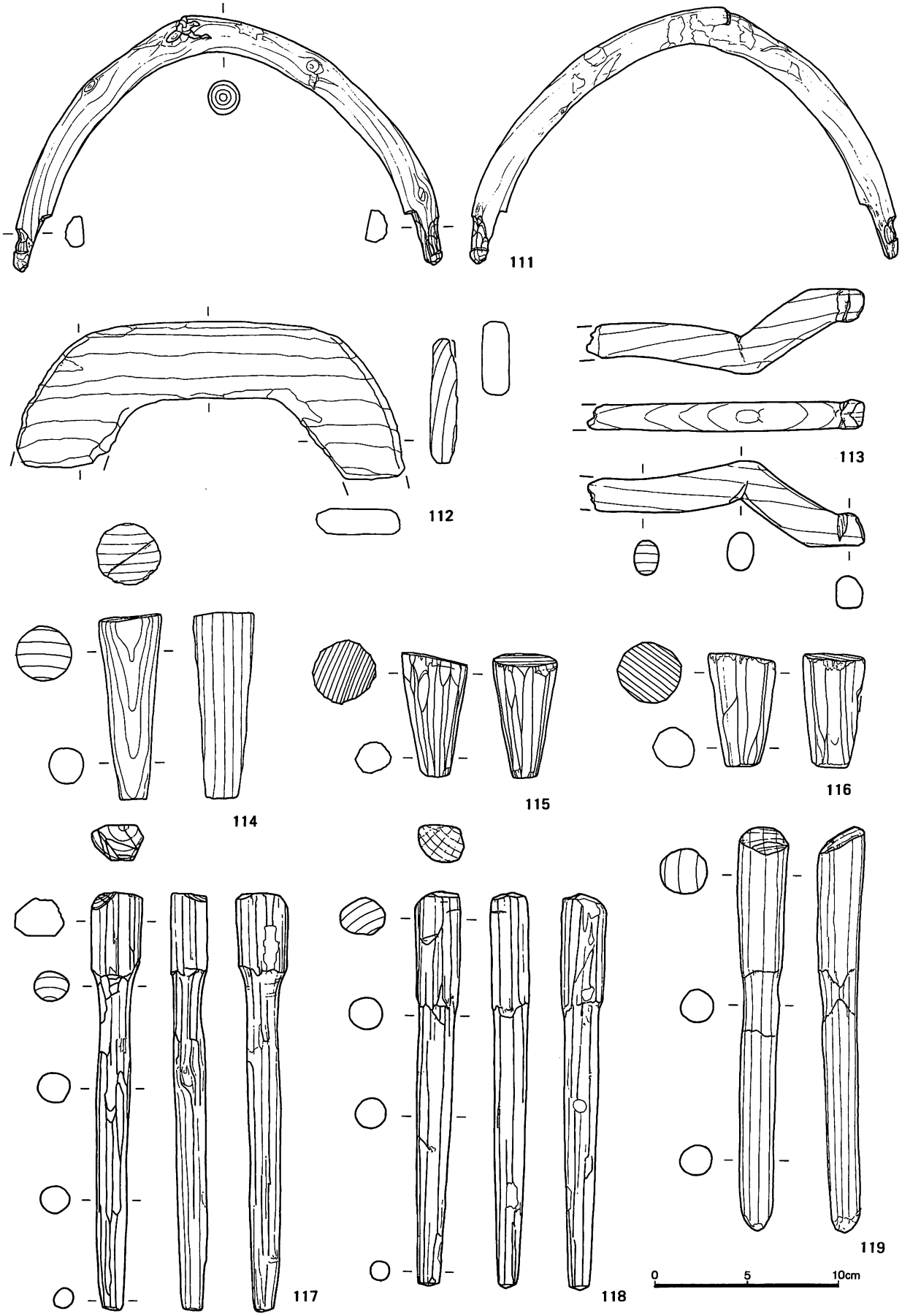
図Ｖ－54　Ａ′地区木製品 (18)



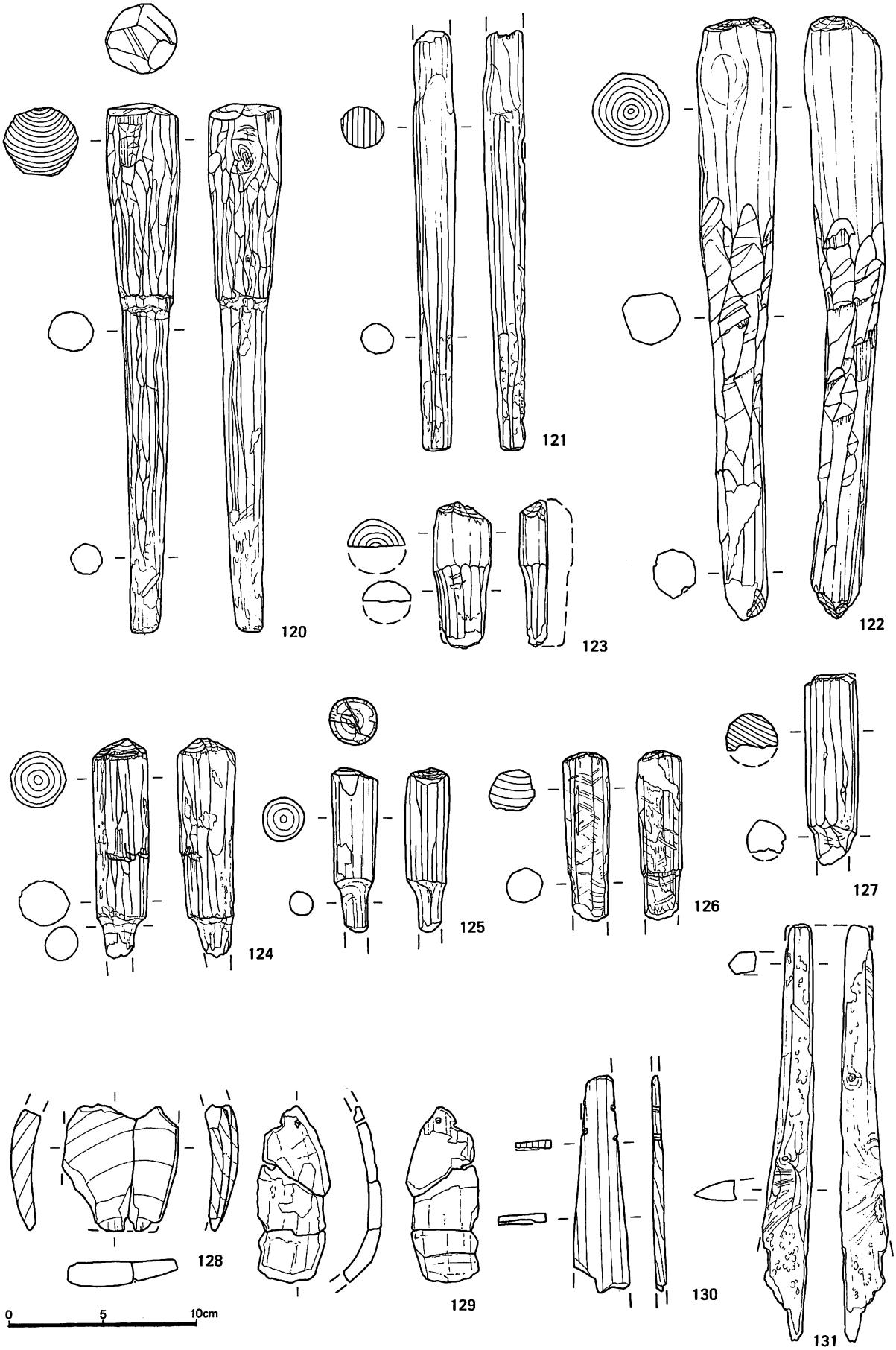
図Ⅴ－55　A′地区木製品 (19)



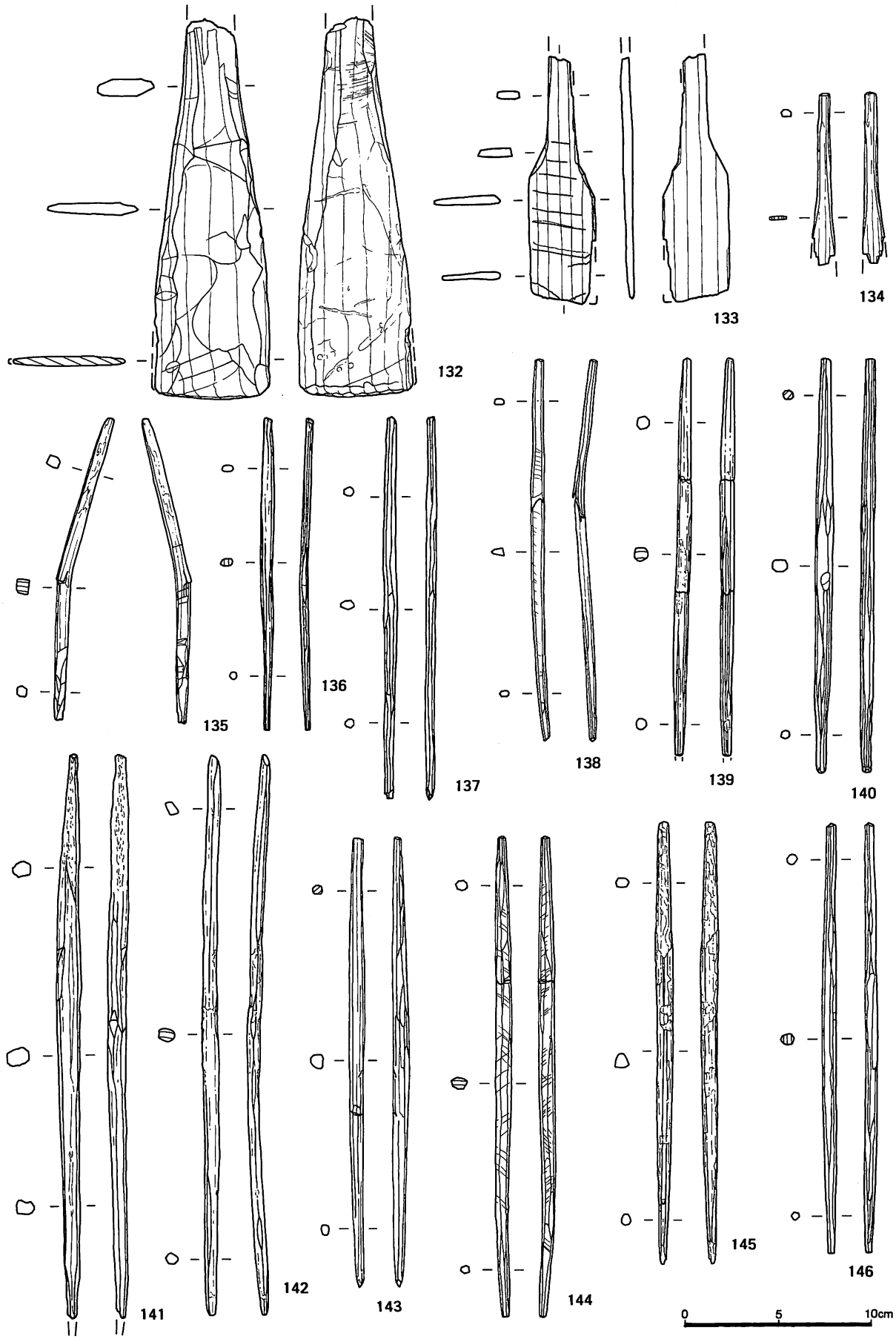
図Ⅴ－56　A′地区木製品 (20)



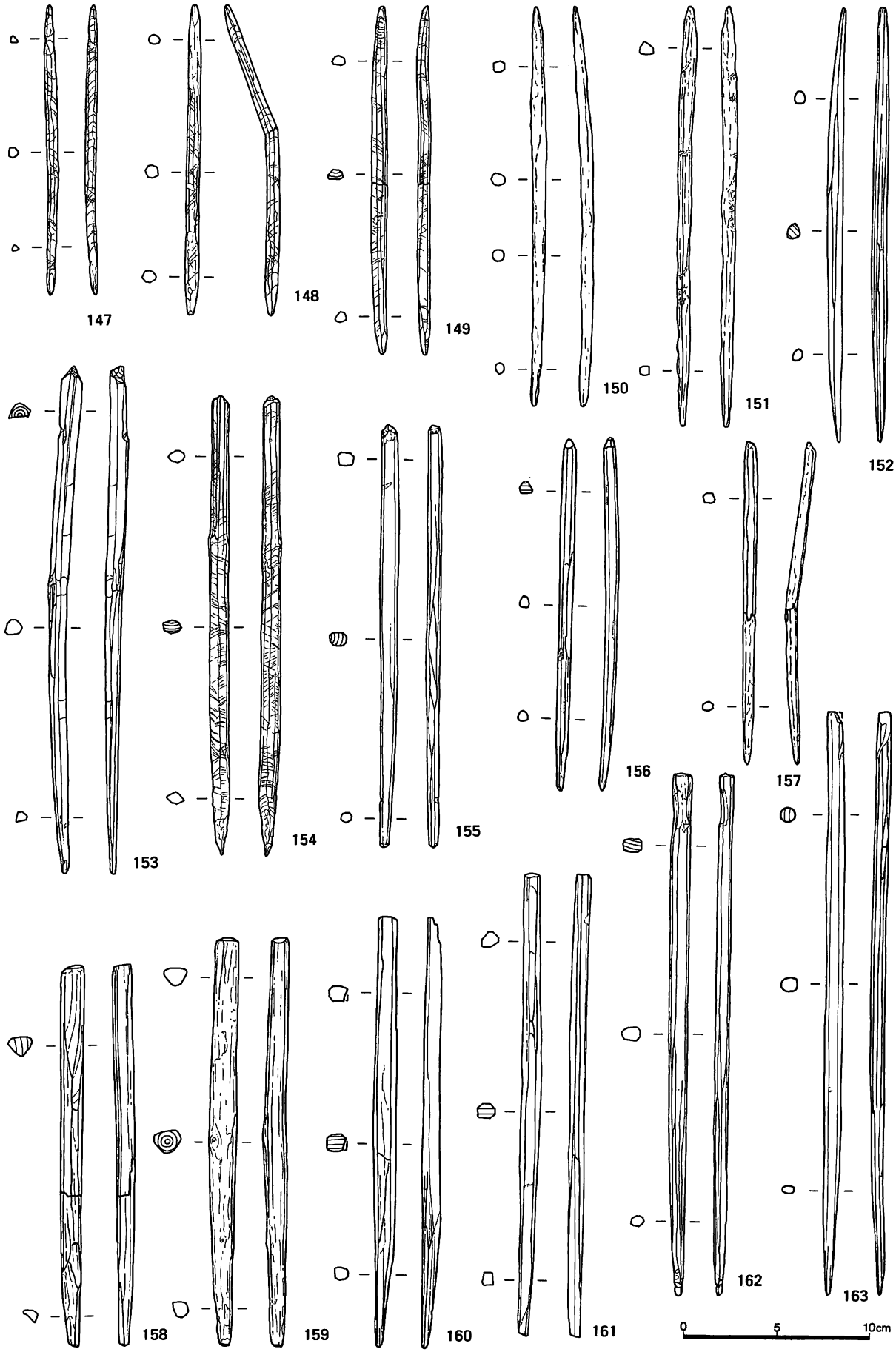
図Ⅴ－57　A′地区木製品 (21)



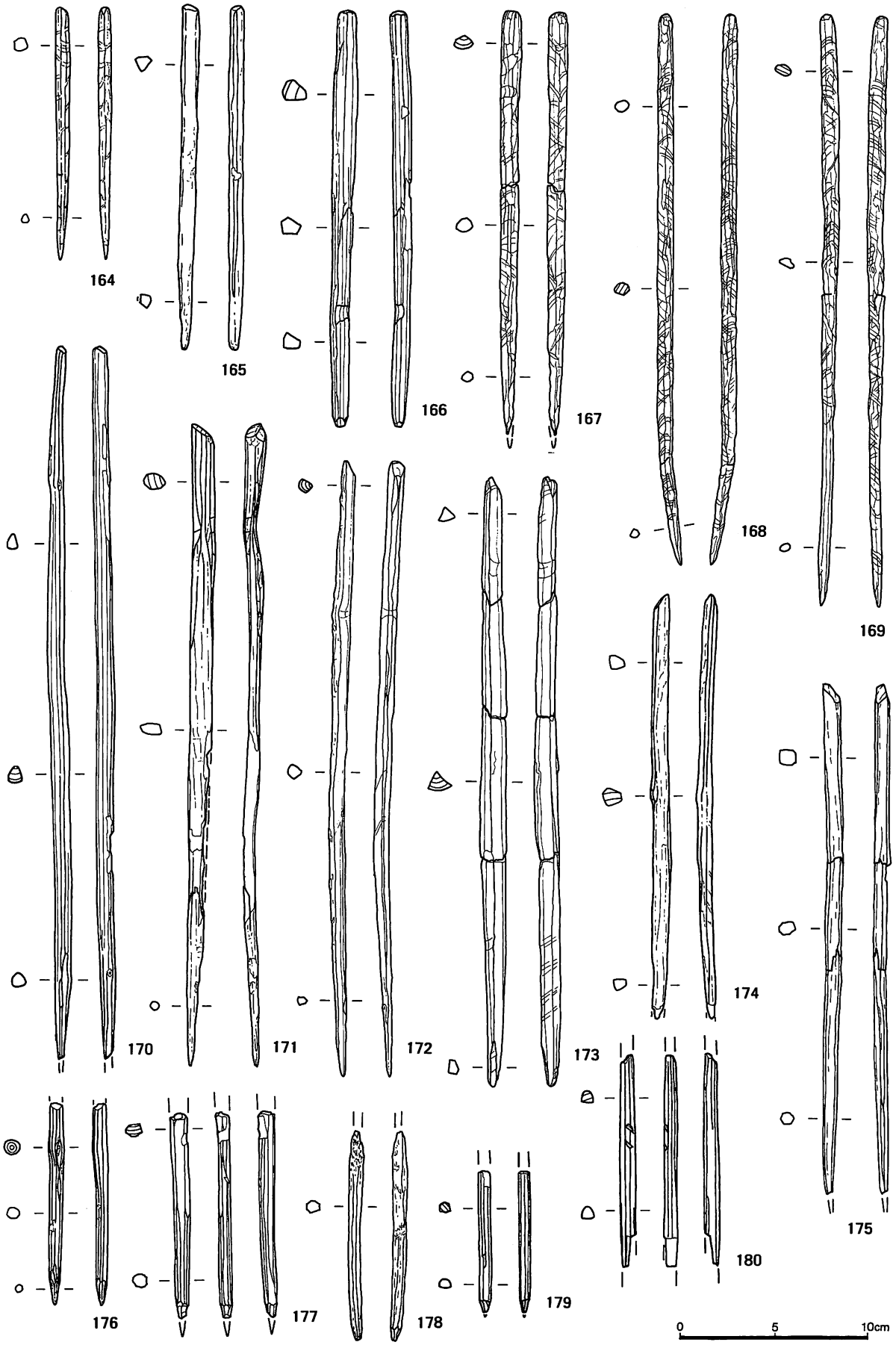
図Ⅴ－58　A′地区木製品 (22)



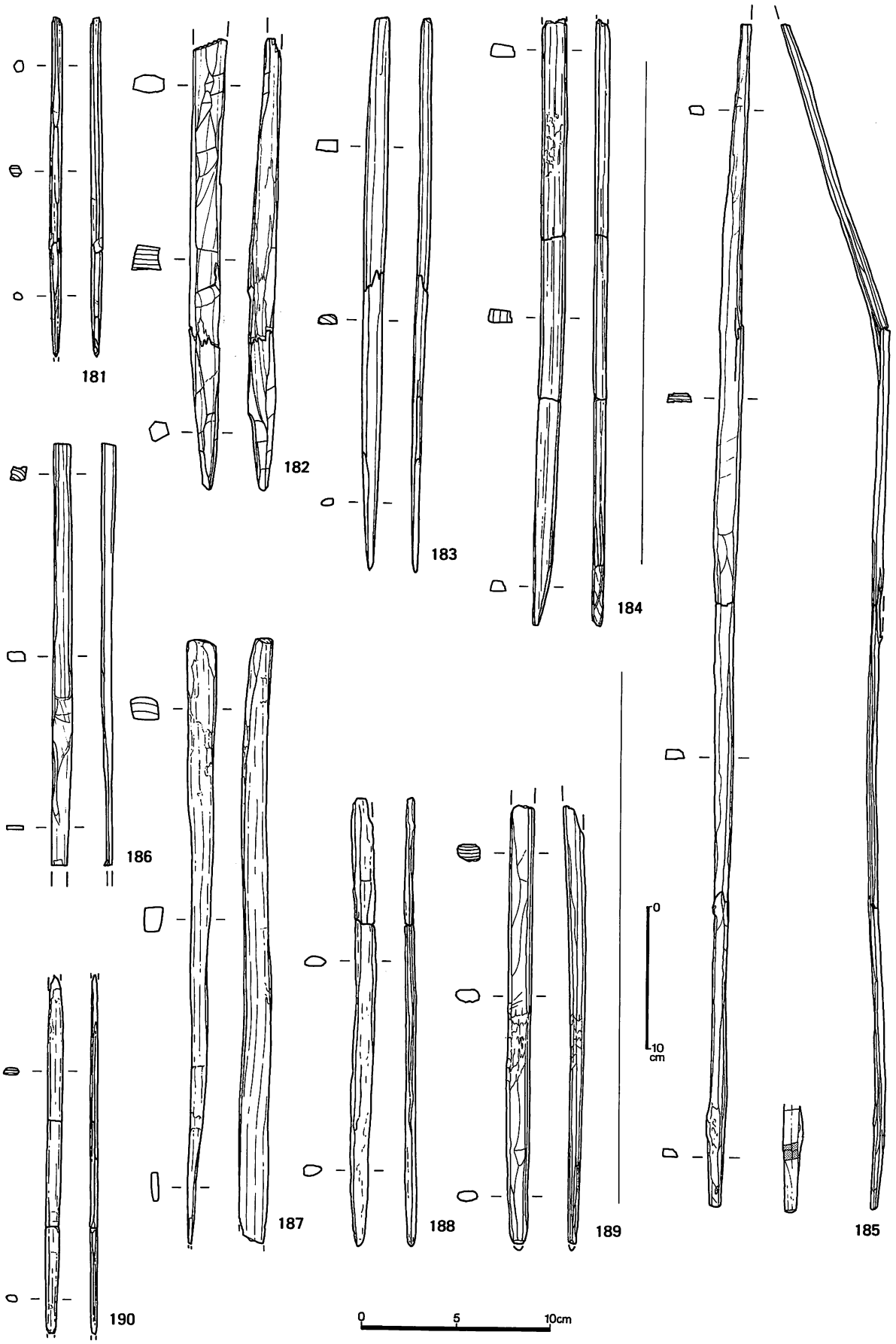
図Ⅴ－59　A′地区木製品 (23)



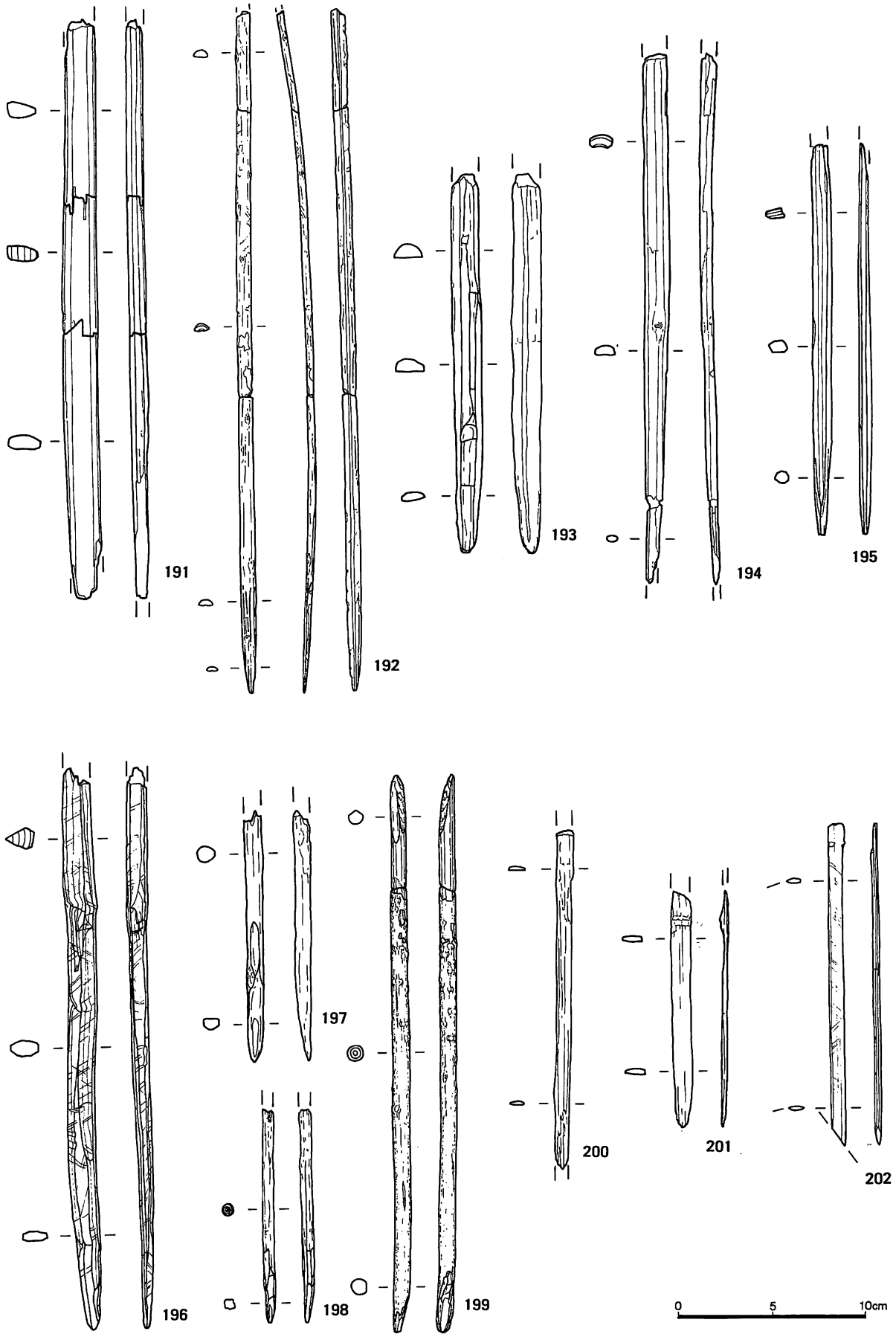
図Ⅴ－60　A′地区木製品 (24)



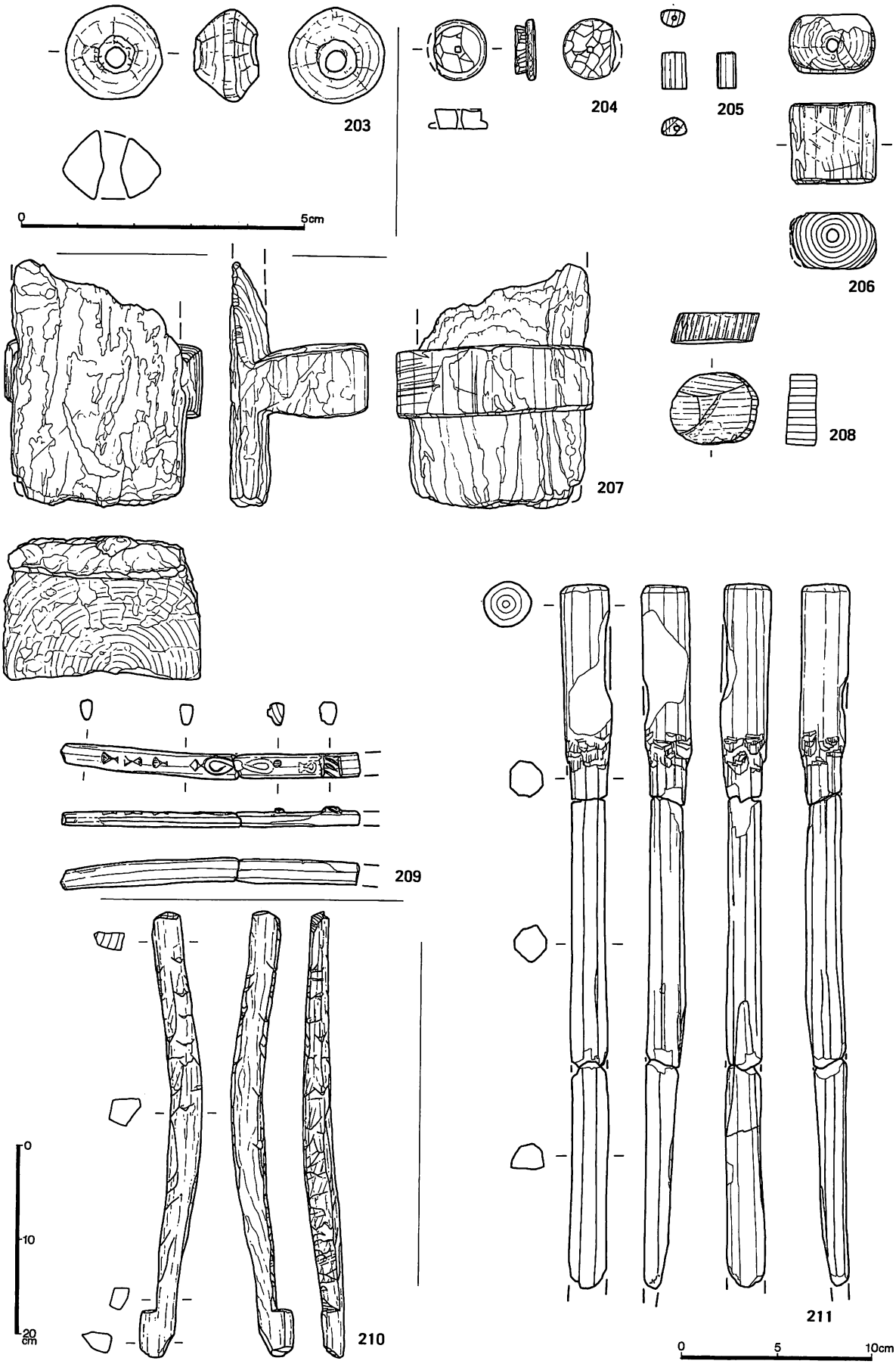
図Ⅴ－61　A′地区木製品 (25)



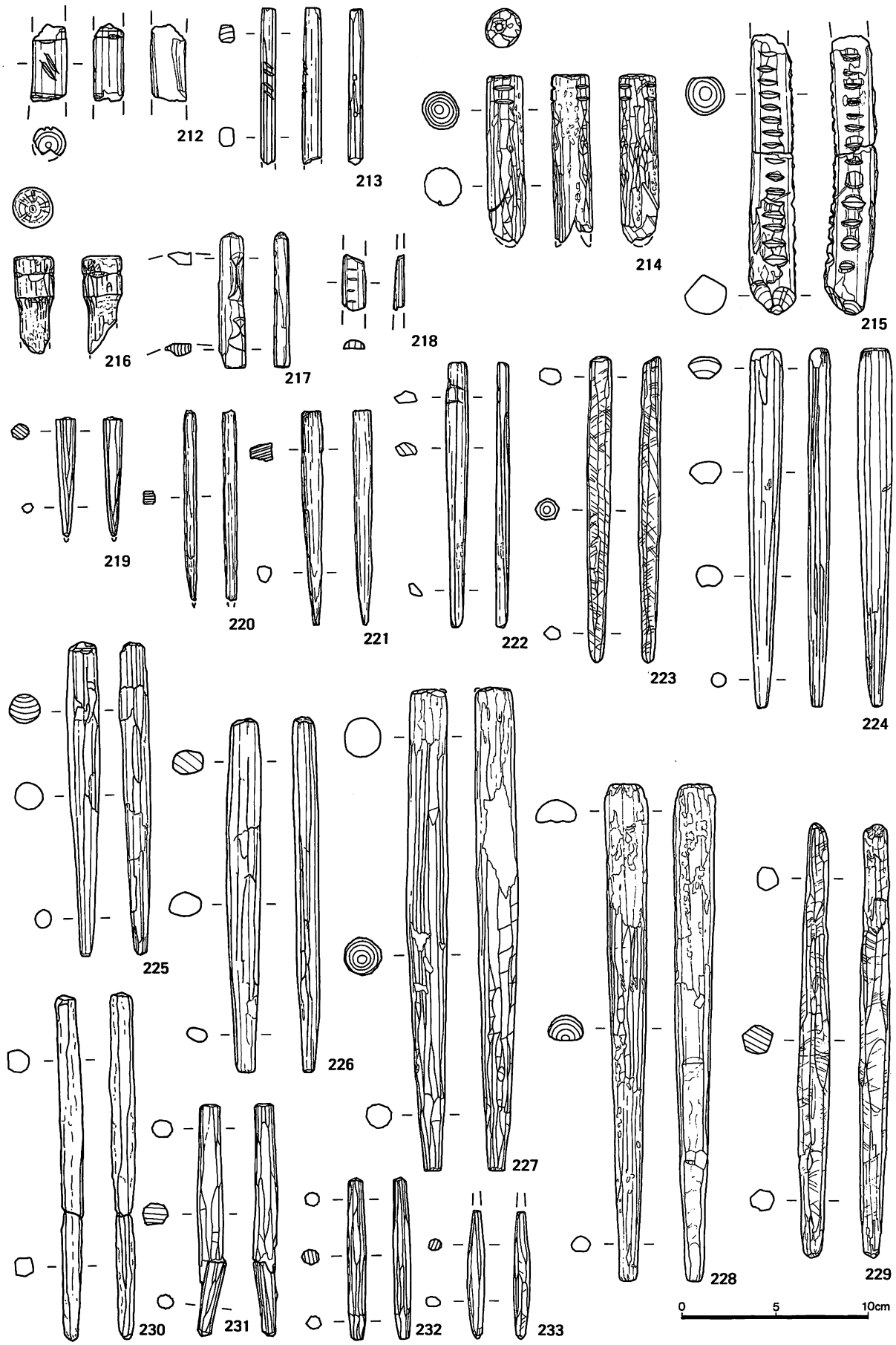
図Ｖ－62　A′地区木製品 (26)



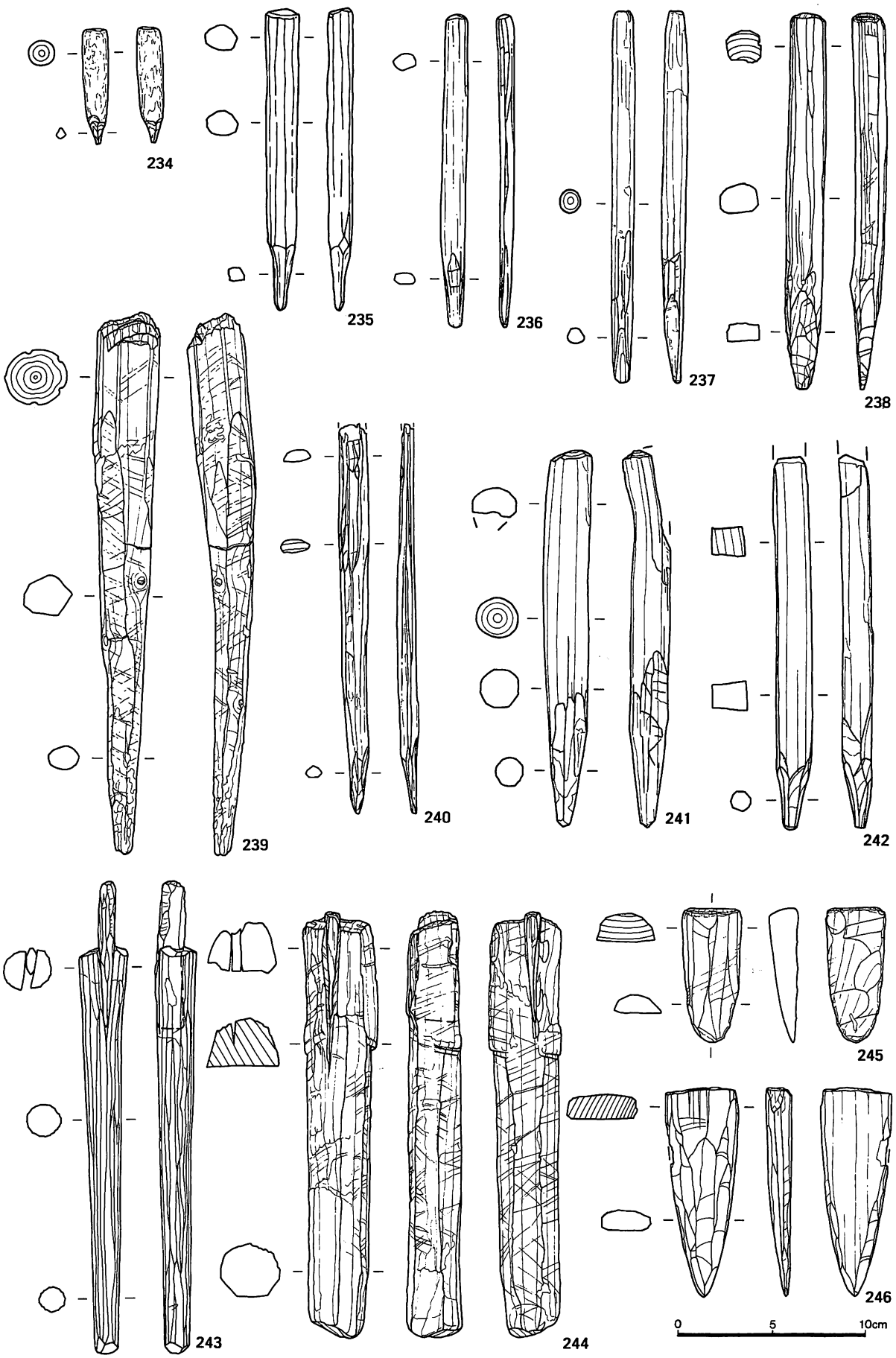
図Ⅴ－63　A′地区木製品 (27)



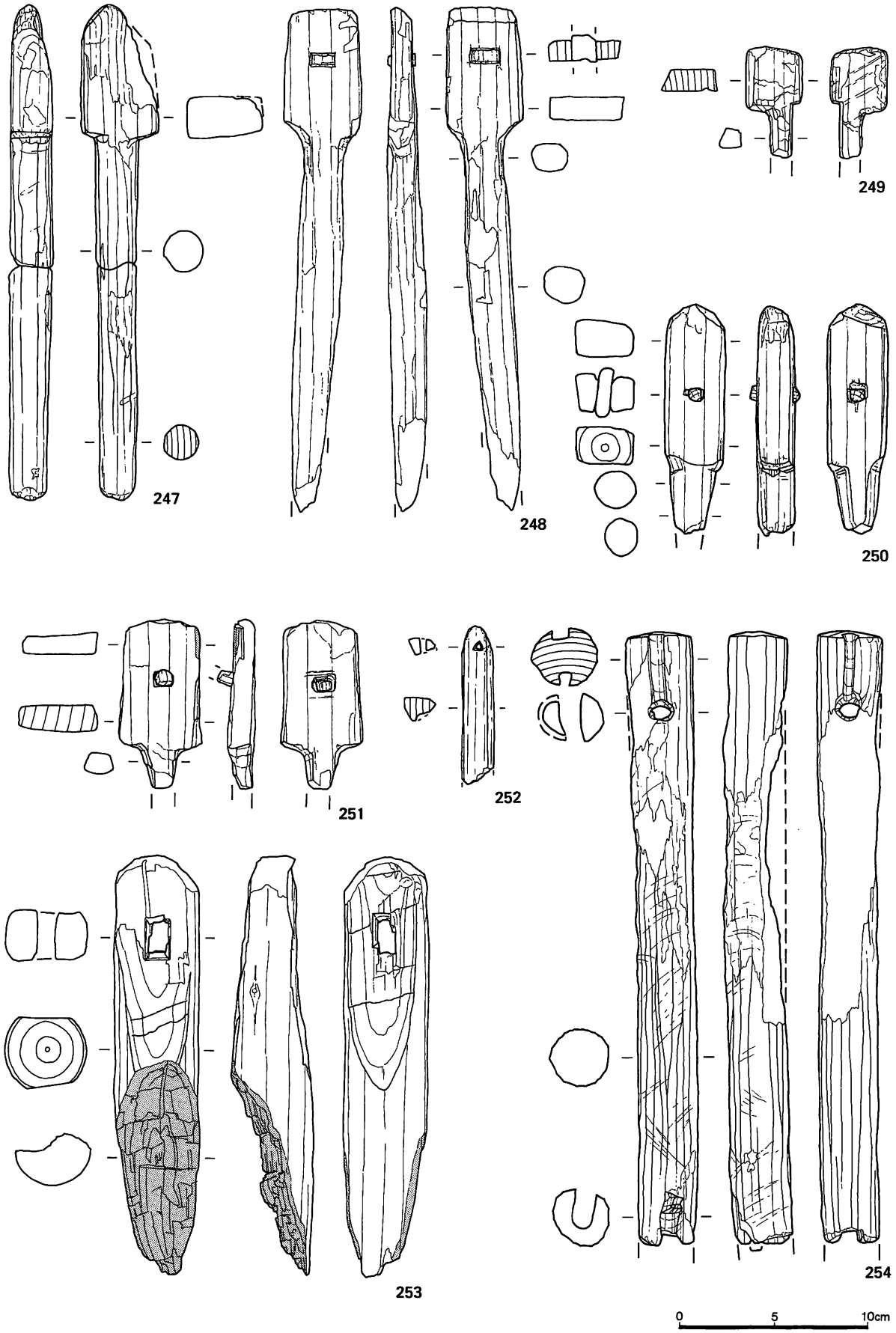
図V－64　A′地区木製品 (28)



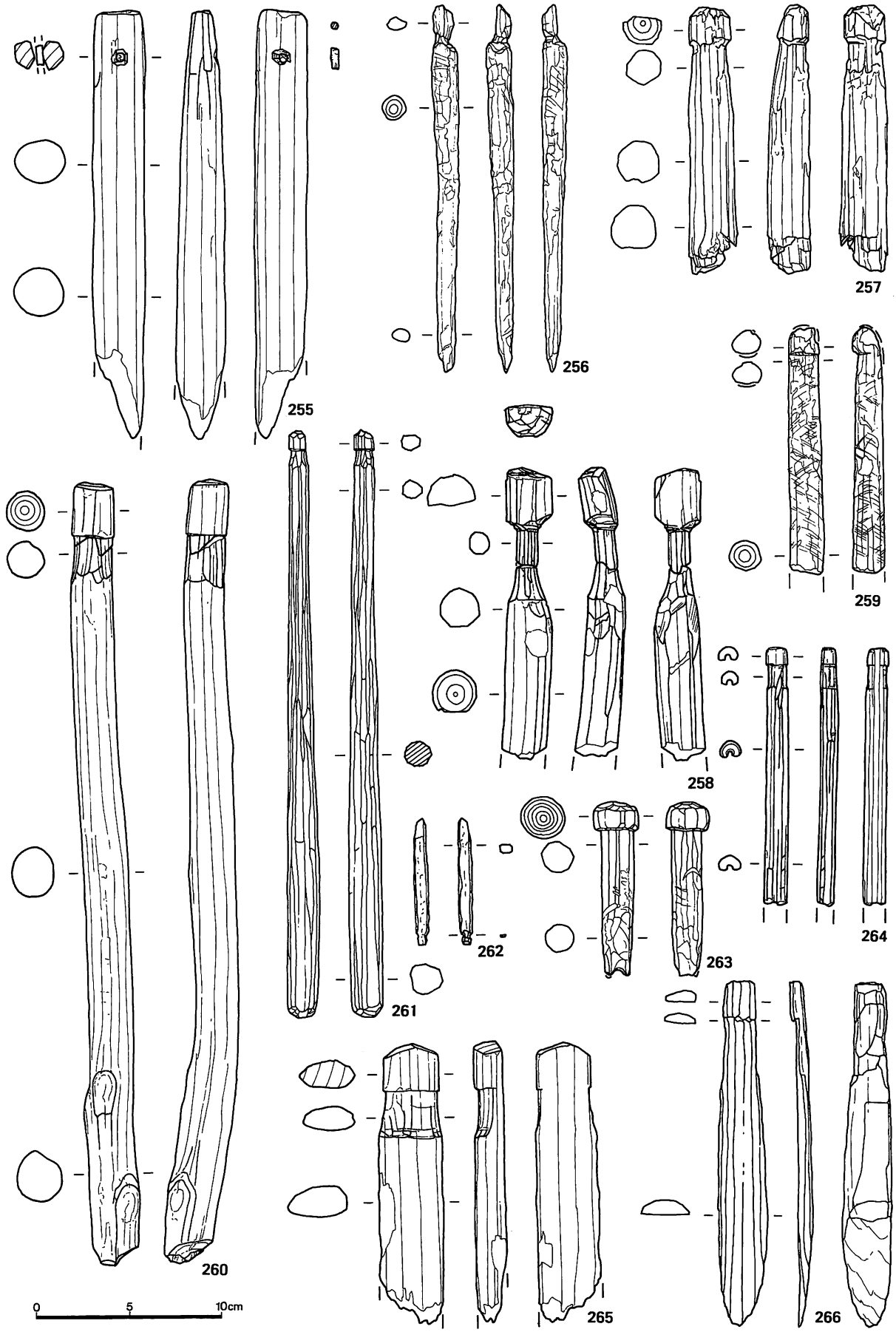
図Ⅴ－65　A′地区木製品 (29)



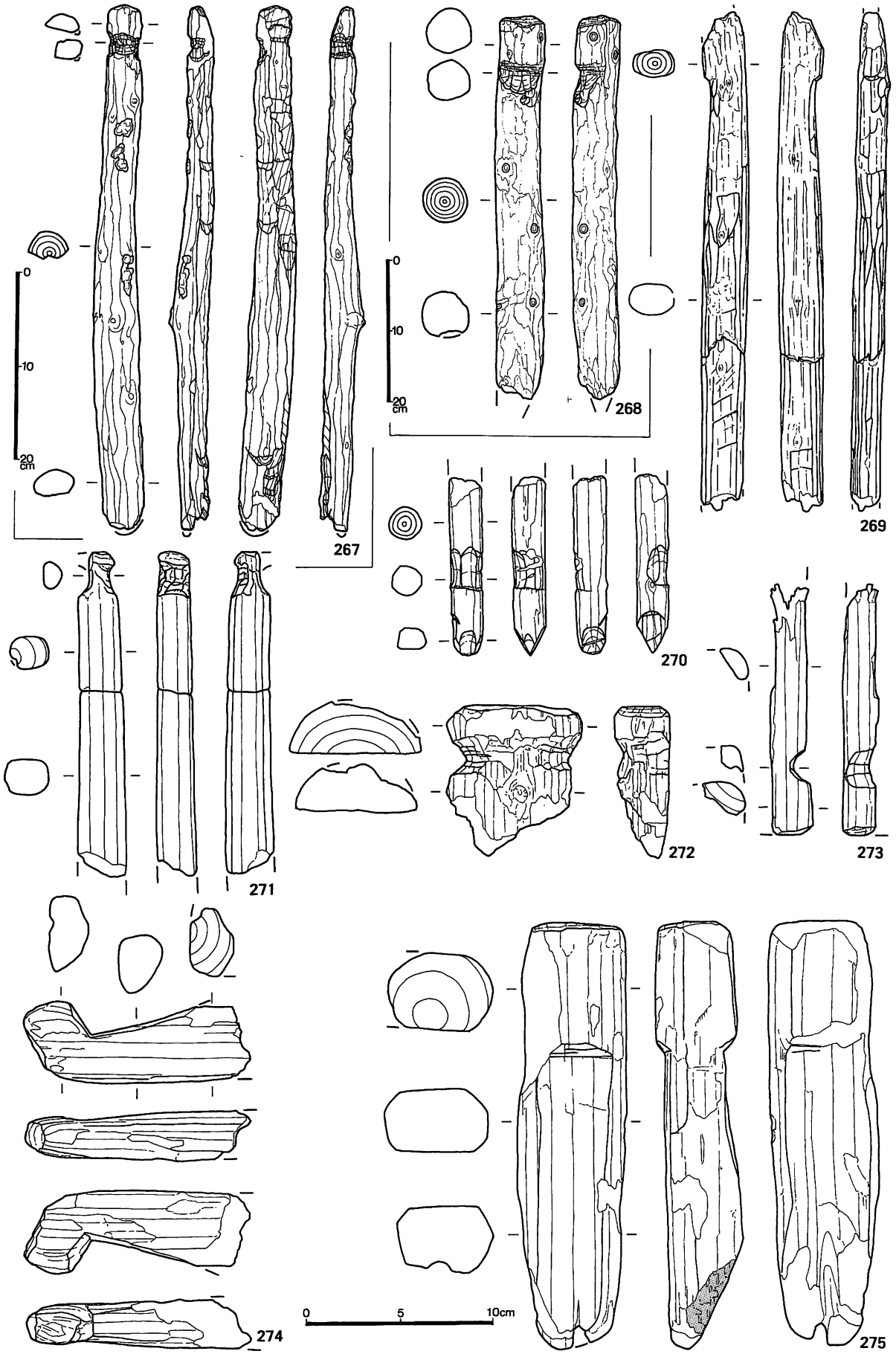
図Ⅴ－66　A′地区木製品 (30)



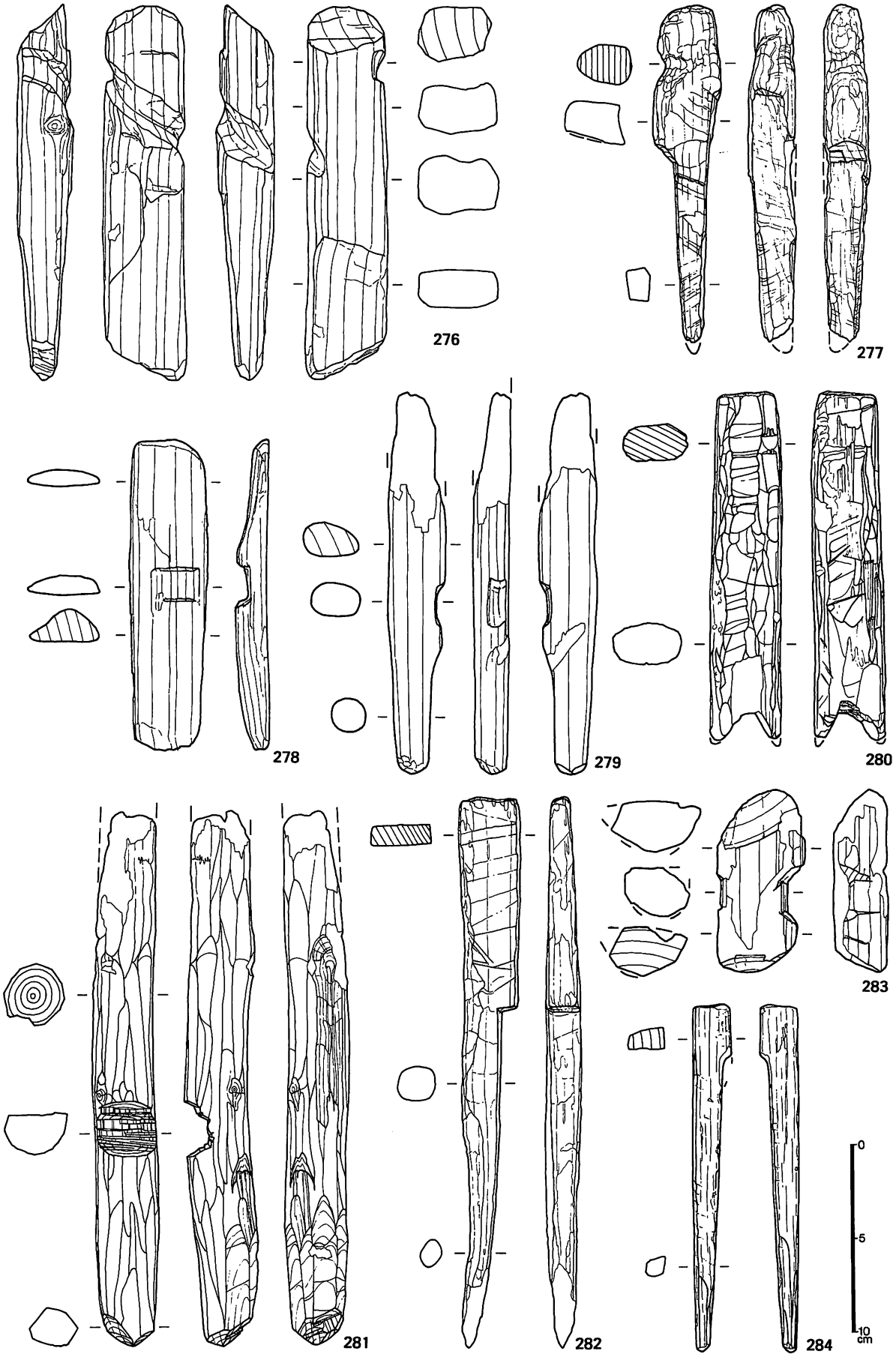
図Ⅴ－67　A′地区木製品 (31)



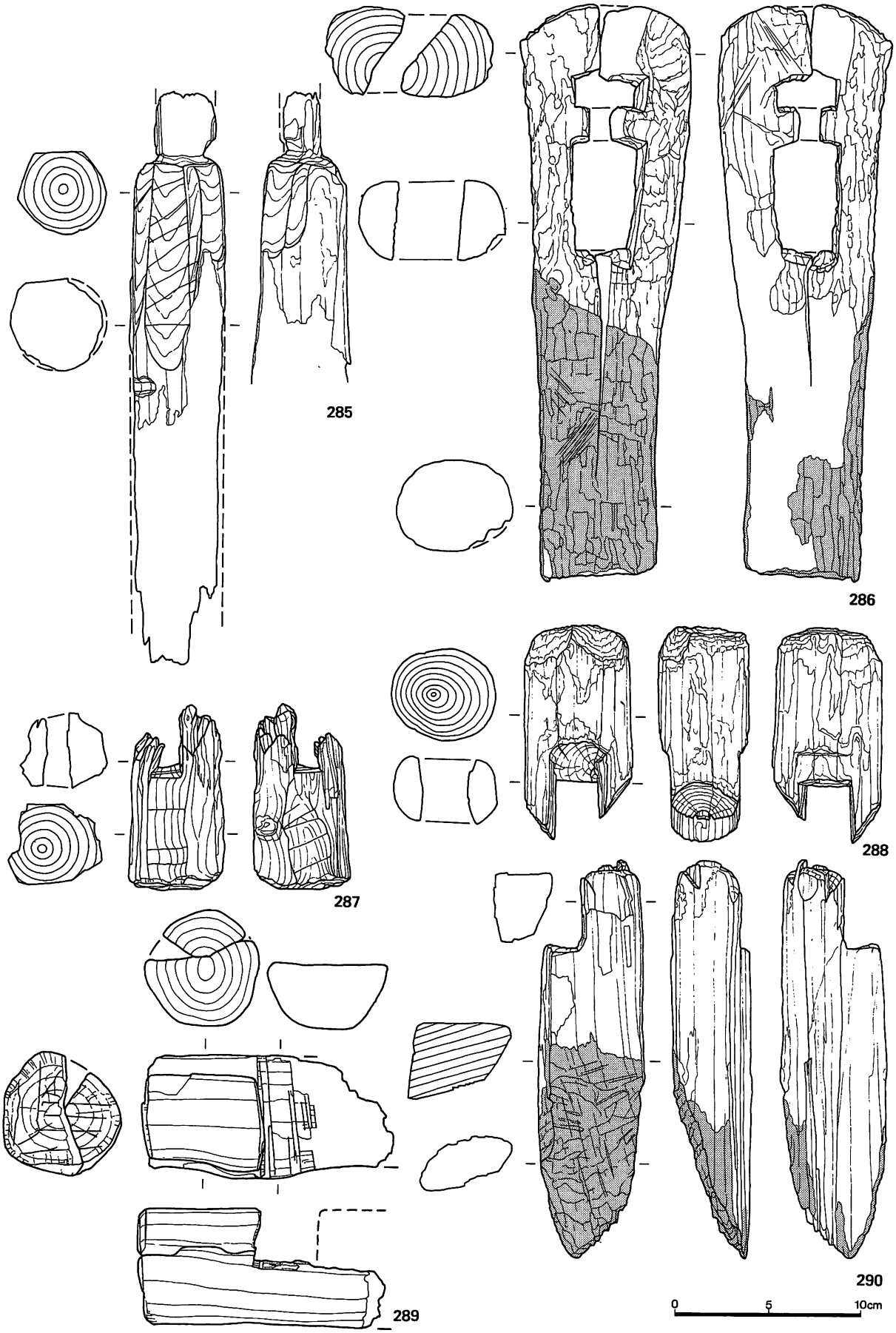
図V－68　A′地区木製品 (32)



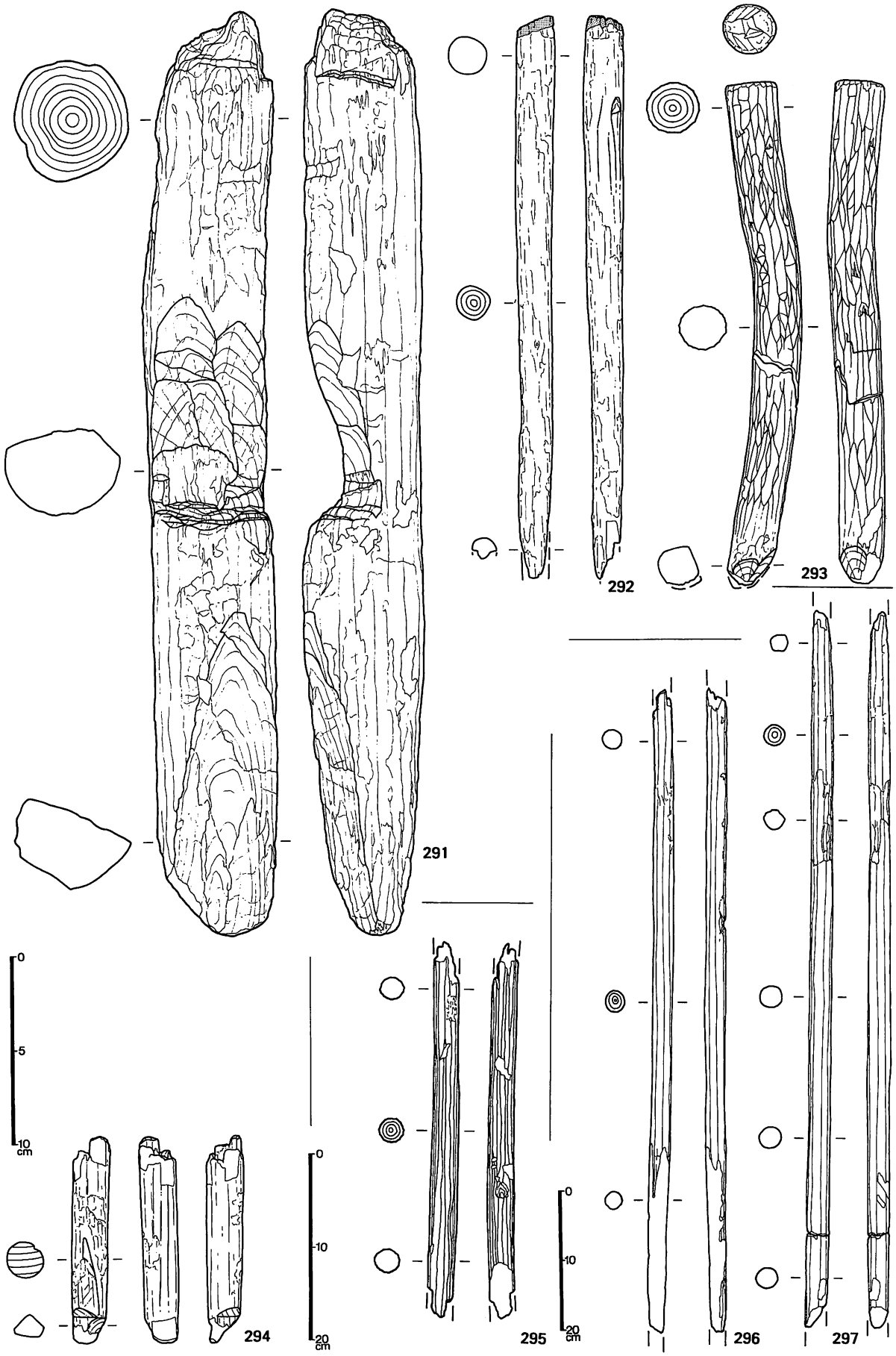
図Ⅴ－69　A′地区木製品 (33)



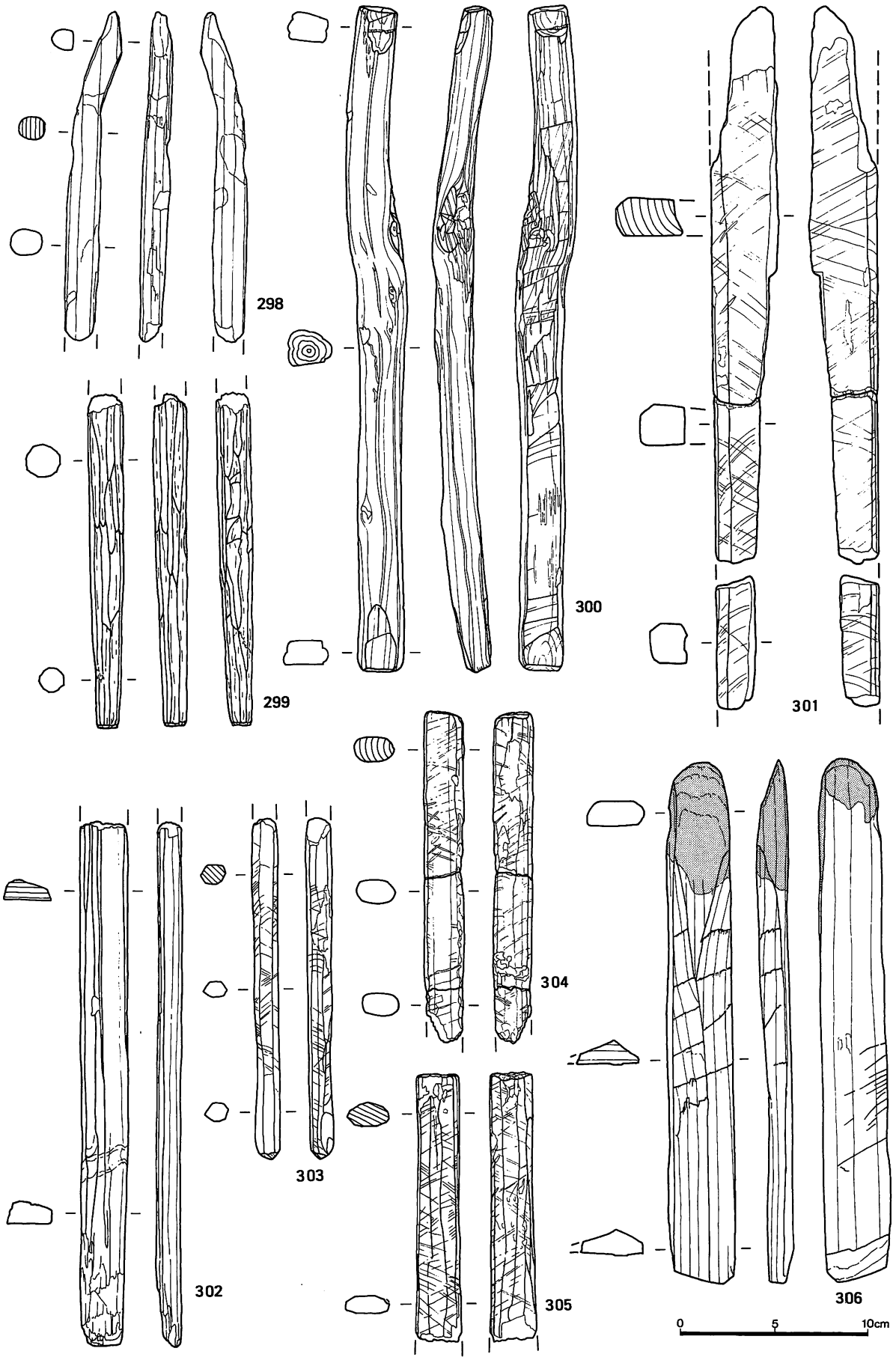
図Ⅴ－70　A′地区木製品 (34)



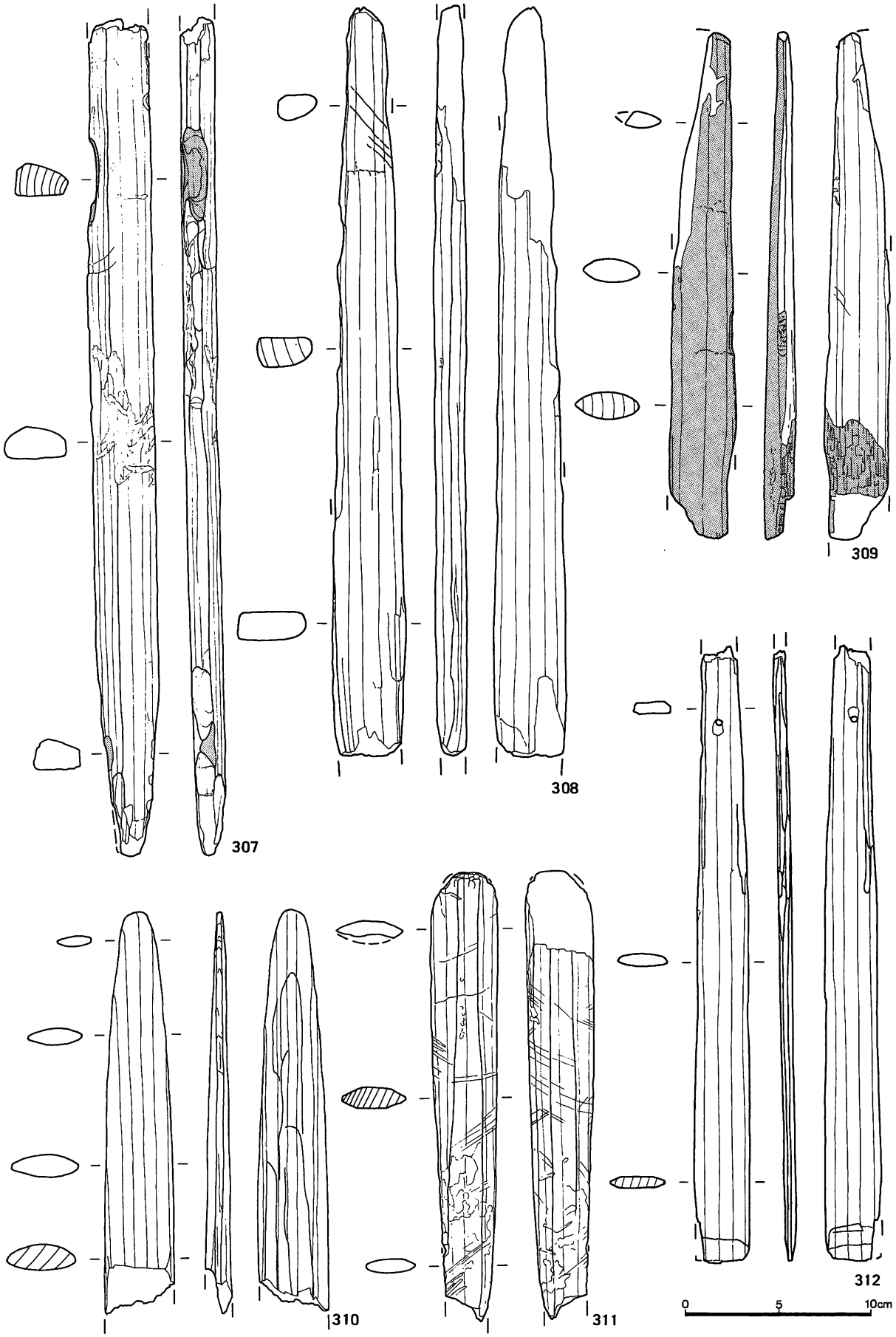
図Ⅴ－71　A′地区木製品 (35)



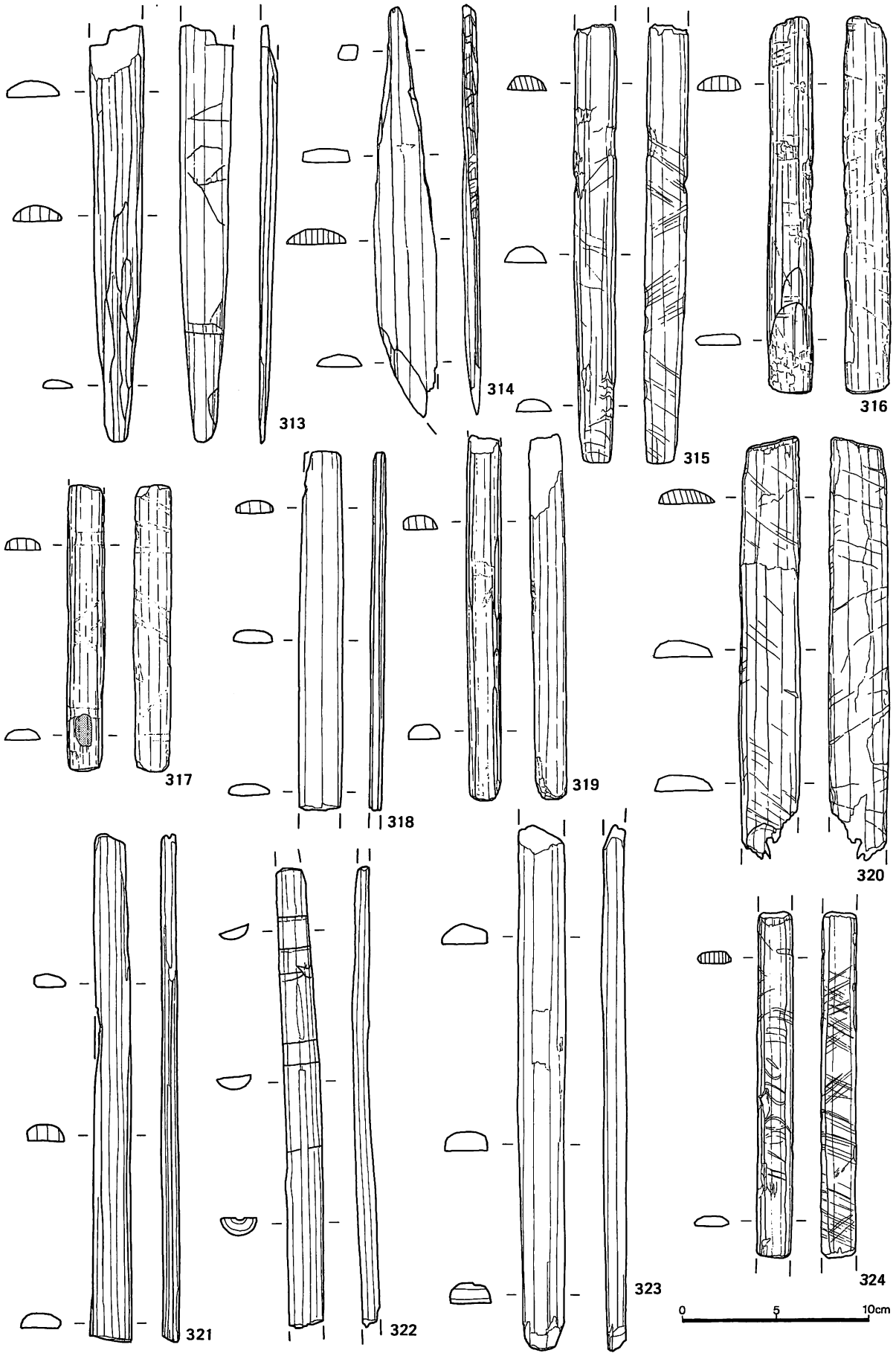
図Ⅴ－72　A′地区木製品 (36)



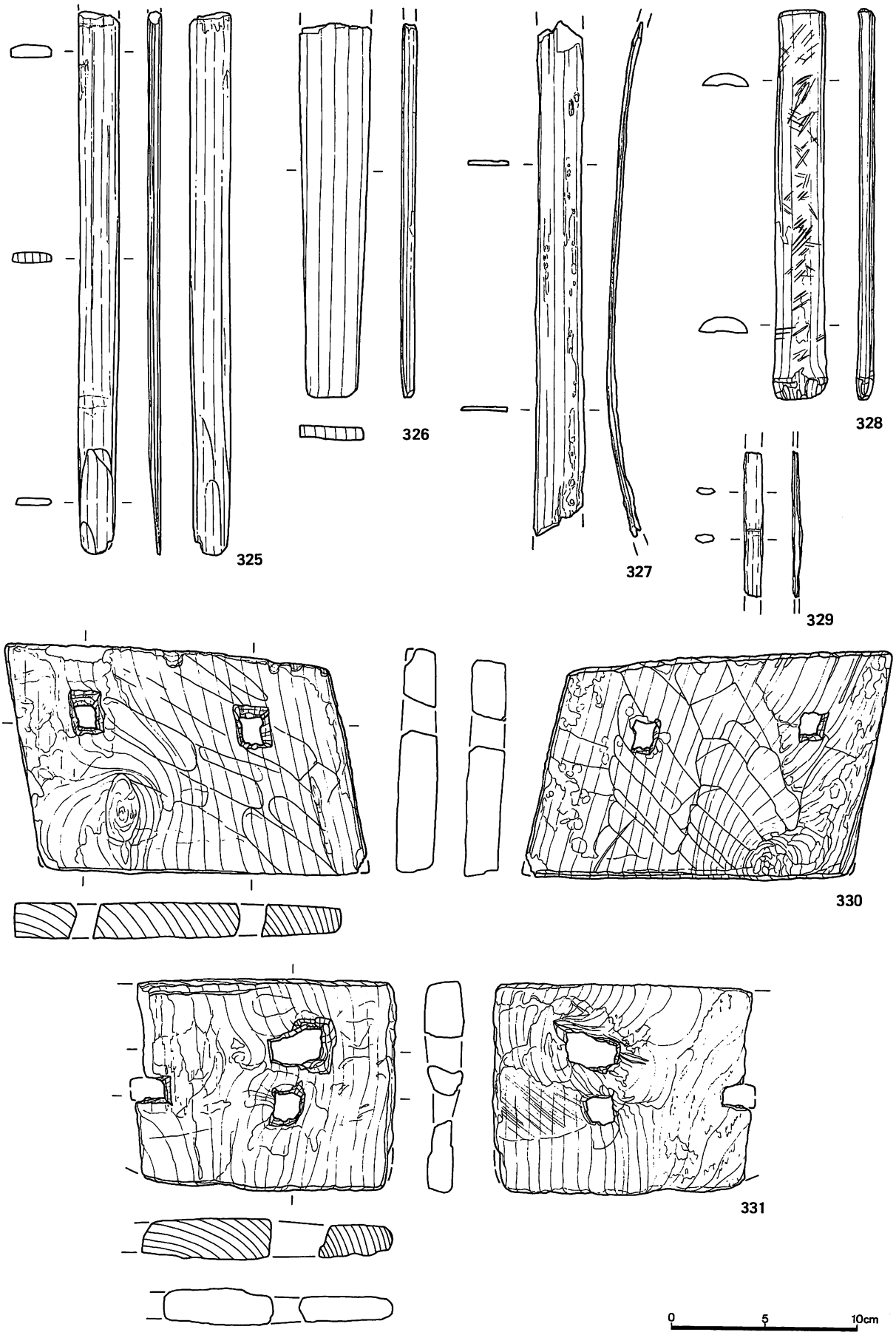
図Ⅴ－73　A′地区木製品 (37)



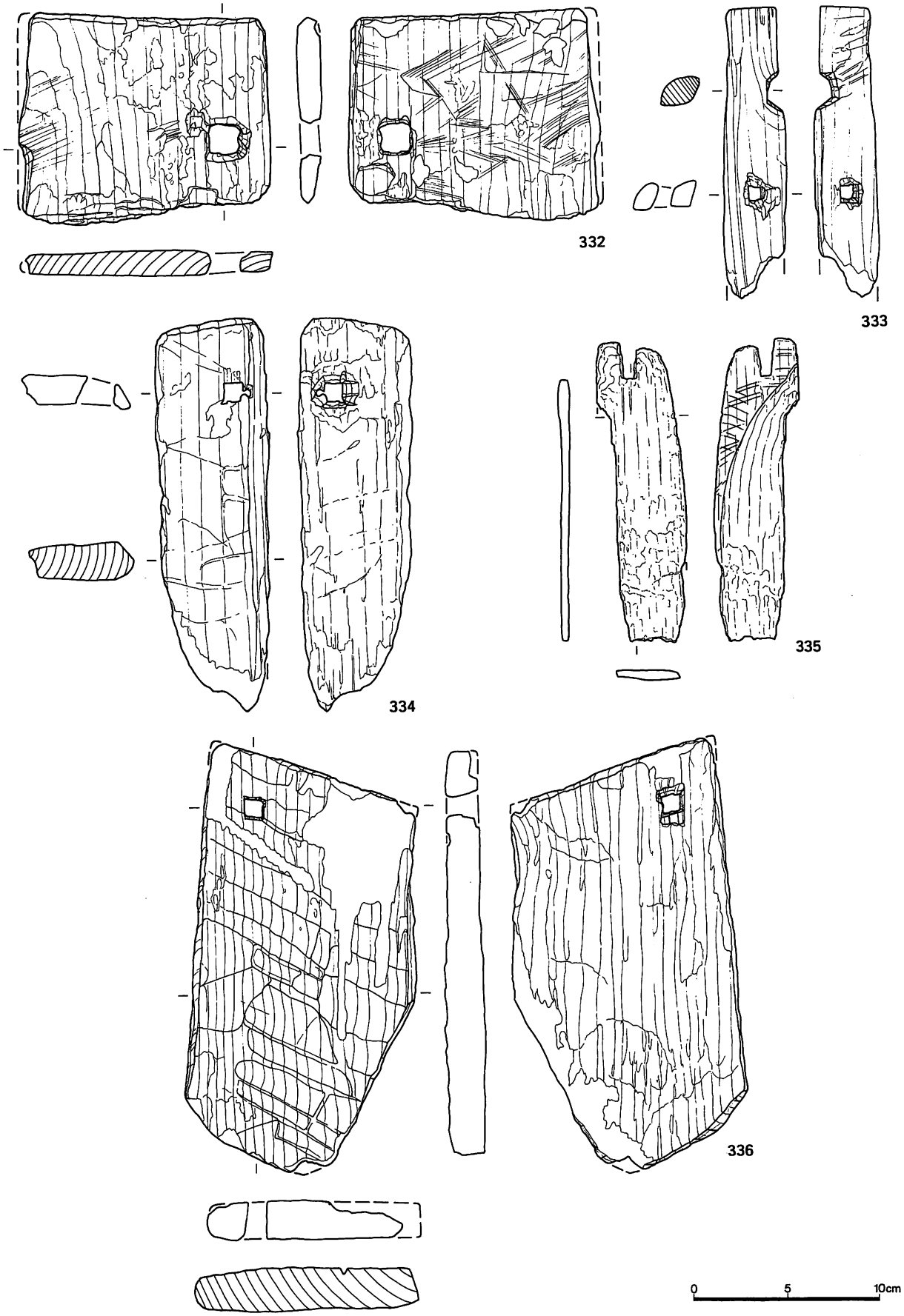
図Ｖ－74　Ａ′地区木製品 (38)



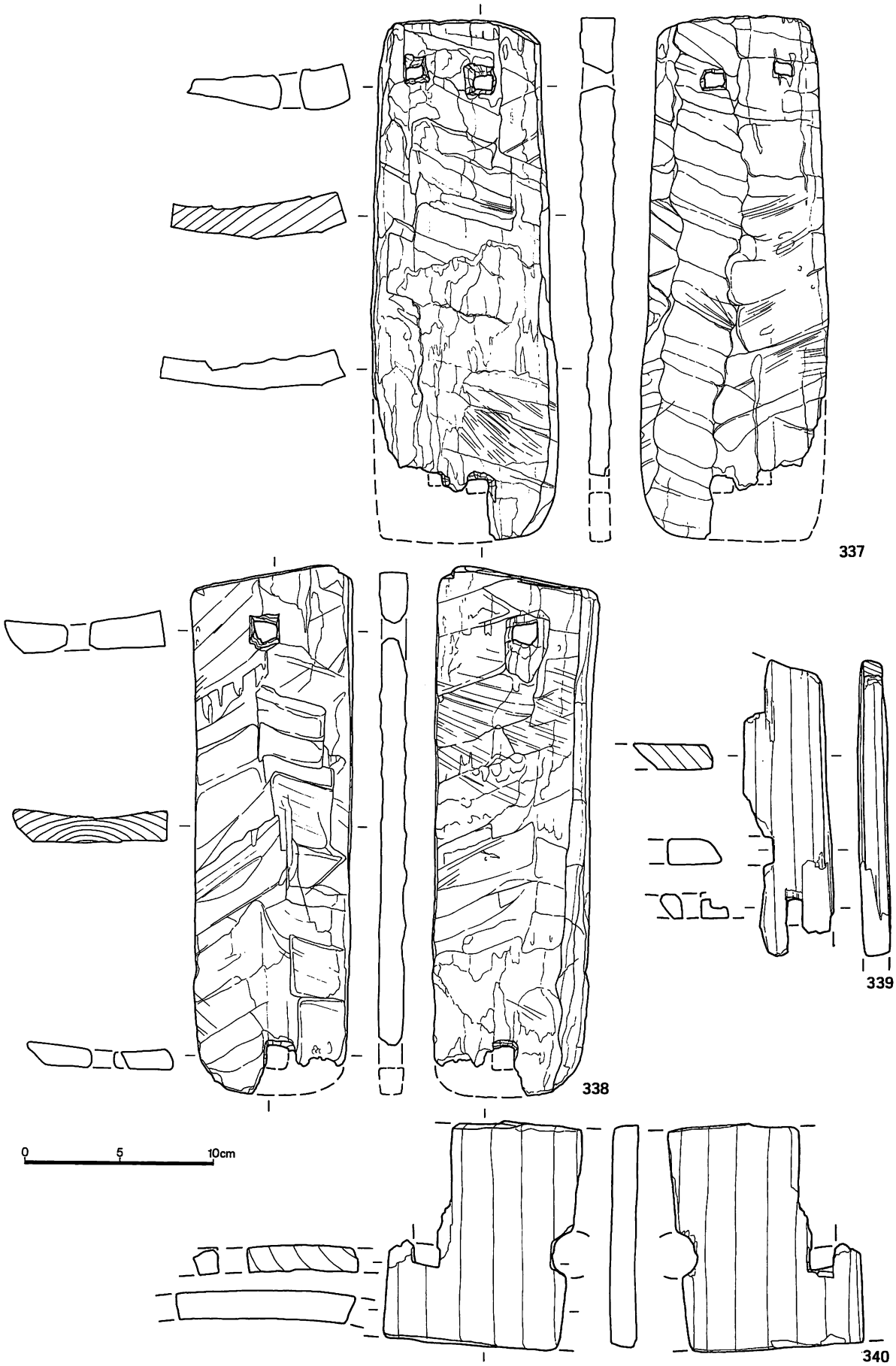
図Ⅴ－75　A′地区木製品 (39)



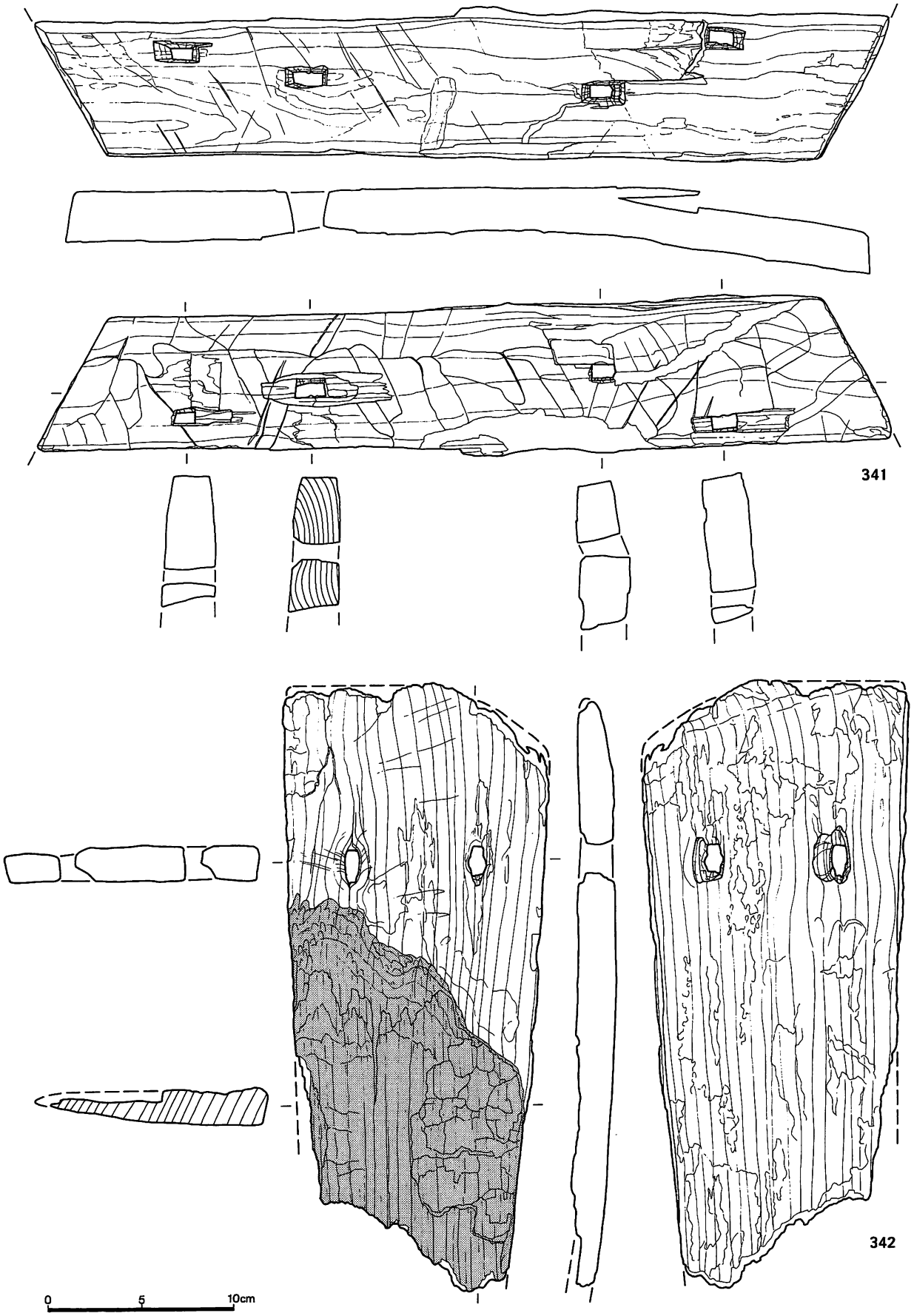
図Ｖ－76　A′地区木製品 (40)



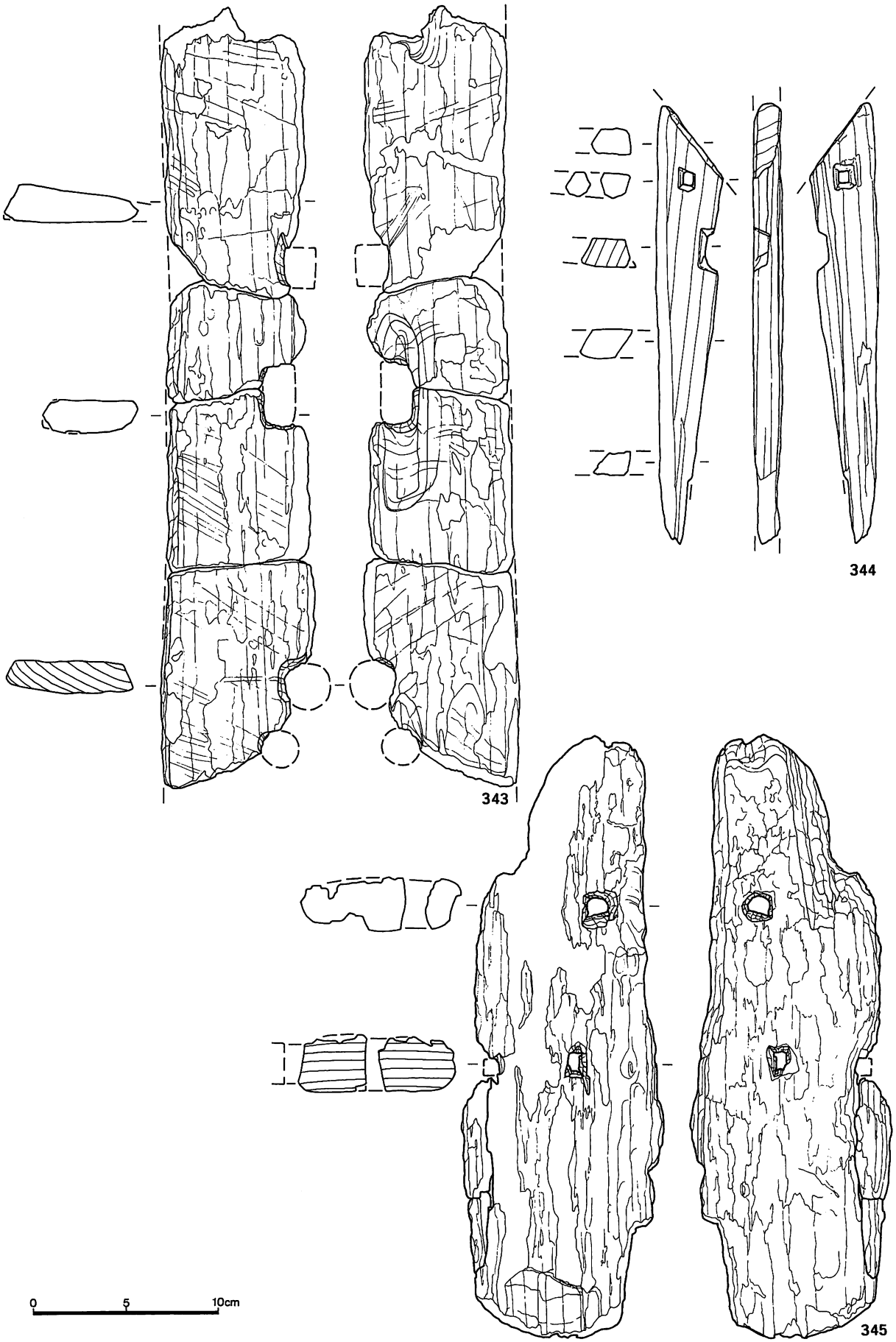
図Ⅴ－77　A′地区木製品 (41)



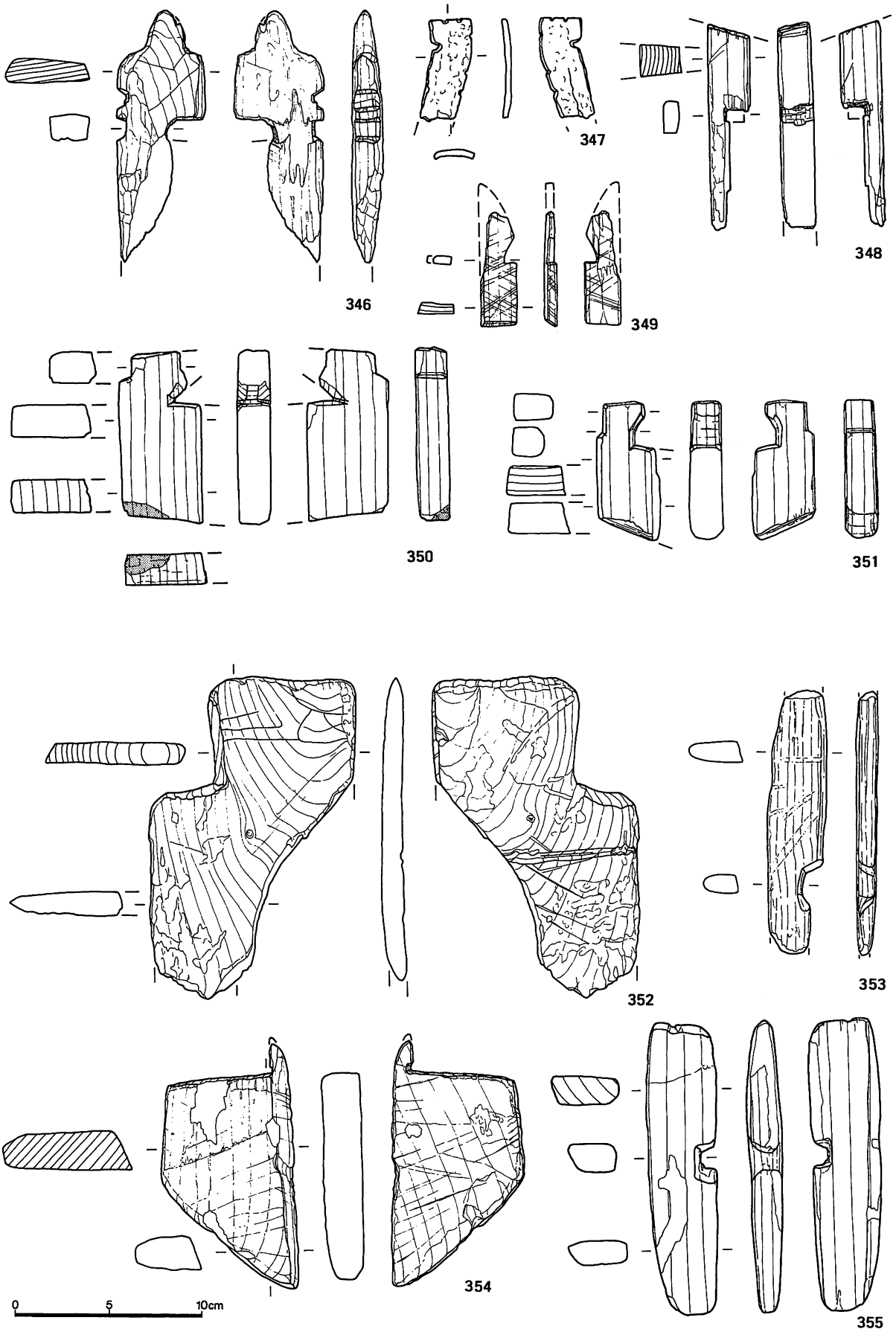
図Ｖ－78　Ａ′地区木製品 (42)



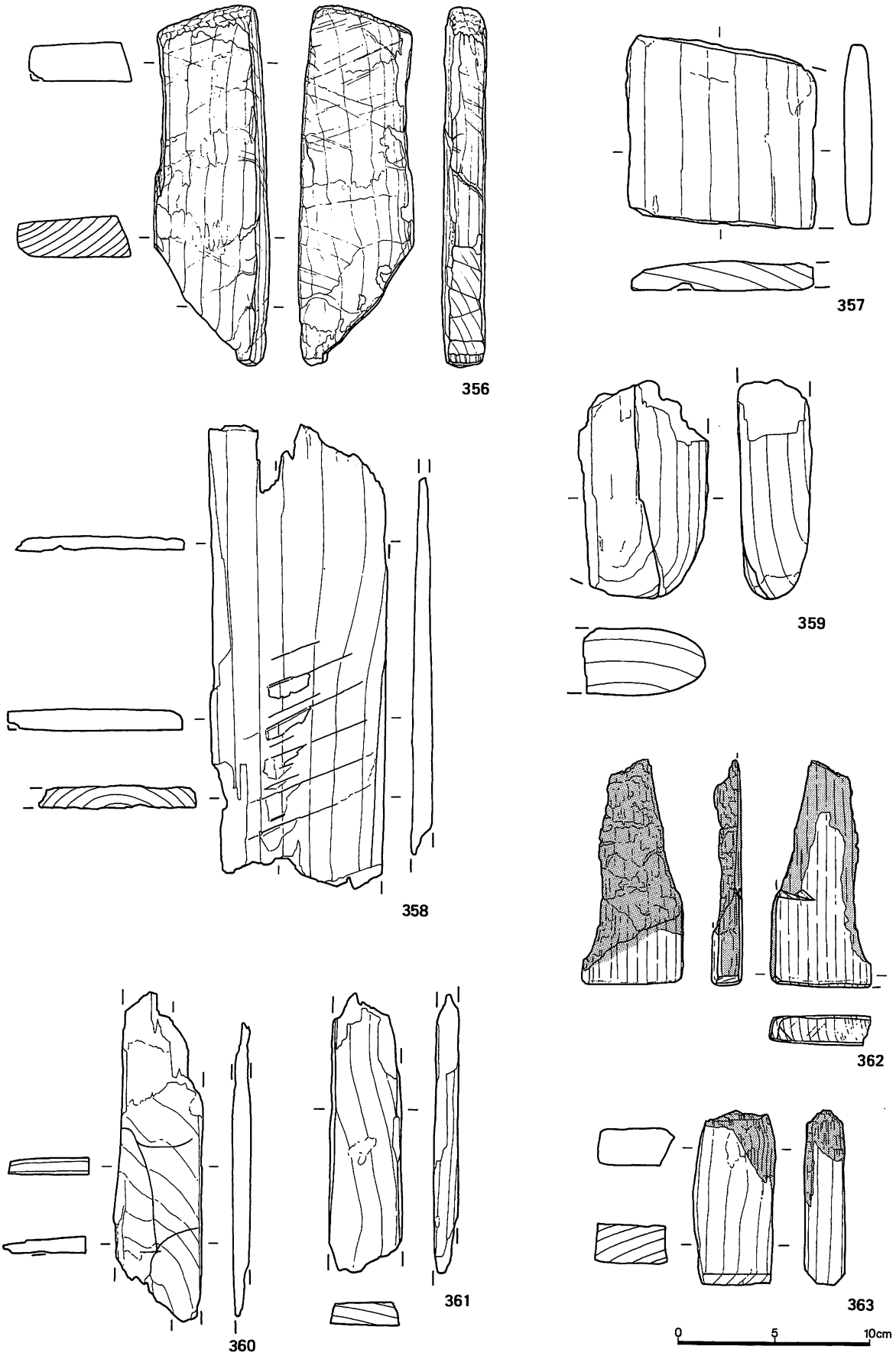
図Ⅴ－79　A′地区木製品 (43)



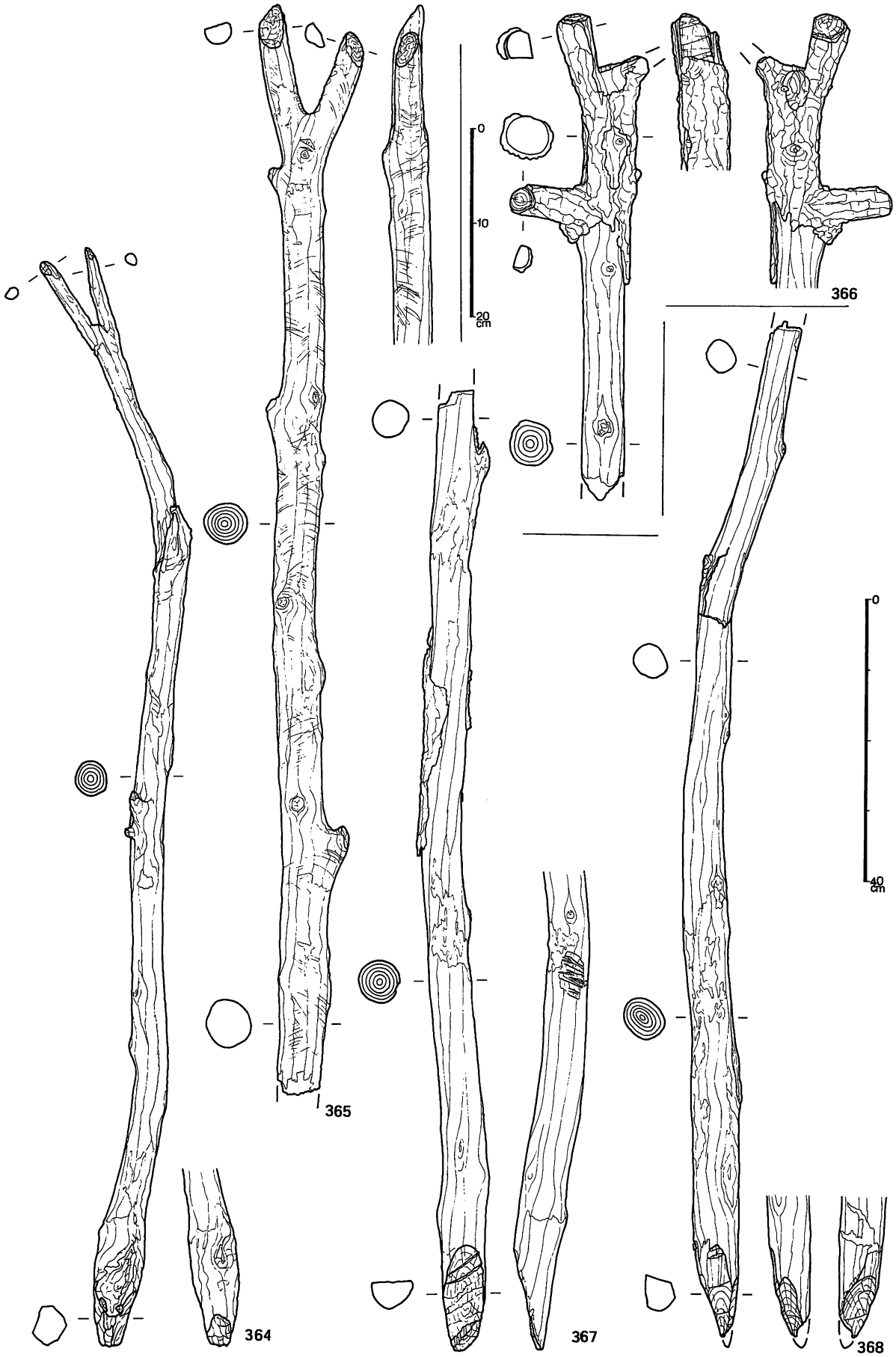
図Ｖ－80　Ａ′地区木製品 (44)



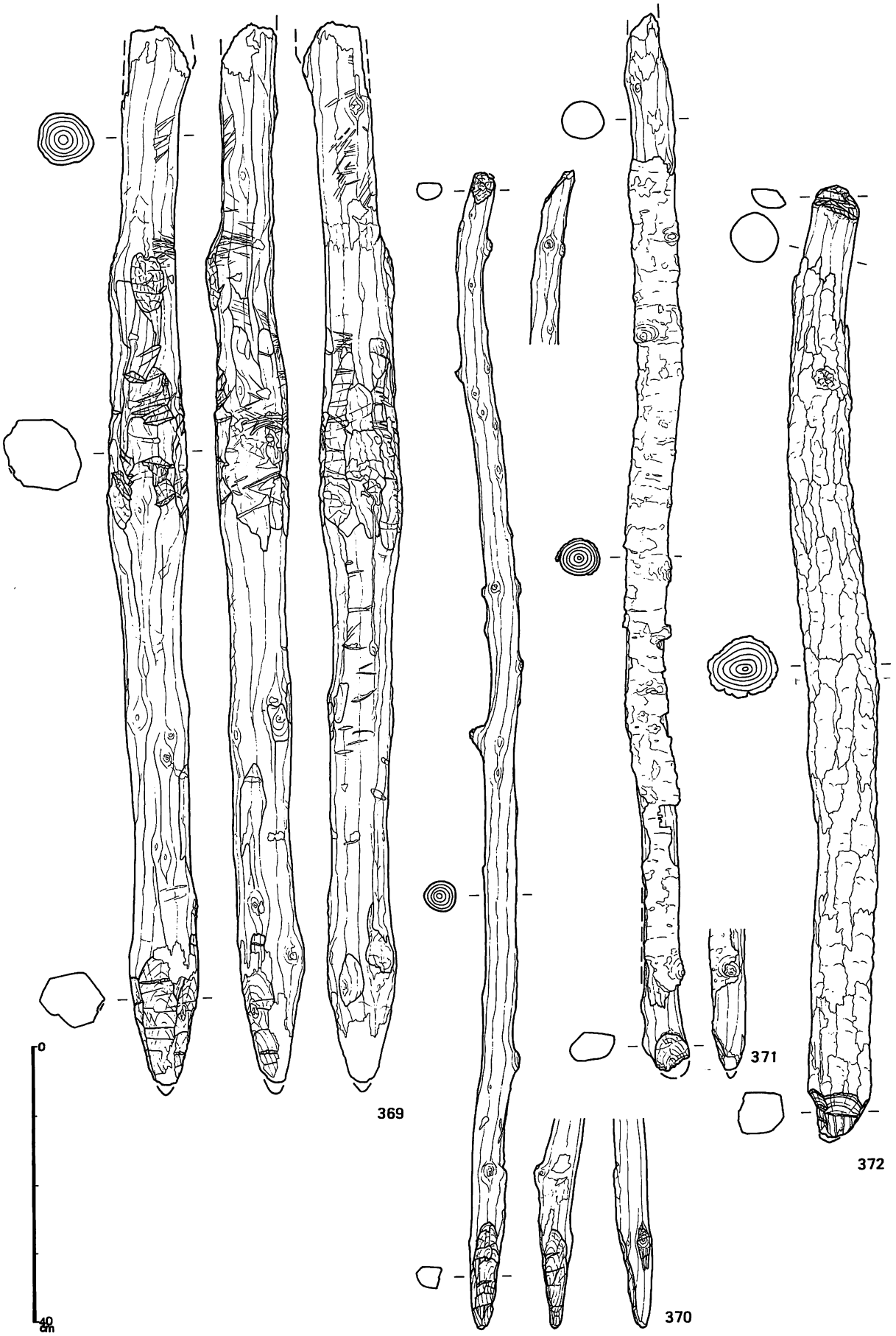
図Ⅴ－81　A′地区木製品 (45)



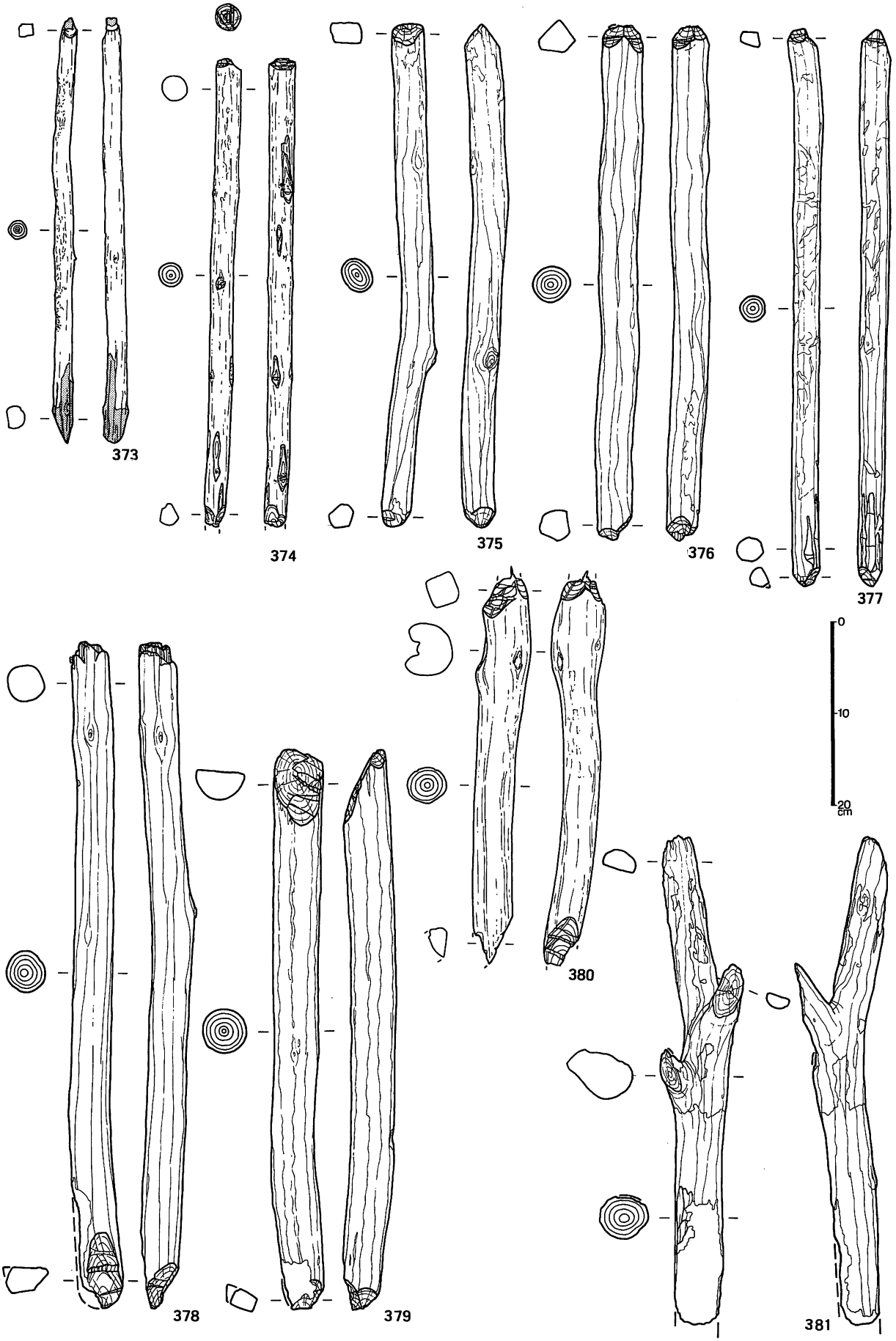
図V－82　A′地区木製品 (46)



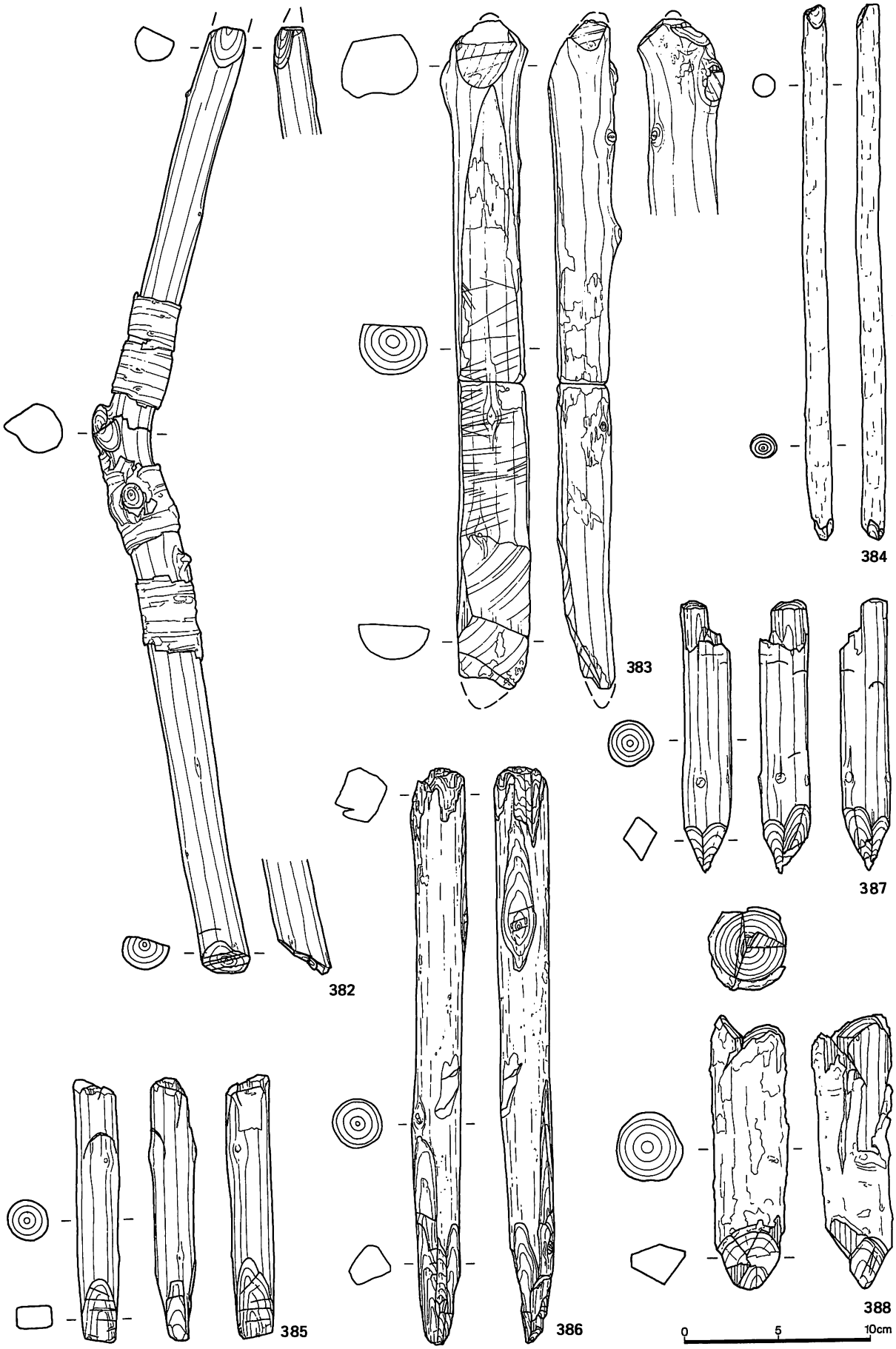
図Ⅴ－83　A′地区木製品 (47)



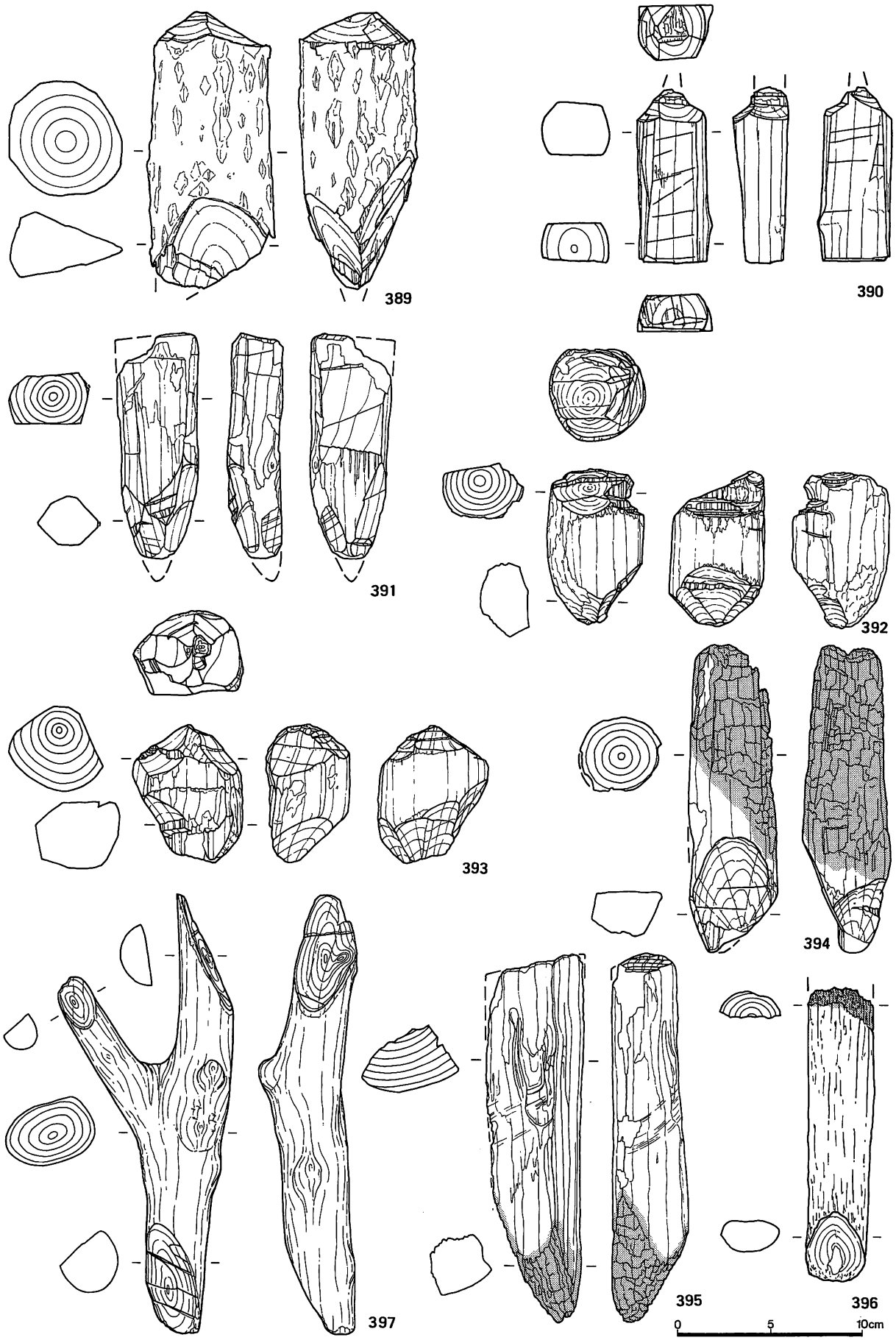
図Ｖ－84　Ａ′地区木製品 (48)



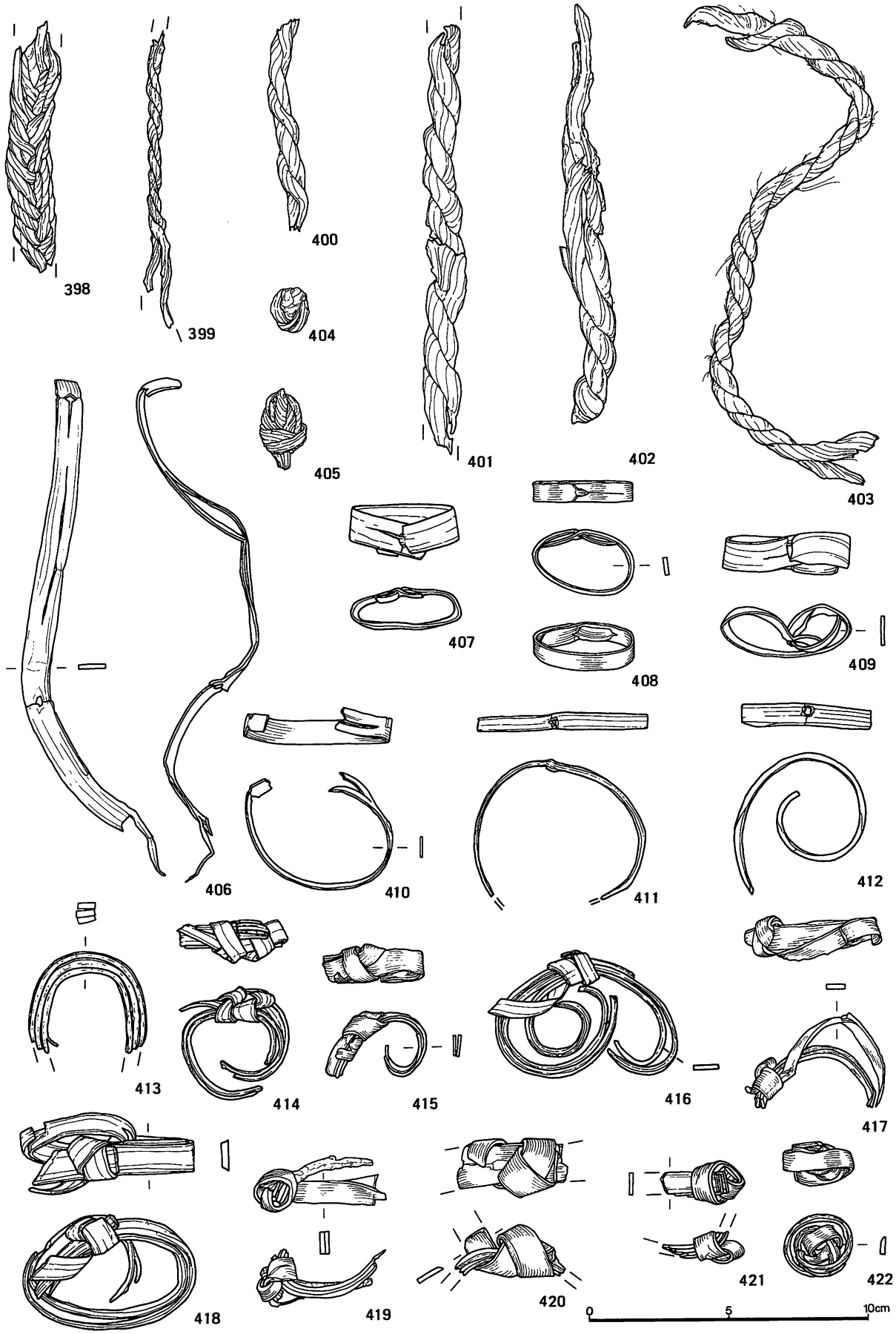
図Ⅴ－85　A′地区木製品 (49)



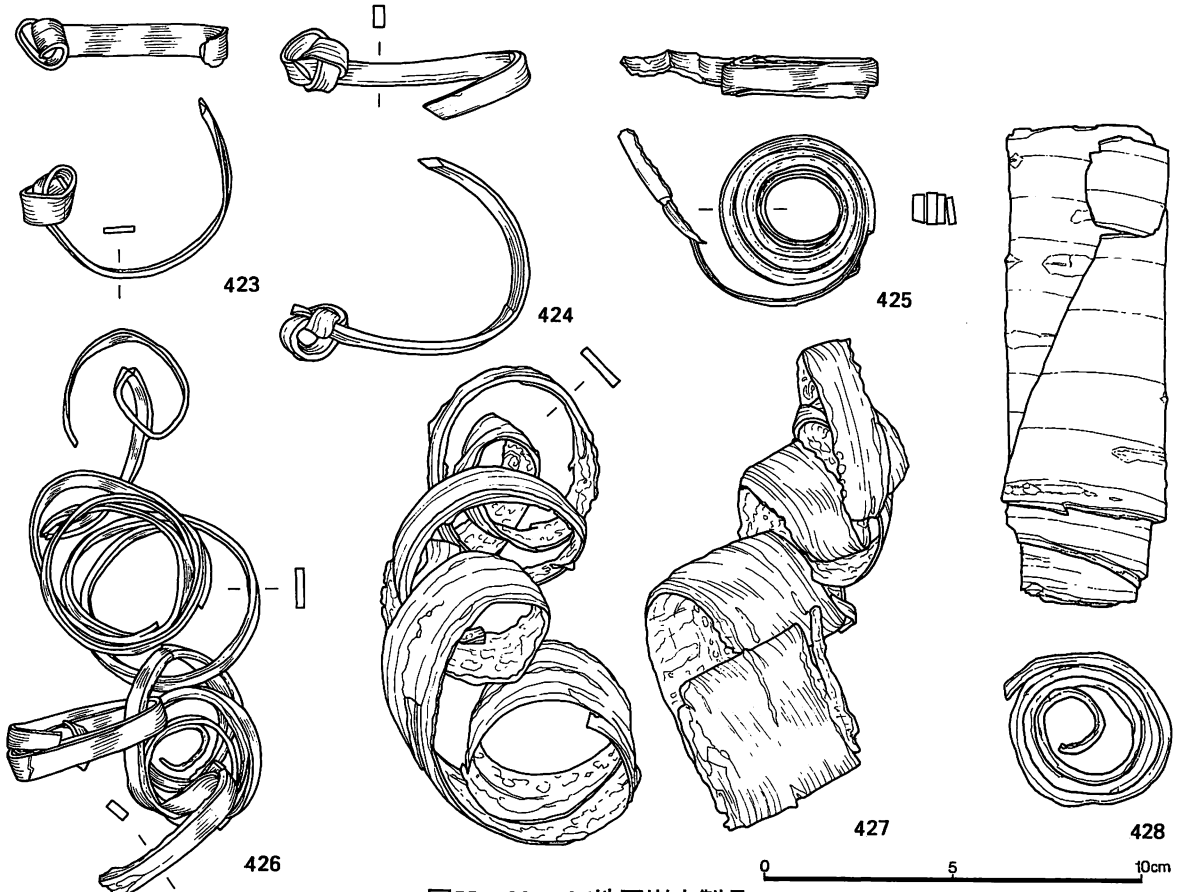
図Ⅴ－86　A′地区木製品 (50)



図Ⅴ－87　A′地区木製品 (51)



図Ⅴ－88　A′地区繊維製品・樹皮製品



図Ⅴ－89　A′地区樹皮製品

縄・紐(398～405)：398はみつあみ状に編み込んだもので、背負紐等の編み方と同様である。399はLR撚りの紐である。400～403はLR撚りの縄である。404・405は縄の結目であり、下駄等の鼻緒の結目であろうか。

樹皮製品（406～428）：406～426は細帯状樹皮で、大きく次の4種に分類できる。**頭部挿入式**（406～410）はコケシ頭状に加工された端部を、菱形孔のあるスリットに挿入して環状とするものである。**釘打込式**（411～413）は樹皮の中央に細い木釘を打ち込んで、樹皮と対象物を固定するものである。413は半損した三段重ねの樹皮であり、欠損部に釘穴があったと考えられる。また、頭部挿入式と併用する場合もあり、406の中央には釘穴がある。**結束式**(414～424)は、対象物に樹皮を巻きつけて結び縛るものである。**挟込式**（425・426）は対象物に樹皮を巻きつけ、最後に巻いた樹皮の下に末端部を挟み込んで締め括るものである。426の末端部は薄く加工されており、其の可能性がある。427・428は太帯状樹皮である。427は螺線状に巻かれ、428は筒状に巻かれている。その他に、先に説明した73のような燈火用あるいは着火・焚付用に使用された炭化樹皮や取上げ困難であったが敷物状の樹皮もある。樹皮製の容器は現在のところ確認できていない。

漆器（429）：カラー図版のため、図Ⅴ－132に掲載した。四隅の角が一手切り（辺にたいして45°の角度で切落すこと）された折敷側板の角部分である。釘の残存する面が底との接合面となり、両側板との接合面は67.5°の角度に切落されている。内外面、口縁部には生漆の上に朱漆が塗重ねられており、各接合面の木質は露出している。　（田口　尚）

表Ⅴ－8　A′地区掲載木製品（1）

Gはグリッド取上げ。　＊は接合資料。　※は中間部をわずかに欠損する。数値は推定値。

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値（cm） 長さ	幅	厚さ	湿重量（g）	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
1	8246	79	櫂	c-67-60-c・d	2	*193.9	14.1	3.4	2004.0			板目	サクラ	3	櫂水掻部に文様とメカジキの線刻画。柄部にイトゥパ。
2	8247	76	櫂柄部	c-67-50-d	G	(97.6)	(7.3)	2.8	664.0			板目	モクレン	2	水掻部の肩部のみが残存している。
3	8248	144	櫂水掻肩片	c-66-49-d	G	(15.6)	(3.8)	2.1	40.0		○	柾目	モクレン	1	炭化した水掻部肩の片側である。
4	8249	189	櫂水掻肩片	c-67-60-a	G	(28.2)	(4.1)	4.0	184.0			柾目	スギ	1	やや厚い水掻部肩の片側である。
5	8250	743	櫂	c-67-50・60	30	173.6	6.5	2.9	1288.0			板目	コナラ	1	肩の張り出さない水掻部の櫂である。
6	8251	77	櫂水掻部	c-66-49-c	G	(70.1)	5.2	3.5	436.0			板目	ヤナギ	1	肩の張り出さない水掻部の櫂である。
7	8252	87	櫂水掻部	c-67-60-c	G	*(54.7)	6.9	2.0	375.0			板目	ハンノキ	2	削り出し時の工具の刃傷痕が顕著である。
8	8253	203	櫂水掻部	c-66-59-c	G	(34.2)	9.6	1.6	326.4			柾目	トネリコ	1	削り出し時の工具の刃傷痕が顕著である。
9	8254	55	車櫂柄部	c-67-50	G	(24.7)	(4.7)	3.2	126.0			板目	モクレン	1	軸差込部が幅広で、軸差込孔が2か所に認められる。
10	8255	143	車櫂軸差込部	c-66-48-d	G	(25.8)	6.8	3.9	431.0			板目	カツラ	2	軸差込部が幅広で、軸差込孔が2か所に認められる。
11	8256	75	車櫂軸差込部	c-67-60-a	192	(69.9)	(8.0)	3.8	1064.0			柾目	モクレン	1	軸差込孔から水掻部にかけて欠損している。
12	8257	78	車櫂軸差込部	c-66-59-b	G	(30.0)	(5.3)	3.1	336.0			柾目	モクレン	1	柄部および軸差込孔から水掻部にかけて欠損。
13	8258	18	車櫂軸差込部	c-67-50-d	G	(11.9)	4.7	2.3	83.0			柾目	ハンノキ	1	柄部および軸差込孔から水掻部にかけて欠損
14	8259	49	櫂柄握部	c-66-59-c	G	16.3	3.1	2.9	110.0			板目	スギ?ヒノキ?	1	「T」字形。表裏から二本の目釘が打ち込まれている。
15	8260	123	櫂柄握部	c-66-48-b	G	(14.1)	7.6	3.1	111.0			板目	ハリギリ	1	「Y」字形。片側から目釘が1本。イトゥパが刻まれる。
16	8261	248	櫂柄握部	c-67-60-a	G	(7.3)	2.4	2.8	24.7			丸木	カエデ	1	「Y」字形。柄挿入部から反損している。
17	8262	51	舟あか汲み	c-66-59-b	176	*(17.8)	(12.0)	8.8	324.0			横木	ヤナギ	3	一木づくりで容器部から握部まで削り出している。
18	8263	109	舟あか汲み	c-66-49-a	G	20.7	(14.9)	6.5	431.0		○	横木	ハンノキ	1	一木づくりで容器部を削り出している。握部は欠損。
19	8264	320	矢中柄部	c-67-60-d	G	(11.9)	1.0	1.2	8.9			1/4割	アジサイ	1	平坦面を削りだし「X」字形のイトゥパが刻まれる。
20	8265	11	矢中柄部	c-66-59-b	115	12.3	1.0	1.0	8.0			丸木	アジサイ	1	基部側が太く、尖端部に向かって徐々に細くなる。
21	8266	312	矢中柄部	c-66-58-b	G	11.7	1.0	0.8	6.0			丸木	アジサイ	1	基部側が太く、尖端部に向かって徐々に細くなる。
22	8267	392	矢中柄部	c-66-49-c	G	11.1	0.8	0.6	3.0			1/4割	アジサイ	1	粗い削り痕が顕著で、断面が角形である。
23	8268	351	矢筈部	c-67-50-a	G	(12.3)	0.8	0.8	6.0			丸木	モミ	1	矢柄の尾部が「U」字状に抉られている。
24	8269	739	弓状抉入付製品	c-67-60-a	76	* 90.2	2.5	2.5	352.0			丸木	モクレン	2	両端・中央部に抉りがある。面は少しずつずれている。
25	8270	194	抉入付Y字状製品	c-67-60-d	G	* 47.7	2.6	2.5	216.6			股木	リンゴ?	2	「Y」字状の各端部に抉りと平坦面が作出されている。
26	8271	219	抉入付半割股木製品	c-66-59-c	G	(17.4)	2.7	2.3	37.0			股木	ガマズミ?	1	枝分かれした材を半截し、下端部に抉り部を作出。
27	8272	84	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-b	G	44.9	2.2	1.6	91.0			半割	アジサイ	1	1本式の中柄部である。尖端部が摩耗している。
28	8273	83	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-b	G	(46.0)	2.6	2.1	127.0			丸木	アジサイ	1	1本式の中柄部である。尖端部が折損している。

表Ⅴ－9　A′地区掲載木製品 (2)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
29	8274	307	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-a	G	27.2	1.6	1.7	51.2			丸木	ｱｼｻｲ	1	基部が切截された、１本式の中柄部である。
30	8275	41	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-d	85	23.5	2.4	1.3	32.0			板目	ｲﾇｴﾝｼﾞｭ?	1	二本組合せ式の中柄部である。基部に刻目列がある。
31	8276	215	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-a	G	(23.5)	2.8	1.7	48.0			板目	ｱｼｻｲ	1	二本組合せ式の中柄部である。基部に刻目列がある。
32	8277	605	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-a	G	22.3	1.3	1.1	16.0			板目	ｱｼｻｲ	1	全体に摩耗しているが紐の圧痕が認められる。
33	8278	663	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-a	G	21.1	1.4	1.0	13.5			板目	ｱｼｻｲ	1	粗く削りだされたもので、全体に摩耗している。
34	8279	595	回転式離頭銛中柄部	c-67-50-a	G	(15.1)	2.0	1.2	17.4			半割	ｱｼｻｲ	1	尖端部を欠損している。基部に抉りがある。
35	8280	240	回転式離頭銛中柄部	c-67-60-a	G	7.2	1.0	0.6	2.0			柾目	ｽｷﾞ?	1	二本組合せ式の中柄部の片側である。イトゥパがある。
36	8281	92	回転式離頭銛指掛部	c-66-49-b	G	9.1	3.0	2.4	20.0			丸木	ｱｼｻｲ	1	柄（棹）の最後部に装着される、指をひっかける部分。
37	8282	747	回転式離頭銛柄部	c-66-59-b	116	169.7	3.1	3.1	1050.0			丸木	ｺﾅﾗ	1	全体に摩耗しているがコケシ頭状の加工がある。
38	8283	70	魚突き鉤台部	c-66-59-b	G	35.0	2.5	2.3	125.0			板目	ｶｴﾃﾞ	1	石突部が細く加工され、楔が打ち込まれている。
39	8284	358	柄・棹との接合部	c-66-49-c	G	(22.8)	2.1	1.3	31.5			半割	ｱｼｻｲ	1	柄（棹）に接合するための平坦面と抉りがある。
40	8285	59	柄・棹との接合部	c-66-59-b	G	(21.9)	20.0	1.4	36.0			半割	ｱｼｻｲ	1	柄（棹）に接合するための平坦面と抉りがある。
41	8286	60	柄・棹との接合部	c-66-59-c	G	(23.7)	2.0	1.8	46.0			柾目	ｶｴﾃﾞ	1	柄（棹）に接合するための平坦面と抉りがある。
42	8287	554	柄・棹との接合部	c-66-59-b	G	(22.4)	2.2	1.2	40.0			半割	ｸﾜ?	1	柄（棹）に接合するための平坦面と抉りがある。
43	8288	636	柄・棹との接合部	c-67-50-b	G	(11.5)	2.0	1.2	15.8			半割	ｱｼｻｲ	1	柄（棹）に接合するため抉り部から欠損している。
44	8289	608	柄・棹との接合部	c-67-50-a	G	(22.9)	1.6	1.6	36.2			丸木	ｷﾊﾀﾞ	1	柄（棹）に接合するため平坦面がある。
45	8290	553	柄・棹との接合部	c-66-59-b	G	15.3	1.9	1.6	23.0			1/4割	ｶｴﾃﾞ	1	柄（棹）に接合するための平坦面と抉りがある。
46	8291	100	柄・棹との接合部	c-66-48-c	G	29.5	2.7	1.2	63.0			柾目	ｶﾔ	1	柄（棹）に接合するため平坦面がある。
47	8292	270	柄・棹との接合部	c-66-49-c	G	(13.5)	1.8	1.6	19.4			半割		1	柄（棹）に接合するため抉り部から欠損している。
48	8293	602	柄・棹との接合部	c-67-60-d	G	15.9	2.4	1.5	25.5			半割	ｶｴﾃﾞ	1	柄（棹）に接合するため抉り部から切截されている
49	8294	72	鉤形木鍬	c-66-59-c	44	61.7	21.0	3.5	499.0	○		股木	ｲﾇｴﾝｼﾞｭ	1	股木の枝側に先端部を作出し、幹側を柄にしている。
50	8295	71	鉤形木鍬	c-66-59-c	G	31.7	18.6	3.7	298.0			股木	ｺﾅﾗ	1	丹念に表面加工している。握部をやや細く加工。
51	8296	56	鉤形木鍬	c-67-50-a	G	(16.6)	(15.1)	3.2	182.0			股木	ﾄﾈﾘｺ	1	柄部を欠損している。
52	8297	611	小刀柄	c-67-50-b	G	(7.4)	2.5	1.3	11.1			柾目	ﾊｺﾔﾅｷﾞ?	1	柄頭側の破片である。
53	8298	9	小刀柄	c-66-59-c	G	(4.6)	3.1	1.4	11.0			柾目	ｶｴﾃﾞ	1	柄頭側の破片である。
54	8299	192	小刀鞘	c-66-59-b	G	10.0	(3.9)	0.8	18.0			柾目	ﾓｸﾚﾝ	1	表面に巴文様が刻まれている。
55	8300	40	小刀樹皮製鞘	c-67-60-d	180	15.5	5.6	4.1	31.0			樹皮	ｼﾗｶﾊﾞ	1	樹皮を折重ね、紐綴じしたものである。
56	8301	21	鞘部材	c-67-60-a	117	29.9	6.4	1.0	155.0			柾目	ｽｷﾞ?	1	細長い六角形の板材。帯状樹皮結束用の溝がある。

表Ｖ－10　A′地区掲載木製品 (3)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
57	8302	16	鞘帯執部	c-66-69-b	G	14.5	3.3	2.1	35.0			柾目	ｺﾅﾗ	1	装着面の両端部にイトゥパ状の刻みがある。
58	8303	50	縦槌	c-66-59-a	47	(14.1)	(15.0)	5.8	254.0			丸木	ﾊﾝﾉｷ	1	柄差込式。頭部の断面は角形である。柄はスギ？。
59	8304	147	縦槌	c-67-50-b	G	6.6	16.8	6.5	418.0			1/4割	ﾄﾈﾘｺ	1	柄差込式。頭部の断面は円形である。
60	8305	102	縦槌	c-67-50-d	G	(16.5)	(13.0)	4.8	292.0			股木	ｶｴﾃﾞ	1	股木利用式。幹側を頭部、枝を柄部としている。
61	8306	208	縦槌	c-66-59-a・b	G	(13.8)	13.3	5.0	238.0			股木	ｺﾅﾗ	1	股木利用式。幹側を頭部、枝を柄部としている。
62	8307	68	横槌	c-66-59-b	G	34.1	7.0	6.8	755.0			丸木	ﾄﾈﾘｺ	1	砧状に面取り加工している。
63	8308	135	台木（作業台）	c-67-50-b	G	28.4	9.1	7.1	881.0			丸木	ﾄﾈﾘｺ	1	砧状に加工されており、平坦面に刃傷痕が多数残存。
64	8309	195	台木（作業台）	c-67-60-d	G	(26.6)	10.5	4.9	1010.0			板目	ﾄﾈﾘｺ	1	中央部に斜め方向の深い刃傷痕が多数残存。
65	8310	2・238	木製発火具	c-66-59-b	G	*(7.8)	1.5	1.4	7.9			柾目	ｲﾇｴﾝｼﾞｭ	2	角棒状である。ヒキリウスは4か所にある。
66	8311	126	木製発火具	c-67-60-c	G	(1.6)	1.1	1.2	1.0			柾目	ｲﾇｴﾝｼﾞｭ	1	角棒状である。両端2か所のヒキリウスを半損。
67	8312	46	炉鉤	c-67-60-d	G	*17.7	3.2	1.6	50.0			板目	ﾊﾝﾉｷ	2	上部にコケシ頭状の結束部がある。
68	8313	53	炉鉤	c-66-59-c	G	(25.8)	5.5	3.1	146.0		○	股木	ｶｴﾃﾞ	1	上端部を欠損し、下端部の表面が炭化している。
69	8314	579	炉鉤	c-66-59-c	G	(14.8)	3.1	1.7	23.2			股木	ｶﾞﾏｽﾞﾐ?	1	股木材を利用。鉤部に使用痕がある。
70	8315	103	炉鉤	c-67-60-a	G	34.2	5.7	3.6	194.0	○		股木	ｺﾅﾗ	1	股木材を利用。上端部は瘤状。
71	8316	199	炉鉤	c-66-59-c	G	(33.3)	5.0	3.1	265.2			板目	ﾆﾚ	1	上端部欠損。下端部を鉤状に加工。鉤につぶれがある。
72	8317	108	抉入付有孔板製品	c-66-49-a	G	27.3	5.3	3.0	272.0			柾目	ｼﾗｶﾝﾊﾞ	1	上部に角孔が穿孔されており、下部に両側からの抉り。
73	8318	156	燈火用筒状樹皮	c-67-60-d	G	11.6	3.5	2.1	16.0		○		ｼﾗｶﾝﾊﾞ	1	樹皮を筒状に巻き束ねたもの。上部が炭化している。
74	8319	65	燈火用樹皮挟木	c-67-60-a・d	56	41.7	5.4	4.7	412.0	○		丸木	ｺﾅﾗ	1	平坦面を作出、割裂いた部分に楔を差込んでいる。
75	8320	754	燈火用樹皮挟木	c-66-48-b	G 175	*(44.6)	5.4	5.6	544.0		○	丸木	ﾊﾝﾉｷ	2	割裂いた部分の内外が炭化している。
76	8321	268	燈火用樹皮挟木	c-67-70-b	G	*(59.7)	3.8	3.6	328.0		○	丸木	ｶｴﾃﾞ	6	割裂いた部分の上部が炭化している。
77	8322	755	燈火用樹皮挟木	c-66-48-b	G 180	*(41.4)	6.1	4.8	564.0		○	丸木	ﾘﾝｺﾞ?	4	割裂いた部分の内面から外に掛けて炭化している。
78	8323	583	有孔棒状製品	c-66-59-a	G	(7.7)	1.5	1.5	11.2			丸木	ﾀﾓ?	1	両端部に抉りと穿孔の痕跡がある。
79	8324	45	有孔板製品	c-67-60-a	G	18.2	3.3	1.7	72.0			柾目	ｶｴﾃﾞ	1	両端部に円孔が穿孔されている。
80	8325	90	曲物・折敷片	c-67-60-d	G	*(65.8)	(9.1)	0.8	264.0			柾目		2	細長い薄柾目板の破片である。
81	8326	13	曲物・折敷片	c-66-59-b	G	(6.6)	(6.6)	0.8	26.0			柾目	ﾈｽﾞｺ?ﾋﾉｷ?	1	角の一手切りされた板に樹皮が縫い込まれている。
82	8327	585	曲物・折敷片	c-66-59-c	G	(11.7)	3.9	0.8	15.7			柾目	ｽｷﾞ?ﾈｽﾞｺ?	1	細長い薄柾目板の破片である。側面に木釘が残存する。
83	8328	572	曲物・折敷片	c-66-59-b	G	(13.5)	(2.4)	0.5	10.9			柾目	ﾋﾉｷ?	1	細長い薄柾目板の破片である。上部に木釘が残存する。
84	8329	375	曲物・折敷片	c-66-48-a	G	(12.5)	7.6	1.0	75.0			板目		1	薄柾目板の側面に釘穴が1か所残存する。

表Ⅴ－11　A′地区掲載木製品 (4)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
85	8330	230	曲物・折敷片	c-66-59-c	G		(11.8)	1.5	0.6	10.8			柾目		1	側面に木釘が２か所残存する。
86	8331	48	曲物・折敷片	c-67-60-d	G		20.2	(4.1)	0.6	43.0			柾目	ﾈｽﾞｺ?ｽｷﾞ?	1	表面に削り痕が顕著。
87	8332	289	曲物・折敷片	c-66-48-c	G		(12.0)	3.8	0.5	17.4			板目		1	下端部の角が切り落されている。
88	8333	301	曲物・折敷片	c-67-70-c	G		12.7	4.3	1.0	31.7			柾目		1	両端部が普及している。側面に木釘穴１か所。
89	8334	214	樽蓋	c-66-59-b	G		23.7	6.8	1.3	144.0			板目	ﾋﾉｷ?ｽｷﾞ?	1	栓の円孔がある。側面に木釘穴３か所。
90	8335	155	桶・樽蓋または底	c-67-60-a	G		22.0	4.8	1.5	103.0			柾目	ｽｷﾞ	1	側面に木釘穴が２か所。残存する木釘はタケ？
91	8336	154	桶・樽蓋または底	c-67-60-d	G		19.2	3.3	1.2	52.0			板目	ｽｷﾞ?	1	側面に木釘穴が２か所。
92	8337	97	桶・樽蓋または底	c-67-70-c	G		(22.2)	5.1	1.4	112.0			板目	ｽｷﾞ?ﾈｽﾞｺ?	1	周縁が普及している。
93	8338	98	桶・樽蓋または底	c-67-60-c	G		32.2	4.5	1.5	180.0			板目	ｽｷﾞ?	1	表裏に削り時の刃傷痕が顕著。側面に木釘穴２か所。
94	8339	136	桶・樽蓋または底	c-67-50-d	G		29.8	7.7	1.7	260.0		○	板目	ｽｷﾞ	1	表裏が炭化。側面に木釘穴２か所。木釘１本残存。
95	8340	233	桶・樽蓋または底	c-67-60-d	G		(8.6)	1.0	0.8	5.4			板目	ﾋﾉｷ?	1	細い棒状に再加工されたもの。側面に木釘穴２か所。
96	8341	223	桶・樽蓋または底	c-67-60-a	G		(14.5)	1.7	1.5	24.5			板目	ｽｷﾞ	1	細い棒状に再加工されたもの。残存する目釘はタケ？
97	8342	82	樽底	c-66-49-b	G		14.2	12.2	3.0	269.0			柾目	ｽｷﾞ?ﾈｽﾞｺ?	1	表裏は粗い削り面。下端面に再加工時の削り痕顕著。
98	8343	182	桶・樽蓋または底	c-67-60-a	G		11.7	1.7	1.5	23.9			板目	ｽｷﾞ	1	細い棒状に再加工されたもの。側面に木釘穴１か所。
99	8344	85	桶・樽蓋または底	c-67-60-b	G		(21.8)	5.2	1.8	130.0			板目	ｽｷﾞ	1	両端部との腐朽が著しい。側面に木釘穴２か所。
100	8345	354	桶・樽蓋または底	c-66-49-d	G		11.2	3.3	1.0	25.4			柾目		1	下端部が切截されている。
101	8346	293	樽側板	c-66-59-a	G		(8.4)	4.0	0.7	15.8			柾目		1	側板の口縁部側破片。下端部が切截されている。
102	8347	617	樽側板	c-67-60-a	G		(6.0)	3.8	0.6	11.8			板目	ﾋﾉｷ	1	側板の口縁部側破片。下端部が切截されている。
103	8348	12	樽側板	c-66-59-b	G		9.1	6.9	1.4	33.0		○	板目	ﾋﾉｷ?ｽｷﾞ?	1	側板の底部側破片。内面の削り痕顕著。上端部が炭化。
104	8349	267	樽側板	c-66-48-a	G		(25.0)	6.9	1.0	89.4			板目	ｽｷﾞ	1	表裏が腐朽している。口縁部側が幅広となっている。
105	8350	287	樽側板	c-66-48-c	G		(24.6)	8.0	1.1	129.9			板目	ｽｷﾞ	1	口縁部が摩耗している。口縁部側が幅広となっている。
106	8351	359	樽側板	c-66-49-c	G		(17.2)	(5.0)	1.1	69.4			板目	ｽｷﾞ	1	下端部が腐朽し、欠損している。
107	8352	350	樽側板	c-66-49-d	G		6.3	2.9	0.9	12.5			板目	ｽｷﾞ?ﾈｽﾞｺ?	1	口縁部を残して斜めに切截している。
108	8353	251	樽側板	c-66-59-a	G		5.4	3.6	1.0	13.5			板目	ｽｷﾞ	1	口縁部を残して斜めに切截している。
109	8354	568	樽側板	c-66-59-b	G		6.5	2.9	1.2	15.5			板目	ｽｷﾞ?ﾈｽﾞｺ?	1	口縁部を残して斜めに切截している。
110	8355	234	樽側板	c-66-49-c	G		4.9	(3.7)	1.0	11.0			板目	ｽｷﾞ	1	口縁部を残して斜めに切截している。
111	8356	114	把手	c-66-49-a	G		13.6	23.3	1.8	81.0			丸木	ｸﾜ?	1	丸木の両側に抉りがある。
112	8357	22	曲物把手	c-66-59-b	150		(21.1)	8.6	1.5	138.0			板目	ｽｷﾞ	1	両側の抉り部分を欠損している。

表Ⅴ－12　A′地区掲載木製品 (5)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
113	8358	300	把手	c-67-60-d	G	(14.9)	2.1	1.6	37.0			柾目	ニシキギ	1	半損している。抉り部を作出。断面は楕円形
114	8359	110	栓	c-66-49-a	G	10.0	3.4	3.2	50.0			柾板	スギ	1	頭部と挿入部が平坦となるやや長い逆円錐台形。
115	8360	19	栓	c-67-60-a	G	6.6	3.5	3.4	35.0			柾板	スギ	1	頭部と挿入部が平坦となる逆円錐台形。
116	8361	17	栓	c-67-50-d	G	6.1	3.5	3.3	38.0			柾板	スギ	1	頭部と挿入部が平坦となる逆円錐台形。
117	8362	138	栓	c-67-50-a	G	22.5	2.8	2.0	54.0			1/4割	カエデ	1	コケシ頭の頭部が作出されている。頭部直下が摩耗。
118	8363	134	栓	c-67-60-a	G	21.3	2.5	2.1	52.0			1/4割	カエデ	1	コケシ頭の頭部が作出されている。頭部直下が摩耗。
119	8364	580	栓	c-66-59-c	G	(21.9)	2.7	2.5	12.8			柾板	ハンノキ	1	コケシ頭の頭部が作出されている。頭部直下が摩耗。
120	8365	67	栓	c-66-59-b	G	27.9	3.8	3.7	150.0			1/4割	カエデ	1	コケシ頭の頭部が作出されている。挿入部先端が摩耗。
121	8366	190	栓	c-67-60-a	G	(22.0)	2.2	2.1	60.0			柾板		1	コケシ頭の頭部を欠損。頭部直下が摩耗。
122	8367	91	栓	c-66-48-c	G	31.7	4.2	4.0	247.0			丸木	コナラ	1	コケシ頭の頭部が作出されている。加工痕が顕著。
123	8368	652	栓	c-66-59-c	G	7.6	2.9	(1.4)	17.4			丸木		1	コケシ頭の頭部を作出。縦に半損。挿入部欠損。
124	8369	285	栓	c-66-59-a	G	(11.5)	2.8	2.9	58.0			丸木	サクラ?	1	コケシ頭の頭部を作出。頭部直下が摩耗。挿入部欠損。
125	8370	231	栓	c-66-59-b	G	(8.2)	2.4	2.4	26.8			丸木	リンゴ?	1	コケシ頭の頭部を作出。頭部直下が摩耗。ナナカマド？
126	8371	562	栓	c-66-59-b	G	(8.9)	2.3	2.1	29.8			1/4割		1	コケシ頭の頭部を作出。頭部直下が摩耗。挿入部欠損。
127	8372	759	栓	c-66-49-b	G	(10.0)	2.7	(1.9)	34.9			柾板		1	コケシ頭の頭部を作出。頭部直下が摩耗。挿入部欠損。
128	8373	191	杓子	c-66-59-b	G	(6.6)	(6.2)	1.3	30.8			横木	ハリギリ	2	皿状の頭部の破片。
129	8374	118	杓子	c-66-48-a	G	(9.3)	(3.8)	0.9	20.0			横木	モクレン	3	皿状の頭部の破片。
130	8375	367	箆	c-67-70-c	G	(11.5)	2.9	0.6	9.9			柾目		1	上端部の側縁に２か所の刻目。箆先部分を欠損。
131	8376	38	箆	c-66-69-b	G	(22.1)	(2.3)	1.1	30.0			板目	ヤナギ	1	撥形。箆先部分を欠損。
132	8377	148	箆	c-66-49-d	G	(20.1)	6.0	1.0	50.0			板目	スギ	1	撥形。上端部を欠損。
133	8378	159	箆	c-66-59-b	G	(13.0)	3.6	0.5	12.0			柾目	トネリコ	1	しゃもじ形。上端部を欠損。
134	8379	650	箆ミニチュア	c-66-59-c	G	(9.0)	1.1	0.4	1.6			柾目	ヒノキ?	1	撥形。箆先部分を欠損。
135	8380	651	箸状製品	c-66-59-c	G	(16.0)	0.8	0.8	6.9			板柾		1	A_1類の両口箸。断面は角形。
136	8381	552	箸状製品	c-66-59-b	G	16.6	0.7	0.5	3.4		○	柾目		1	A_1類の両口箸。断面は楕円形。
137	8382	577	箸状製品	c-66-59-b	G	22.0	0.8	0.6	6.3			板目		1	A_3類の両口箸。断面は楕円形。
138	8383	549	箸状製品	c-67-60-c	G	20.2	0.6	0.5	3.6			板目		1	A_1類の両口箸。断面は三角形。
139	8384	680	箸状製品	c-66-59・67-60	G	* 21.1	0.8	0.8	7.4			板目		3	A_1類の両口箸。断面は円形。
140	8385	42	箸状製品	c-66-59-b	G	22.0	0.8	0.7	8.0			板目		1	A_1類の両口箸。断面は角形。

表Ⅴ－13　A′地区掲載木製品 (6)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
141	8386	306	箸状製品	c-67-60-a	G		(30.0)	1.3	1.0	22.2			板目		1	A_3類の両口箸。断面は隅丸長方形。
142	8387	620	箸状製品	c-67-60-b	G		29.9	0.9	0.7	11.9			板目		1	A_3類の両口箸。断面は楕円形。
143	8388	25	箸状製品	c-66-59-c	G		23.9	0.8	0.8	9.0			1/4割		1	A_3類の両口箸。断面は三角形。
144	8389	660	箸状製品	c-66-59-b	G		* 25.6	0.8	0.7	8.4			板目		2	A_1類の両口箸。断面は六角形。
145	8390	403	箸状製品	c-67-60-a	G		23.7	1.0	0.8	9.0			1/4割		1	A_3類の両口箸。断面は三角形。
146	8391	101	箸状製品	c-66-48-c	G		22.9	0.6	0.7	7.0			柾目		1	A_1類の両口箸。断面は楕円形。
147	8392	655	箸状製品	c-67-50-c	G		15.2	0.6	0.6	2.8					1	A_2類の両口箸。断面は五角形。
148	8393	647	箸状製品	c-67-60-a	G		16.3	0.7	0.7	5.7					1	A_2類の両口箸。断面は六角形。
149	8394	548	箸状製品	c-67-60-c	G		* 18.4	0.8	0.6	5.9			1/4割		2	A_2類の両口箸。断面は台形。
150	8395	607	箸状製品	c-67-60-a	G		21.5	0.8	0.8	7.5					1	A_2類の両口箸。断面は円形。
151	8396	402	箸状製品	c-66-49-c	G		22.2	0.8	0.7	7.8			1/4割		1	A_2類の両口箸。断面は三角形。
152	8397	417	箸状製品	c-67-50-c	G		22.9	0.8	0.8	8.2			板柾		1	A_2類の両口箸。断面は角形。
153	8398	99	箸状製品	c-67-60-c	G		26.9	1.2	0.9	15.0			半割		1	B_1類の片口箸。断面は六角形。
154	8399	418	箸状製品	c-67-50-b	G		24.2	0.9	0.7	11.2			1/4割		1	B_1類の片口箸。断面は楕円形。
155	8400	183	箸状製品	c-67-60-d	G		22.3	0.9	0.7	10.0			1/4割		1	B_1類の片口箸。断面は楕円形。
156	8401	415	箸状製品	c-67-70-b	G		18.6	0.7	0.7	6.2			板目		1	B_1類の片口箸。断面は三角形。
157	8402	644	箸状製品	c-66-49-b	G		* 17.0	0.8	0.7	5.4			板柾		2	B_1類の片口箸。断面は角形。
158	8403	638	箸状製品	c-66-48-b	G		* 20.4	1.3	1.1	14.8			柾目		2	B_2類の片口箸。断面は三角形。
159	8404	623	箸状製品	c-67-50-c	G		21.8	1.5	1.3	24.5			丸木		1	B_2類の片口箸。断面は三角形。
160	8405	566	箸状製品	c-66-59-b	G		22.9	1.2	1.0	15.2			板目		1	B_2類の片口箸。断面は角形。
161	8406	28	箸状製品	c-66-69-b	G		24.6	1.0	0.9	15.0			板目		1	B_2類の片口箸。断面は６角形。
162	8407	128	箸状製品	c-67-70-c	G		27.9	1.0	0.7	14.0			板目		1	B_2類の片口箸。断面は隅丸の角形。
163	8408	205	箸状製品	c-67-60-c	G		31.0	0.9	0.8	15.0			柾目		1	B_2類の片口箸。断面は楕円形。
164	8409	669	箸状製品	c-67-60-d	G		13.3	0.8	0.8	3.6					1	B_3類の片口箸。断面は角形。
165	8410	666	箸状製品	c-67-50-d	G		(18.2)	0.9	0.8	9.1			1/4割		1	B_3類の片口箸。断面は三角形。
166	8411	592	箸状製品	c-67-50-a	G		21.8	1.3	1.0	16.0			1/4割		1	B_3類の片口箸。断面は五角形。
167	8412	654	箸状製品	c-67-50-c	G		* 22.2	1.0	0.8	10.1			1/4割		2	B_3類の片口箸。断面は楕円形。
168	8413	658	箸状製品	c-66-59-b	G		28.9	0.8	0.8	11.6			板柾		1	B_3類の片口箸。断面は楕円形。

表Ｖ－14　A′地区掲載木製品 (7)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
169	8414	645	箸状製品	c-67-60-a	G	31.0	0.8	0.7	8.3			柾目		1	B_3類の片口箸。断面は楕円形。
170	8415	266	箸状製品	c-67-60-c	G	37.4	1.0	1.0	17.8			1/4割		1	B_4類の片口箸。断面は三角形。
171	8416	643	箸状製品	c-66-49-b	G	33.8	1.2	1.1	19.1			1/4割		1	B_4類の片口箸。断面は楕円形。
172	8417	63	箸状製品	c-67-60-d	G	32.3	0.9	0.8	13.0			1/4割		1	B_4類の片口箸。断面は三角形。
173	8418	657	箸状製品	c-67-50-c	G	* 31.9	1.3	1.2	19.0			1/4割		4	B_4類の片口箸。断面は三角形。
174	8419	661	箸状製品	c-67-60-a	G	(22.3)	1.0	0.9	10.2			板目		1	B_4類の片口箸。断面は五角形。
175	8420	684	箸状製品	c-66-49-b	G	* 26.9	0.9	0.9	13.1			板目		3	B_4類の片口箸。断面の上部は角形、先端部八角形。
176	8421	668	箸状製品	c-67-60-b	G	(10.7)	0.9	0.8	3.8			丸木		1	D類の先端部が鉛筆先状もの。断面は円形。
177	8422	589	箸状製品	c-67-50-a	G	(10.8)	0.8	0.7	4.1			板目		1	D類の先端部が鉛筆先状もの。断面は角形。
178	8423	333	箸状製品	c-67-60-c	G	(11.1)	0.8	0.6	3.3					1	D類の先端部が鉛筆先状もの。断面は七角形。
179	8424	719	箸状製品	c-66-48-c	G	(7.5)	0.6	0.5	1.9			板目		1	D類の先端部が鉛筆先状もの。断面は六角形。
180	8425	677	短刻付製品	c-67-60-c	G	(11.3)	0.8	0.7	4.0			板目		1	箸状製品の両端部を欠損。斜めに二本の短刻がある。
181	8426	550	串状製品	c-67-50-b	G	* 17.8	0.6	0.6	4.1			板目		2	A類。焼き鳥串状に細い。
182	8427	587	串状製品	c-67-50-a	G	(23.5)	1.6	1.3	29.9			板目		1	B類。断面は長方形。先端部のみ粗く削りだす。
183	8428	213	串状製品	c-66-59-c	G	28.8	1.2	0.6	12.0			板目		1	B類。断面は長方形。
184	8429	686	串状製品	c-67-60-a・d	G	(31.7)	1.3	0.7	21.8			柾目		3	B類。断面は長方形。先端部斜め削り。
185	8430	639	串状製品	c-66-48-b	G	*(82.7)	1.7	0.7	58.5			板目		3	B類。断面は長方形。細く長い。
186	8431	39	串状製品	c-67-60-a	G	(22.1)	1.0	0.7	9.0			板目		1	C類。先端が二面削りで幅広野もの。断面は長方形。
187	8432	667	串状製品	c-66-59-a	G	31.6	1.6	1.5	38.6			板目		1	C類。先端が二面削りで幅広野もの。断面は角形。
188	8433	618	串状製品	c-67-60-b	G	*(23.5)	1.0	0.7	8.8			板目		2	D類。断面は楕円形。先端は舌先状の形態。
189	8434	576	串状製品	c-66-59-b	G	(23.0)	1.2	0.9	16.6			板目		1	D類。断面は楕円形。先端は舌先状の形態。
190	8435	685	串状製品	c-67-60-c	G	*(18.9)	0.8	0.4	4.0			板目		1	D類。断面は楕円形。先端は舌先状の形態。
191	8436	273	串状製品	c-66-48-b	G	*(61.0)	3.7	1.9	280.0			柾目		3	D類。断面は楕円形。先端は舌先状の形態。
192	8437	687	串状製品	c-66-59-a・b	G	* 72.5	1.6	0.9	64.4			半割		3	E類。断面は半円形。先端は舌先状の形態。
193	8438	664	串状製品	c-67-50-a	G	*(20.0)	1.6	0.8	15.7			半割		1	E類。断面は半円形。先端は舌先状の形態。
194	8439	621	串状製品	c-67-50-c	G	(27.9)	1.3	0.8	15.0			1/3割		1	F類。断面は扁平な多角形。
195	8440	395	串状製品	c-66-49-c	G	(20.6)	1.1	0.6	10.1			板目		1	F類。断面は扁平な多角形。
196	8441	671	串状製品	c-66-49-c	G	(29.7)	1.6	1.0	26.4			1/6割		1	F類。断面は扁平な多角形。

表Ⅴ－15　A′地区掲載木製品 (8)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
197	8442	665	串状製品	c-67-50-b	G	(13.2)	0.9	0.9	6.7			丸木		1	G類。先端部のみを削り出している。
198	8443	291	串状製品	c-66-48-c	G	(11.4)	0.6	0.7	3.1			丸木		1	G類。先端部のみを削り出している。
199	8444	334_{337}	串状製品	c-66-48・67-50	G	29.7	0.9	0.9	16.8			丸木		1	G類。先端部のみを削り出している。
200	8445	279	串状製品	c-66-59-a	G	(18.0)	1.0	0.2	2.6			1/4割		1	H類。竹を割裂き内面から薄く削ったもの。
201	8446	635	串状製品	c-67-50-b	G	(12.5)	1.1	0.5	2.8			1/4割		1	H類。竹を割裂き内面から薄く削ったもの。
202	8447	648	串状製品	c-67-60-a	G	17.0	0.8	0.3	2.4			1/6割		1	H類。竹を割裂き内面から薄く削ったもの。
203	8448	426	木玉	c-67-50-c	G	1.7	1.7	1.1	1.3				ｱｼｻｲ	1	算盤玉形で中心を穿孔。表面の削り痕が顕著。
204	8449	1	根付・緒締等	c-67-70-b	G	3.1	(2.7)	1.5	6.0			板目	ﾋﾉｷ?	1	表裏の環の大きさの異なる滑車形の加工。
205	8450	252	根付・緒締等	c-66-59-c	G	1.9	1.2	1.0	1.8			柾目		1	断面が楕円形で、中央に小孔が穿孔されている。
206	8451	163	根付・緒締等	c-66-49-d	G	4.2	4.4	3.0	46.0			丸木		1	断面が楕円形で、樹心部に孔が穿孔されている。
207	8452	88	下駄状製品	c-67-60-c	G	(12.8)	10.3	7.6	330.0			横木	ｶﾂﾗ	1	連歯下駄に似るが、鼻緒孔が無い。
208	8453	298	円板材	c-66-48-c	G	4.6	3.7	1.6	19.2			柾目		1	表裏が平行となるように加工されている。
209	8454	616	宝刀ミニチュア	c-67-60-a・d	G	15.5	1.2	1.0	10.8			板目	ﾄﾈﾘｺ	2	柄部分を欠損。表面にのみ浮き彫り、線刻がある。
210	8455	193	木幣	c-66-59-c	G	46.6	3.3	3.1	293.4			板目	ｺﾅﾗ	1	材の稜線に下方から斜めに山形の切り込みが連続する。
211	8456	424	木幣	c-67-70-b	G	(36.4)	2.4	2.4	98.0			丸木	ﾐｽﾞｷ	1	頭部直下に削りかけの痕跡が多段にめぐる。
212	8457	758	短刻付製品	c-66-49-a	G	(4.0)	1.9	1.5	6.9			丸木	ﾔﾅｷﾞ	1	水平の短刻に挟まれた二本組の短刻がある。
213	8458	675	短刻付製品	c-66-59-c	G	(8.3)	0.8	1.0	5.5			板目	ｽｷﾞ?ﾋﾉｷ?	1	二本組の短刻が斜め刻まれる。
214	8459	166	短刻付製品	c-66-48-d	G	8.9	2.0	2.0	24.0			丸木	ﾔﾅｷﾞ	1	二本組の短刻が水平にめぐる。
215	8460	142	短刻付製品	c-66-49-d	G	(14.7)	2.4	2.3	52.0			丸木	ﾔﾅｷﾞ	1	短刻が縦に連続する。
216	8461	693	短刻付製品	c-66-49-a	G	(5.2)	2.2	2.1	11.8			丸木	ﾔﾅｷﾞ	1	水平に短刻がめぐる。
217	8462	653	短刻付製品	c-67-50-c	G	7.1	1.3	0.8	4.6			柾目	ｽｷﾞ?ﾋﾉｷ?	1	大小の扇形の文様が向い合うように刻まれている。
218	8463	674	短刻付製品	c-67-60-c	G	(3.0)	1.3	0.6	1.1			柾目	ｶｴﾃﾞ	1	細い短刻が縦に連続する。
219	8464	646	ピン状製品	c-67-60-a	G	6.2	1.0	0.8	2.3			柾板		1	先端部に向かって粗く削り出したもの。断面は楕円形。
220	8465	356	ピン状製品	c-67-70-b	G	(10.0)	0.7	0.8	3.6			柾目		1	先端部に向かって粗く削り出したもの。断面は角形。
221	8466	271	ピン状製品	c-67-50-a	G	13.5	1.2	1.0	6.6			板目		1	先端部に向かって粗く削り出したもの。断面は長法方形。
222	8467	662	ピン状製品	c-67-60-a	G	14.1	1.2	0.7	6.8			板目		1	先端部に向かって粗く削り出したもの。断面は楕円形。
223	8468	659	ピン状製品	c-66-59-b	G	16.1	1.2	1.1	14.5			丸木	ｱｼｻｲ	1	先端部に向かって粗く削り出したもの。断面は多角形。
224	8469	37	軸状製品	c-66-69-b	G	19.0	1.8	1.1	24.0			1/3割	ｱｼｻｲ	1	表面を丹念に削りだす。断面は隅丸三角形。

表Ｖ－16　A′地区掲載木製品 (9)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
225	8470	105	軸状製品	c-66-49-a	G		16.6	1.7	1.5	25.0			1/4割	ｱｼｻｲ	1	先端部に向って細く加工されている。断面は円形。
226	8471	225	軸状製品	c-66-59-c	G		18.6	1.7	1.3	29.0			板目	ｽｷﾞ?	1	先端部に向って細く加工されている。断面は楕円形。
227	8472	186	軸状製品	c-67-60-a	G		25.5	2.2	2.2	70.0			丸木	ﾄﾈﾘｺ?	1	先端部に向って細く加工されている。断面は円形。
228	8473	152	軸状製品	c-66-59-a	G		(26.5)	2.1	1.3	47.0			半割	ｱｼｻｲ	1	先端部に向って細く加工されている。断面は楕円形。
229	8474	419	軸状製品	c-66-49-c	G		22.9	1.6	1.5	32.1			板目	ﾓﾐ	1	両端に向って細く加工されている。断面は五角形。
230	8475	678	軸状製品	c-66-49-c	G		* 18.5	1.3	1.3	18.5			柾目		2	先端部に向って細く加工されている。断面は角形。
231	8476	581	軸状製品	c-66-59-c	G		12.3	1.4	1.2	12.0			板柾	ｽｷﾞ	1	両端に向って細く加工されている。断面は五角形。
232	8477	649	軸状製品	c-66-59-c	G		8.6	0.9	0.9	4.6			板柾	ｽｷﾞ	1	両端に向って細く加工されている。断面は五角形。
233	8478	569	軸状製品	c-66-59-b	G		6.8	0.8	0.6	2.0			板柾	ﾋﾉｷ?	1	両端に向って細く加工されている。断面は楕円形。
234	8479	690	ピン状製品	c-67-60-c	G		6.1	1.4	1.4	6.8			丸木		1	先端部のみが削りだされている。断面は円形。
235	8480	603	ピン状製品	c-67-60-c	G		15.8	1.6	1.3	26.6			半割	ｱｼｻｲ	1	先端部のみが削りだされている。断面は楕円形。
236	8481	622	ピン状製品	c-67-50-c	G		16.5	1.3	0.9	12.4			半割	ｱｼｻｲ	1	先端部のみが削りだされている。断面は楕円形。
237	8482	218	ピン状製品	c-67-60-a	G		(19.4)	1.2	1.2	19.0			丸木		1	先端部のみが削りだされている。断面は円形。
238	8483	141	ピン状製品	c-67-50-a	G		19.8	2.0	1.7	49.0			1/4割	ｱｼｻｲ	1	先端部のみが削りだされている。断面は隅丸長方形。
239	8484	559	ピン状製品	c-66-59-b	G		(28.4)	3.3	3.0	117.0			丸木	ｺﾅﾗ	1	先端部のみが削りだされ、削りが長い。断面は円形。
240	8485	681	ピン状製品	c-67-60-a	G		(20.5)	1.6	1.0	17.8			板目	ｽｷﾞ?ﾋﾉｷ?	1	先端部のみが削りだされている。断面は偏平な楕円形。
241	8486	362	ピン状製品	c-66-48-d	G		(19.9)	2.4	2.1	56.9			丸木	ｸﾏｼﾃﾞ	1	先端部のみが削りだされている。断面は円形。
242	8487	211	ピン状製品	c-67-60-d	G		(19.5)	1.9	1.5	48.0			柾目	ｽｷﾞ?	1	先端部のみが削りだされている。断面は角形。
243	8488	47	楔付製品	c-67-60-a	G		25.0	2.5	2.1	52.0			丸木	ｶｴﾃﾞ	1	端部に長めの楔が打ち込まれている。断面は円形。
244	8489	372	楔付製品	c-66-48-c	G		22.4	3.7	2.8	145.2			柾目	ｶﾂﾗ	1	角形の端部に楔が打ち込まれている。断面は七角形。
245	8490	541	楔形製品	c-66-48-b	G		7.1	3.1	1.6	18.2			板目	ｶﾂﾗ	1	舌先状の丸先端である。削り痕顕著。
246	8491	14	楔形製品	c-66-59-c	G		11.0	3.8	1.3	30.0			柾目	ｽｷﾞ	1	先端部が鋭角である。削り痕顕著。
247	8492	119	方形頭付丸棒状製品	c-67-70-c	G		*(26.0)	4.0	2.2	98.0			柾目	ﾄﾈﾘｺ	2	方形の頭部の下は丸棒状である。
248	8493	24	方形頭付丸棒状製品	c-66-59-b	G		(26.5)	4.1	2.0	78.0			柾目	ｶｴﾃﾞ	1	方形の頭部の角孔に楔状の木質（クルミ）が残存する。
249	8494	563	方形頭付丸棒状製品	c-66-59-b	G		(5.8)	2.9	1.2	11.0			柾目		1	方形の頭部の下は丸棒状である。
250	8495	120	方形頭付丸棒状製品	c-67-60-b	G		(12.1)	3.1	2.0	55.0			丸木	ｶﾂﾗ	1	方形の頭部の角孔に楔状の木質が残存。下端部欠損。
251	8496	6	方形頭付丸棒状製品	c-66-59-a	G		(8.8)	4.4	1.5	33.0			柾目	ｶｴﾃﾞ	1	頭部の角孔に楔状の木質（スギ）が残存。下端部欠損。
252	8497	698	有孔丸棒状材	c-67-60-b	G		(8.3)	1.7	1.2	9.0			柾目		1	上端部に三角形の小孔。断面は三角形。

表Ⅴ－17　A′地区掲載木製品 (10)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
253	8498	54	有孔丸棒状材	c-66-59-b	G		22.0	4.5	4.3	207.0		○	丸木	ｽｷﾞ	1	上端部の表裏に平坦面作出。縦長角孔。下端部炭化。
254	8499	200	有孔丸棒状材	c-66-59-a	G		(32.4)	3.4	3.1	214.4			板目	ｺﾅﾗ	1	上端部の表裏に垂下する溝と円孔がある。
255	8500	332	有孔丸棒状材	c-67-60-b	G		(22.8)	2.8	2.7	99.6			板目	ｵﾆｸﾞﾙﾐ	1	上端部の表裏に平坦面作出。角孔に木質残存。
256	8501	588	抉入付丸棒状材	c-67-50-a	G		(19.4)	1.3	1.3	15.8			丸木		1	コケシ頭状の頭部を作出。断面は円形。
257	8502	127	抉入付丸棒状材	c-67-60-a	G		(15.4)	2.4	2.2	46.0			丸木	ﾔﾅｷﾞ	1	コケシ頭状の頭部を作出。断面は偏平な円形。
258	8503	107	抉入付丸棒状材	c-66-49-b	G		(14.1)	2.4	2.2	47.0			丸木	ｺﾅﾗ	1	コケシ頭状の頭部を作出。首が長く抉り込まれている。
259	8504	624	抉入付丸棒状材	c-67-60-a	G		(13.0)	1.7	1.6	23.6			丸木		1	瘤状の頭部を作出している。断面は円形。
260	8505	257	抉入付丸棒状材	c-67-61-d	G		41.7	2.6	2.8	172.9			丸木	ﾅﾅｶﾏﾄﾞ	1	上端部を浅く抉り、コケシ頭状の頭部を作出。
261	8506	66	抉入付丸棒状材	c-67-60-d	G		31.2	1.7	1.7	49.0			板柾	ｶﾔ?	1	小さなコケシ頭状の頭部を作出。下端部は切截。
262	8507	700	抉入付角棒状材	c-67-60-b	G		6.7	0.7	0.5	1.8			板目		1	下端部がコケシ頭状に加工されている。断面は長方形。
263	8508	20	抉入付丸棒状材	c-67-60-d	G		(9.3)	2.4	2.2	20.0			丸木	ｶｴﾃﾞ	1	茸形に頭部が作出されている。断面は円形。
264	8509	227	抉入付割棒状材	c-66-59-b	G		(13.6)	1.2	0.9	8.9			半割	ｴﾝｼｭ?	1	片面のみを帯状に抉り、コケシ頭状に加工している。
265	8510	327	抉入付楕円棒状材	c-67-60-b	G		(74.9)	3.4	1.7	49.4			柾目	ﾓﾐ	1	片面のみを帯状に抉りコケシ頭状に加工。
266	8511	540	抉入付蒲鉾棒状材	c-66-48-b	G		(18.5)	2.7	0.9	22.2			板目	ｽｷﾞ	1	全体を削り、コケシ頭状に加工。
267	8512	673	抉入付割棒状材	c-67-60-d	G		(55.5)	4.8	4.1	442.3			半割		1	コケシ頭状の頭部を作出。
268	8513	255	抉入付丸棒状材	c-67-61-d	G		(54.1)	6.7	6.3	1603.0			丸木	ﾓﾐ	1	片側のみを抉り込んでいる。
269	8514	594	抉入付角棒状材	c-67-50-a	G		*(26.5)	2.4	1.7	82.9			丸木	ﾆﾚ	2	端部が瘤状となっている。下端部を欠損する。
270	8515	586	抉入付丸棒状材	c-67-50-a	G		(9.4)	1.6	1.7	18.0			丸木	ｸﾏｼﾃﾞ	1	杭状の先端部を持つコケシ頭状の頭部を作出。
271	8516	221	抉入付角棒状材	c-67-60-d	G		*(17.0)	2.5	2.0	53.9			1/4割	ﾆｼｷｷﾞ	2	小さなコケシ頭状の頭部を作出。
272	8517	185	抉入付割棒状材	c-67-60-a	G		(7.8)	7.1	2.9	72.1			偏割	ﾔﾅｷﾞ	1	曲面側を溝状に抉り、コケシ頭状の頭部を作出。
273	8518	399	抉入付角棒状材	c-66-59-a	G		(13.3)	2.2	1.9	26.0			1/4割		1	下端部の側縁が抉られている。
274	8519	396	抉入付角棒状材	c-66-48-c	G		(12.0)	4.0	2.6	64.0			半割	ｸﾜ	1	片側端部を瘤状に加工している。
275	8520	216	抉入付角棒状材	c-67-70-a	G		(22.4)	5.7	4.3	351.2		○	丸木	ﾊﾝﾉｷ	1	平坦面を削りだし、頭部を作出している。下端部炭化。
276	8521	106	抉入付角棒状材	c-66-49-c	G		19.5	4.2	3.0	155.0			柾目		1	斜めに溝状の抉りがある。
277	8522	343	抉入付楕円棒状材	c-66-49-d	G		(17.5)	3.4	2.5	65.2			柾目	ﾄﾈﾘｺ	1	上端部が片側から抉り、階段状に加工している。
278	8523	317	抉入付角棒状材	c-67-60-b	G		16.2	4.1	1.7	55.9			柾目		1	表面に溝状の抉りがある。
279	8524	325	抉入付楕円棒状材	c-67-70-b	G		(20.0)	3.0	1.8	62.2			柾目	ｸﾜ	1	胴部がふくらみ、側縁が抉られている。
280	8525	157	抉入付角棒状材	c-66-59-b	G		18.2	3.7	2.2	106.0			板目	ｶｴﾃﾞ	1	上端部は平坦に切截され、下端部は深く抉られている。

表V－18　A′地区掲載木製品 (11)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
281	8526	196	抉入付丸棒状材	c-66-49-c	G		(28.1)	3.2	3.3	194.0			丸木	カエデ	1	表面が粗く削られ、胴部が抉られている。
282	8527	95	抉入付角棒状材	c-67-60-d	G		(29.0)	3.2	1.8	79.0			柾目	コナラ	1	平坦面の削り出され、頭部が角鉤状となっている。
283	8528	313	抉入付割棒状材	c-67-70-c	G		9.5	4.6	2.8	57.4			板目		1	側縁部が抉られている。断面は半円形である。
284	8529	409	抉入付角棒状材	c-66-48-b	G		18.3	2.0	1.1	21.8			柾目		1	平坦面の削り出され、頭部が角鉤状となっている。
285	8530	112	凸形頭付丸棒状材	c-66-49-a	G		(30.4)	5.0	5.5	412.0			丸木	イチイ	1	頭部が凸形に削りだされている。
286	8531	64	角孔付丸材	c-66-59-b	149		(30.6)	8.9	4.8	683.0		○	丸木	クワ	1	上端部に大小2か所の角孔がある。下端部は炭化。
287	8532	188	角孔付丸材	c-67-60-a	G		9.9	5.1	4.2	121.0			丸木	スギ	1	丸材の角孔部が切截されている。
288	8533	376	角孔付丸材	c-67-50-a	G		11.3	5.7	4.8	178.0			丸木	モミ	1	丸材の角孔部が切截されている。
289	8534	537	角孔付丸材	c-66-48-c	G		*(13.5)	6.6	6.2	244.0			丸木	ハンノキ	2	丸材の角孔（角抉り）部から折損している。
290	8535	198	抉入付角材	c-66-49-c	G		21.2	5.5	4.2	242.0		○	板目	カツラ	1	上端部が角形に抉られている。下端部は炭化している。
291	8536	104	抉入付丸棒状材	c-66-49-b	G		(58.7)	6.5	6.3	1207.0			丸木	コナラ	1	杭状の先端部を持ち、鉤形に抉られている。
292	8537	599	丸棒状材	c-67-50-a	G		(29.6)	2.1	2.1	83.9		○	丸木		1	上端部が炭化し、下端部は欠損している。
293	8538	304	丸棒状材	c-67-60-a	G		* 26.4	2.7	2.6	123.3			丸木		2	上端部は平坦に加工され、下端部は欠損している。
294	8539	543	丸棒状材	c-66-59-a	G		11.0	1.9	2.0	27.8			板目		1	両端部が切截されている。
295	8540	600	丸棒状材	c-67-50-a	G		(39.9)	2.6	2.7	178.0			丸木	ヤナギ	1	両端部を欠損している。
296	8541	73	丸棒状材	c-67-60-a	155		(91.1)	2.8	2.8	504.0			丸木	リンゴ?	1	両端部を欠損している。腐朽が著しい。ナナカマド？
297	8542	74	丸棒状材	c-66-59-b	148		*(101.2)	3.3	3.2	763.0			丸木	コナラ	2	両端部を欠損している。
298	8543	96	丸棒状材	c-67-70-c	G		(17.2)	(2.6)	1.4	25.0			柾目		1	湾曲した楕円形の材である。下端部は欠損している。
299	8544	400	丸棒状材	c-66-48-b	G		(17.4)	1.8	1.8	34.2			丸木	カエデ	1	表面の加工痕が顕著である。上端部を欠損する。
300	8545	202	丸棒状材	c-66-59-b	G		34.9	2.7	2.2	120.0			丸木	ナラ	1	両端部は対面する二面削りされ、裏面に平坦面を作出。
301	8546	229	角棒状材	c-66-59-c	G		※(37.0)	(3.5)	2.1	155.0			柾目	ハリギリ	3	表面に削り時の刃傷痕が多数認められる。
302	8547	275	角棒状材	c-66-49-c	G		(27.6)	2.4	1.2	65.0			板目		1	上端部を欠損し、下端部は腐朽。断面は長方形である。
303	8548	341	角棒状材	c-66-49-c	G		(18.0)	1.3	1.1	16.3			柾目		1	上端部を欠損する。断面は六角形である。
304	8549	556	楕円形棒状材	c-66-59-b	G		(17.4)	2.0	1.3	33.4			柾目		1	下端部を欠損する。
305	8550	555	楕円形棒状材	c-66-59-a	G		(14.2)	2.4	1.2	27.6			板目		1	表面に削り時の刃傷痕が多数認められる。
306	8551	331	角棒状材	c-67-50-b	G		27.6	3.5	1.6	89.8		○	板目		1	上端部は炭化し、下端部は切截されている。
307	8552	111	楕円形棒状材	c-66-49-a	G		(44.5)	3.5	1.9	205.0		○	柾目	スギ?	1	先端部が徐々に細くなる。上端部側縁と下端部が炭化。
308	8553	560	楕円形棒状材	c-66-59-a	G		(39.8)	3.9	1.8	165.6			柾目		1	両端部を欠損している。下端部が幅広となる。

表Ⅴ－19　A′地区掲載木製品 (12)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
309	8554	388	紡錘形棒状板材	c-66-48-b	G		(26.8)	3.5	1.7	69.5		○	柾目		1	両端部を欠損する。表面が炭化している。
310	8555	36	紡錘形棒状板材	c-66-69-b	G		(21.5)	3.7	1.4	52.0			板目	ｽｷﾞ	1	先端部は徐々に細くなる舌先形である。下端部を欠損。
311	8556	44	紡錘形棒状板材	c-67-50-d	G		(24.0)	3.5	1.4	62.0			柾目	ﾓｸﾚﾝ	1	両端部を欠損する。上端部は幅広で丸く加工。
312	8557	201	紡錘形棒状板材	c-66-59-c	G		(32.7)	3.0	0.7	47.0			柾目	ｽｷﾞ	1	上端部に円孔が１か所。下端部は切り出されている。
313	8558	629	蒲鉾形棒状板材	c-66-59-c	G		(22.0)	2.8	0.9	28.0			柾目		1	上端部は欠損。先端部は徐々に細くなる舌先形である。
314	8559	26	蒲鉾形棒状板材	c-66-59-c	G		(21.7)	3.2	0.9	30.0			柾目		1	上端部が細く突がる。下端部は斜めに切截されている。
315	8560	339	蒲鉾形棒状板材	c-66-49-d	G		(23.2)	2.1	0.9	32.6			柾目		1	上端部は欠損。下端部はやや細い。刃傷痕多数。
316	8561	410	蒲鉾形棒状板材	c-67-70-b	G		(19.9)	2.4	0.8	27.7			柾目		1	表面の腐朽著しい。
317	8562	344	蒲鉾形棒状板材	c-67-60-c	G		(15.1)	2.0	0.6	14.7		○	柾目		1	上端部は欠損。下端部表面に炭化部分がある。
318	8563	369	蒲鉾形棒状板材	c-66-48-d	G		(19.0)	2.3	0.7	23.4			柾目		1	下端部は欠損。上端部の幅がやや細く加工されている。
319	8564	408	蒲鉾形棒状板材	c-67-70-b	G		(19.3)	1.9	0.9	22.0			柾目		1	上端部は欠損。下端部は摩耗している。
320	8565	338	蒲鉾形棒状板材	c-66-49-d	G		(22.2)	3.2	0.9	46.6			柾目	ｽｷﾞ?	1	下端部は欠損。上端部に削り痕が顕著に残る。
321	8566	633	蒲鉾形棒状板材	c-67-60-a	G		(27.0)	2.3	0.9	38.2			柾目		1	上端部を欠損する。
322	8567	326	蒲鉾形棒状板材	c-67-50-a	G		(24.4)	2.0	1.0	28.8			半円		1	両端部を欠損する。平行な刃傷痕が認められる。
323	8568	360	蒲鉾形棒状板材	c-66-49-c	G		(27.8)	2.5	1.2	60.0			板目		1	両端部を欠損する。
324	8569	404	紡錘形棒状材	c-66-48-c	G		(18.4)	1.8	0.6	17.0			柾目		1	両端部を欠損する。斜行した刃傷痕が認められる。
325	8570	637	薄柾目棒状板材	c-67-60-a	G		(28.9)	2.1	0.7	33.7			柾目	ｽｷﾞ?	1	上端部を欠損する。下端部は舌先状に削りだされる。
326	8571	323	薄柾目棒状板材	c-67-50-b	G		(19.8)	3.8	0.8	46.0			柾目		1	やや幅広な上端部を欠損する。
327	8572	398	薄柾目棒状板材	c-66-59-a	G		(27.8)	2.5	0.3	15.3			柾目		1	全体の腐朽が著しい。
328	8573	187	竹材	c-67-60-d	G		20.8	2.9	0.9	29.0			1/4割		1	表面に刃傷痕が多数認められる。下端部に節がある。
329	8574	322	竹材	c-66-48-d	G		(7.7)	1.0	0.5	1.8			1/4割		1	中央部に節がある。内面が削られている。
330	8575	146	有孔板材	c-66-48-d	G		12.2	19.4	2.1	358.0			板目	ﾊﾘｷﾘ	1	上端部に２か所の角孔が並んでいる。
331	8576	121	有孔板材	c-67-60-c	G		(11.4)	13.9	2.3	222.0			板目	ﾊﾘｷﾘ	1	角孔が３か所ある。
332	8577	137	有孔板材	c-67-50-d	G		(11.2)	(13.4)	1.4	162.0			板目	ﾊﾘｷﾘ	1	片側によった角孔が１か所ある。
333	8578	86	有孔板材	c-66-59-a	G		(15.4)	3.3	1.6	54.0			板目		1	上端部の側縁には抉りがあり、下端部に角孔が１か所。
334	8579	93	有孔板材	c-66-59-d	G		(20.8)	6.0	2.0	160.0			柾目		1	上端部に角孔が１か所ある。
335	8580	697	有孔板材	c-67-60-a	G		(15.9)	(4.7)	0.6	25.8			柾目		1	上端部の角孔部が欠損し、角抉り状となっている。
336	8581	145	有孔板材	c-66-48-d	G		(22.8)	(11.8)	2.3	423.0			板目	ﾊﾘｷﾘ	1	上端部の角に角孔が１か所ある。

表Ｖ－20　A′地区掲載木製品 (13)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
337	8582	58	有孔板材	c-67-60-d	G		(27.2)	9.7	2.4	320.0			板目	ハンノキ	1	湾曲し、中央が稜線となる。両端に２か所角孔がある。
338	8583	57	有孔板材	c-66-69-b	G		(27.7)	8.5	1.8	286.0			板目	ハンノキ	1	湾曲し、中央が稜線となる。両端に１か所角孔がある。
339	8584	226	有孔板材	c-67-60-d	G		(15.0)	4.4	1.5	55.8			板目		1	３か所の角孔部分が欠損。
340	8585	165	有孔板材	c-66-48-d	G		12.0	9.4	1.7	115.0			柾目		1	２か所の角孔部分が欠損。円孔と角孔の２種である。
341	8586	94	有孔板材	c-66-48-a	G		(45.7)	(7.8)	3.2	723.0			板目	スギ	1	左右対称となる４か所の角孔がある。
342	8587	113	有孔板材	c-66-49-a	G		(32.5)	13.9	2.1	508.0		○	柾目	ハリギリ	1	２か所の角孔がある。
343	8588	365他	有孔板材	c-67-70-c	G		*(41.9)	(8.0)	2.0	386.0			板目	シナノキ	4	４～５か所の角孔部分を欠損。
344	8589	23	有孔板材	c-67-60-d	195		(23.4)	(3.5)	(1.6)	57.0			柾目		1	上部に角孔１か所。側縁部角形の抉り。
345	8590	274	有孔板材	c-67-60-d	G		(32.3)	(10.8)	3.0	593.0			板目		1	３か所の角孔がある。
346	8591	150	抉入付板材	c-66-48-d	G		(13.2)	4.6	1.5	37.0			板目	カツラ	1	上部に突起部。側縁部に２か所の抉りがある。
347	8592	696	抉入付板材	c-67-50-a	G		(5.3)	2.2	0.4	3.7			板目		1	周縁に刻目状の抉りがある。
348	8593	584	抉入付板材	c-67-50-a	G		(10.8)	2.1	1.7	22.0			柾目		1	角孔部から欠損したものか。
349	8594	582	抉入付板材	c-66-59-c	G		(6.0)	1.8	0.6	4.0			柾目		1	側縁部に抉りがある。
350	8595	116	抉入付板材	c-67-60-b	G		9.0	(4.3)	1.7	56.0		○	柾目	スギ	1	上部に抉りがある。下端部は炭化。曲物把手の抉り？
351	8596	115	抉入付板材	c-66-49-a	G		7.3	(3.3)	1.7	28.0			板目	スギ?	1	上部に抉りがある．曲物把手の抉り？
352	8597	336	抉入付板材	c-66-49-b	G		(17.0)	(10.9)	1.2	112.0			板目	ハリギリ	1	上部に角形の抉りがある。
353	8598	310	抉入付板材	c-67-70-c	G		13.9	3.1	1.2	29.2			柾目		1	下部側縁部に抉りがある。
354	8599	378	抉入付板材	c-66-59-d	G		(12.9)	(7.0)	2.1	110.1			板目		1	上端部隅に突起部分が残る。
355	8600	124	抉入付板材	c-66-59-a	G		(15.5)	(3.7)	1.8	62.0			板目		1	側縁中央に角形の抉りがある。
356	8601	347	板材	c-66-59-d	G		(18.4)	5.9	2.1	158.0			板目	ハリギリ	1	側縁部の削り痕が顕著である。
357	8602	243	板材	c-67-50-b	G		10.0	(9.8)	1.5	95.0			板目		1	側縁部が摩耗している。
358	8603	364	板材	c-67-70-c	G		(23.7)	(9.1)	1.2	151.0			板目	スギ	1	表面に斜め方向の刃傷が残る。
359	8604	222	板材	c-66-59-b	G		*(11.1)	(6.6)	3.7	167.0			板目	トネリコ	2	側縁部が丸い。
360	8605	363	板材	c-67-70-c	G		(17.0)	4.6	1.0	44.3			板目		1	表面の削り痕が顕著である。
361	8606	318	板材	c-67-70-c	G		(14.4)	3.8	1.3	46.7			板目		1	両端部が欠損している。
362	8607	597	板材	c-67-50-a	G		11.6	5.3	1.6	46.0		○	柾目		1	上端部が炭化している。
363	8608	614	板材	c-67-70-a	G		9.0	4.0	2.2	61.6		○	板目		1	上端部が炭化している。
364	8609	718	柱材	c-67-60-c	G		153.8	8.2	7.0	2567.0			股木		1	枝分かれ部を利用した「Y」形の受け部である。

表Ⅴ－21　A′地区掲載木製品 (14)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
365	8610	709	柱材	c-67-60-d	G		(152.6)	14.3	8.1	4694.0			股木		1	枝分かれ部を利用した「Y」形の受け部である。
366	8611	197	柱材	c-66-59-a	G		(51.4)	12.8	5.3	885.0	○		股木		1	枝分かれ部を角形に削った受け部である。
367	8612	707	柱材	c-66-59-b	G		(133.8)	7.6	7.4	3531.0	○		丸木		1	上端部を欠損。先端部は一面削りで極鋭角である。
368	8613	701	柱材	c-67-60-d	G		(142.6)	7.1	6.2	3101.0	○		丸木		1	上端部を欠損。先端部は四面削りで極鋭角である。
369	8614	708	柱材	c-66-59-b・c	G		(150.8)	11.8	10.1	8894.0			丸木		1	胴部が太く角形に削っている。先端は多面削り極鋭角。
370	8615	716	柱材	c-67-60-d	200		164.5	6.5	6.7	2253.0			丸木		1	上端部を欠損。先端部は交差する２面削りで極鋭角。
371	8616	704	母屋または垂木	c-67-60-c	G		(150.7)	7.0	7.0	3529.0	○		丸木		1	上端部を欠損。先端部は一面削りで極鋭角である。
372	8617	702	母屋または垂木	c-66-59-c	G		134.5	10.0	10.6	8254.0	○		丸木		1	上端部は両側から粗い削り。先端部は四面削りで鋭角。
373	8618	263	両端杭先状加工材	c-67-50-b	G		45.2	2.0	2.8	148.0		○	丸木		1	上端部四面削り、下端部一面削り。両端部が炭化。
374	8619	262	両端杭先状加工材	c-67-50-b	G		50.1	2.8	2.9	284.1			丸木		1	上端部平坦に近い削り、下端部三面削り。
375	8620	258	両端杭先状加工材	c-67-60-d	G		54.1	4.2	3.8	492.0			丸木		1	上端部二面削り、下端部四面削り。
376	8621	256	両端杭先状加工材	c-67-61-d	G		55.2	4.3	3.9	632.0			丸木		1	上端部四面削り、下端部三面削り。
377	8622	204	両端杭先状加工材	c-66-59-a	G		59.9	3.0	3.1	383.4			丸木		1	上端部四面削り、下端部三面削り。
378	8623	259	両端杭先状加工材	c-67-60-d	G		71.4	4.6	4.7	942.0			丸木		1	上端部は斜め上からの切痕多数。下端部は三面削り。
379	8624	261	両端杭先状加工材	c-67-60-d	G		60.1	5.2	5.0	1024.0			丸木		1	上端部一面削り、下端部４面削り。
380	8625	264	両端杭先状加工材	c-67-60-d	G		42.5	5.5	5.6	588.0			丸木		1	上端粗い四面削り、下端部交差する二面削り。
381	8626	254	枝切痕材	c-67-61-d	G		(52.8)	7.5	8.2	866.0			股木		1	枝分かれ部分は一面削り。下端部欠損。
382	8627	265	両端杭先状加工材	c-67-60-b	G		* 50.2	3.2	3.2	239.2	○		丸木		2	上端部対面する２面削り、下端部一面削り。
383	8628	184	両端杭先状加工材	c-66-69-b	G		* 35.4	4.1	3.4	279.0			丸木		2	上端部四面削り、下端部一面削り。平坦面作出。
384	8629	691	両端杭先状加工材	c-67-60-a	G		28.3	1.3	1.3	37.1			丸木		1	上端部一面削り、下端部四面削り。
385	8630	751	杭状材	c-66-48-b	G 145		14.1	2.2	2.5	47.0			丸木		1	上端部斜め上からの切痕多数。先端部四面削り。
386	8631	389	杭状材	c-67-60-d	G		30.7	2.9	2.9	160.7			丸木		1	上端部斜め上からの切痕多数。先端部五面削り。
387	8632	547	杭状材	c-66-48-b	G		(14.4)	2.6	2.7	57.2			丸木		1	上端部斜め上からの切痕多数。先端部四面削り。
388	8633	330	杭状材	c-67-60-c	G		14.6	4.0	4.2	115.0	○		丸木		1	上端部斜め上３方向からの切痕。先端部五面削り。
389	8634	315	木端	c-67-60-a	G		14.6	6.9	6.3	326.2	○		丸木		1	上端部は鈍角に削られ、下端部対面する二面削り。
390	8635	140	木端	c-66-48-b	G		9.3	3.8	2.9	70.0			丸木		1	表裏に平坦面作出。上端部は凸形に削り、下端部平ら。
391	8636	538	木端	c-66-48-c	G		(12.0)	4.3	2.7	89.0			丸木		1	表裏に平坦面作出。上端部は凸形に削り、下端部平ら。
392	8637	272	木端	c-67-60-b	G		8.2	5.1	4.9	113.0			丸木		1	両端部は顕著な切截痕である。

表Ⅴ－22　A′地区掲載木製品 (15)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
393	8638	561	木端	c-66-59-b	G		8.3	5.8	4.5	88.3			丸木		1	両端部に切截痕が顕著。
394	8639	303	炭化材	c-67-70-c	G		16.3	4.6	4.6	191.3		○	丸木	ナラ	1	先端部は杭状に切截され、上端部が炭化している。
395	8640	302	炭化材	c-67-70-c	G		19.7	5.2	4.1	198.4		○	1/4割	ナラ	1	下端部が炭化している。
396	8641	283	炭化材	c-67-70-c	G		(15.9)	3.6	3.6	132.2		○	丸木		1	先端部は杭状に切截され、上端部が炭化している。
397	8642	371	枝切痕材	c-66-49-c	G		23.6	9.3	3.8	219.7			股木		1	切截痕はすべて一面削り。
398	8643	246	みつあみ状紐	c-66-59-b	G		(8.9)	1.8	0.6	4.5					1	おぶり紐等の組紐部分に似る。
399	8644	52	撚り紐	c-66-59-b	G		(10.5)	0.5	0.5	1.2					2	ＬＲ撚り。他に比べやや細い。
400	8645	244	撚り縄	c-67-60-c	G		(7.4)	0.9	0.9	1.4					3	ＬＲ撚り。撚りがやや戻っている。
401	8646	217	撚り縄	c-67-70-b	G		(15.2)	1.4	1.4	3.8					3	ＬＲ撚り。他に同様の破片が３点ある。
402	8647	253	撚り縄	c-66-49-c	G		(14.9)	1.7	1.5	6.3					2	ＬＲ撚り。他に破片がある
403	8648	34	撚り縄	c-66-59-b	G		(13.5)	0.9	0.9	10.3					1	ＬＲ撚り。上部は撚りが戻っている。
404	8649	458	縄結目	c-67-50-d	G		(1.5)	1.4	0.6	0.7					1	繊維が幅広である。
405	8650	249	縄結目	c-66-59-a・b	G		(2.9)	1.6	0.7	1.2					1	繊維が幅広である。
406	8651	5	頭部挿入細帯状樹皮巻	c-66-49-c	G		※(18.0)	4.2	4.9	3.0				ｻｸﾗ?	1	コケシ頭状端部をスリットに挿入。中央に釘穴がある。
407	8652	235	頭部挿入細帯状樹皮巻	c-66-69-b	G		4.1	1.4	1.1	1.3				ｻｸﾗ?	1	コケシ頭状端部をスリットに挿入。
408	8653	420Ⓓ	頭部挿入細帯状樹皮巻	c-66-49-c	G		3.6	2.3	0.8	0.9				ｻｸﾗ?	1	コケシ頭状端部をスリットに挿入。
409	8654	4	頭部挿入細帯状樹皮巻	c-66-59-c	G		1.9	4.6	1.5	1.0				ｻｸﾗ?	1	コケシ頭状端部をスリットに挿入。
410	8655	8	頭部挿入細帯状樹皮巻	c-66-59-b	G		(12.3)	0.8	0.1	1.0				ｻｸﾗ?	1	コケシ頭状端部をスリットに挿入。スリット部欠損。
411	8656	601	釘打込細帯状樹皮巻	c-67-60-a	G		(14.0)	0.6	0.2	1.2					1	中央部に釘穴がある。
412	8657	247	釘打込細帯状樹皮巻	c-67-60-a	G		(15.4)	0.8	0.3	2.1				ｻｸﾗ?	1	中央部に釘穴がある。
413	8658	232	釘打込細帯状樹皮巻	c-66-48-a	G		(4.2)*	0.7	0.7	3.5					3	３枚重ねの樹皮。角形の対象物の形が残る。
414	8659	117	結束細帯状樹皮巻	c-66-49-a	G		(4.0)	0.8	0.2	4.0				ｻｸﾗ?	1	結目が残る。
415	8660	406Ⓓ	結束細帯状樹皮巻	c-66-48-b	G		(3.7)	0.9	0.1	1.7				ｻｸﾗ?	1	結目が残る。
416	8661	131	結束細帯状樹皮巻	c-66-48-b	G		(10.0)	1.0	0.2	8.0				ｻｸﾗ?	1	結目が残る。
417	8662	401Ⓓ	結束細帯状樹皮巻	c-66-49-d	G		(4.9)	0.7	0.2	3.0				ｻｸﾗ?	1	結目が残る。
418	8663	132	結束細帯状樹皮巻	c-66-59-a	G		(6.2)	1.2	0.2	11.0				ｻｸﾗ?	1	結目が残る。
419	8664	379	結束細帯状樹皮巻	c-66-49-a	G		4.7	0.8	0.2	2.6					1	結目が残る。
420	8665	295	結束細帯状樹皮巻	c-66-48-c	G		4.0	1.2	0.2	4.6				ｻｸﾗ?	1	結目が残る。

表Ⅴ－23　A′地区掲載木製品 (16)

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No		計測値 (cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量 (g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
421	8666	468	結束細帯状樹皮巻	c-66-48-c	G		(3.0)	0.7	0.2	1.4				ｻｸﾗ?		結目が残る。
422	8667	282②	結束細帯状樹皮巻	c-66-49-d	G		(2.6)	0.7	0.2	1.8				ｻｸﾗ?		結目が残る。
423	8668	153	結束細帯状樹皮巻	c-66-49-d	G		(5.6)	0.8	0.2	2.0				ｻｸﾗ?		結目が残る。
424	8669	3	結束細帯状樹皮巻	c-67-60-d	G		(6.6)	0.6	0.3	3.0				ｻｸﾗ?		結目が残る。端部に切截痕がある。
425	8670	401②	差込細帯状樹皮巻	c-66-49-d	G		(6.8)	0.8	0.3	6.9				ｻｸﾗ?		渦巻状。片側末端部が薄くなり、折れている。
426	8671	413	差込細帯状樹皮巻	c-66-49-d	G		(14.9)	4.9	1.1	17.9				ｻｸﾗ?		渦巻状。片側末端部が薄くなっている。
427	8672	162	螺旋太帯状樹皮巻	c-67-60-d	G		(12.7)	4.3	0.2	37.0				ｼﾗｶﾝﾊﾞ		樹皮がのびて螺旋状となっている。
428	8673	139	筒形太帯状樹皮巻	c-66-48-b	G		(12.6)	4.3	3.8	95.0				ｼﾗｶﾝﾊﾞ		筒形に巻かれている。
429	8674	80・81	漆塗折敷側板	c-66-59-b	G		(5.8)	3.2	0.8	14.6						一手切り折敷の角側板。

6)　自然遺物（表V－24）

掲載した遺物は、人力調査と土壌水洗とによって検出されたものである。A′地区はTa－a層を人力によって除去し、0黒層以下をクラムシェルで採取した。従って遺物の時期は擦文時代からアイヌ文化期である。

スギナ、スモモ、クリ、クルミ属は食用植物であり、ショウブ、キハダ、コブシは薬としても用いられる植物である。また、知里真志保「分類アイヌ語辞典　植物動物編」平凡社(1976)や更級源蔵・更級　光「コタン生物記　I」法政大学出版局(1976)によれば、アイヌの人々にとっても同じようにスギナ、スモモは食用植物であり、ショウブ、キハダ、コブシ、クリ、クルミ属は食用と薬用の植物であったようである。また、エゾヤマザクラは綴じ紐として、ミツバウツギ、コブシ、クリは用材とされていたようだ。ハンノキは祭祀用具の材に使われるようだ。同定された木製品の樹種にも、同様の樹木が検出されている。

当時の環境は表によってもうかがえる。例えば、スギナ、ショウブ、ヒルムシロ、ハンノキ、などは水辺や水湿のある低地に成育する。また一方、ミツバウツギ、キハダ、エゾヤマザクラなどは山地に成育する。しかし、これらの中には有用植物が多く含まれており、遺跡の自然環境のみを表しているわけではないので、樹種同定、花粉分析、珪藻分析などと比較検討されなければならない。

（鈴木　信）

表V－24　A′地区自然遺物

名称	発掘区					
	C－67－40	C－67－50	C－67－60	C－67－61	C－67－70	C－67－71
獣骨片						
甲虫片			332(0.06)			
カワシンジュガイ殻皮		293(28.95)	174(19.72)		33(2.90)	
茸類						
サルノコシカケ		7(144.04)	3(38.15)			
スギナ		17(0.96)				
キク科			1(+)		1(0.05)	
イヌホウズキ						
タデ科						
ショウブ		5(0.02)				
ヒルムシロ						
ハクウンボク			1(0.08)			
ミツバウツギ						
キハダ			8(0.27)			
エゾヤマザクラ		2(0.05)			1(0.04)	
スモモ		1(0.12)/49(14.31)	2(0.50)/70(39.69)		31(8.43)	
コブシ		14(1.14)	4(0.30)		2(0.17)	
コナラ			1(+)			
ブナ科		27(0.53)	4(0.17)		3(0.10)	
クリ						
ハンノキ		229(5.08)	110(1.42)			
クルミ属		38(25.79)/175(123.39)	4(2.91)/95(90.35)		3(1.79)/47(35.51)	

名称	発掘区					
	C－66－47	C－66－48	C－66－49	C－66－58	C－66－59	C－66－69
獣骨片			1(1.39)			
甲虫片		1(0.03)				
カワシンジュガイ殻皮	14(2.10)	13(0.01)	134(15.28)	3(0.32)	733(93.10)	5(0.87)
茸類	1(0.21)					
サルノコシカケ	1(8.89)	22(157.39)	4(227.89)			
スギナ		1(0.28)	4(0.31)	2(0.01)	8(0.47)	
キク科					1(+)	
イヌホウズキ					1(+)	
タデ科		1(+)				
ショウブ		1(+)	28(0.11)		9(0.04)	
ヒルムシロ					1(+)	
ハクウンボク						
ミツバウツギ	65(0.36)	151(1.04)				
キハダ	6(0.03)					
エゾヤマザクラ		2(0.08)	1(0.02)	3(0.07)		
スモモ	11(2.65)	2(0.49)/22(5.68)	1(0.10)/52(14.95)	6(1.17)/199(62.75)		
コブシ	5(0.37)	18(1.27)	8(0.76)	7(1.88)		
ブナ科						
コナラ			13(0.95)		18(1.45)	
クリ	1(0.10)				5(0.40)	
ハンノキ	16(0.70)	54(1.51)	132(3.90)		547(4.84)	
クルミ属	3(1.14)/16(10.02)	1(1.72)/16(19.53)	14(13.06)/96(61.88)	1(0.62)/0(0.00)	57(47.67)/455(307.32)	1(0.76)/2(2.73)

6　B地区の調査

(1)　包含層の遺物

1)　土器

出土した土器は、全部で7点である。105区で縄文土器片1点。109区で縄文土器片1点。102区の1点と105区の3点はA′地区の土器が掲載されている北大A式の深鉢(図V－25－8)と接合した。102区で擦文土器深鉢の胴部片が1点。　　(鈴木　信)

2)　石器・礫(図V－90～92、表V－25、図版V－41)

出土した石器は全部で4点である。105区で石鏃1点、108区で石鏃1点とつまみ付ナイフ1点。102区からはフレークが1点。礫•礫片は全部で288点である。出土地点の内訳は次のとおりである。101区で9点。102区で44点。103区で9点。104区で15点。105区で55点。106区で12点。107区で4点。108区で44点。109区で86点。

石器

石鏃(1・2)：1は凸基の石鏃、細かい果球が入る黒曜石を素材とする。片面に礫皮を残す。2は凸基の石鏃、片面に主要剝離面を残す。3はつまみ付ナイフ。急角度に調整されているほうの側縁の刃部はつぶれがみられる。

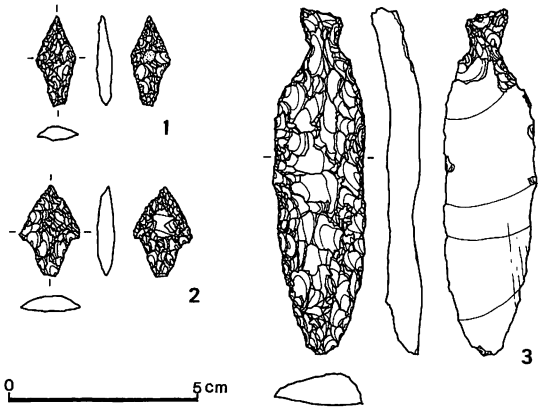
礫(図V－91・92)：グラフはB地区出土の完形の礫73点(礫片は215点)についての形態を岩質別に示した。縦軸は長さ／幅で平面を表し、横軸は厚さ／幅で断面形を表す。よって、縦軸の値が大きくなると平面形は棒状に近くなり、横軸の値が小さくなると断面形は扁平に近くなる。従って、グラフの破線で区画された領域は形態の違いを表している。

形態の名称は、初めに平面形の名、次に断面形の名を付け、それらを組合わせることで礫の名称が立体的になるようにし、略号としてアルファベットを付した。

横軸値0.8～1.0、縦軸値2.0以上の形態が棒状礫で略号はa。横軸値0.5～0.8、縦軸値2.0以上の形態が棒状楕円礫で略号はb。横軸値0.5以下、縦軸値2.0以上の形態が棒状扁平礫で略号はc。横軸値0.5～1.0、縦軸値1.2と横軸値0.5～0.8、縦軸値1.0～1.2の形態が楕円礫で略号はd。横軸値0.5以下、縦軸値1.0～1.2の形態が円扁平礫で略号はe。横軸値0.8～1.0以下、縦軸値1.0～1.2の形態が球礫で略号はf。

また、ドット記号に付くアンダーラインは礫の円磨度を表し、実線は亜円礫、線を付していないドットは円礫を表す。

砂岩は主に横軸値0.32～0.72、縦軸値1.22～1.99に集中している。棒状礫・棒状楕円礫・楕円礫・



図V－90　B地区石器

表V－25　B地区掲載石器

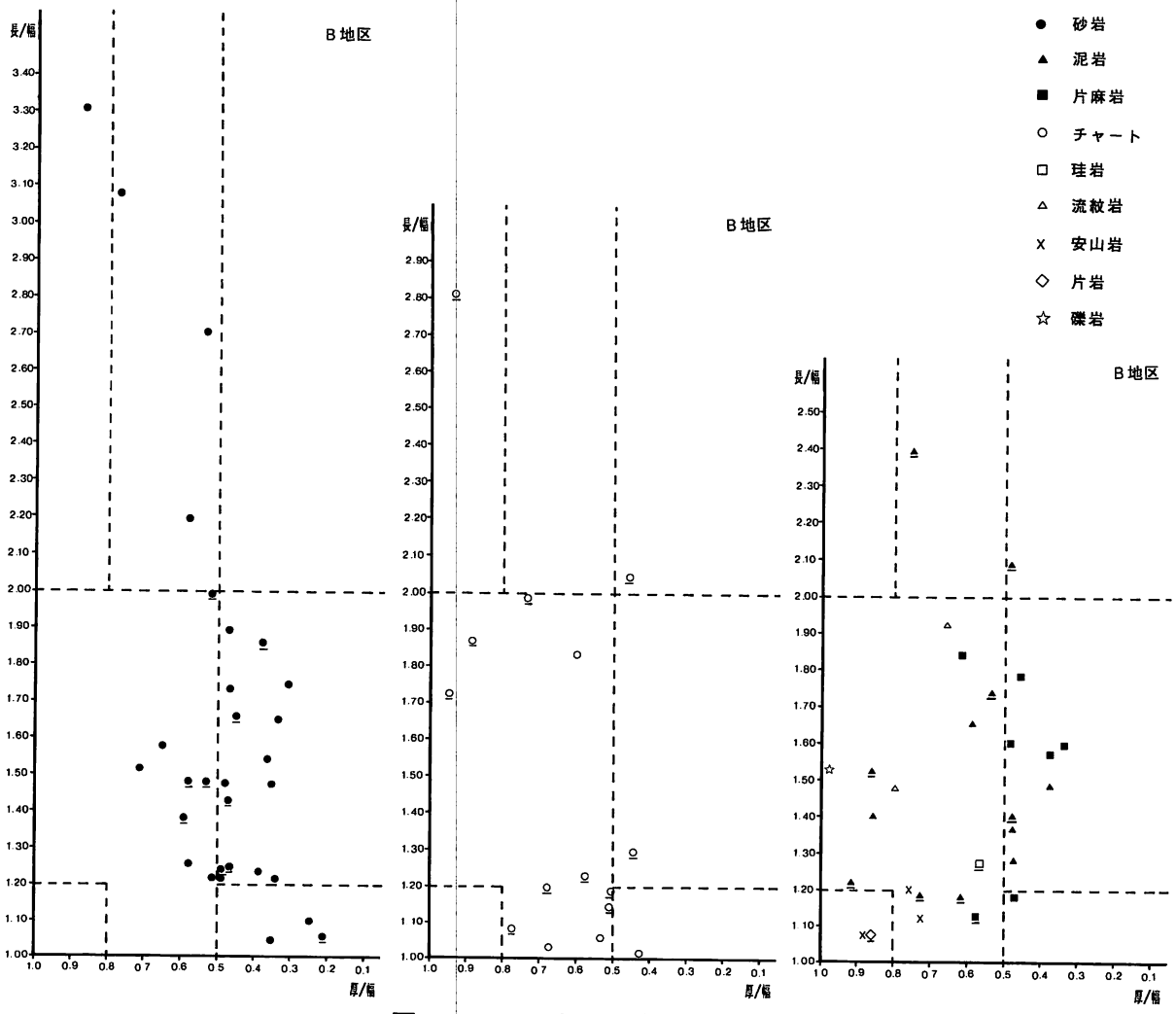
図番号	名　　称	発掘区	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材　質
1	石　　鏃	105区	24.0×10.5×3.0	0.6	黒曜石
2	石　　鏃	108区	24.5×14.5×4.0	1.2	黒曜石
3	つまみ付ナイフ	108区	92.0×24.5×8.9	21.4	黒曜石

楕円扁平礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円扁平礫（50.0%）によって構成されている。チャートは主に横軸値0.43～0.77、縦軸値1.0～1.3と横軸値0.46～0.95、縦軸値1.72～2.05の２か所に集中している。棒状扁平礫・楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫(73.3%)によって構成されている。砂岩に較べると一つの形態が卓越している。泥岩は主に横軸値0.38～0.92、縦軸値1.18～1.74にやや集中している。棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・楕円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫（53.8%）によって構成されている。泥岩はチャートや砂岩に比べると断面型にバリエーションをもつ。片麻岩主に横軸値0.34～0.62、縦軸値1.14～1.85に分布している。楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円扁平礫(57.1%)によって構成されている。

他には、楕円礫・球礫の安山岩３個。楕円礫の流紋岩２個。楕円礫の珪岩、球礫の片岩、楕円礫の礫岩が各１個ある。

砂岩・片麻岩は楕円扁平礫が多く、泥岩・チャートは楕円礫が多い。そのほかの礫は楕円礫が多い。

図Ⅴ－92上のグラフは岩質ごとの形態別重量を示した。砂岩の63.3%は0～80ｇの範囲にあり、40～60ｇの範囲にピークがある。また0～80ｇの範囲における形態は、棒状楕円礫・楕円礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。チャートの86.7%は0～100ｇの範囲にあり、20～40ｇの範囲にピークがある。また0～100ｇの範囲における形態は、棒状扁平礫・楕円礫・円



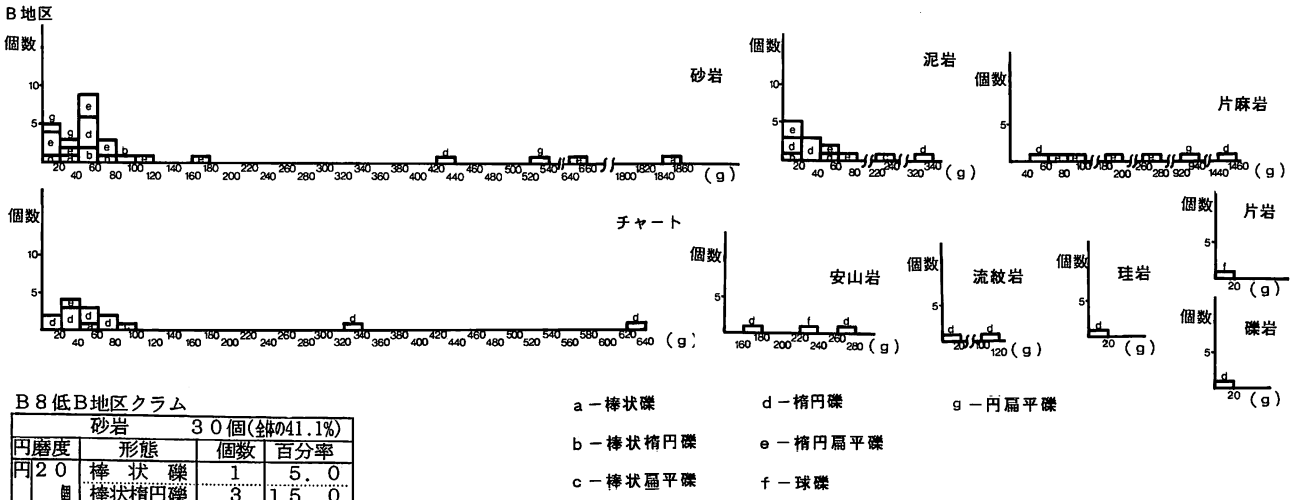
図Ⅴ－91　Ｂ地区礫グラフ・表 (1)

扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。泥岩の84.6%は0～80ｇの範囲にあり、0～20ｇの範囲にピークがある。また0～80ｇの範囲における形態は、棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。片麻岩、安山岩、流紋岩、珪岩、片岩、礫岩には特定の重量に集中することもなく、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。

砂岩・チャート・泥岩は0～60ｇの範囲の重量が選択されている。とりわけ砂岩については著しく偏って選択されている。

以上より形態と重量の関係は、砂岩・チャート・泥岩のように、代表的な形態が集中する重量に分散しているにもかかわらず特定の重量が選択されているものについては、選択の基準が重量にあること示している。

礫の円磨度は図Ⅲ－92下の表に示した。砂岩は全体の67.0%を円礫が占める。円礫と同じ形態の亜円礫も出土しており、円磨度の同異に関わらず形態は一様である。チャートは全体の73.0%が亜円礫



B８低B地区クラム

砂岩　３０個(全体の41.1%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 ２０個 67.0%	棒状礫	1	5.0
	棒状楕円礫	3	15.0
	楕円礫	4	20.0
	楕円扁平礫	10	50.0
	円扁平礫	2	10.0
亜円礫 １０個 33.0%	棒状楕円礫	1	10.0
	楕円礫	3	30.0
	楕円扁平礫	5	50.0
	円扁平礫	1	10.0

B８低B地区クラム

チャート　１５個(全体の20.5%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 ４個 27.0%	楕円礫	3	75.0
	球礫	1	25.0
亜円礫 １１個 73.0%	棒状礫	1	9.1
	棒状扁平礫	1	9.1
	楕円礫	8	72.7
	楕円扁平礫	1	9.1

B８低B地区クラム

流紋岩　２個(全体の 2.7%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 ２個 100%	楕円礫	2	100

B８低B地区クラム

泥岩　１３個(全体の17.8%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 ５個 38.5%	楕円礫	2	40.0
	楕円扁平礫	3	60.0
亜円礫 ８個 61.5%	棒状楕円礫	1	12.5
	棒状扁平礫	1	12.5
	楕円礫	5	62.5
	楕円扁平礫	1	12.5

B８低B地区クラム

珪岩　１個(全体の 1.4%)			
円磨度	形態	個数	百分率
亜円礫 １個 100%	楕円礫	1	100

B８低B地区クラム

片岩　１個(全体の 1.4%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 １個 100%	球礫	1	100

B８低B地区クラム

片麻岩　７個(全体の 9.6%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 ６個 86.0%	楕円礫	1	16.7
	楕円扁平礫	4	66.6
	円扁平礫	1	16.7
亜円礫 １個 14.0%	楕円礫	1	100

B８低B地区クラム

安山岩　３個(全体の 4.1%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 ３個 100%	楕円礫	2	66.7
	球礫	1	33.3

B８低B地区クラム

礫岩　１個(全体の 1.4%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 １個 100%	楕円礫	1	100

図Ⅴ－92　B地区礫グラフ・表 (2)

を占める。亜円礫に見られた棒状礫・棒状楕円礫・楕円扁平礫が円礫に見られない。泥岩もチャートと同じ状況を示す。片麻岩は円礫が86.0%を占めており、円磨度が似かよっている。

円磨度の相違は礫の採取地点（例えば、河川の上流・中流・下流、海浜という単一の円磨状況が起こりうる地点）の相違でもある。砂岩のように異なる円磨状況で一様な形態が選択されるものや、チャート・泥岩のように異なる円磨状況で異なる形態が選択されるものがある。　（鈴木　信）

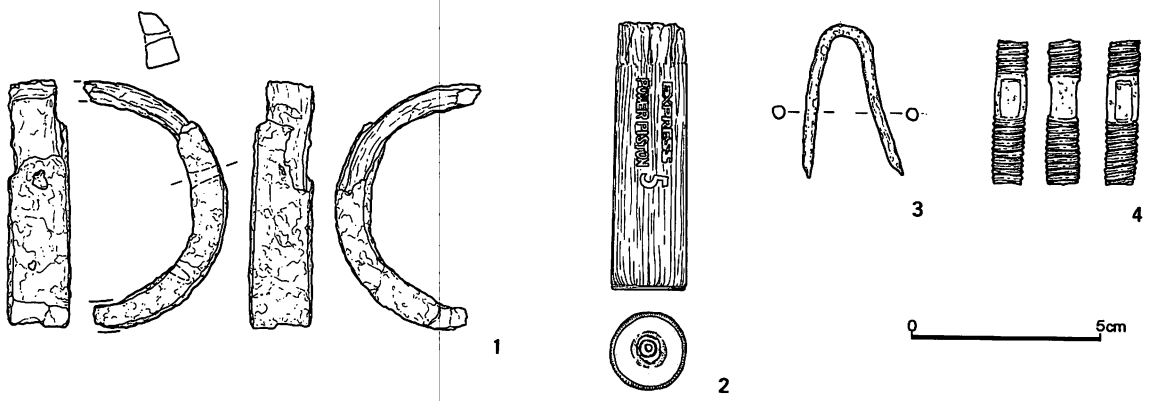
3)　金属製品（図V－93、表V－26、図版V－41）

出土した金属製品は、全部で4点である。出土地点の内訳は次のとおりである。101区から1点、102区から2点、105区から1点である。表土層あるいは盛土層中の遺物と考えられる。

1は輪状の鉄製品。三角形の貫通孔と貫通していない穴があいてる。重量があるので鉄分の溶脱が少なかったのであろう。2は散弾銃の薬莢、緑色した塩化ビニール製で「EXPRESS 5 POWER PISTON」と白色で印刷されている。3はU字の鉄釘、使用によってか片方が曲がっている。4は両方にネジが切ってあるボルト。金属光沢が残っている。　（鈴木　信）

表V－26　B地区掲載金属製品

図番号	金属番号	名　称	調査区	遺物番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)			重量	破片数	材質	備考
1	44	輪状の鉄製品	105	G	(3.9)	6.6	1.7	(34.7)	1	鉄	プラマイルMV－1減圧含浸
2	84	散弾　銃薬莢	101	G	7.0	2.1	2.0	6.3	1	塩化ビニール	インクラック処理
3	42	U字釘	102	G	4.1	2.7	3.1	3.5	1	鉄	プラマイルMV－1減圧含浸
4	43	ボルト	102	G	3.8	0.9	0.9	15.0	1	鉄	プラマイルMV－1減圧含浸



図V－93　B地区金属製品

4)　**木製品**（図Ⅴ－94～97、表Ⅴ－27、図版Ⅴ－41～42）

遺物は109区と103～105区に集中する傾向がある。クラムシェルによる包含層の採取時や運搬・堆積時に破損したり、折損したものが多い。

車櫂受軸部（1）：抉りの付く両側縁は欠損し、中央には欠損した円孔部の痕跡が残ることから、櫂受軸差込式と考えられる。木取りは柾目で、樹種はハンノキ属である。

回転式離鋸中柄（2）：両側面には棹と接合部するため返しのある抉りが作出されている。先端部摩耗し、断面が楕円形となっている。基部は鋭く尖り摩耗している。形態からは矢中柄やヤスなどの可能性も考えられる。樹種はアジサイ属である。

把手状製品（3）：扉の取って等に似た木製品である。下部には扉等に括り付けるための抉りが作出されており、欠損した上部も同様の構造であったと考えられる。

曲物底・蓋（4）：柾目板で、表に「Y」字に似たイトゥパ状の線刻がある。周縁は摩耗し丸くなっており、木釘などの痕跡はない。

樽蓋（5）：三枚組の樽の蓋で、隅丸方形の栓の挿入孔がある。表面に小さな炭化部分あり、片側の一枚のみが板目取りである。

盆状容器底（6・7）：6・7は板目（横木）取りされた同一個体と考えられ、わずかに湾曲している。7の側縁部はわずかに立ち上がる。

腰当状製品（8・9）：アッシ織時に織手の腰に当て、紐をひっかけて織物を張る湾曲した腰当板に似る。8・9は柾目取りされた同一個体と考えられ、8の下端部には円孔の痕跡が残存する。

縁付有孔角板材(10)：側縁部が立ち上がる角箱形の厚い板材である。板底には不規則な配置の大小の角孔が7か所に開けられている。小角孔はほぼ当間隔に一方にまとまっている。

箸状製品(11)：A′地区の両口箸のうち、一方の端部を平らにし、もう一方の先端部を細く尖らせたA_3類と考えられる。

軸状製品（12）：太い端部から先端部に向かって細くなるものであり、先端部は摩耗している。

抉入付角棒(13)：上端部が先の折れた切出しナイフ型となる角棒であり、上端部の側縁には下方からの抉りがある。

板片（14）：欠損した木口取りの板である。

抉入付丸棒状材（15）：丸木取りされた材の上端部にコケシ頭状の抉りがある。

角棒状材（16）：六角形に面取り加工された材の上端部には、炭化し抉れた部分がある

抉入付板材（17）：柾目取りの板材で、側縁部は抉り部分から欠損し有孔板材の可能性がある。

薄柾目棒状板材（18）：やや蒲鉾形の断面の薄い柾目板で、幅が先端部に向かって細くなる。

杭状作業台(19)：板目取りの角材の表面を楔状に削りだしている。表裏には刃物による打撃痕が顕著に認められる。裏面は、刃傷痕により凹んでいる。

木端（20）：木口面を平らに削った、断面三角形のものである。

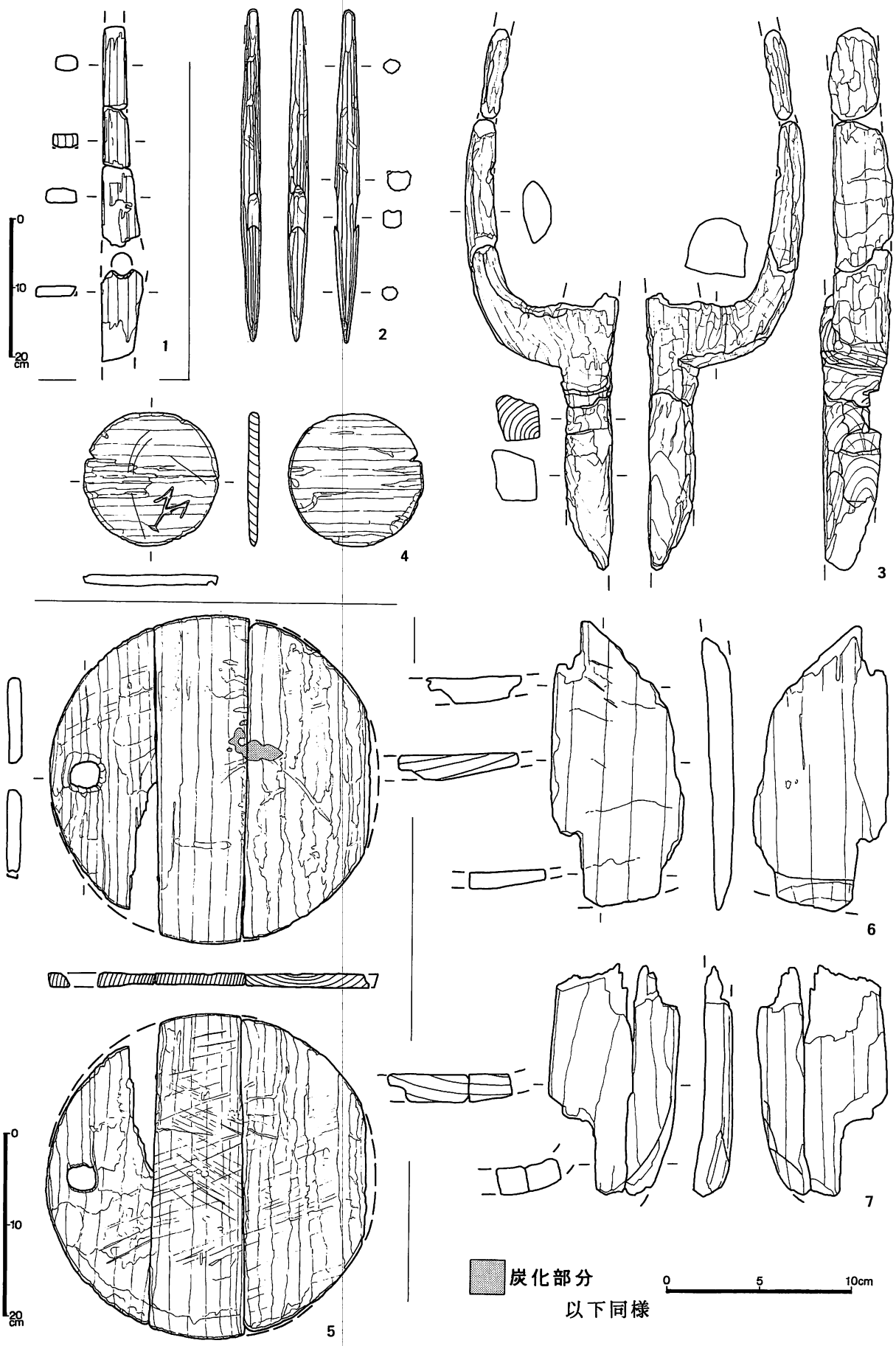
割材（21）：21は円孔部から縦割れしたものである。

有孔板材（22・23）：22は樹皮部分で円孔1か所ある。23は柾目に近い板で4か所に角孔がある。

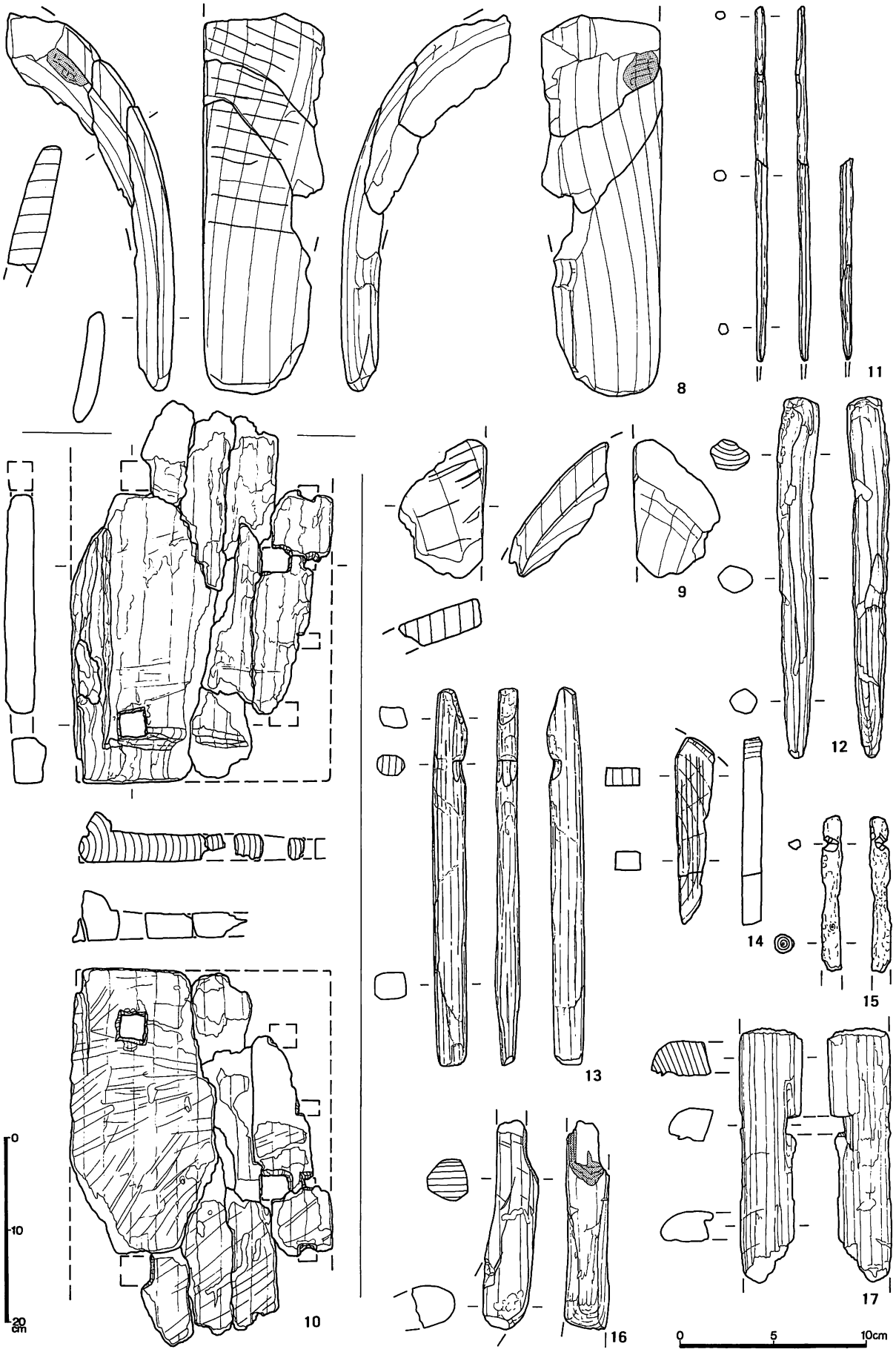
有孔角材（24・25）：24の表面は部分的に炭化し、上端部に角孔があり、側縁には2か所の抉りがある。25は角材の上部を削りだし、2か所に角孔を開けている。胴部には紐の圧痕が残存する。

杭状材（26）：先端部は1面削りで緩い鋭角となっており、24・25と組合う建材の可能性がある。

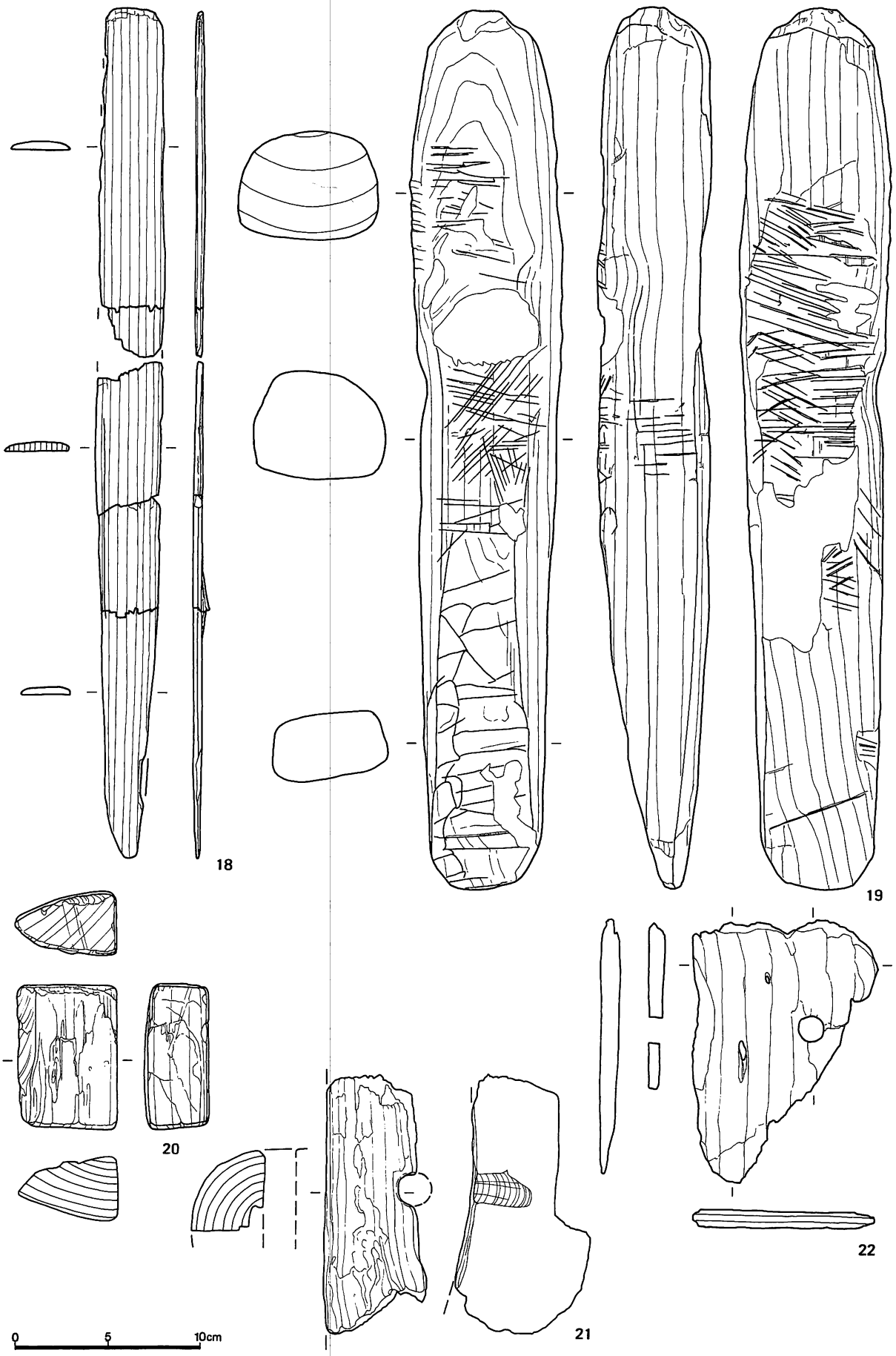
鈎状材（27）：枝分かれした材の股木部分で、下端部に切痕が認められる。



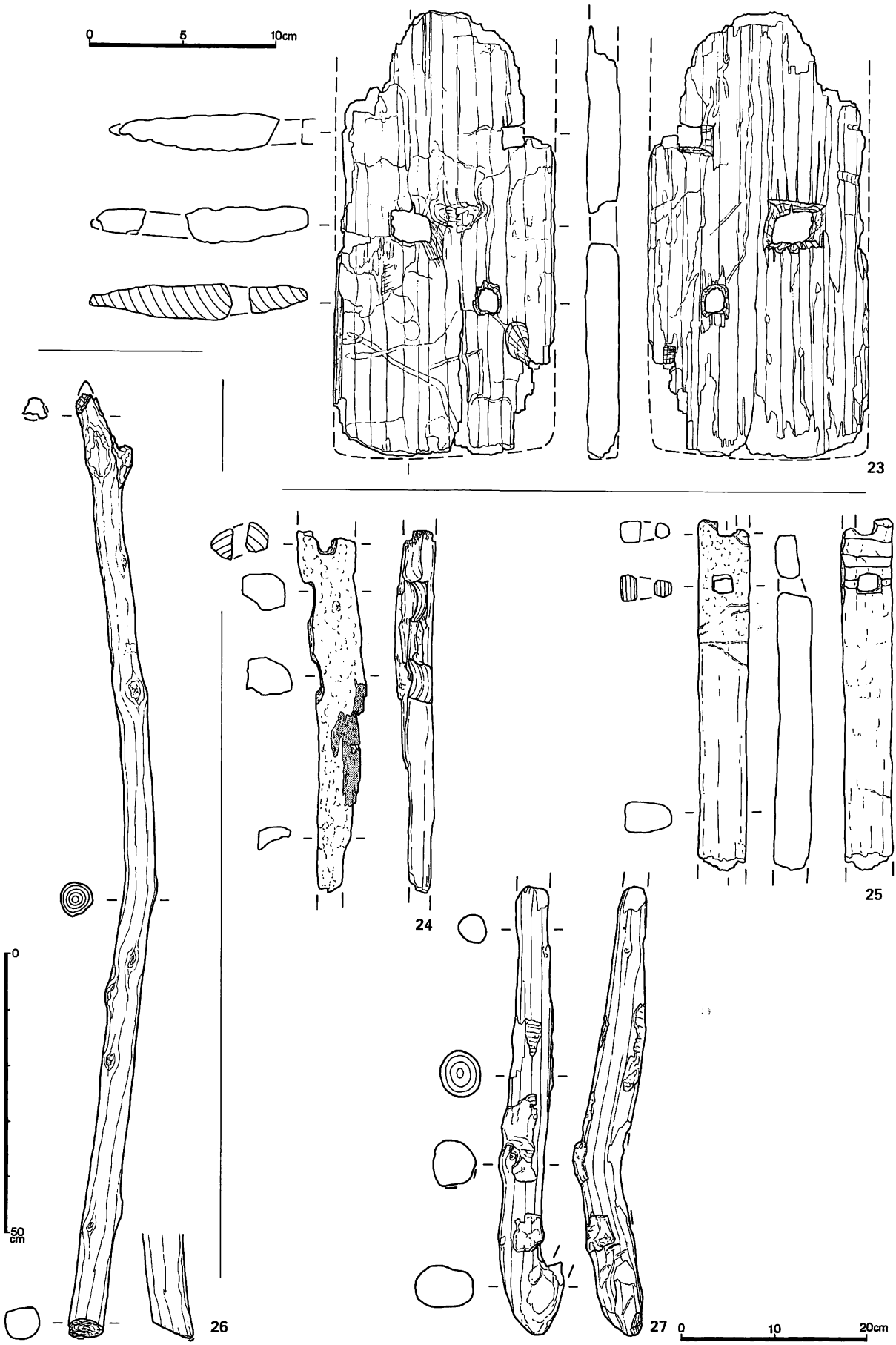
図Ⅴ－94　Ｂ地区木製品 (1)



図Ⅴ－95　B地区木製品 (2)



図Ｖ－96　Ｂ地区木製品 (3)



図Ⅴ－97　B地区木製品 (4)

表Ｖ－27　Ｂ地区掲載木製品

Ｇはグリッド取上げ。　＊は接合資料。　※は中間部をわずかに欠損する。数値は推定値。

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量(g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
1	8675	168	車櫂受軸部	101	G	※(48.1)	(6.1)	2.2	302.0			柾目	ﾊﾝﾉｷ	4	軸差込式。差込孔を欠損。
2	8676	461	回転式離頭銛中柄部	105	G	17.6	1.2	1.0	12.0			半割	ｱｼｻｲ	1	両側面に返しのある抉り。矢中柄、ヤスの可能性あり。
3	8677	171	把手状製品	109	G	※(23.7)	(7.4)	3.7	133.0			板目	ｶｴﾃﾞ	4	上部欠損。下部に抉りある。
4	8678	172	曲物底・蓋	105	G	7.1	7.2	0.6	22.0			柾目	ｽｷﾞ	1	表にイトッパ状の線刻。
5	8679	181	樽蓋	109	G	＊(35.2)	34.2	1.5	1230.0		○	柾目	ｽｷﾞ	3	表面に炭化部分ある。片側は板目取り。
6	8680	180	盆状容器底	109	G	(15.1)	(7.0)	1.4	80.0			板目	ﾊﾘｷﾞﾘ	1	わずかに湾曲している。７と同一個体。
7	8681	796	盆状容器底	109	G	＊(12.3)	(6.9)	1.7	72.0			板目	ﾊﾘｷﾞﾘ	2	側縁部がわずかに立ち上がる。
8	8682	169①	腰当状製品	109	G	＊(19.9)	2.1	(6.3)	179.0		○	柾目	ﾊﾘｷﾞﾘ	4	下側縁に抉りある。９と同一個体。
9	8683	169②	腰当状製品	109	G	(7.2)	1.5	(4.6)	37.0			柾目	ﾊﾘｷﾞﾘ	1	８と同一個体
10	8684	170	縁付有孔角板材	109	G	＊(40.5)	(27.9)	5.9	1996.0			柾目	ﾊﾘｷﾞﾘ	14	側縁部立ち上がる。７か所に角孔。
11	8685	460	箸状製品	109	G	＊(18.8)	0.7	0.6	4.5			――	ﾌﾅ	2	A_3類。胴部断面円形。
12	8686	242	軸状製品	108	G	19.0	2.0	1.6	65.0			1/4割	ﾄﾈﾘｺ	1	先端部摩耗。
13	8687	260	抉入付角棒状材	109	G	20.1	1.8	1.4	35.5			柾目	ｽｷﾞ	1	上部側縁に抉りある。
14	8688	631	板片	105	G	＊(9.9)	2.1	1.0	13.8			木口	ﾊﾝﾉｷ	2	円板状の板の破片。
15	8689	695	抉入付丸棒状材	101	G	(8.3)	1.0	1.6	4.6			丸木	ﾊﾝﾉｷ	1	上部に抉りある。
16	8690	178	角棒状材	109	G	(11.1)	2.9	2.4	36.0		○	柾目	ﾊﾘｷﾞﾘ	1	六角形に面取り加工。
17	8691	176	抉入付板材	108	G	(13.6)	3.3	1.9	49.0			柾目	ﾊﾘｷﾞﾘ	1	側縁部抉りある。縦割れした下有孔板材か。
18	8692	798	薄柾目棒状板	109	G	※(45.0)	3.5	0.5	46.0			柾目	ｽｷﾞ	5	先端部に向かって幅が狭くなる。
19	8693	175	杭状作業台	109	G	46.5	8.0	5.9	1322.0			板目	ｲﾇｴﾝｼﾞｭ	1	表裏に刃物の打撃痕多数ある。
20	8694	245	木端	102	G	7.7	5.3	3.4	98.0			板目	ﾊﾝﾉｷ	1	断面三角形。木口面に切痕ある。
21	8695	177	割材	108	G	(13.8)	(5.5)	7.2	169.0			割材	ﾊﾘｷﾞﾘ	1	円孔がある。
22	8696	626	有孔板材	105	G	(13.3)	(9.8)	1.0	60.0			板目	樹皮	1	円孔１か所。
23	8697	167	有孔板材	101	G	(23.7)	11.8	2.1	329.0			柾目	ﾓﾐ	1	角孔３か所。
24	8698	179	有孔角材	108	G	(38.2)	6.3	4.0	423.0		○	1/4割	ﾊﾘｷﾞﾘ	1	上部に角孔、側縁に抉りある。
25	8699	173	有孔角材	104	G	(37.3)	5.3	4.0	486.0			柾目	ｷﾊﾀﾞ	1	上部２か所に角孔ある。胴部に紐の圧痕。
26	8700	714	杭状材	101	G	(138.1)	6.5	5.8	2266.0	○		丸木	ｺﾅﾗ	1	先端部１面削り、緩鋭角。
27	8701	174	鈎状材	109	G	(47.9)	(6.5)	5.4	659.0	○		股木		1	鈎状の部分欠損。上部分解顕著。

5)　自然遺物（表Ⅴ－28）

ここに掲げた遺物は、土壌水洗によって検出されたものである。B地区は範囲確認調査のための盛土を残したままでクラムシェルで包含層を採取した。従って遺物の時期は擦文時代から現代までの幅を持つ。

B地区はA′地区に較べて種類数・量が少ない、しかしB地区で新たに検出されたものもある。アヤメ属、サワシバである。「分類アイヌ語辞典　植物動物編」や「コタン生物記　Ⅰ」によるれば、アイヌの人々にとってアヤメ属、サワシバは重要な植物ではなかったようだ。アヤメ属は山間に、サワシバは水分に恵まれた谷沿いの肥沃地に成育する。

（鈴木　信）

表Ⅴ－28　B地区自然遺物

名　称	発		掘		区
	101-①	101-②	１０２	１０３	１０４
獣骨片					
甲虫片					
カワシンジュガイ殻皮	１(0.07)				
サルノコシカケ	１(0.72)	２(56.85)		３(213.5)	
スギナ		２(0.12)			
キク科					
アヤメ					
カヤツリグサ科					
ショウブ					
エゾヤマザクラ					
コナラ	１５(0.84)	３２(0.98)	２１(0.71)	５(0.56)	２７(3.15)
ハンノキ	３５(0.79)	２０(0.87)	８３(6.21)	２３(0.14)	
サワシバ					
クルミ属					

名　称	発		掘		区
	１０５	１０６	１０７	１０８	１０９
獣骨片					１(5.77)
甲虫片		１６(＋)		１５(0.01)	８(＋)
カワシンジュガイ殻皮					
サルノコシカケ	１７(121.35)	２８(238.62)	４(85.73)	７２(1170.9)	１６(197.20)
スギナ	１(0.03)	５(0.49)		４(0.25)	２(0.03)
キク科					
アヤメ					１(＋)
カヤツリグサ科					３１(0.03)
ショウブ	６(0.03)	１８(0.09)		１５１(0.49)	
エゾヤマザクラ	１(＋)				
コナラ	５２(2.87)	６８(4.60)		９１(2.63)	１７(1.73)
ハンノキ	７６(＋)	９３(4.63)	２(0.10)	４５(0.12)	１１(0.87)
サワシバ					１(＋)
クルミ属	１(3.20)	１(3.99)			

7　C地区の調査

(1)　表土層の遺構（図V－98）

今回の調査において、表土層そのものは調査の対象になってはいないが、第0黒色土層上面を確認面とした上層遺構のかたちで存在した。遺構は杭穴状のピットの集中が3か所である。

1)　杭穴

杭が打ち込まれた際に、火山灰が下方へ引きずり込まれ、杭の先端部分に押し込められた状態で堆積する。このことから、杭が打たれた時期は、杭穴の先端部分にある火山灰の降下以後となり、覆土にTa－aを含むものは表土層の杭穴となる。ただし表土層上面、表土層中、Ta－a層上面のいずれから打たれたかはわからない。

杭穴は全部で33か所あった。分布は主にc－67－80とc－67－92とb－67－04に集中している。またこれらには配列の規則性は見当らない。c－67－80に集中する杭穴は、先端が0黒層まで達している。これらの確認面での直径は5 cmが1例、6 cmが1例、7 cmが3例、8 cmが2例、9 cmが3例、10 cmが1例である。c－67－92とb－67－04に集中する杭穴は、先端がI黒$_1$層まで達している。c－67－92に集中する杭穴の確認面での直径は5 cmが1例、6 cmが9例、8 cmが4例である。b－67－04に集中する杭穴の確認面での直径は3 cmが1例、5 cmが2例、6 cmが1例、10 cmが1例である。先端が0黒層まで達している杭穴の確認面での直径の平均は7.7 cm。先端がI黒$_1$層まで達している杭穴の確認面での直径の平均は6.4 cmで、先端が0黒層まで達している杭穴のほうがやや太い。

（鈴木　信）

(2)　第0黒色土層の遺構とその遺物

Ta－a層（1739年降下）とTa－b層（1667年降下）との間に形成された0黒層は本遺跡の主体となる遺物包含層である。遺構は、建物跡、木組、立杭、杭穴、集石、焼土、自然遺物集中、炭化物集中がある。遺物は、石製品、金属製品、木製品、樹皮製品、自然遺物が出土した。石製品、金属製品は、主にc－67－92にある建物跡付近に集中し、木製品、樹皮製品は調査区北側の標高4 m以下に多く分布する。

1)　建物跡（図V－99・101・102、表V－29・30、図版V－47）

0 H－1

位置　c－67－92・93

規模　面積約5 m²　立杭12本

調査　この掘建柱建物跡は、Ta－a層除去後すぐに0黒層上面で立杭列として確認された。

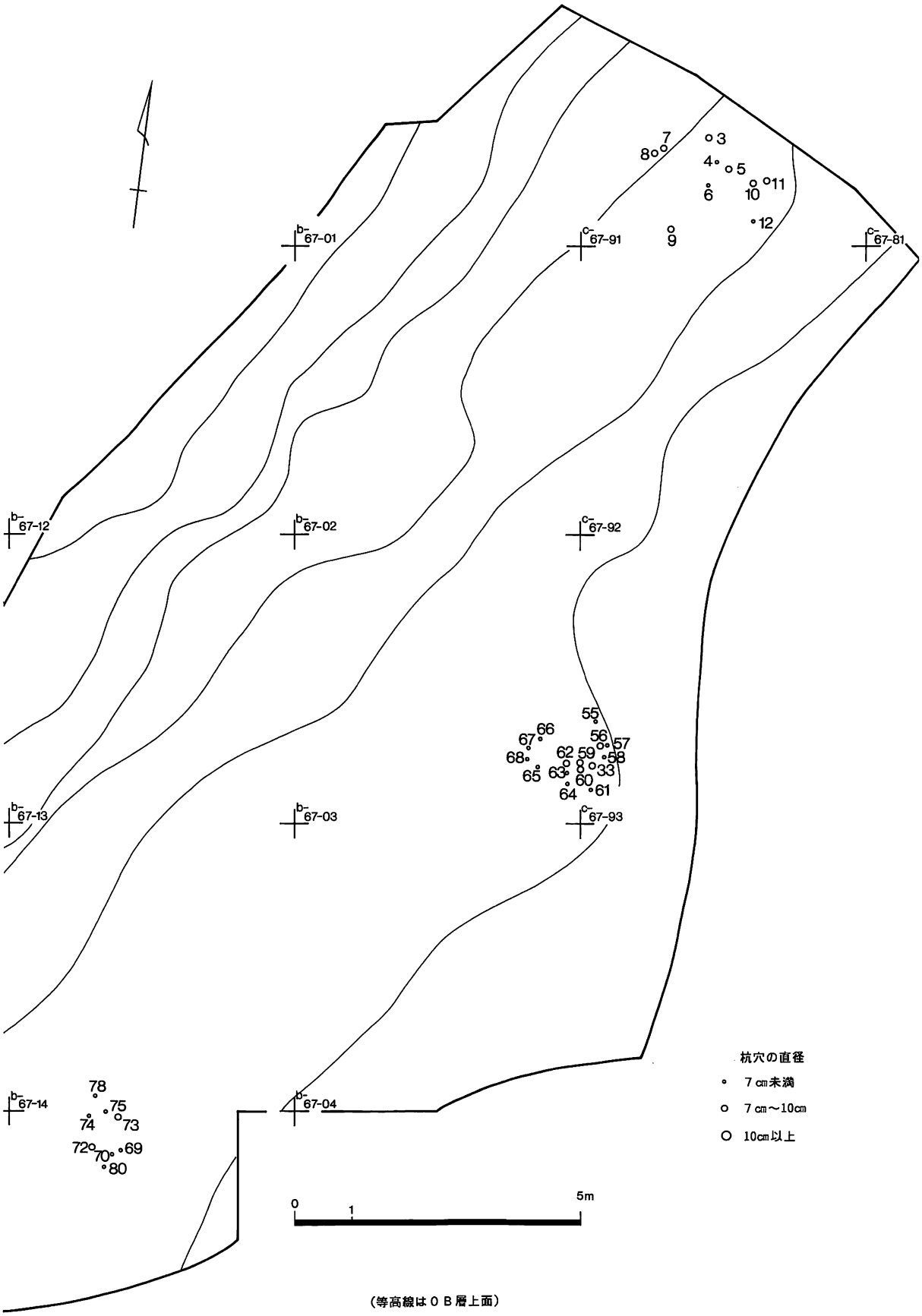
特徴　調査区中央の標高4 mの等高線がテラス状に張り出す部分に斜面と並行して建てられている。柱は樹皮を残したままの丸木を用いており、直径は6 cm未満～11 cmで8 cm・6 cmが多い。先端の切り出しは交差し、角度は鋭角である。斜面下側には7 cm～12 cmのやや太い柱が使われている。

内部には0 C－2を伴っている。周辺には0 W－1、0 C－5、0 N－1を伴っている。遺物の分布も建物跡の北東側に集中している。規模が小さいことから家族が常住する家屋とは考えにくく、作業小屋などの用途が考えられる。

この建物の内部のTa－bがなかったこと、Ta－a層除去後すぐに0黒層上面で立杭列として確認されたことから、Ta－b降下以前からTa－a降下直前まで建っていたと考えられる。

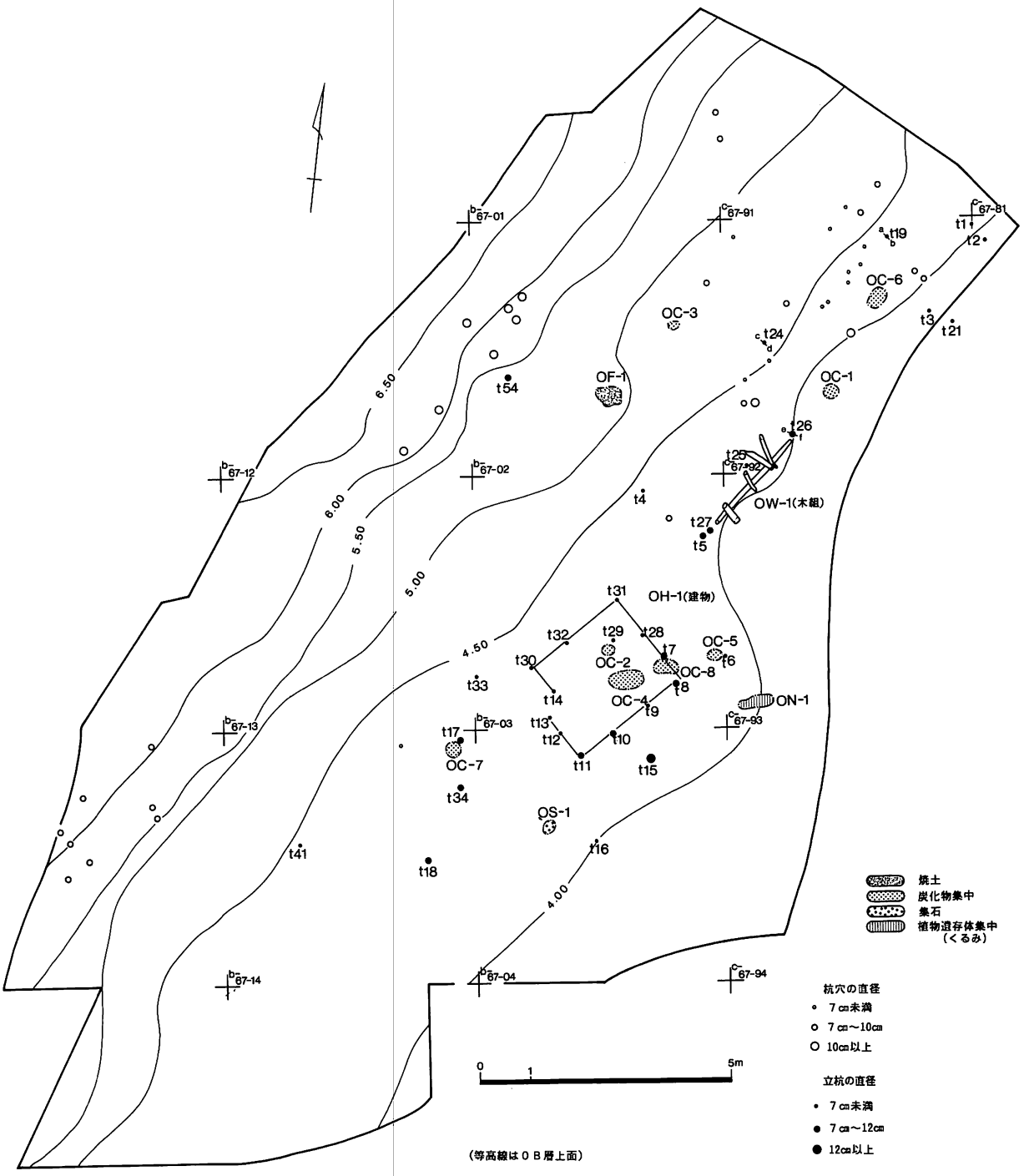
実測可能なものを図V－101・102の4～9に掲載した。カッコの中の記号のtは立杭を示し、数字はその番号を表す。2・4・5面削りのものがみられる。

（鈴木　信）



（等高線はＯＢ層上面）

図Ⅴ－98　Ｃ地区表土層遺構位置図



図Ｖ－99　Ｃ地区０黒層遺構位置図

2)　**木組**（図V－99・101、表V－29・30、図版V－47）

0 W－1

位置　c－67－81・82・92

規模　横木1本、立杭2本、材4本

調査　Ta－a層除去後すぐに0黒層上面で確認された。材4本は、横木に拠りかかった状態で出土した。この材4本は先端が尖った杭状をなしており、長さは40 cm～50 cmくらいである。

特徴　調査区北側の標高4 mの等高線上に斜面と並行して建てられている。横木は一部炭化した樹皮のない丸木を用いており、直径は8.5 cmで先端の切り出しは並行で、面取りを2面しており、角度はやや鋭角である。立杭2本はいずれも樹皮を残したままの丸木を用いており、先端はいずれも鋭角をなす。周辺には0 H－1・0 C－2・0 C－5・0 N－1が存在する。木組の北側には切片、枝切痕、箸状木製品、串状木製品などがやや多く分布している。

実測可能なものを図V－101の1～3に掲載した。2は杭の中ほどに6面の面取りがみられる。

（鈴木　信）

3)　**立杭**（図V－100～103、表V－29・30、図版V－46・47）

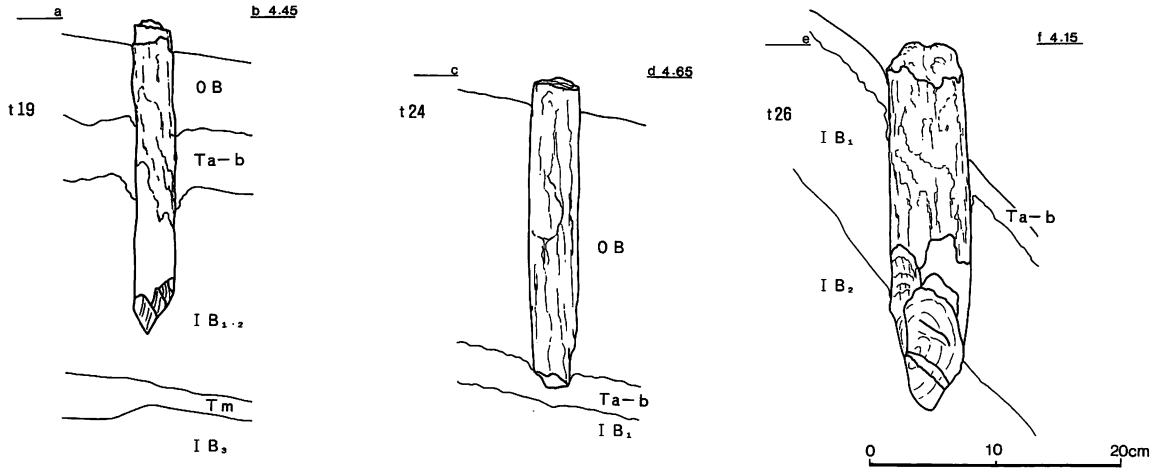
0黒層で上端部を確認できたものは20か所である。いずれも杭頭は腐朽して残存しておらず、打ち込み面は確認不能である。腐植が進行してなくなってしまった部分は腐朽した時点までは地上に出ていたと考えられる。従って、杭が打たれた時期は、残存していた上端部を確認した面の時期よりも遡ることはない。以上より、残存していた上端部を確認した面が立杭の所属する時期と考えられる。

分布は杭穴が斜面部分の標高6 mから斜面裾部の4.5 m付近までに分布するのにたいして、立杭は1例を除くと斜面裾部の標高4.5 m～4 mに分布する。分布は等高線に並行しており、調査区北側と0 W－1付近と0 H－1の南西側にややまとまっている。しかし、後述する杭穴に較べると、分布や配列に規則性はみられない。

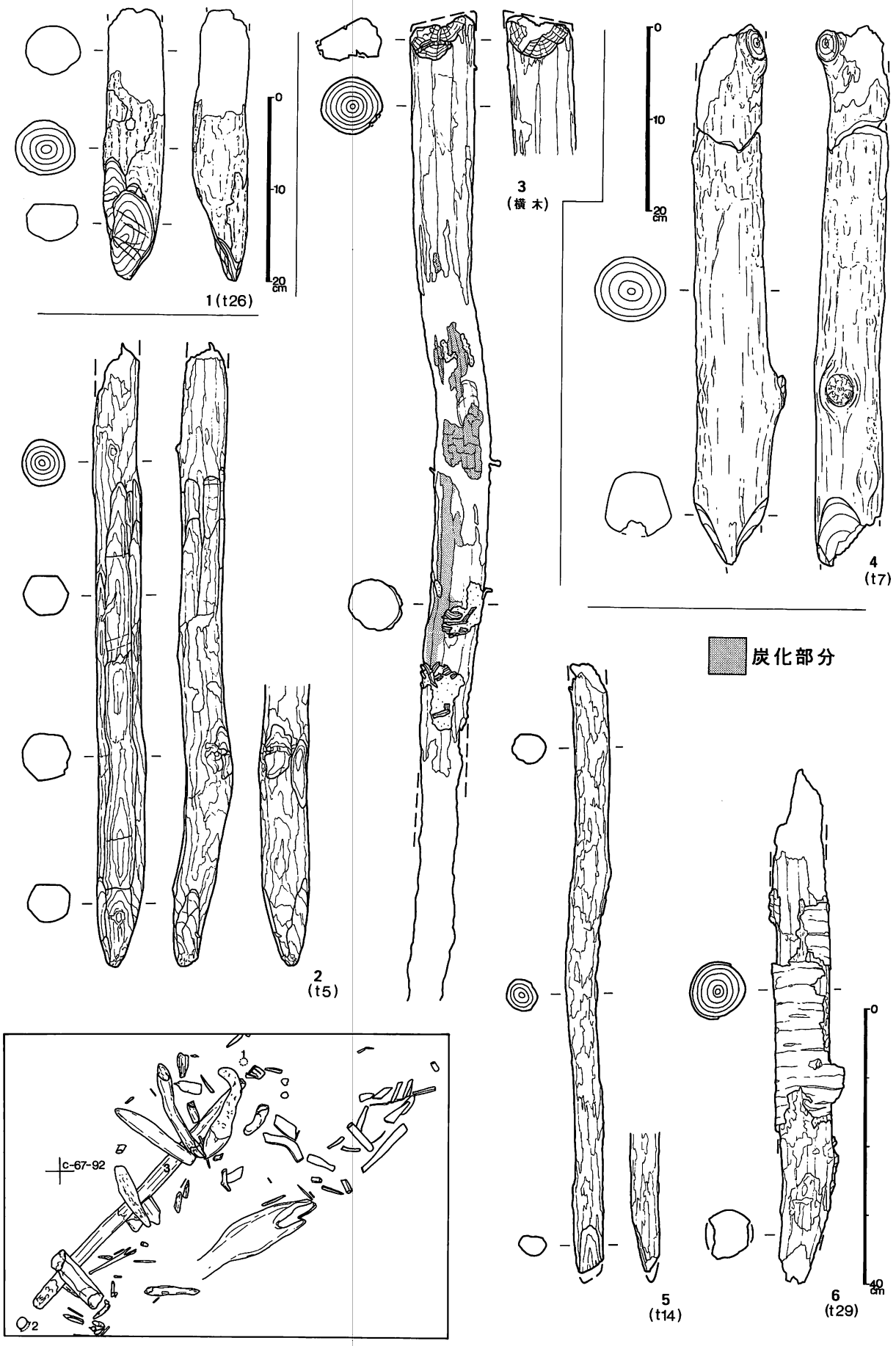
立杭の大きさは、現地で取上げられかつ計測できた個体の直径で表すと、3 cmが4点、4 cmが1点、5 cmが1点、6 cmが2点、7 cmが6点、8 cmが2点、9 cmが1点、10 cmが3点、直径のピークは7 cmにあり、3 cmと10 cmが多い。0 H－1のピークが8 cmにあるのにたいしてやや細目である。

実測可能なものを図V－102の10から図V－103の1～16に掲載した。15は丸木の一端を1面取したもの。16は柾目取の板材の一端を割剝いで先端部を作りだしている。その他の杭は丸木で先端部切出しが交差する多面取のものである。

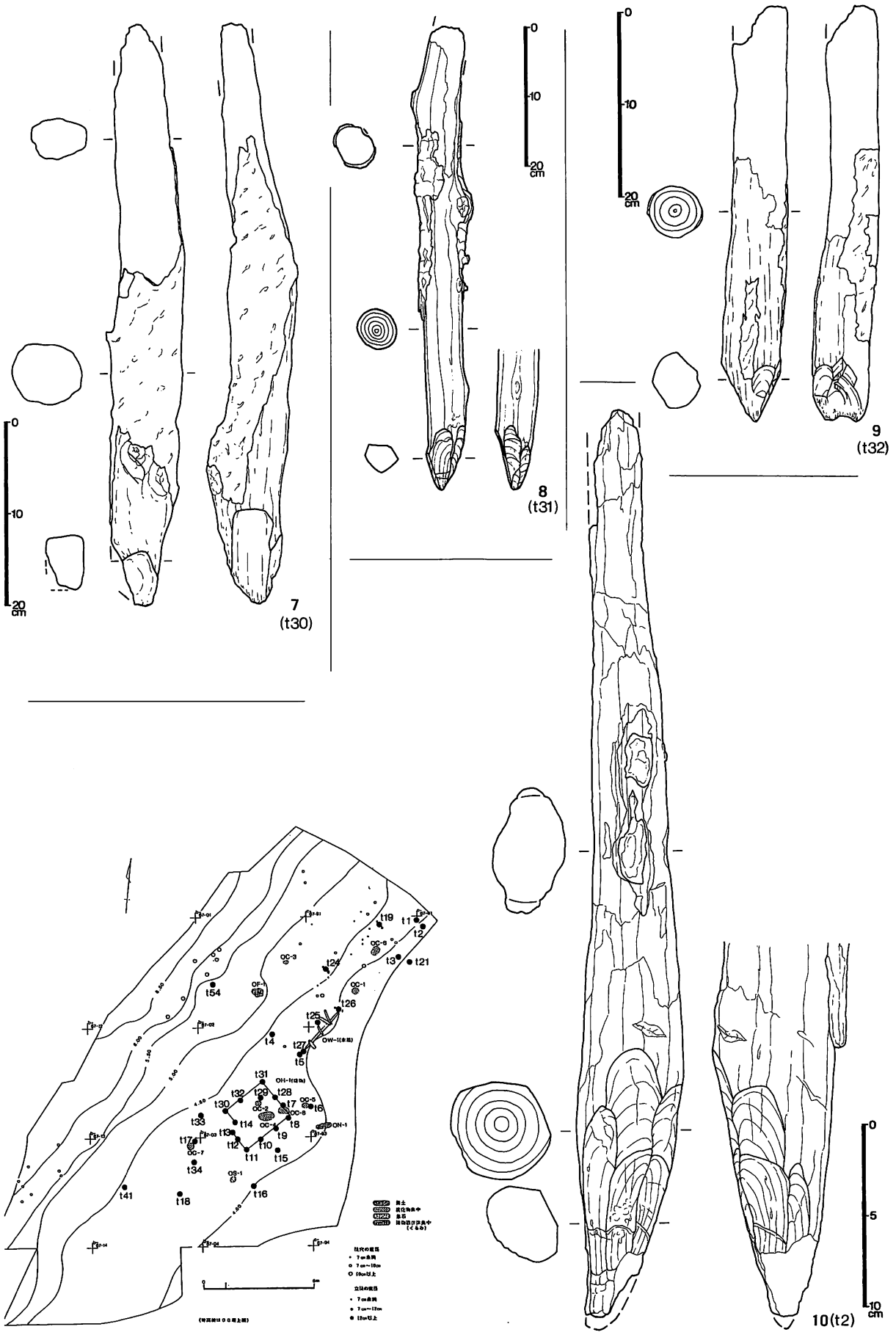
（鈴木　信）



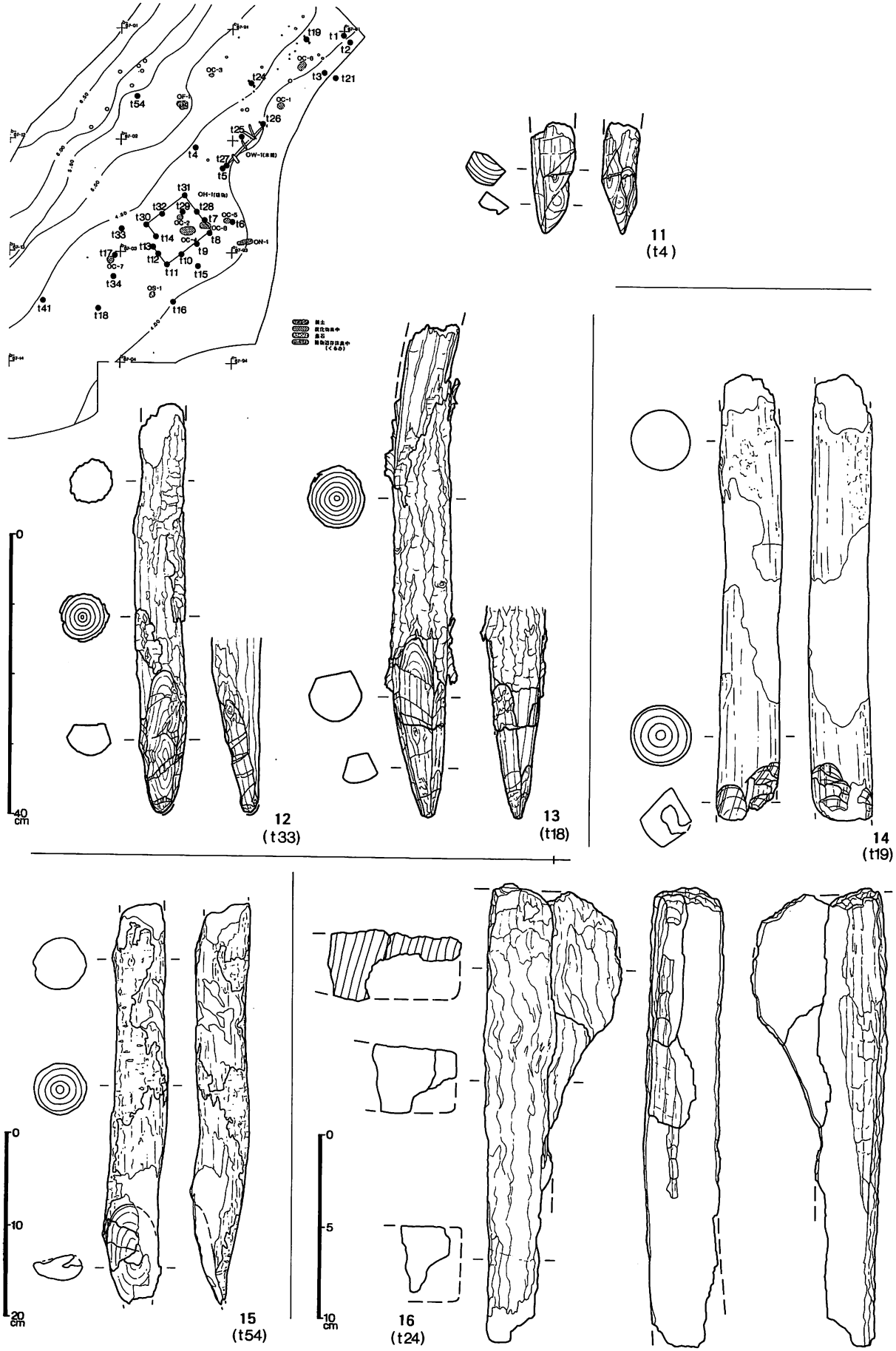
図V－100　C地区0黒層立杭断面図



図Ⅴ－101　Ｃ地区０黒層立杭 (1)



図Ⅴ－102　C地区0黒層立杭 (2)



図V－103　C地区0黒層立杭 (3)

表Ⅴ－29　Ｃ地区０黒層掲載立杭

図　番　号	遺構名	発　掘　区	確認面	方向(頭→先)	長さ×幅×厚さ(cm)	湿重量(g)	木取り	備　考
Ⅴ－101－1	立杭－26	c－67－81	0　B	ＮＥ→ＳＷ	(29.0)×6.5×6.0	(633)	丸　木	樹皮が残っている。
－2	－5	c－67－92	0　B	垂　直	(88.8)×6.2×7.0	(2680)	丸　木	樹皮あり。
－3	横　木	c－67－81・82	0　B	水　平	(143.8)×9.0×8.5	(5570)	丸　木	炭化部分あり。
－4	立杭－7	c－67－92	0　B	垂　直	(57.8)×9.6×7.4	(2119)	丸　木	２点接合。樹皮あり。
－5	－14	c－67－92	0　B	ＳＥ→ＮＷ	(86.9)×5.3×4.9	(1246)	丸　木	
－6	－29	c－67－92	0　B	垂　直	(73.4)×8.4×8.2	(2968)	丸　木	樹皮あり。
Ⅴ－102－7	－30	c－67－92	0　B	垂　直	(61.8)×7.7×8.2	(1852)	丸　木	樹皮あり。
－8	－31	c－67－92	0　B	垂　直	(66.0)×7.8×7.3	(1719)	丸　木	樹皮あり。
－9	－32	c－67－92	0　B	Ｓ　→　Ｎ	(44.4)×6.6×6.2	(1017)	丸　木	樹皮あり。
－10	－2	c－67－71	0　B	Ｗ　→　Ｅ	(48.5)×5.5×7.1	(686)	丸　木	
Ⅴ－103－11	－4	c－67－92	0　B	垂　直	(15.7)×6.0×4.9	(192)	丸　木	
－12	－33	c－67－92	0　B	垂　直	(57.9)×7.0×7.8	(1552)	丸　木	
－13	－18	b－67－03	0　B	Ｗ　→　Ｅ	(69.6)×10.0×10.3	(2922)	丸　木	樹皮あり。
－14	－19	c－67－81	0　B	Ｅ　→　Ｗ	(23.7)×3.4×3.2	(172)	丸　木	腐蝕部分に横方向にヒビが入る。下部は芯が抜けている。
－15	－54	c－67－91	0　B	垂　直	(43.0)×6.0×5.8	(631)	丸　木	樹皮が残っている。
－16	－24	c－67－81	0　B	Ｎ　→　Ｓ	(24.5)×(7.1)×(3.9)	(229)	板	立杭。

表V－30　C地区0黒層立杭

遺構名	図番号	発掘区	確認面	方向(頭→先)	直径(cm)	遺構名	図番号	発掘区	確認面	方向(頭→先)	直径(cm)
立杭－1	未掲載	c－67－81	0 B	垂直	3	立杭－18	V－103－13	b－67－03	0 B	W→E	10.3
－2	V－102－10	c－67－71	0 B	W → E	7.1	－19	V－103－14	c－67－81	0 B	E → W	3.4
－3	未掲載	c－67－81	0 B	E → W	3	－21	未掲載	c－67－81	0 B	NE→SW	7
－4	V－103－11	c－67－92	0 B	垂直	6.0	－24	V－103－16	c－67－81	0 B	N → S	(7.1)
－5	V－101－2	c－67－92	0 B	垂直	7.0	－25	未掲載	c－67－81	0 B	SW→NE	7
－6	未掲載	c－67－82・92	0 B	SW→NE	3	－26	V－101－1	c－67－81	0 B	NE→SW	6.5
－7	V－101－4	c－67－92	0 B	垂直	9.6	－27	未掲載	c－67－92	0 B	垂直	9
－8	未掲載	c－67－92	0 B	垂直	10	－28	未掲載	c－67－92	0 B	垂直	3
－9	未掲載	c－67－92	0 B	SW→NE	6	－29	V－101－6	c－67－92	0 B	垂直	8.4
－10	未掲載	c－67－93	0 B	垂直	8	－30	V－102－7	c－67－92	0 B	垂直	8.2
－11	未掲載	c－67－93	0 B	E → W	6	－31	V－102－8	c－67－92	0 B	垂直	7.8
－12	未掲載	c－67－92	0 B	E → W	6	－32	V－102－9	c－67－92	0 B	S → N	6.6
－13	未掲載	c－67－92	0 B	SW→NE	5	－33	V－103－12	c－67－92	0 B	垂直	7.8
－14	V－101－5	c－67－92	0 B	SE→NW	5.3	－34	未掲載	b－67－03	0 B	NE→SW	10
－15	未掲載	c－67－93	0 B	垂直	8	－41	未掲載	b－67－03	0 B	N → S	4
－16	未掲載	c－67－93	0 B	E → W	5	－54	V－103－15	c－67－91	0 B	垂直	6.0
－17	未掲載	b－67－03	0 B	E → W	10						

直径は掲載遺物では実測による最大径、他は現場での略測による概数を記した。

表V－31　C地区0黒層杭穴

遺構名	発掘区	確認面	直径(cm)	遺構名	発掘区	確認面	直径(cm)
杭穴－1	c－67－80	0 B	8	杭穴－36	c－67－81	0 B	5
－2	c－67－80	0 B	10	－37	c－67－80	0 B	8
－14	c－67－91	0 B	12	－38	c－67－81	0 B	5
－15	c－67－91	0 B	12	－39	c－67－80	0 B	10
－16	c－67－91	0 B	17	－40	c－67－81	0 B	3
－17	b－67－01	0 B	13	－41	c－67－81	0 B	5
－18	c－67－91	0 B	12	－42	c－67－80	0 B	4
－19	b－67－01	0 B	11	－43	c－67－81	0 B	4
－20	b－67－01	0 B	15	－44	c－67－80	0 B	7
－21	b－67－03	0 B	10	－45	c－67－81	0 B	10
－22	b－67－13	0 B	9	－46	c－67－81	0 B	3
－23	b－67－13	0 B	10	－47	c－67－81	0 B	3
－24	b－67－13	0 B	10	－48	c－67－81	0 B	4
－25	b－67－13	0 B	9	－49	c－67－81	0 B	4
－26	b－67－13	0 B	8	－50	c－67－81	0 B	20
－27	b－67－13	0 B	7	－51	c－67－92	0 B	8
－28	b－67－13	0 B	8	－52	c－67－81	0 B	4
－30	c－67－81	0 B	3	－53	b－67－03	0 B	5
－35	c－67－81	0 B	8				

4)　**杭穴**（図V－99、表V－31、図版V－46－1）

0黒層の杭穴は覆土にTa－aを含まず、Ta－bを含むものである。ただし0黒層上面、0黒層中のいずれから打たれたかはわからない。

杭穴は全部で37か所あった。分布は主にc－67－81とc－67－91とb－67－13に集中している。

c－67－81に集中する杭穴は、先端がI黒$_{1.2}$層まで達している。確認面での直径は3 cmが4点、4 cmが5点、5 cmが3点、7 cmが1点、10 cmが1点である。直径は3 cmから10 cmまでの変位があり、ピークは4 cmにある。配列は標高4.5 cmの等高線に沿ってみられるが、間隔はまちまちで、直径も他の杭穴の集中と較べると小さいことから、小規模な遺構の集合体である可能性が高い。付近には切片や枝切痕や箸状木製品や串状木製品などが非常に多く分布している。

c－67－91に集中する杭穴は、先端がTa－b層まで達している。確認面での直径は11 cmが1点、12 cmが3点、13 cmが1点、15 cmが1点、17 cmが1点である。直径は11 cmから17 cmまでの変位があり、ピークは12 cmにある。配列は標高6 mの等高線に沿ってみられる。c－67－81に集中する杭穴よりも径が大きいことから、0 W－1のような遺構の可能性がある。直径の組合せでみると2か所くらい存在しそうだ。斜面下の0 F－1と関係のありそうな杭穴列が標高5.5 mの等高線に沿ってみられる。b－67－13に集中する杭穴は、先端がTa－b層まで達している。杭穴の確認面での直径は7 cmが1例、8 cmが2例、9 cmが2例で、10 cmが3例である。直径は7 cmから10 cmまでの変位があり、ピークは10 cmにある。配列は標高6 mと5.5 mの等高線に沿ってみられる。c－67－81に集中する杭穴よりも径が大きいことから、0 W－1のような遺構の可能性がある。（鈴木　信）

5)　**集石**（図V－104、表V－32）

0 S－1

位置　c－67－93

規模　52.0 g～108.8 g　7点

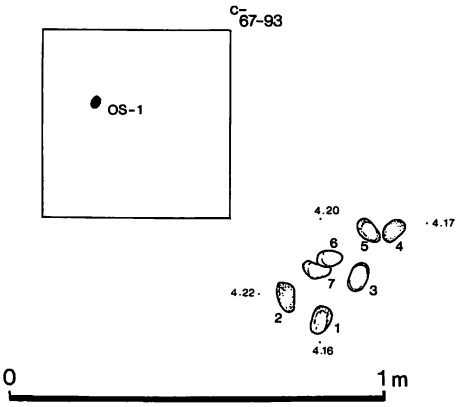
調査　0黒層中から出土している。

特徴　礫は互いに重なりあうことがなくやや離れた状態で出土した。岩質は泥岩が多く、形態は棒状楕円礫と円扁平礫が多い。集石の周りには木製品などの遺物は出土していない。昨年出土した集石は80 g～400 gで片麻岩が多いのに較べ、泥岩の小さい礫で構成されているのが特徴である。構築された時期は一番下の礫が0黒層の上位なのでTa－a降下年代に近いとおもわれる。　（鈴木　信）

6)　**焼土**（図V－105、図版V－48－1・2）

0 F－1

位置　c－67－91　標高4 mの等高線がテラス状に張り出した部分に位置する。



図V－104　C地区0黒層集石

表V－32　C地区0黒層集石計測値

図番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材・石質	備考
1	8.58×5.16×0.96	69.0	安山岩　円礫	楕円扁平礫
2	6.45×5.23×1.26	69.9	砂岩　円礫	楕円扁平礫
3	8.18×4.28×2.23	108.8	泥岩　円礫	楕円礫
4	6.97×4.18×1.91	81.9	砂岩　円礫	楕円扁平礫
5	5.58×3.71×1.53	52.0	チャート　円礫	楕円扁平礫
6	7.43×3.18×2.26	61.8	泥岩　亜円礫	棒状楕円礫
7	6.42×3.03×1.83	62.1	泥岩　亜円礫	棒状楕円礫

規模　0.55×0.45×0.06

調査　Ta－a 層除去後すぐに0黒層上面で確認された。

特徴　掘り込みのある焼土壙である。平面形は不整楕円形を呈し、断面は丸い壙底から内弯して立ち上がる壁によって構成されている。覆土は、上層(イ)は、灰と被熱したサケ科、マイワシ、コイ科の骨を含む。下層(ロ)は、灰と炭化物が少量混じっている。また、下層からは被熱していない片麻岩の棒状扁平礫(12.08 cm×5.42 cm×1.64 cm, 186.4 g) が出土している。またフローテーションの結果アワが検出されている。テラス状に張り出した部分に立地すること、その斜面上の直径の太い杭穴列と合わせて考えるとたんなる焼土とはいえないかも知れない。0黒層上面で検出されていることからTa－a 火山灰が降下した年代に近い遺構である。　（鈴木　信）

7)　クルミ集中（図V－99）

0 N－1

位置　c－67－82

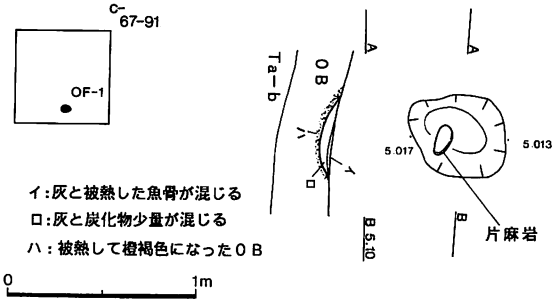
規模　0.70×0.24

調査　Ta－a 層除去後すぐに0黒層上面で確認された。

特徴　クルミの殻が21.1 g 出土している。標高4 m の等高線に直交するように位置している。クルミの広がりが斜面の上から下に向かって放射状に広がっていることやフローテーションの結果、タデ属、タラノキ属、ブドウ属などの種子が発見されていることから、おそらくは植物質の残滓がまとめて投棄されていたものと考えられる。

8)　炭化物集中（図V－99、表V－33）

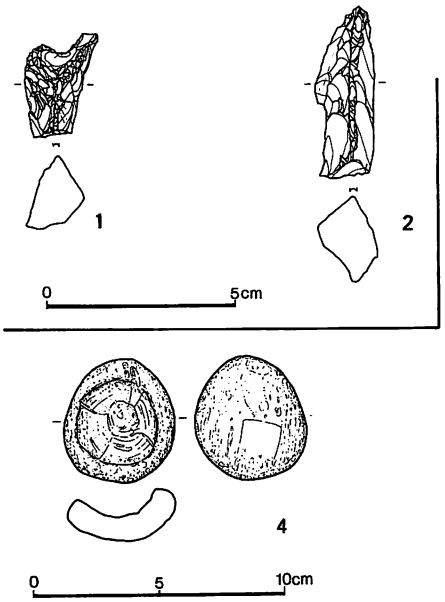
炭化物集中はいずれも掘り込みなどの遺構を伴わず、炭化物が平坦にしかも不整形に広がっていた状態の遺構を言う。0 C－1・3・6は0黒層上層で確認されており、調査区の北側に集まっている。0 C－2・5は0黒層上面で確認されており、0 H－1の内外にある。0 C－4・7・8は0黒層中位で確認されており、c－67－92 付近に集まっている。フローテーションの結果、0 C－1・4・7からはアサ、0 C－6・8からはヒエが検出されている。各炭化物集中からはフローテーションによっていろいろな種子が検出されている。このことは、炭化した大型植物遺存体と合わせて考えなければならないが、遺構の性格を反映している可能性が強い。　（鈴木　信）



図V－105　C地区0黒層焼土

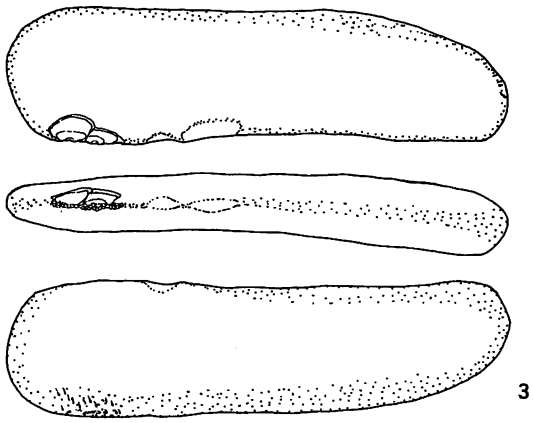
表V－33　C地区0黒層炭化物集中

名　　称	発　掘　区	構 築 面	長軸×短軸(m)
OC－1	c－67－81	0B上層	0.32×0.32
－2	c－67－92	0B上面	0.20×0.20
－3	c－67－91	0B上層	0.20×0.18
－4	c-67-92~93	0B中層	0.70×0.40
－5	c－67－92	0B上面	0.30×0.23
－6	c－67－81	0B上層	0.40×0.36
－7	c－67－03	0B中層	0.33×0.32
－8	c－67－92	0B中層	0.51×0.31

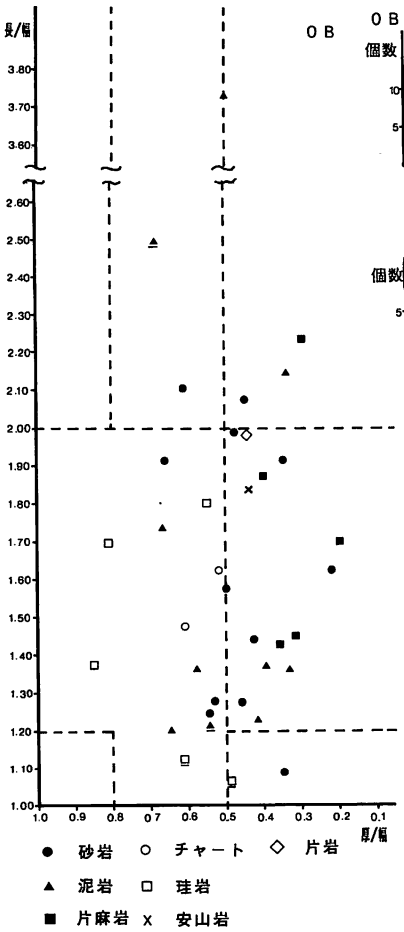


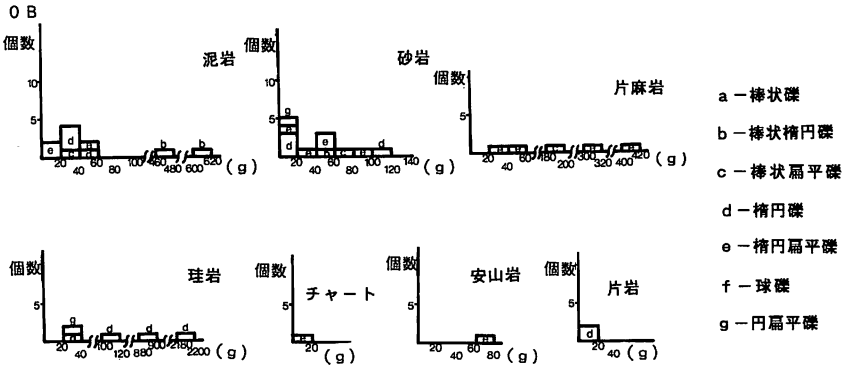
表Ⅴ－34　C地区0黒層掲載石器・石製品

図番号	名　称	発　掘　区	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材　質
1	火打石	c－67－80	27.0×20.0×19.0	8.8	チャート
2	火打石	c－67－92	45.0×16.0×22.5	16.8	チャート
3	たたき石	b－67－81	19.5×5.4×2.2	462.4	緑色泥岩
4	軽石製品	c－67－91	49.1×44.0×19.2	10.7	流紋岩



図Ⅴ－106　C地区0黒層石器・石製品





0B

泥岩　10個(全体の27.8%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	8個 80.0%	棒状楕円礫	1	12.5
		棒状扁平礫	1	12.5
		楕円礫	3	37.5
		楕円扁平礫	3	37.5
亜円礫	2個 20.0%	棒状楕円礫	1	50.0
		楕円礫	1	50.0

B8低C区　0B

砂岩　12個(全体の33.3%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	12個 100%	棒状楕円礫	1	8.3
		棒状扁平礫	1	8.3
		楕円礫	4	33.3
		楕円扁平礫	5	41.7
		円扁平礫	1	8.3

0B

珪岩　5個(全体の13.9%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	3個 60.0%	楕円礫	3	100
亜角礫	2個 40.0%	楕円礫	1	50.0
		円扁平礫	1	50.0

0B

片麻岩　5個(全体の13.9%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	5個 100%	棒状扁平礫	1	20.0
		楕円扁平礫	4	80.0

0B

チャート　2個(全体の5.7%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	2個 100%	楕円礫	2	100

0B

安山岩　1個(全体の2.8%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	1個 100%	楕円扁平礫	1	100

0B

片岩　1個(全体の2.8%)				
円磨度		形態	個数	百分率
円礫	1個 100%	楕円扁平礫	1	100

図Ⅴ－107　C地区0黒層礫グラフ・表

(3)　第0黒色土層の遺物

1)　石器・石製品・礫（図V－106・107、表V－34、図版V－49－1）

石器・石製品

1と2は赤色チャートの火打石。3は緑色泥岩のたたき石。4は軽石製品、火皿のミニチュアか。

礫（図V－107）：グラフは0黒層の完形の礫36点（礫片208点）について形態を岩質別に示した。砂岩は主に横軸値0.35～0.65、縦軸値1.24～2.10にやや集中している。棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫(33.3%）と楕円扁平礫(41.7%）によって構成されている。泥岩は主に横軸値0.33～0.65、縦軸値1.20～1.37に集中している。棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・楕円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫(33.3%）と楕円扁平礫(40.0%)によって構成されている。泥岩は砂岩に比べるとより丸い平面形が集まっている。片麻岩は主に横軸値0.18～0.83、縦軸値1.42～2.24に分布している。棒状扁平礫・楕円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円扁平礫(80.0%)によって構成されている。片麻岩は泥岩や砂岩に比べるとより扁平な礫が集まっている。珪岩は横軸値0.49～0.85、縦軸値1.06～1.80に広がりを持つ。楕円礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫(80.0%)によって構成されている。各岩質を通じて楕円礫・楕円扁平礫が多い。

図V－107右上のグラフは岩質ごとの形態別重量を示した。砂岩の75.0%は0～60gの範囲にあり、0～20gの範囲にピークがある。また0～60gの範囲における形態は、棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。泥岩の80.0%は0～60gの範囲にあり、20～60gの範囲にピークがある。また0～60gの範囲における形態は、棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。片麻岩と珪岩は特定の重量に集中することもなく、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。砂岩・泥岩は0～60gの範囲の重量が選択されている。

形態と重量の関係は、砂岩・泥岩のように、代表的な形態が集中せず各重量に分散して、かつ特定の重量が選択されているものについては、選択の基準が重量にあることを示している。（鈴木　信）

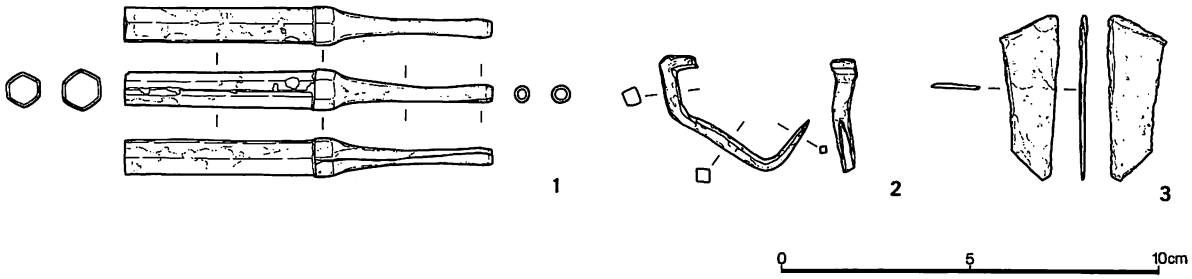
2)　金属製品（口絵4－5、図V－108、表V－35、図版V－49－2～4）

1は真鍮製キセル吸口、古泉分類の吸口第I類B。断面六角形の肩部分の上から吸口を被せている。彫金は無いが古式の水口キセルに近い形をしている。2は銅製の釘。3は銅板片で端に切断痕がある。

（鈴木　信）

表V－35　C地区0黒層掲載金属製品

図番号	金属番号	名　称	調査区	遺物番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量	破片数	材質	備考
1	75	キセル　吸口	c－67－92	3	9.8　1.1　1.0	8.0	1	真鍮	インクラック処理
2	76	釘	c－67－91	4	3.0　4.0　0.7	5.7	1	銅	インクラック処理
3	77	銅板片	b－67－03	5	4.4　1.6　0.2	0.6	1	銅	インクラック処理



図V－108　C地区0黒層金属製品

3)　**木製品・樹皮製品**（図Ⅴ－109～114、表Ⅴ－36～37、図版Ⅴ－50～53）

木製品・樹皮製品の密度は、A′地区と比較すると非常に希薄である。その多くはc－67－81に集中する傾向があり、その他にはc－67－82、c－67－91、b－67－03の三地点に小さな集中箇所がある。分布は建物跡、木組、立杭、杭穴、炭化物集などの遺構を避けるように外側に少しずれている。

握部付容器（1）：容器の先端部は欠損している。一木を横木取りして握部から容器部までを刳り出している。器厚が薄く、底面は平坦である。握部の断面は円形である。当初はあか汲みと考えていたが、容器の器厚が薄く側縁も低いため、水を少量しか汲み出せないことや容器底部分と握部に段差がなく水平構造であるため、水を汲みだすときに握部を握った指が床面にあたり作業に不都合であることが判明し名称を変更した。また、餌入れとも推定されたが、おりの中に餌入れが引き込まれないように容器の握部側を高くするという特徴的な構造はない。

櫂柄握部（2）：櫂の柄末端に装着される「Y」字形の握部である。柄挿入部は長方形で、挿入された柄が残存し一方から目釘が打ち込まれている。

回転式離頭銛中柄部（3）：表面の摩耗が著しい。尖端部の断面は楕円形であり、基部は槍部と密着させるための平坦面が削りだされている。接合のための抉り部は、小さな「V」字状の抉りとなっており、固定・接合のための紐の圧痕が認められる。平坦面の角度から一本式の中柄と考えられる。

柄・棹との接合部（4・5）：魚突き鉤台部または回転式離頭銛中柄の柄や棹との接合部（基部）である。4は柄に装着するための帯状の抉り部と裏面に平坦面が作出されている。5は二本組合式の回転式離頭銛中柄部の基部端と考えられる。稜線には3か所の「V」字状の刻目があり、側面に短い斜め二本線でイトゥパが刻まれている。「キ」の字状に見えるのは亀裂のためである。上部は意図的に切截されている。

針状製品（6）：上端部は斜め一面削りし、その削りの下部に円孔が貫通している。削られた部分の髄は失われ凹んでおり、貫通した円孔につながっている。全体の表面加工は丹念で、下端部に平坦面が作出されている。

鉤形木鍬（7）：股木を利用した木鍬の頭部破片である。尖端部は欠損し、鉤の頂点は切截され、断面が半円形となる。

抉入付丸棒状材（8）：端部の平らなコケシ状の頭部の直下は、帯状に深く抉られている。それより下は腐朽と土圧によりつぶれている。

抉入付丸材（9）：樹皮の残る丸木材の両端を粗く平らに削り、中央を角形に抉っている。

曲物底板(10)：曲物の柄杓底板と考えられる。柾目板の二枚合わせの底であり、側面に木釘孔が3か所認められる。板の上方には木釘孔が1か所あり、挿入した柄の固定具を裏から木釘によって接合するためものである。

栓(11～14)：すべて円錐台形となるものである。頭部と挿入部の先が平坦となり、樽の鏡板に差し込まれたものと考えられる。11の頭部には、蓋につけられた焼き印の一部が認められる。12の頭部はつぶれている。

樽側板(15)：板目板で口縁部側が厚く、底付近の内面は薄く削られている。底付近の内面には底板がはめこまれた痕跡として横走する傷痕が多数認められ、直下には底板を固定していた木釘が残存している。

箸状製品(16～20)：基準はA′地区と同様であるが、尖端・基部を欠損するものが多いため細分は難しい。18は**A類**とされる両口箸で、角形となる胴部の両端部を平らにしたA_1類であろう。17は**C類**とされる寸胴箸に近いものであり、丸木取りの両端を欠損している。16は**B類**とされる片口箸であり、

上部が楕円形となっている。

串状製品（21～23）：箸状製品と同じく、基準はA′地区と同様である。21の断面形は角形となり**B類**に近いのものである。先端部は斜め削りであり、上端部に焼痕が認められる。23の断面形は扁平な楕円形となる**D類**である。また、先端部は薄く幅広に加工され、斜め削りで尖らせているため**C類**に近い要素を持ち側縁の中央に刻目がある。焼痕が認められる。**H類**（22）はタケ・ササを割裂き、薄くしたものである。

ピン状製品（24～35•38）：26～31は太い端部側から尖端部に向かって全面を粗く削りだしたものである。24•33の断面は楕円形である。33は上端部を欠損しているため串状製品の可能性もある。25の断面は円形であり、両端部の摩耗が著しい。32•38の断面は角形である。38は極太の粗い削りのもので、表面に焼痕がある。34の断面は半円形で、表面が摩耗している。35は先端の断面が角形となるように削りだしたものである。先端部のみ差し込むものであろう。

軸状製品（36•37）：太い端部から先端部に向かって全面を丹念に削りだしたものである。36は半割材で断面が楕円形となるものである。先端部は欠損している。37の表面は丸木の稜だけを削り、先端部は丹念に削りだしている。

丸材（39・40）：39の先端部は炭化している。40の両端は腐朽している。丸木取りの串状製品の可能性がある。

薄柾目棒状板材（41）:断面がやや蒲鉾形となる、箆状の柾目板である。下端部の表面は刃部のように削りだされている。

抉入付蒲鉾状材(42)：断面がやや凸形となる板材である。上端部が角形に加工され、その直下は角形に浅く抉られている。抉り部の稜線は樹皮などが巻かれたようにつぶれている。

有孔板材(43)：上部がやや弧状となる角形の柾目板である。四隅には各1か所ずつ、やや斜めに穿孔された角孔が開けられている。表面には板作成時の斜め方向の削りが顕著に残る。

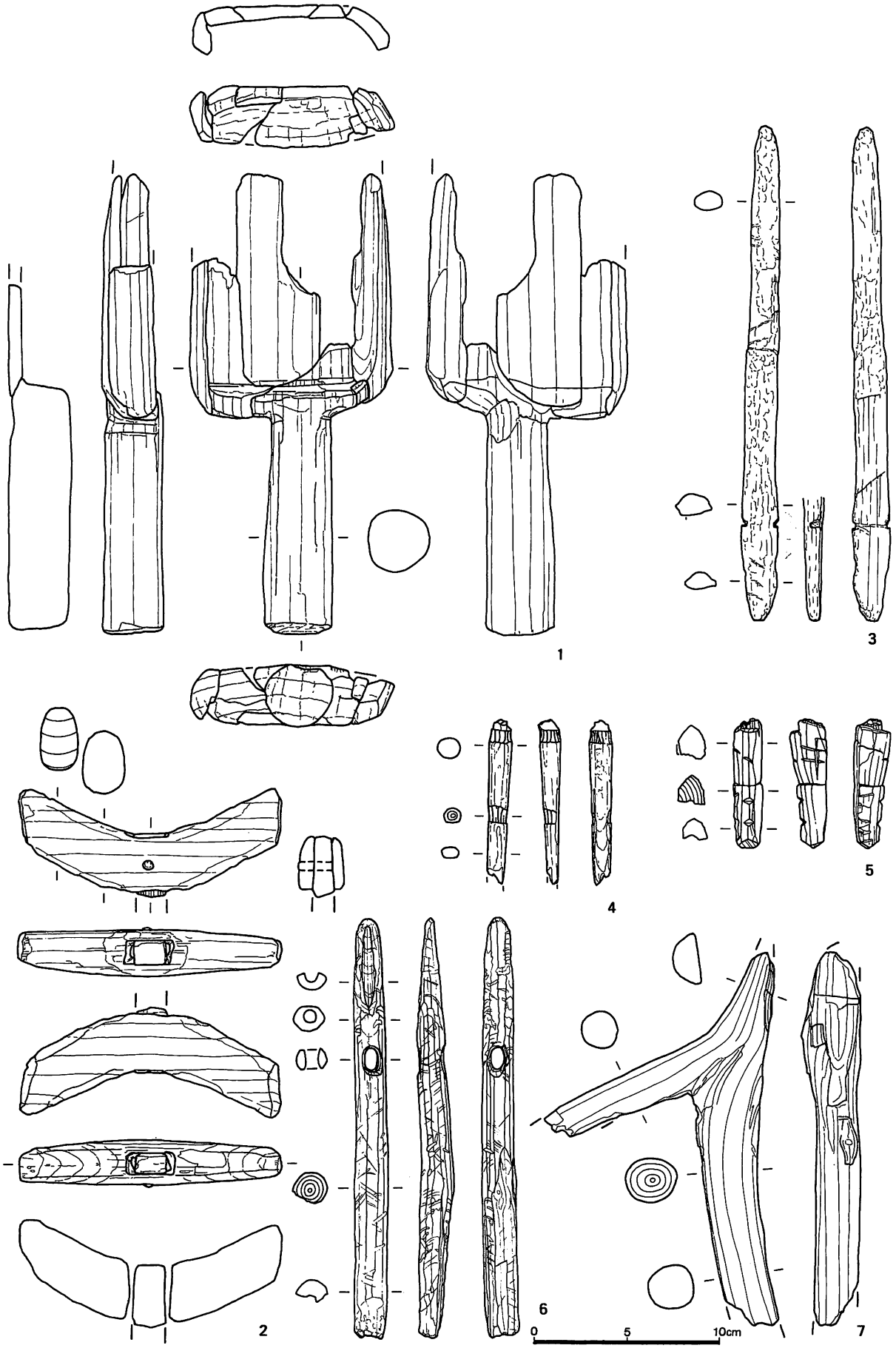
球状材(44)：両端部から粗く削りこんでおり、球状となっている。組合式の建材などのコケシ状の頭部であった可能性がある。

板材(45)：板目板である。表裏には板作成時の斜め方向の削りが顕著に残り、部分的に薄い樹皮状の繊維が付着する。削られた側面の上下にはかすかにつぶれたような凹みが認められる。

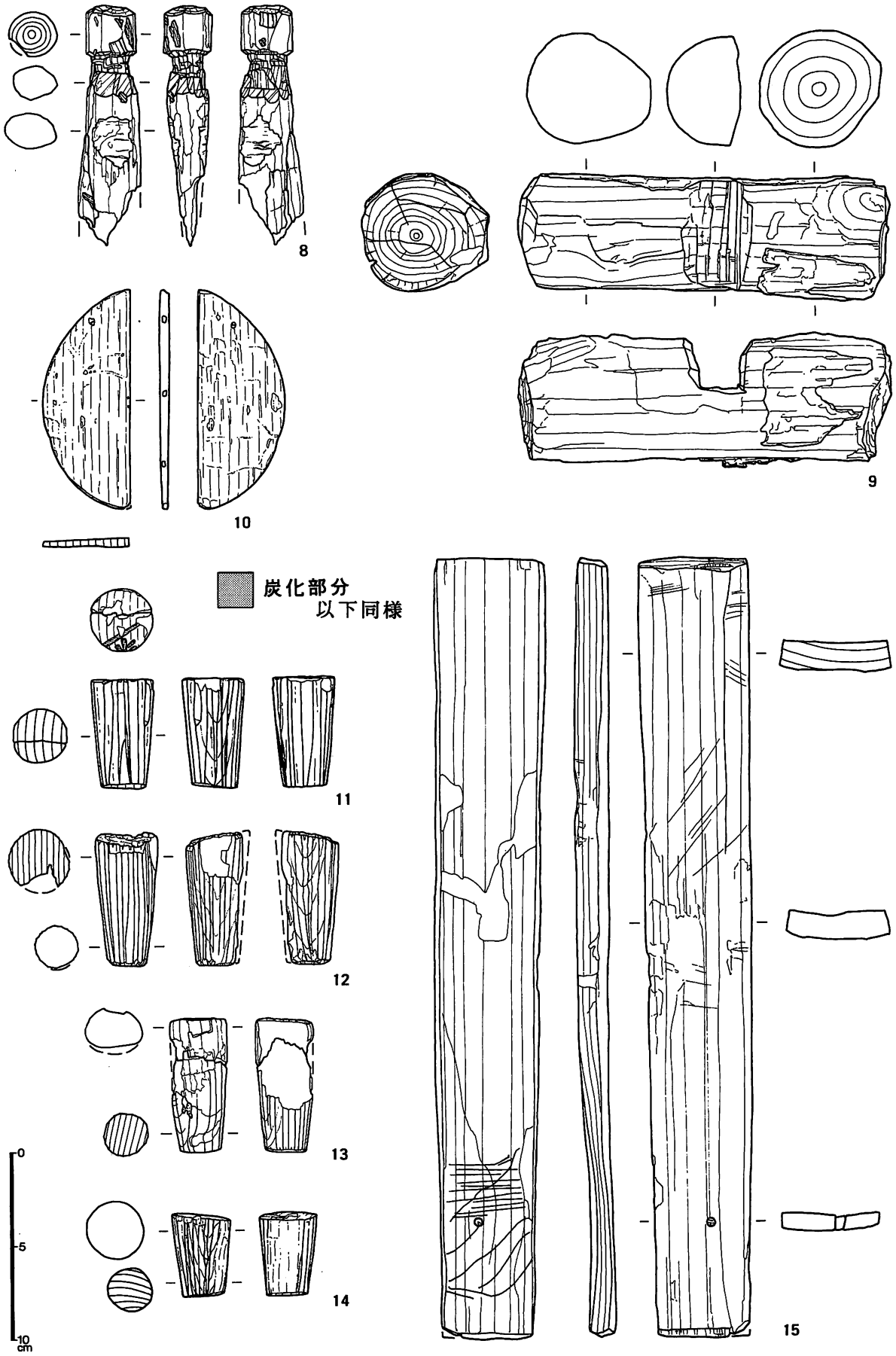
木端（46•47）：建材や各種部材の長さ調整のために切截された丸木材の端である。46には両端部および側面に顕著な削り面がある。47の下端部は一面削りで、平坦な上端部には斜め上方から切痕が多数残る。地中に埋まっていた杭先端部の可能性もある。

樹皮製品（48～51）：48は四枚重ねの細帯状樹皮を束ね螺旋状に細帯状樹皮を巻きつけたものである。束ねられた樹皮の表面は、巻かれた細帯状樹皮の圧痕が鮮明に認められる。両端が内側に折れ曲がっていることから小さな容器の把手部分の可能性がある。49は対象物に樹皮を巻きつけて結び縛った結束式の細帯状樹皮である。50は両端が内側にカールした細帯状樹皮である。51は螺旋状に巻かれた太い帯状の樹皮である。燈火用の筒状に長く巻かれた頭部挿入式のものが緩んだ可能性がある。

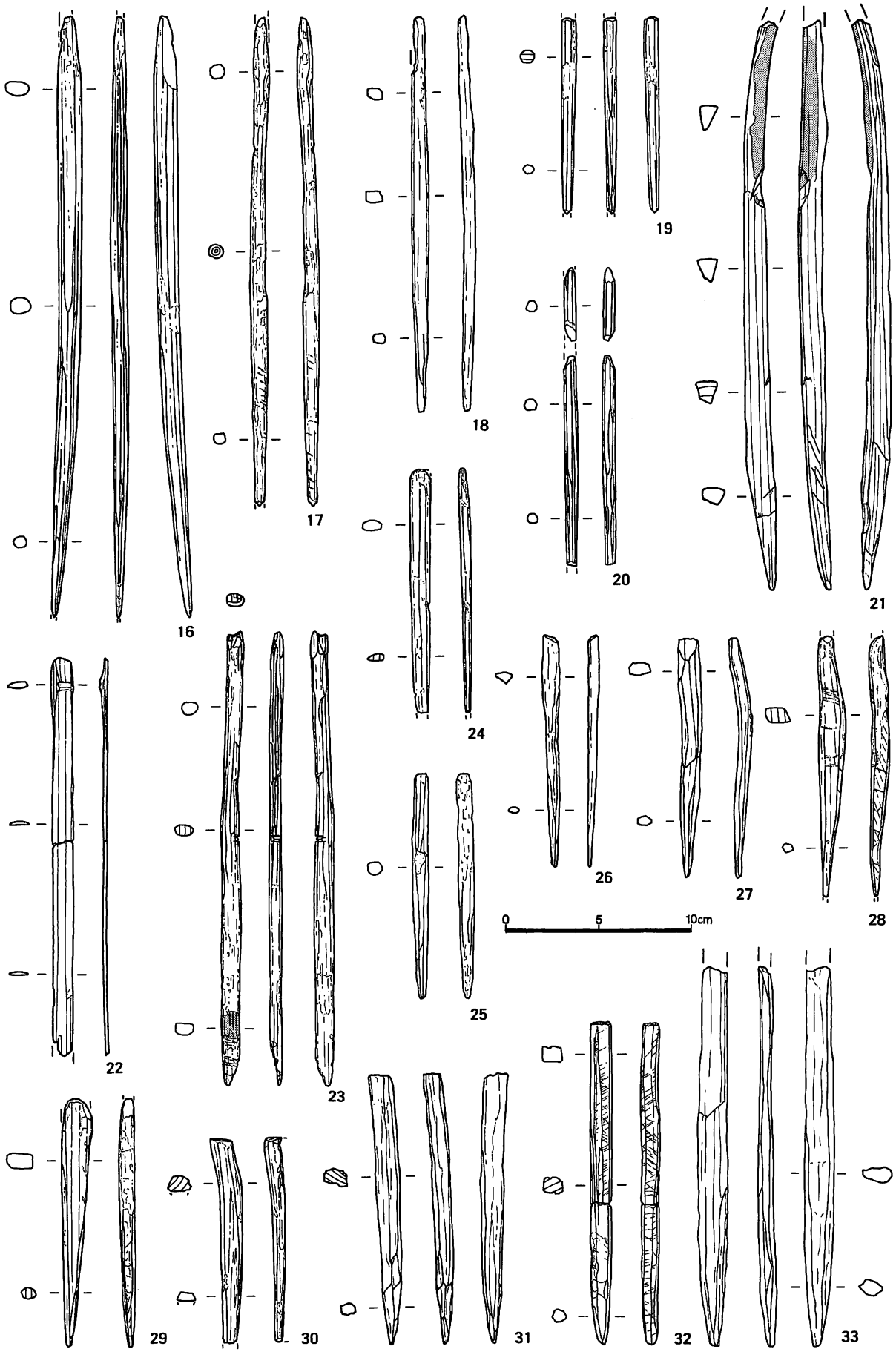
（田口　尚）



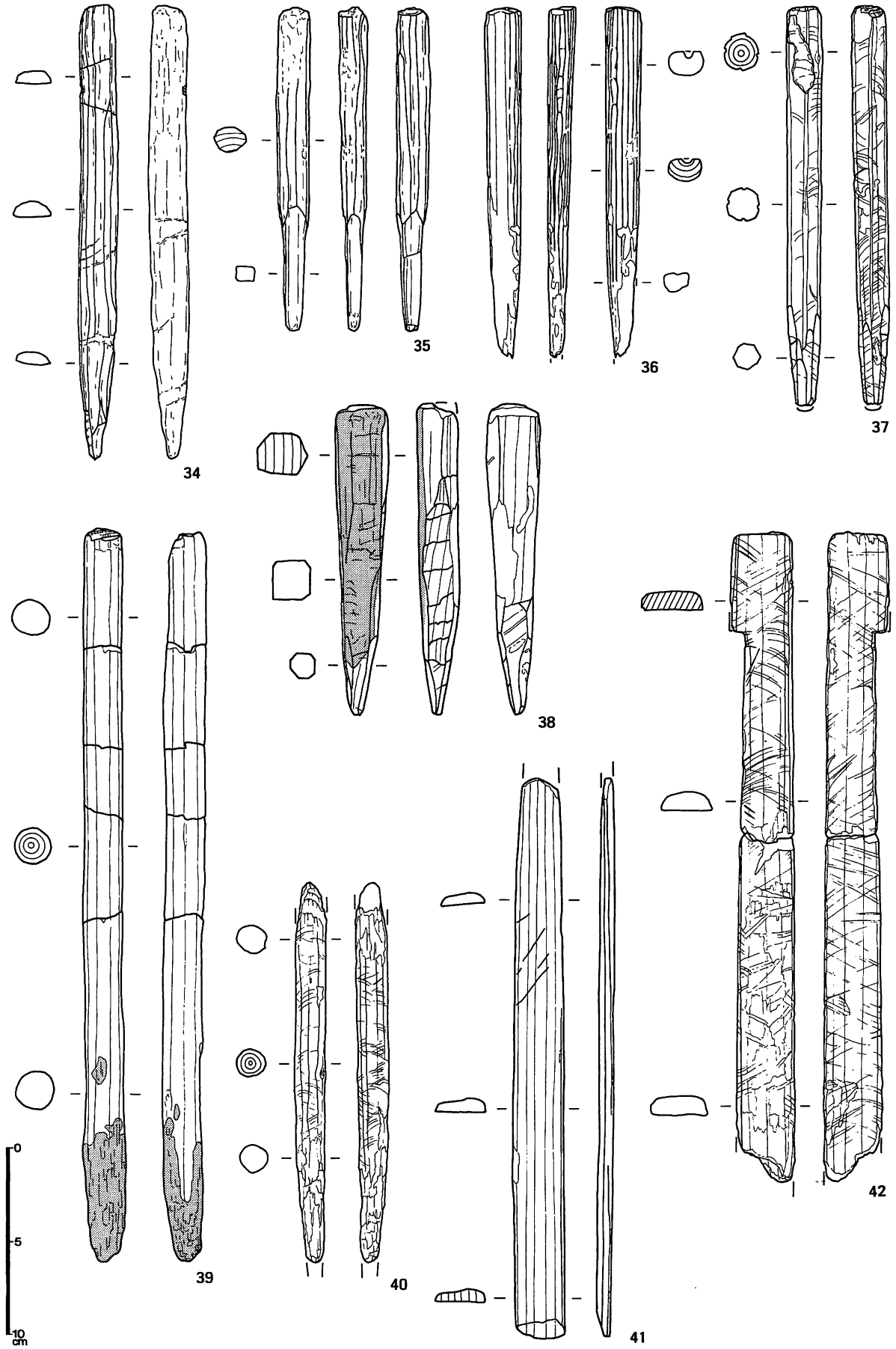
図Ⅴ－109　C地区0黒層木製品（1）



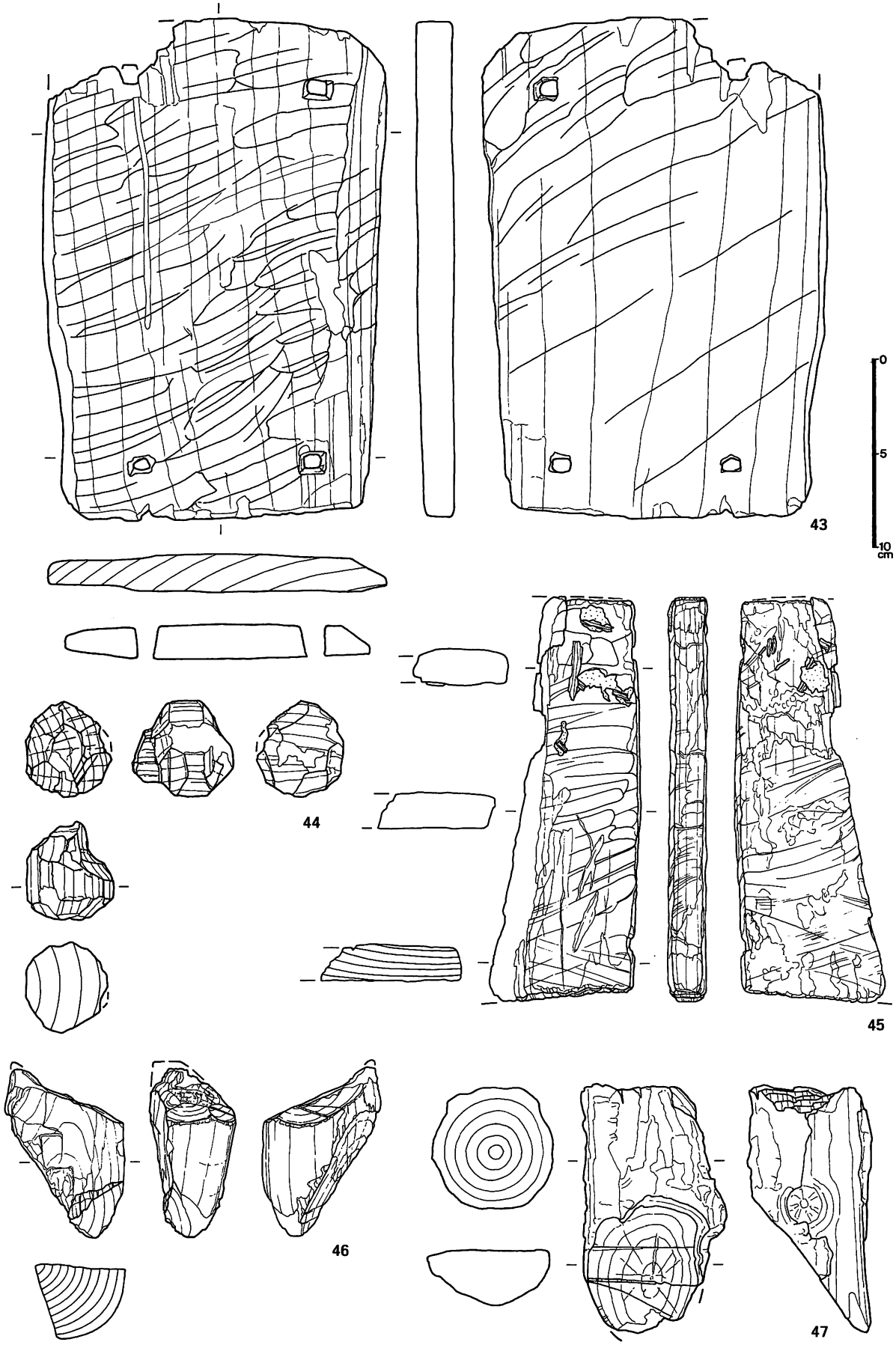
図Ⅴ－110　C地区0黒層木製品 (2)



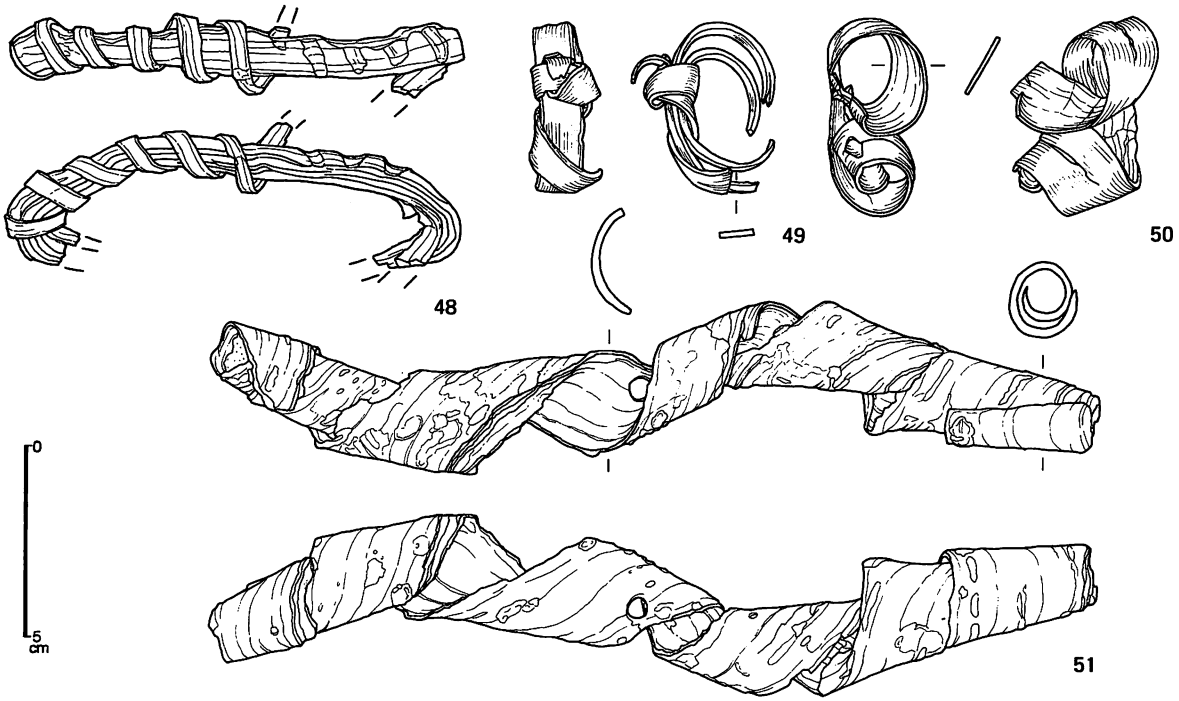
図Ⅴ－111　C地区0黒層木製品 (3)



図Ｖ－112　Ｃ地区０黒層木製品 (4)



図Ⅴ－113　C地区0黒層木製品 (5)



図Ｖ－114　Ｃ地区０黒層樹皮製品

表Ⅴ－36　C地区0黒層掲載木製品

Gはグリッド取上げ。　＊は接合資料。　※は中間部をわずかに欠損する。数値は推定値。

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量(g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
1	8702	381	握部付容器	b-67-03	174	*(24.5)	10.8	3.3	192.0			横木	ﾊﾝﾉｷ	6	先端部欠損。一木造り。底と握部に段差がない。
2	8703	492	櫂柄握部	c-67-81	60	13.8	5.8	2.5	80.0			柾目	ﾊﾝﾉｷ	1	「Y」字形。残存する櫂柄はサクラ属。目釘がある。
3	8704	504	回転式離頭鋸中柄部	c-67-85	G	(26.0)	2.0	1.1	36.0			半割	ﾉﾘｳﾂｷ	1	小さな抉りがある。両端部の摩耗著しい。
4	8705	501	柄・棹との接合部	c-67-82	249	(8.6)	1.2	1.1	6.5			丸木	ｱｼｻｲ	1	抉り２か所。基部端欠損。
5	8706	475	柄・棹との接合部	c-67-80	24	6.8	1.4	1.9	10.4			1/4割	ｱｼｻｲ	1	イトゥパ状の刻みがある。刻目２か所。
6	8707	448	針状製品	c-67-92	G	22.4	1.7	1.6	37.5			丸木	ｱｼｻｲ	1	貫通した円孔１か所。
7	8708	530	鉤形木鍬	b-67-03	G	(19.9)	(12.4)	3.1	128.4			股木	ｺﾅﾗ	1	尖端部欠損。
8	8709	500	抉入付丸棒状材	c-67-91	247	(12.5)	3.2	2.5	34.3			丸木	ﾔﾅｷﾞ	1	コケシ状の頭部。帯状の抉り。
9	8710	507	抉入付丸材	c-67-81	8	19.6	6.5	6.6	536.0	○		丸木	ｻｸﾗ	1	両端部平胆。角形の抉り。
10	8711	494	曲物底板	c-67-91	215	11.4	4.6	0.5	15.2			柾目	ｽｷﾞ?ﾋﾉｷ?	1	側面に釘孔３か所。
11	8712	476	栓	c-67-81	23	* 5.7	3.2	3.3	41.0		○	板柾	ｽｷﾞ?ﾋﾉｷ?	2	取上No．523と接合。円錐台形。焼印が付く。
12	8713	490	栓	c-67-91	22	7.0	3.2	3.0	3.8			板柾	ｽｷﾞ?	1	円錐台形。頭部につぶれ痕がある。
13	8714	484	栓	c-67-81	61	* 7.0	3.0	2.4	26.6			板柾	ｽｷﾞ	2	円錐台形。
14	8715	478	栓	c-67-80	1	4.4	3.1	3.0	25.4			板柾	ｽｷﾞ?ﾋﾉｷ?	1	円錐台形。
15	8716	499	樽側板	c-67-92	107	40.7	5.8	1.7	288.4			板目	ｽｷﾞ	1	口縁部側厚い。底板をはめた痕跡と釘孔がある。
16	8717	443	箸状製品	c-67	G	(32.0)	1.3	0.9	22.6			板目		1	B類。段面楕円形。上端部腐朽。
17	8718	519	箸状製品	c-67-93	546	(25.7)	0.9	0.8	10.8			丸木		1	C類。断面円形。両端部わずかに欠損。
18	8719	481	箸状製品	c-67-81	5	20.9	0.9	0.7	8.3			板目		1	A_1類。胴部断面角形。
19	8720	474	箸状製品	c-67-91	9	(10.4)	0.8	0.7	3.6			板目		1	上端部欠損。断面円形。
20	8721	497	箸状製品	c-67-80	201	※(15.4)	0.7	0.6	3.3			板目		2	両端部欠損し、２点に割れている。断面円形。
21	8722	491	串状製品	c-67-81	21	(30.0)	1.5	1.3	26.5		○	1/4割		1	B類。断面三角形。上端部炭化。
22	8723	529	串状製品	c-67-93	G	*(21.1)	1.2	0.4	4.1			割	ﾀｹ	2	H類。内面から薄く削がれている。上端部に節目。
23	8724	447	串状製品	c-67-82	G	(24.1)	1.1	0.7	13.1		○	柾目		1	D類。側縁中央に刻目２か所。下端部に炭化部分。
24	8725	505	ピン状製品	c-67-82	321	(12.9)	1.1	0.6	4.8			柾目		1	断面楕円形。
25	8726	480	ピン状製品	c-67-81	25	12.0	0.9	0.7	5.3			板目		1	断面円形。
26	8727	487	ピン状製品	c-67-91	32	12.2	0.9	0.6	3.3			割		1	断面三角形。
27	8728	522	ピン状製品	c-67-81	G	12.7	1.3	0.8	6.7			板目		1	断面長方形。
28	8729	485	ピン状製品	c-67-91	29	(13.8)	1.4	1.0	9.5			柾目		1	断面長方形。

表Ｖ－37　Ｃ地区０黒層掲載木製品・樹皮製品

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量(g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
29	8730	524	ピン状製品	c-67-81	G	(13.2)	1.6	0.8	10.1			柾目		1	断面長方形。
30	8731	534	ピン状製品	b-67-03	G	(10.9)	1.2	0.9	7.1			板目		1	断面角形。
31	8732	483	ピン状製品	c-67-91	31	14.5	1.3	1.0	10.9			板目		1	断面長方形。
32	8733	489	ピン状製品	c-67-91	30	* 17.2	1.1	0.9	12.6			板目		2	断面角形。
33	8734	502	ピン状製品	c-67-82	390	(20.3)	1.6	0.9	16.6			板目		1	断面楕円形。
34	8735	498	ピン状製品	c-67-91	87	13.8	2.0	1.0	24.4			板目	ｽｷ?ﾋﾉｷ?	1	断面半円形。
35	8736	482	ピン状製品	c-67-81	27	17.0	1.7	1.3	27.2			1/4割	ｱｼｻｲ	1	端部断面は楕円形。尖端部角形。
36	8737	506	軸状製品	c-67-82	335	(18.5)	1.9	1.4	28.8			半割	ｱｼｻｲ	1	断面楕円形。先端部欠損。木の髄が抜けている。
37	8738	533	軸状製品	b-67-03	G	(20.9)	1.8	1.8	45.9			丸木	ｶﾂﾗ	1	断面円形。尖端部のみ削りだす。
38	8739	488	ピン状製品	c-67-81	26	(16.3)	2.8	2.2	59.0		○	柾目		1	断面角形。
39	8740	486	丸棒状材	c-66-81	6	* 38.5	2.0	2.1	120.1		○	丸木		5	下端部炭化。
40	8741	532	丸棒状材	b-67-03	G	(20.0)	1.6	1.5	30.4			丸木		1	両端部腐朽。
41	8742	496	薄柾目棒状板	b-67-03	187	(29.5)	2.7	0.8	40.8			柾目		1	下端部の一面を刃部状に切り出す。
42	8743	525	抉入付蒲鉾形棒状材	c-67-81	G	*(34.1)	3.2	1.1	90.4			柾目	ﾓﾐ	2	上端部は方形に加工した鉤状である。
43	8744	473	有孔板材	c-67-81	3	(26.2)	17.8	2.0	718.0			板目	ｶﾂﾗ	1	角に角孔が３か所ある。
44	8745	503	球状材	c-67-81	310	5.0	4.5	5.1	48.4			1/4割		1	コケシ頭部状の削り。
45	8746	472	板材	c-67-81	7	21.2	(7.5)	2.0	207.8			板目	ｶﾂﾗ	3	表面の削り痕顕著。
46	8747	479	木端	c-67-81	2	(8.9)	5.9	4.3	82.7			1/4割		1	顕著な削り面が残存。
47	8748	531	木端	b-67-03	G	(13.1)	7.5	6.5	282.4			丸木		1	下端部は一面削り。上端部は切痕多数。杭先か？
48	8749	495	把手状樹皮製品	c-67-81	213	(12.1)	1.1	0.8	12.2					1	螺旋状に樹皮を巻束ねている。
49	8750	444②	結束細帯状樹皮巻	c-67-92	G	3.8	4.5	1.9	4.6					1	結び目がある。
50	8751	521	頭部挿入細帯状樹皮巻	c-67-81	G	3.9	5.3	2.7	3.4					1	孔のあるスリットがある。
51	8752	526	螺旋太帯状樹皮巻	c-67-81	G	23.6	2.9	2.1	30.8					1	燈火用の筒状樹皮がのびたもの。

4)　自然遺物（表Ⅴ－38）

掲載した遺物は、人力調査によって検出されたものである。遺物の時期はアイヌ文化期(1667年～1739年）である。

遺物は遺構が集中するc－67－81・91・92・93に多い。中でもc－67－91はC地区で出土する自然遺物のほとんどの種類がそろっている。遺物の種類数・量はA′地区に較べると少ないが、しいてあげるとクルミ属が多いのが特徴である。

ショウブ、ヒルムシロ、ハンノキ、など水辺や水湿のある低地に成育する植物がみあたらない。0黒層が形成されていた頃はC地区がわりと乾いていたことを示しているのかも知れない。

（鈴木　信）

表Ⅴ－38　C地区0黒層自然遺物

名称	発掘区					
	b－67－01	b－67－02	b－67－03	b－67－12	b－67－13	b－67－14
獣骨片						
甲虫片						
カワシンジュガイ殻皮						
サルノコシカケ						
スギナ						
ショウブ						
タデ科						
ヤマブドウ						
ミツバウツギ						
スモモ			1(0.25)			
コブシ						
コナラ						
ハンノキ						
クルミ属						

名称	発掘区							
	c－67－80	c－67－81	c－67－82	c－67－83	c－67－90	c－67－91	c－67－92	c－67－93
獣骨片								
甲虫片						1(+)	3(+)	6(+)
カワシンジュガイ殻皮						1(0.44)		
サルノコシカケ						1(3.45)		
スギナ						2(0.11)	13(0.16)	
ショウブ						1(+)		
タデ科								
ヤマブドウ							3(0.01)	
ミツバウツギ						2(0.09)		
スモモ			1(0.19)					
コブシ		1(0.03)						
コナラ							18(0.51)	
ハンノキ						5(4.23)		
クルミ属		3(2.17)					3(0.77)	1(0.40)

(4)　第Ⅰ黒色土層の遺構とその遺物

Ta－b層（1667年降下）とTa－c層との間に形成されたⅠ黒層には立杭、杭穴、双礫、集石、炭化物集中などの遺構がある。遺物は、石製品、金属製品、木製品、樹皮製品、自然遺物が出土した。石製品、木製品、樹皮製品は調査区北側の標高4.5m以下に多く分布する。

1)　立杭（図Ⅴ－115～118、表Ⅴ－39・40）

立杭はⅠ黒$_1$層から15本、Ⅰ黒$_2$層から5本検出されている。いずれも杭頭は腐朽して残存しており、打ち込み面は確認不能である。

Ⅰ黒$_1$層の杭穴の分布は斜面裾部の標高4.5m～4mに分布する。分布は調査区北側と中央にややまとまっている。立杭の大きさは、現地で取上げられかつ計測できた個体の直径で表すと、3cmが2例、4cmが3例、5cmが2例、8cmが2例、9cmが2例、10cmが1例である。ピークは4cmと7cmにある。これは0黒層の立杭のピークが7cmであり近い状況を呈している。実測可能なものを図Ⅴ－118－17～23に掲載した。18は樹皮を残したままの割材の杭。その他の杭は樹皮を残した丸木で先端部切出しが交差する5・6面取のものである。

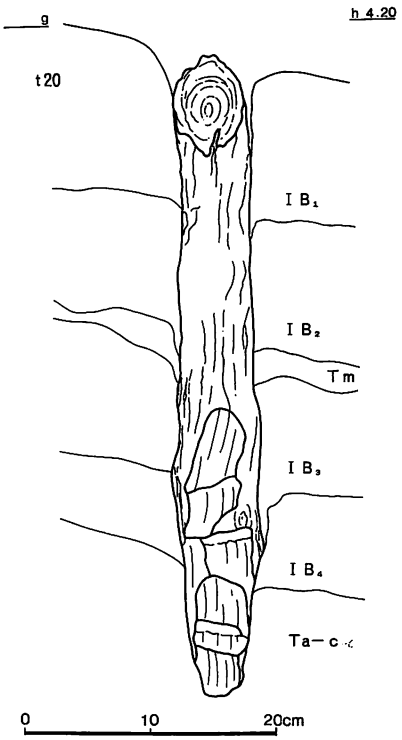
Ⅰ黒$_2$層の杭穴の分布は斜面裾部の標高4m付近に分布する。分布にまとまりはみられない。立杭の大きさは、現地で取上げられかつ計測できた個体の直径で表すと、3cmが1例、4cmが2例、5cmが1例、6cmが1例である。ピークは4cmにある。実測可能なものを図Ⅴ－118－24・25に掲載した。杭は樹皮を残したままの丸木で、先端部切出が交差する1面取のものである。（鈴木　信）

2)　杭穴（図Ⅴ－116、表Ⅴ－41）

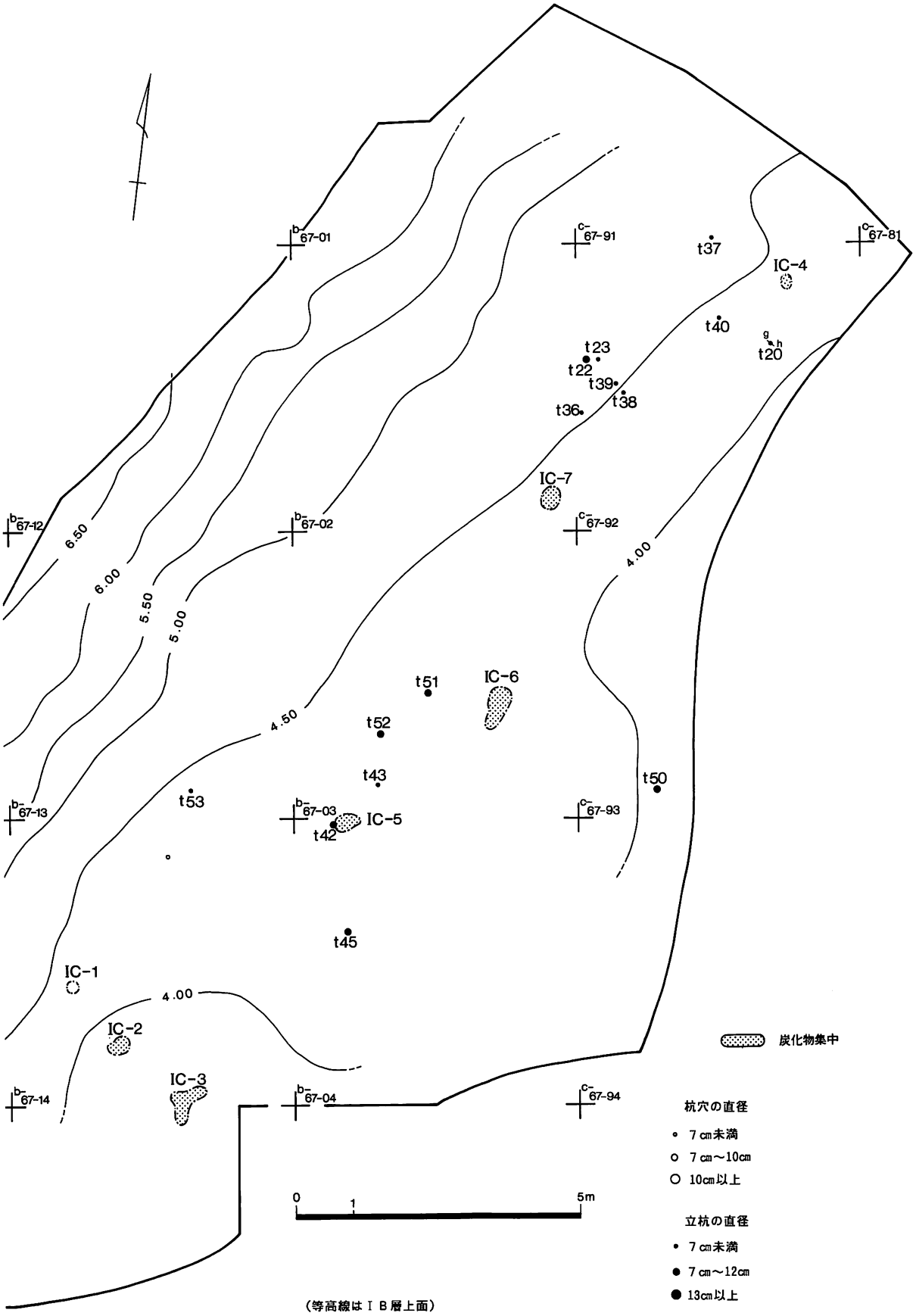
Ⅰ黒層の杭穴は覆土にTa－a、Ta－b火山灰を含まないものである。ただしⅠ黒層上面、Ⅰ黒層中のいずれから打たれたかはわからない。

杭穴はⅠ黒$_1$層に1か所あった。位置はb－67－03の北側である。杭穴の確認面での直径は4cmである。

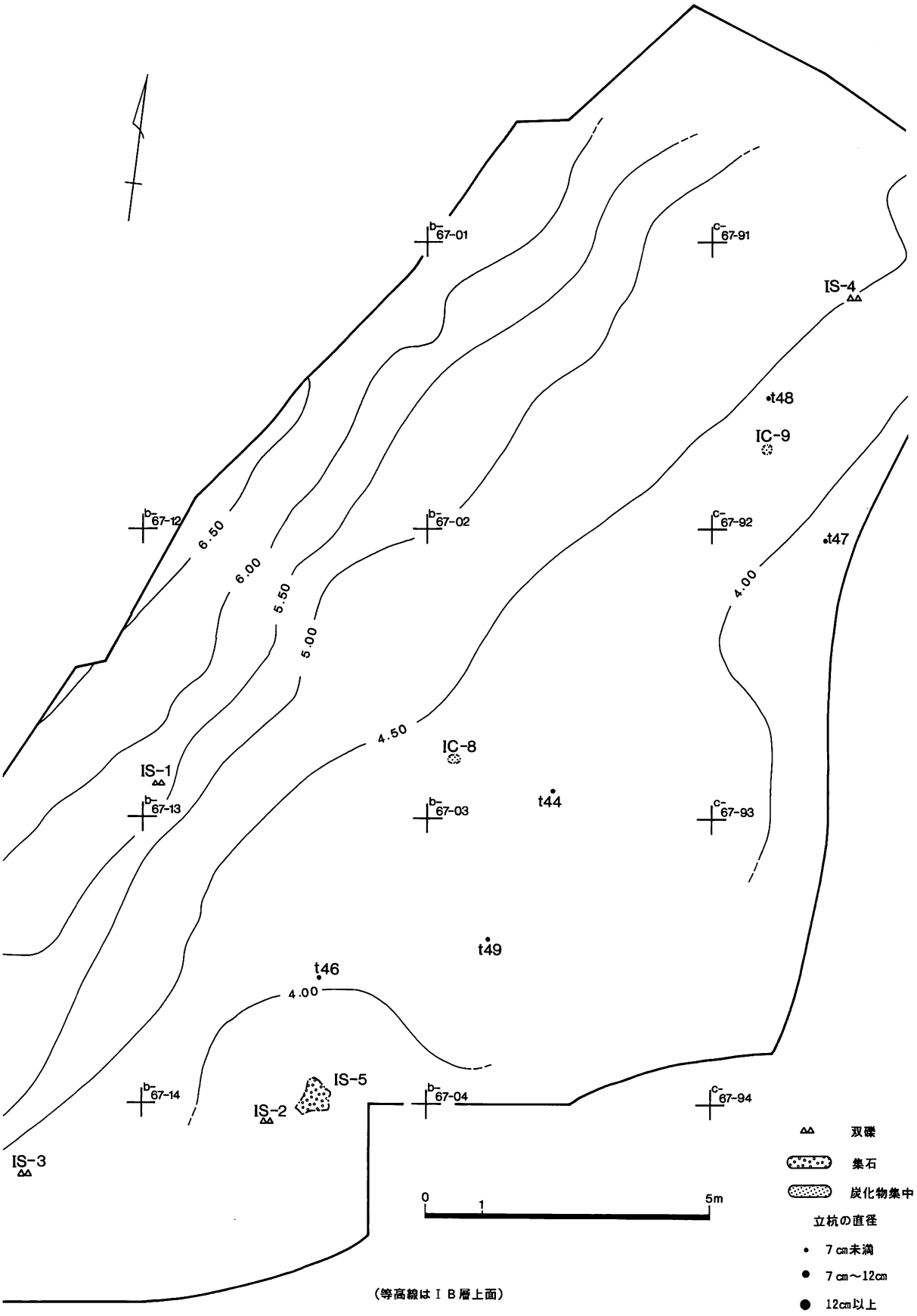
（鈴木　信）



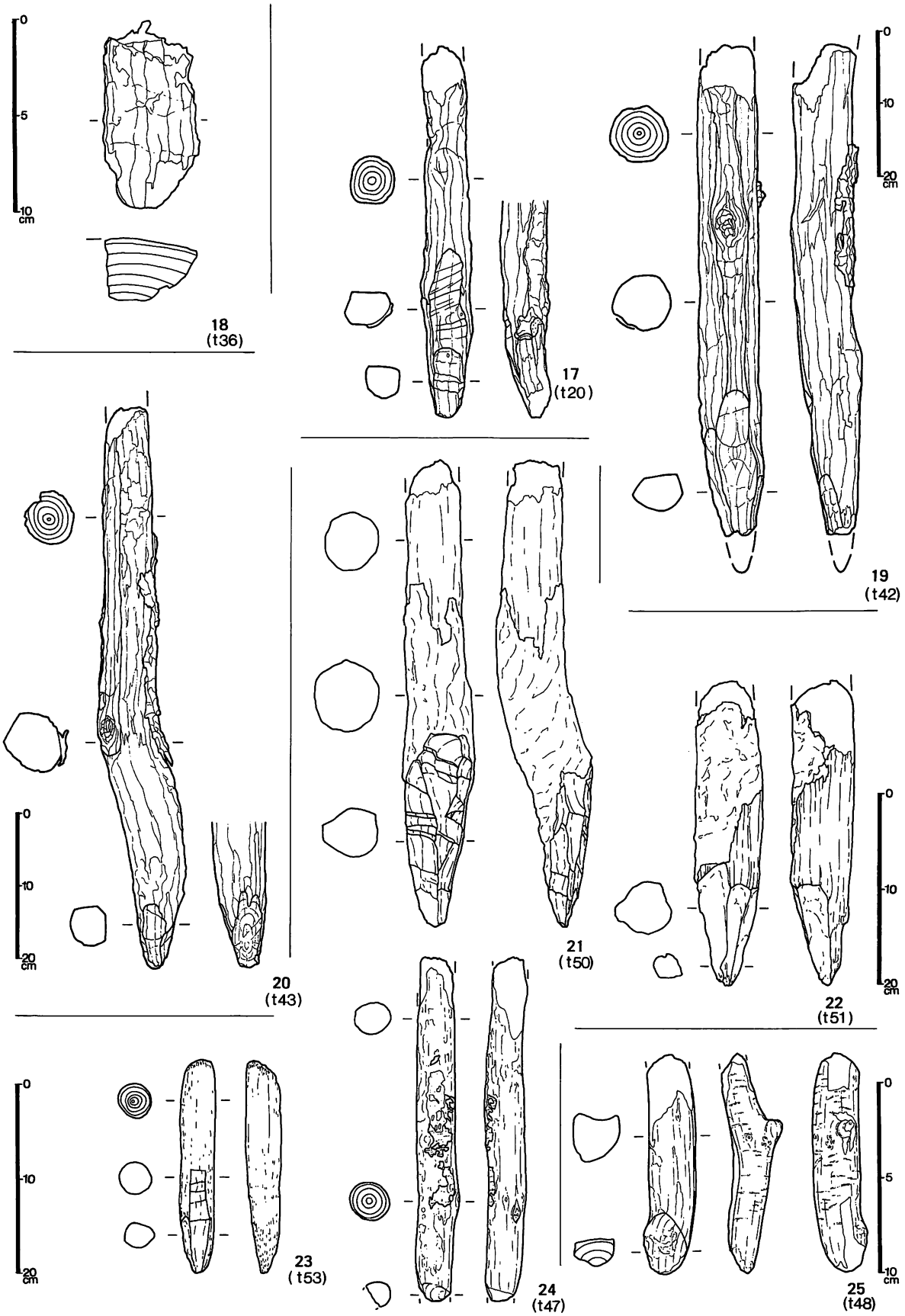
図Ⅴ－115　C地区Ⅰ黒$_1$層立杭断面図



図Ⅴ－116　C地区Ⅰ黒$_1$層遺構位置図



図Ｖ－117　Ｃ地区Ｉ黒$_2$層遺構位置図



図Ⅴ－118　C地区Ⅰ黒層立杭

表Ｖ－39　Ｃ地区Ｉ黒層掲載立杭

図番号	遺構名	発掘区	確認面	方向(頭→先)	長さ×幅×厚さ(cm)	湿重量(g)	木取り	備考
V－118－18	立杭－36	c－67－81	IB1	NE→SW	(9.6)×(4.8)×(3.7)	(85)	板	樹皮あり。
－17	－20	c－67－81	IB1	NE→SW	(51.1)×6.5×6.5	(1245)	丸木	樹皮あり。
－19	－42	c－67－93	IB1	SE→NW	(67.0)×8.6×8.4	(2806)	丸木	樹皮あり。
－20	－43	c－67－92	IB1	S→N	(77.0)×8.1×9.2	(2867)	丸木	樹皮あり。
－21	－50	c－67－82	IB1	E→W	(48.1)×7.4×8.0	(1352)	丸木	樹皮あり。
－22	－51	c－67－92	IB1	S→N	(31.5)×6.7×6.3	(844)	丸木	
－23	－53	b－67－02	IB1	垂直	(22.1)×3.6×3.7	(178)	丸木	全体に立ち腐れていて、はっきりした加工痕は見られない。
－24	－47	c－67－82	IB2	N→S	(35.8)×4.2×4.1	(400)	丸木	樹皮あり、泥その他の付着物もある。全体に腐蝕している。
－25	－48	c－67－81	IB2	S→N	(11.4)×2.5×2.8	(34)	丸木	繊維の圧痕？が多数見られる。

表Ｖ－40　Ｃ地区Ｉ黒層立杭

遺構名	図番号	発掘区	確認面	方向(頭→先)	直径(cm)	備考
立杭－20	V－118－17	c－67－81	IB1	NE→SW	6.5	
－22	未掲載	c－67－81	IB1	W→E	10	
－23	未掲載	c－67－81	IB1	SE→NW	7	
－36	V－118－18	c－67－81	IB1	NE→SW	(4.8)	
－37	未掲載	c－67－80	IB1	E→W	3	
－38	未掲載	c－67－81	IB1	E→W	3	
－39	未掲載	c－67－81	IB1	N→S	4	
－40	未掲載	c－67－81	IB1	S→N	4	斜面
－42	V－118－19	c－67－93	IB1	SE→NW	8.6	
－43	V－118－20	c－67－92	IB1	S→N	9.2	
－45	未掲載	c－67－93	IB1	垂直	5	
－50	V－118－21	c－67－82	IB1	E→W	8.0	
－51	V－118－22	c－67－92	IB1	S→N	6.7	
－52	未掲載	c－67－92	IB1	E→W	8	
－53	V－118－23	b－67－02	IB1	垂直	3.7	
－44	未掲載	c－67－92	IB2	S→N	5	
－46	未掲載	b－67－03	IB2	NW→SE	6	
－47	V－118－24	c－67－82	IB2	N→S	4.2	
－48	V－118－25	c－67－81	IB2	S→N	2.8	
－49	未掲載	c－67－93	IB2	垂直	4	

表Ｖ－41　Ｃ地区Ｉ黒層杭穴

遺構名	発掘区	確認面	直径(cm)
杭穴－54	b－67－03	IB1	4

3)　**双礫**（図Ⅴ－119、表Ⅴ－43、図版Ⅴ－54－1）

ＩＳ－１

位置　b－67－02　斜面部の標高5.5ｍ付近に位置する。

規模　１が5,500ｇ、２が2,000ｇ

特徴　Ⅰ黒$_2$層の上部に礫が置かれていた。砂岩の楕円礫と扁平楕円礫によって構成されている。

ＩＳ－２

位置　b－67－04　標高４ｍ付近に位置し、付近にはＩＳ－５がある。

規模　１が9,100ｇ、２が13,900ｇ

特徴　Ⅰ黒$_2$層で検出された。砂岩の楕円礫と珪岩の棒状楕円礫によって構成されている。

ＩＳ－３

位置　b－67－14　斜面裾部の標高4.5ｍ付近に位置する。

規模　１が481.3ｇ、２が2,045ｇ

特徴　Ⅰ黒$_2$層で検出された。片麻岩と珪岩の扁平楕円礫によって構成されている。近くに擦文土器が出土している。

ＩＳ－４

位置　c－67－81　斜面裾部の標高4.5ｍ付近に位置する。

規模　１が2,450ｇ、２が1,603ｇ

特徴　Ⅰ黒$_2$層で検出された。泥岩の円扁平礫と砂岩の楕円礫によって構成されている。

（鈴木　信）

4)　**集石**（図Ⅴ－119・表Ⅴ－43）

ＩＳ－５

位置　c－67－03・04

規模　23.6ｇ～190.5ｇ　15個

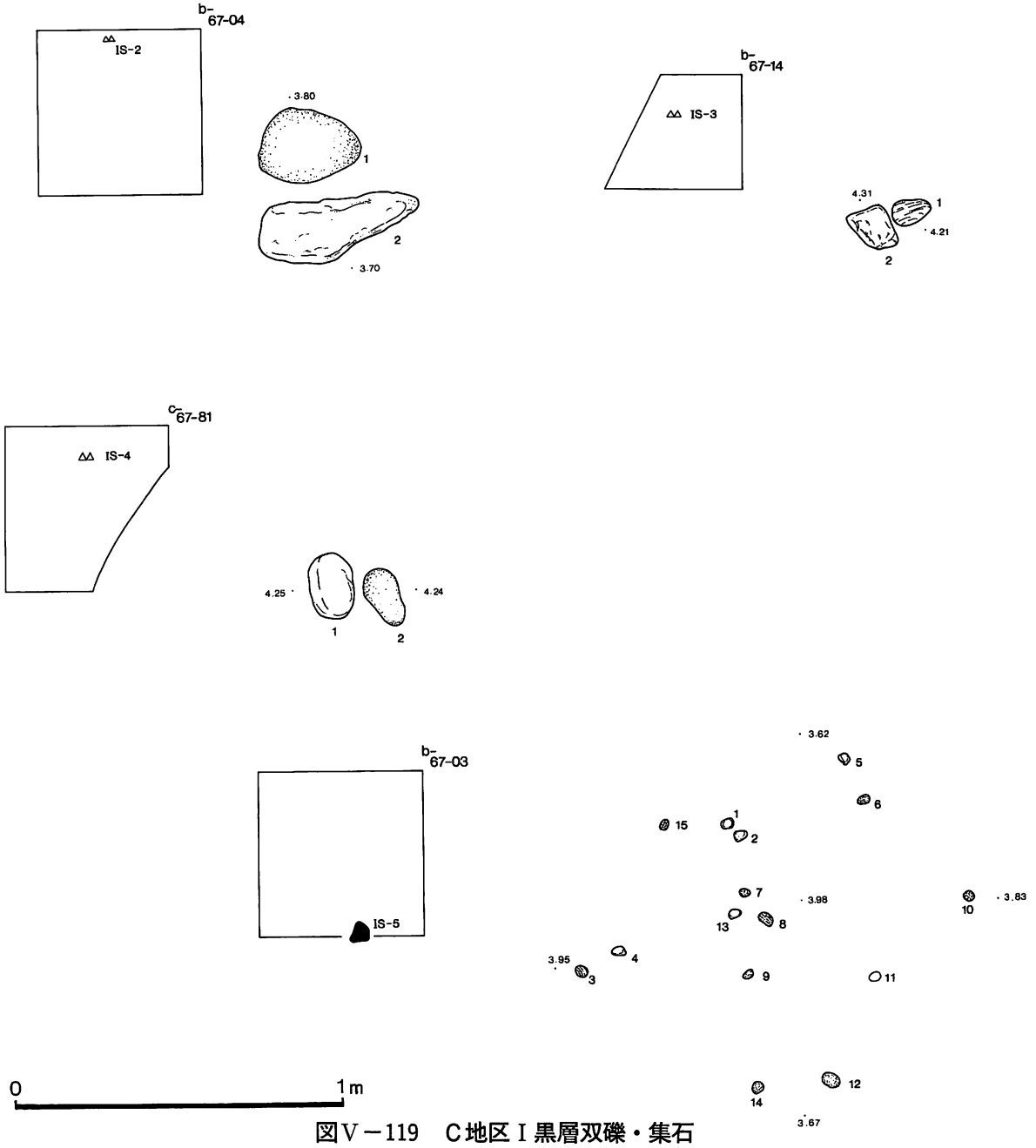
特徴　Ⅰ黒$_2$層で検出された。礫は互いに重なりあうことがなくやや離れた状態で出土した。岩質は砂岩が多く、形態は楕円礫と円扁平礫が多い。昨年出土した集石は80ｇ～400ｇで片麻岩が多いのに較べると、砂岩の小さい礫で構成されているのが特徴である。　（鈴木　信）

5)　**炭化物集中**（図Ⅴ－116・117、表Ⅴ－42、**８節－(2)**の表１）

Ｃ－１～７はⅠ黒$_1$層で確認されており、ＩＣ－４は調査区の北側に位置している。ＩＣ－５～７は調査区の中央に位置している。ＩＣ－１～３は調査区の南側に集まっている。ＩＣ－７ではアサが検出されている。他の炭化物集中はフローテーションの結果、栽培植物は検出されていない。ＩＣ－８・９はⅠ黒$_2$層で確認されており、フローテーションの結果種子は検出されていない。炭化物集中の性格を述べるには、フローテーションの結果に加えて大型の炭化植物遺存体の同定が必要とされるが、各炭化物集中出検出されるものが異なることが、性格を反映している可能性が強い。　（鈴木　信）

表Ⅴ－42　C地区Ⅰ黒層炭化物集中

名　称	発　掘　区	構築面	長軸×短軸(m)	名　称	発　掘　区	構築面	長軸×短軸(m)
ＩＣ－１	b －67－03	ＩＢ$_1$	0.18×0.16	ＩＣ－６	c －67－92	ＩＢ$_1$	0.78×0.28
－２	b －67－03	ＩＢ$_1$	0.37×0.33	－７	c －67－91	ＩＢ$_1$	0.46×0.34
－３	b－67－03～04	ＩＢ$_1$	0.76×0.36	－８	c －67－92	ＩＢ$_2$	0.16×0.10
－４	c －67－81	ＩＢ$_1$	0.25×0.18	－９	c －67－81	ＩＢ$_2$	0.10×0.10
－５	c－67－92～93	ＩＢ$_1$	0.50×0.28				



図Ⅴ－119　Ｃ地区Ｉ黒層双礫・集石

表Ⅴ－43　Ｃ地区Ｉ黒層双礫・集石計測値

遺構名	図番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材・石質	備考	遺構名	図番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材・石質	備考
ＩＳ－１	未掲載	25.1×14.4×11.3	5500	砂岩　円礫	楕円礫	ＩＳ－５	5	5.9×3.4×2.3	67.8	チャート亜円礫	楕円礫
－１	未掲載	18.4×11.8×4.5	2000	砂岩　亜円礫	楕円扁平礫	－５	6	5.9×3.7×2.0	47.6	砂岩　円礫	楕円礫
－２	1	29.0×21.7×16.0	9100	砂岩　亜円礫	楕円礫	－５	7	5.1×2.9×1.2	23.6	砂岩　円礫	楕円扁平礫
－２	2	41.1×20.2×14.2	13900	珪岩　亜円礫	棒状楕円礫	－５	8	7.3×4.2×1.7	89.4	片麻岩　円礫	楕円扁平礫
－３	1	11.7×7.6×3.4	481	片麻岩　円礫	楕円扁平礫	－５	9	6.8×3.5×1.6	58.6	砂岩　円礫	楕円扁平礫
－３	2	19.0×14.5×5.5	2045	珪岩　円礫	楕円扁平礫	－５	10	9.1×4.1×3.9	190.5	砂岩　亜円礫	棒状礫
－４	1	16.9×14.5×6.6	2450	泥岩　亜円礫	円扁平礫	－５	11	7.5×4.9×2.3	121.3	チャート　円礫	楕円扁平礫
－４	2	16.5×11.1×8.3	1603	砂岩　亜円礫	楕円礫	－５	12	9.7×6.2×2.0	113.0	砂岩　円礫	楕円扁平礫
－５	1	6.6×3.0×1.9	55.9	泥岩　円礫	棒状楕円礫	－５	13	5.6×4.6×1.4	58.1	泥岩　円礫	円扁平礫
－５	2	6.4×2.5×2.2	47.8	砂岩　亜円礫	棒状礫	－５	14	6.7×3.3×1.6	50.4	砂岩　亜円礫	棒状扁平礫
－５	3	5.9×3.6×1.6	51.4	片麻岩　円礫	楕円扁平礫	－５	15	6.3×2.6×1.3	37.5	片麻岩　円礫	棒状楕円礫
－５	4	5.7×3.9×1.6	58.5	泥岩　円礫	楕円扁平礫						

(5)　第Ⅰ黒色土層の遺物

1)　土器（図Ⅴ－120、表Ⅴ－44、図版Ⅴ－55－1・2）

Ⅰ黒層からは20点出土している。1は十勝最寄式の深鉢の頸部。内面は明橙褐色で、ヨコヘラミガキ。外面は黒色で、タテハケの後に沈線で文様を描く。2は小型の擦文土器の口縁部。内面は黒色で、ヨコヘラミガキ。外面は黒色で、タテハケの後にヨコヘラミガキを施し、沈線で文様を描く。Ⅰ黒$_3$層出土。3は擦文土器の上半部。内面は黒色で、タテヘラミガキの後にヨコヘラミガキ。外面は黒褐色～にぶい黄橙色で、タテハケの後にヨコハケ、さらにヘラミガキを施し沈線で文様を描く。Ⅰ黒$_2$層出土。

（鈴木　信）

2)　石器・石製品、礫（図Ⅴ－121～123、表Ⅴ－45、図版Ⅴ－56－1・2）

石器・石製品

1は凝灰岩製の砥石。角礫の一面を使用する。使用面は波打っている。2は6面体で2面を除くそれぞれがノミ状の工具で加工されている。3は棒状の礫。加工痕や使用痕はみられない。

礫（図Ⅴ－122・123）

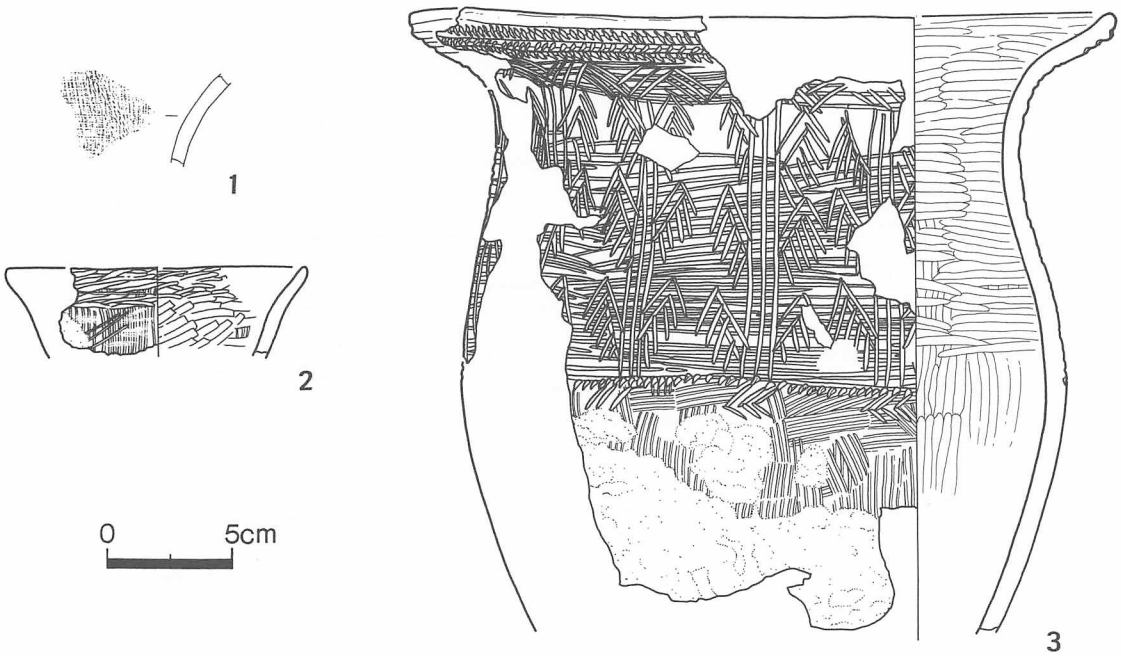
図Ⅴ－122上段左のグラフはⅠ黒$_1$層出土の完形礫42点（礫片は324点）についての形態を岩質別に示した。砂岩は主に横軸値0.31～0.66、縦軸値1.44～1.54に集中している。棒状礫・棒状楕円礫・棒

表Ⅴ－44　C地区Ⅰ黒層掲載土器

図番号	名称	発掘区	層位	備考	図番号	名称	発掘区	層位	備考
Ⅴ－120－1	深鉢　頸部	不明	排土	Ⅶ（十勝最寄式）	Ⅴ－120－3	深鉢　口縁～体部	b－67－14	ⅠB_1	Ⅶ（擦文）
－2	深鉢　口縁	c－67－81	ⅠB_3	Ⅶ（擦文）					

表Ⅴ－45　C地区Ⅰ黒層掲載石器・石製品

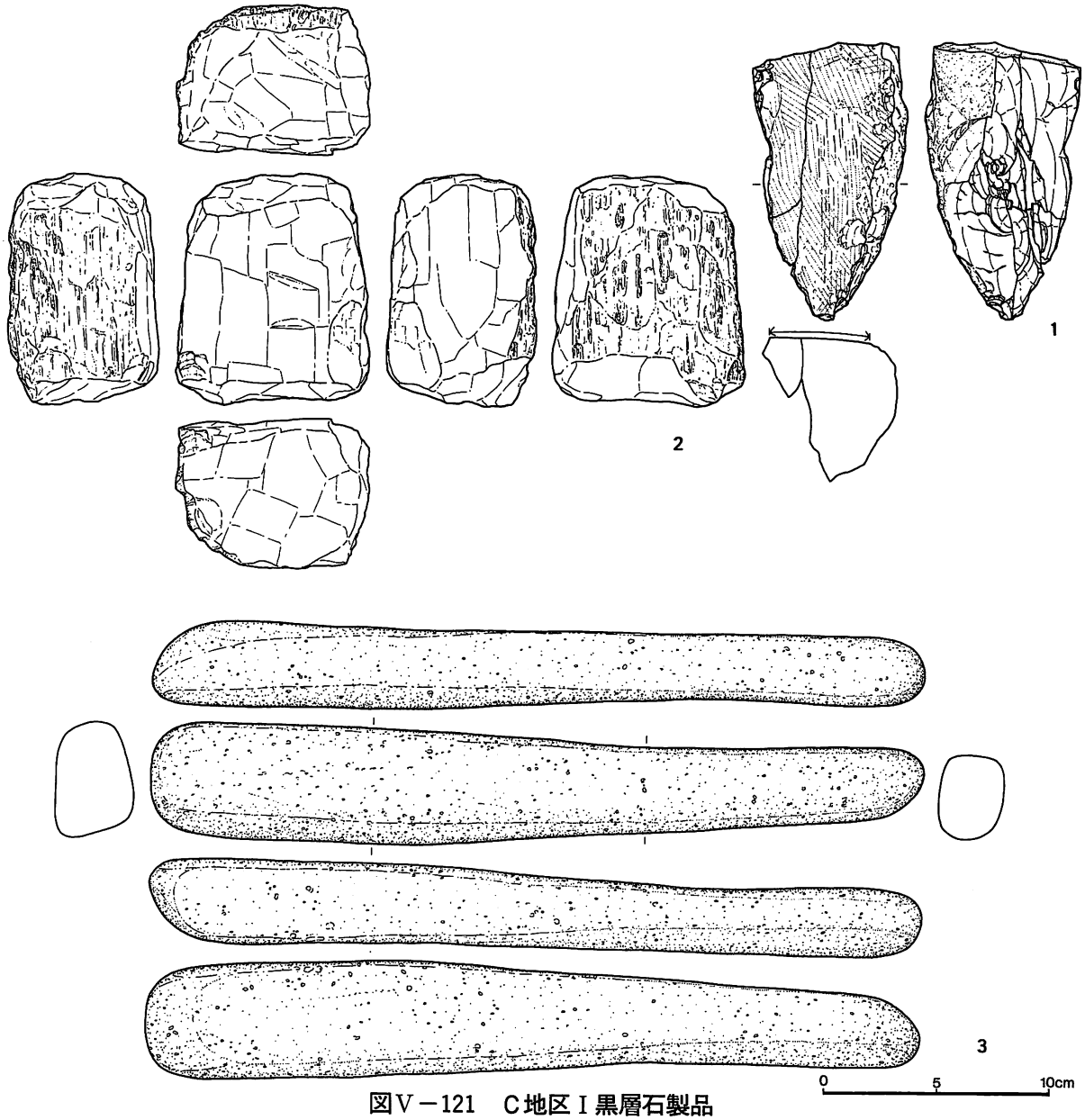
図番号	名称	発掘区	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材質
Ⅴ－121－1	砥石	c－67－92	ⅠB_1上面	121.5×68.6×64.5	419.4	凝灰岩
－2	軽石製品	b－67－14	ⅠB_1	101.6×85.1×65.9	187.9	流紋岩
－3	棒状の礫	c－67－91	ⅠB_3	340.0×52.4×37.1	894	凝灰質砂岩



図Ⅴ－120　C地区Ⅰ黒層土器

状扁平礫・楕円礫・楕円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫(41.7%)と楕円扁平礫(33.3%)によって構成されている。泥岩は主に横軸値0.25～0.71、縦軸値1.31～1.76にやや集中している。棒状楕円礫・楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫(53.9%)と楕円扁平礫(30.8%)によって構成されている。片麻岩は主に横軸値0.25～0.47、縦軸値1.28～1.60に集中している。棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円扁平礫(63.6%)によって構成されている。片麻岩は泥岩や砂岩に比べるとより扁平な礫が集まっている。チャートは棒状礫・棒状扁平礫・楕円礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫(60.0%)によって構成されている。他には、楕円扁平礫の珪岩1個ある。各岩質をつうじて楕円礫・楕円礫が多い。

図V－122下のグラフは岩質ごとの形態別重量を示した。砂岩の66.7%は40～120gの範囲にあり、60～80gの範囲にピークがある。また40～120gの範囲における形態は、棒状礫・棒状楕円礫・棒状扁平礫・円扁平礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。ピークの範囲でも同じである。泥岩の69.2%は0～80gの範囲にあり、0～20gの範囲にピークがある。また0～80gの範囲における形態は、楕円礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。

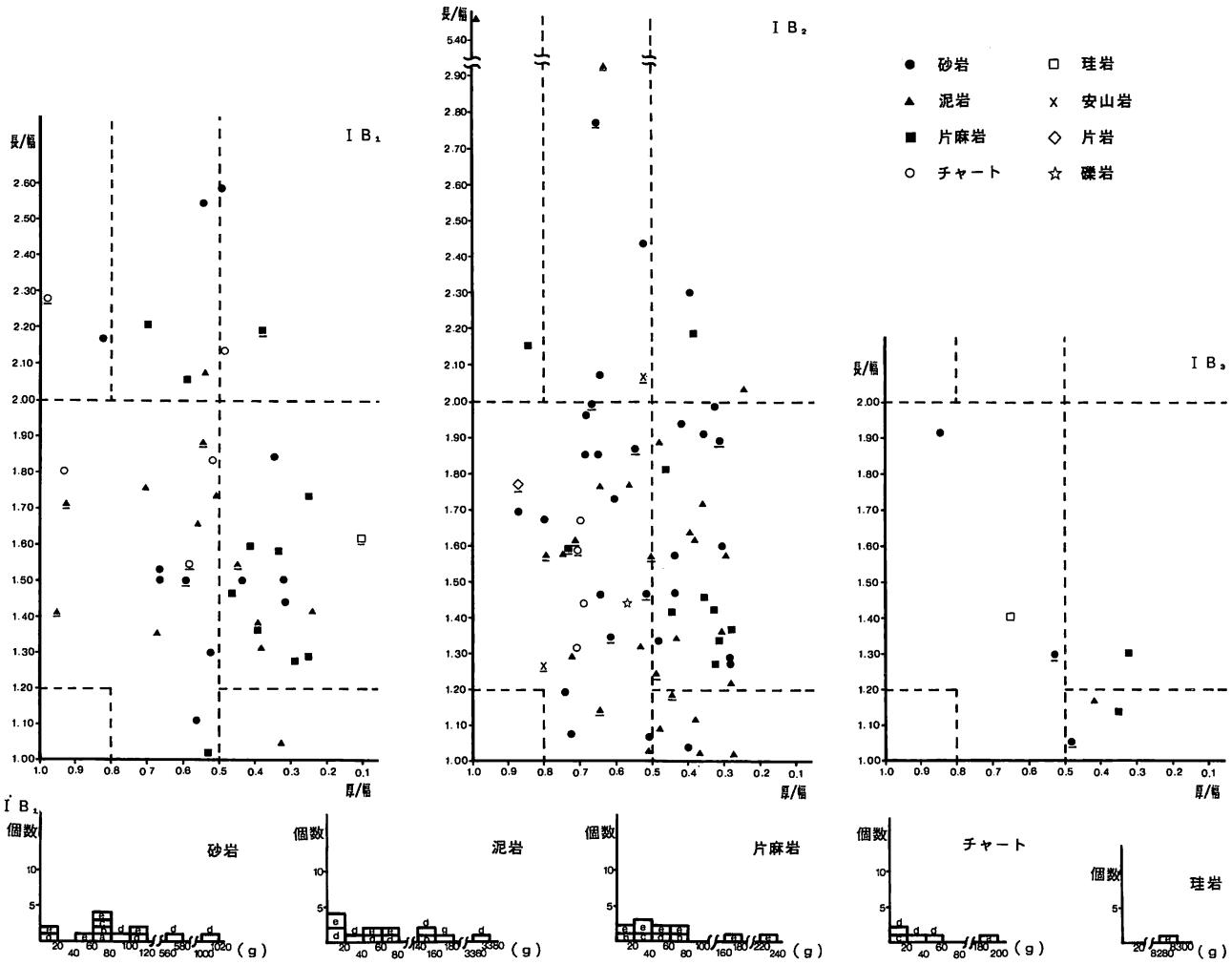


図V－121　C地区I黒層石製品

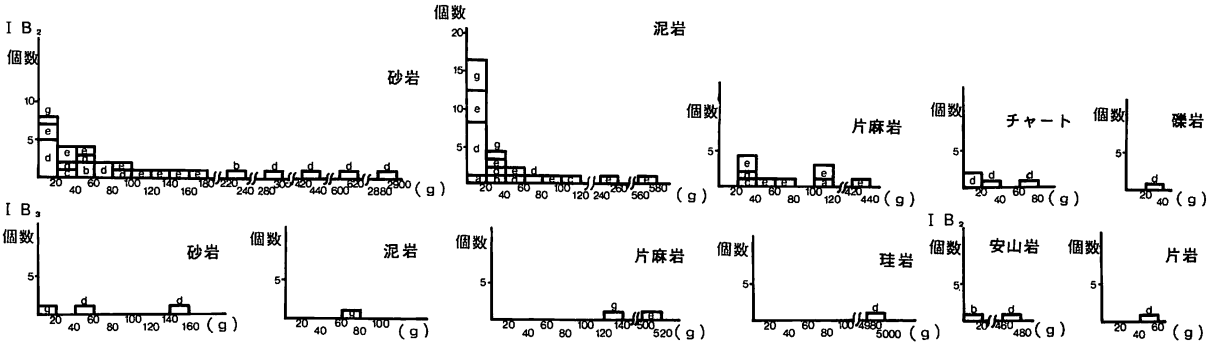
ピークの範囲でも同じである。片麻岩の80.0%は0～80ｇの範囲にあり、20～40ｇの範囲にピークがある。また0～80ｇの範囲における形態は、棒状扁平礫•円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。ピークの範囲でも同じである。砂岩•泥岩•片麻岩•チャートは0～80ｇの範囲の重量が選択されている。

形態と重量の関係は、砂岩・泥岩・片麻岩・チャートのように、代表的な形態が集中せず各重量に分散し、かつ特定の重量が選択されているものについては、選択の基準が重量にあること示している。

図Ⅴ－122上段中のグラフはⅠ黒$_2$層出土の完形礫74点（礫片は93点）についての形態を岩質別に示した。砂岩は主に横軸値0.28～0.80、縦軸値1.04～2.00に集中している。棒状楕円礫•棒状扁平礫•楕円礫•楕円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫（48.3%）と楕円扁平礫（34.5%）によって構成されている。泥岩は主に横軸値0.28～0.80、縦軸値1.00～1.89にやや集中している。棒状礫•棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫（37.0%）と楕円扁平礫（33.3%）によって構成されている。片麻岩は主に横軸値0.31～0.43、縦軸値1.28～1.46に集中している。棒状礫•棒状扁平礫•楕円礫•楕円扁平礫の形態が存在するけれども、主に楕円礫（80.0%）によって構成されている。片麻岩は泥岩や砂岩に比べるとより扁平で丸い礫が集まっている。チャートは主に横軸値0.69～0.71、縦軸値1.32～1.68に集中している。楕円礫によって構成されている。他には、棒状楕円礫の安山岩1個と楕円礫の片岩・礫岩・安山岩が各1個ある。各岩質をつうじて楕円礫・楕円扁平礫が多い。



図Ⅴ－122　C地区Ⅰ黒層礫グラフ・表 (1)



ＩＢ₁

砂岩　１２個(全体の28.6%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 11個 91.7%	棒状礫	1	9.1
	棒状楕円礫	1	9.1
	棒状扁平礫	1	9.1
	楕円礫	4	36.4
	楕円扁平礫	4	36.4
亜円礫 1個 8.3%	楕円礫	1	100

ＩＢ₁

チャート　５個(全体の11.9%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 3個 60.0%	棒状扁平礫	1	33.3
	楕円礫	2	66.6
亜円礫 2個 40.0%	棒状礫	1	50.0
	楕円礫	1	50.0

ＩＢ₂

砂岩　２９個(全体の39.1%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 23個 79.3%	棒状楕円礫	2	8.7
	棒状扁平礫	1	4.3
	楕円礫	10	43.5
	楕円扁平礫	9	39.1
	円扁平礫	1	4.3
亜円礫 6個 20.7%	棒状楕円礫	1	16.7
	楕円礫	4	66.7
	楕円扁平礫	1	16.7

ＩＢ₂

チャート　４個(全体の 5.4%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 3個 75.0%	楕円礫	3	100
亜円礫 1個 25.0%	楕円礫	1	100

ＩＢ₃

砂岩　３個(全体の42.8%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 33.3%	楕円礫	1	100
亜円礫 2個 66.7%	楕円礫	1	50.0
	円扁平礫	1	50.0

ＩＢ₁

泥岩　１３個(全体の31.0%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 9個 69.2%	棒状楕円礫	1	11.1
	楕円礫	4	44.4
	楕円扁平礫	3	33.3
	円扁平礫	1	11.1
亜円礫 4個 30.8%	楕円礫	3	75.0
	楕円扁平礫	1	25.0

ＩＢ₁

珪岩　１個(全体の 2.3%)			
円磨度	形態	個数	百分率
亜円礫 1個 100%	楕円扁平礫	1	100

ＩＢ₂

泥岩　２７個(全体の36.5%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 20個 74.1%	棒状礫	1	5.0
	棒状扁平礫	1	5.0
	楕円礫	6	30.0
	楕円扁平礫	8	40.0
	円扁平礫	4	20.0
亜円礫 7個 25.9%	棒状楕円礫	1	14.3
	楕円礫	4	57.1
	楕円扁平礫	1	14.3
	円扁平礫	1	14.3

ＩＢ₂

安山岩　２個(全体の 2.7%)			
円磨度	形態	個数	百分率
亜円礫 2個 100%	棒状楕円礫	1	50.0
	楕円礫	1	50.0

ＩＢ₂

片岩　１個(全体の 1.4%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 100%	楕円礫	1	100

ＩＢ₃

片麻岩　２個(全体の28.6%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 2個 100%	楕円扁平礫	1	50.0
	円扁平礫	1	50.0

ＩＢ₃

珪岩　１個(全体の14.3%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 100%	楕円礫	1	100

a－棒状礫　　d－楕円礫
b－棒状楕円礫　　e－楕円扁平礫
c－棒状扁平礫　　g－円扁平礫

ＩＢ₁

片麻岩　１１個(全体の26.2%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 10個 90.9%	棒状楕円礫	2	20.0
	楕円礫	1	10.0
	楕円扁平礫	7	70.0
亜円礫 1個 9.1%	棒状扁平礫	1	100

ＩＢ₂

片麻岩　１０個(全体の42.8%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 9個 90.0%	棒状礫	1	11.1
	棒状扁平礫	1	11.1
	楕円礫	7	77.8
亜円礫 1個 10.0%	楕円礫	1	100

ＩＢ₂

礫岩　１個(全体の 1.4%)			
円磨度	形態	個数	百分率
亜円礫 1個 100%	楕円礫	1	100

ＩＢ₃

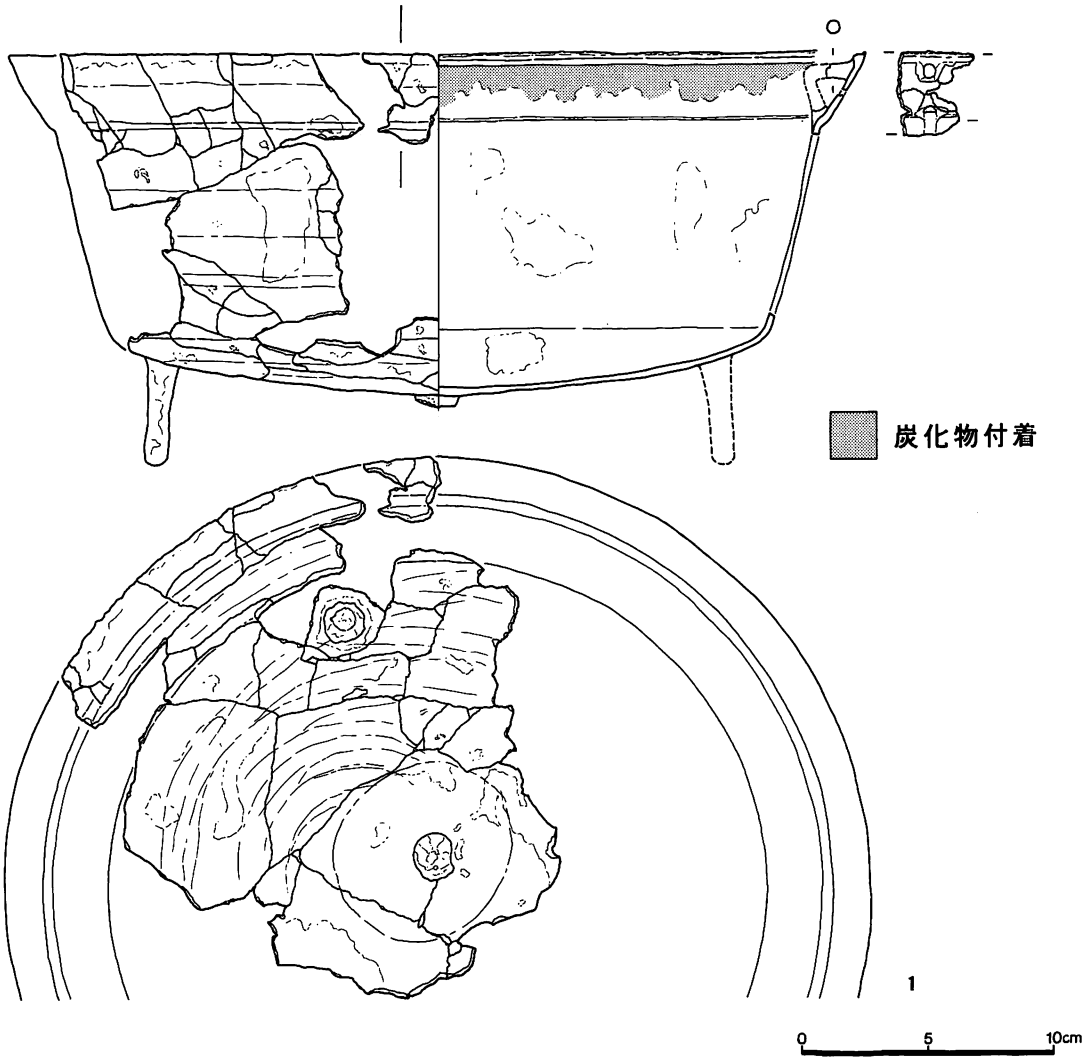
泥岩　１個(全体の14.3%)			
円磨度	形態	個数	百分率
円礫 1個 100%	円扁平礫	1	100

図Ⅴ－123　Ｃ地区Ｉ黒層礫グラフ・表 (2)

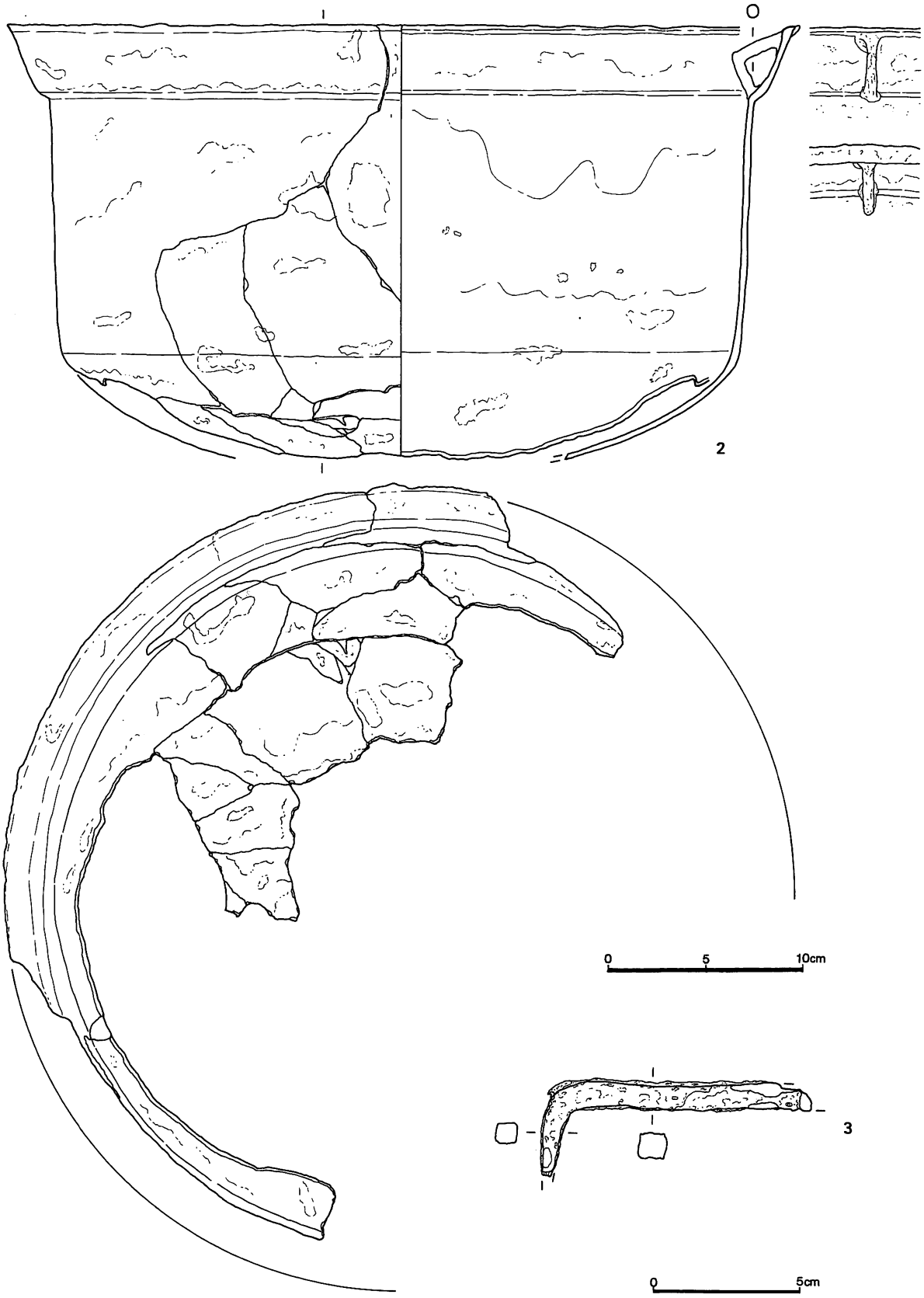
図Ⅴ－123上のグラフは岩質ごとの形態別重量を示した。砂岩の55.1%は0～60ｇの範囲にあり、0～20ｇの範囲にピークがある。また0～60ｇの範囲における形態は、棒状楕円礫・棒状扁平礫・楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。ピークの範囲では楕円礫が多い。泥岩の81.5%は0～60ｇの範囲にあり、0～20ｇの範囲にピークがある。また0～60ｇの範囲における形態は、棒状礫・棒状楕円礫・楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。ピークの範囲でも同じである。片麻岩の63.4%は20～80ｇの範囲にある。また20～80ｇの範囲における形態は、棒状扁平礫・楕円礫・円扁平礫があり、特定の形態が特定の重量に偏ることはみられない。ピークの範囲でも同じである。砂岩・泥岩・片麻岩・は0～60ｇの範囲の重量が選択されている。

表Ⅴ－46　C地区Ⅰ黒層掲載金属製品

図番号	録番号	名　称	調査区	遺物番号	長さ × 幅 × 厚さ (cm)	重量	破片数	材質	層位	備考
1	48	内耳鉄鍋口縁部	c－67－93	7	(16.2)　(34.2)　0.3	(88.0)	143	鉄	IB_1	パラロイドB72処理　インクラック処理
2	47	鉄鍋　口縁部	c－67－92	6	(22.0)　(40.6)　0.3	(1560.0)	15	鉄	IB_1	プラマイルMV－1減圧含浸
3	45	カスガイ	b－67－91	1	(9.2)　(3.4)　1.0	(16.0)	1	鉄	IB	パラロイドB72処理　プラマイルMV－1減圧含浸



図Ⅴ－124　C地区Ⅰ黒層金属製品 (1)



図Ｖ－125　Ｃ地区Ｉ黒層金属製品 (2)

形態と重量の関係は、泥岩・片麻岩のように、代表的な形態が集中せず各重量に分散し、かつ特定の重量が選択されているものについては、選択の基準が重量にあること示している。砂岩についてもほぼ同じ傾向と見てようだろう。

図Ⅴ－122上段右のグラフはⅠ黒$_3$層出土の完形礫7点(礫片は40点)についての形態を岩質別に示した。砂岩の1点を抜かすと、横軸値0.32～0.66、縦軸値1.06～1.14に集中している。楕円礫・楕円扁平礫・円扁平礫の形態が存在するけれども、主に円扁平礫（42.9%）によって構成されている。

図Ⅴ－123上のグラフは岩質ごとの形態別重量を示した。砂岩・泥岩はⅠ黒$_2$層やⅠ黒$_2$層出土のものと変わらない重さである。片麻岩・珪岩はⅠ黒$_2$層やⅠ黒$_2$層出土のものに較べて重い。（鈴木　信）

3)　**金属製品**（図Ⅴ－124・125、表Ⅴ－46、図版Ⅴ－56－3・4、図版Ⅴ－57－1～3）

1は内耳鉄鍋。丸湯口をもつ丸い底から上方へ直線的に立ち上がる体部を持つ。外帯はわずかに内弯しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はまるみを帯びた三角形で、口縁端面は水平で、内面側に肥厚する。内耳は直線的で、断面が円形である。足は断面が円形で、下の部分が若干太くなっている。この鍋は鉄分の溶脱が激しく非常に軽かった。またそのことによってか強度も無く変形した状態で出土した。2は内耳鉄鍋。丸い底から上方へ直線的に立ち上がる体部を持つ。外帯はわずかに内弯しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はまるみを帯びた三角形で、口縁端面は内斜し、内面側に少し肥厚する。内耳は直線的で、断面が円形である。口径が非常に大きい。3はカスガイ。使用によって中央部分が少しⅤ字状に変形している。（鈴木　信）

4)　**木製品**（口絵－3・4、図Ⅴ－126～132、表Ⅴ－47・48、図版Ⅴ－57～59）

本年度の調査によりⅠ黒層中にも木製品の存在することが確認された。木製品の密度は0黒層同様に希薄である。0黒層のような集中箇所はなく、c－67－83・93とその周辺から出土したものがやや多い程度である。分布は遺構の分布域の外側に少しずれている。

早櫂柄部（1）：断面が楕円形となる棒状の材で、下端部はやや幅広となり欠損している。表面の全面が炭化している。長さや形態から水掻部の最上部から破損した早櫂の柄と考えれる。

山刀柄部（2）：全体は柄頭に向かって緩く反り、柄頭側に山刀の特徴となる瘤状の突起が付けられている。柄の中央部に断面は楕円形であるが、突起部から柄頭にかけて平坦に削られている。縁側は茎部を挟み込むようにスリット状となっており、渦巻の線刻のある部分を浮き彫りにして帯状に彫り込まれている。この部分には樹皮が巻かれていたと考えられる。目釘は樹皮を巻いている部分を挟んで2か所に認められ、対になる括弧状の線刻に囲まれている。表面のみに文様が描かれ、柄頭側には渦巻をモチーフとした線刻みで文様が彫り込まれている。中央部には波状の線刻が一本描かれ、帯状に浅く彫り込まれた部分には鋸歯状の刻目がめぐり、対になる括弧状の線刻に挟まれている。帯状の彫り込みには樹皮が巻かれていた可能性がある。

柄・棹との接合部（3）：魚突き鉤台部または回転式離頭銛中柄の基部である。中央に柄に装着するための帯状の抉り部と裏面に平坦面が作出されている。基部の先端は突がらない。

回転式離頭銛中柄部（4）：先端部は欠損・摩耗し、中央部から先端部に向かって断面を丸形に細く削りだしている。中央部の断面は角形であり、柄に装着し紐で固定するための刻目状の抉りが両側つけられている。下端部には平坦面が作出されている。非常に短く形態も他と異なるが、回転式離頭銛中柄部の可能性がある。

抉入付角棒状材（5・6）：5は表面の摩耗が著しい。角形の上端部の片角は斜めに削りだされ、帯状の浮彫りがめぐっている。その直下は摩耗し細く括れている。下端部はやや細くなり、断面が楕円形に削りだされている。6は角棒の中央よりやや下の部分が抉られており、断面が半円形となってい

る。下端部はやや薄くなるように削りだされている。

方形頭付丸棒状材（7）：方形に加工された頭部に角孔があけられ、楔状の木片が残存するものである。頭部端は斜めに切り出されている。方形頭部の直下は丸棒状に加工されている。

抉入付半円棒状材（8）：側縁部が抉られ、コケシ頭状のとなっている。抉りの裏面には平坦面が作出され、断面が半円状となっている。棹や柄の接合部と考えられる。

円板状材（9）：木口取りした板材の破片である。

楔形製品（10・12・13）：10の正面は長方形であり、側面は上端部から下端部に向かって楔形に削りだされている。断面は楕円形である。上端部は平らに削りだされ、敲打痕が認められる。12は先の丸い楔形であり、断面は半円形である。13は先のやや鋭角となる楔形であり、断面は半円形である。いずれも表裏に削り痕が顕著に残り、端部は平らに削りだされている。端部にはわずかに敲打痕が認められる。

蒲鉾状材（11）：板目板を細く加工したもので、断面が半円形となっている。上端部は平らに削りだされている。先端部は腐朽・摩耗している。

箸状製品（14～20・23）：基準はA′地区と同様であるが、尖端・基部を欠損するものが多いため細分は難しい。14・15は**B類**とされる片口箸で、端部の一方（基部）が太く、もう一方（先端部）に向かって細く削り出したものである。いずれも基部端を斜めに削ったB_4類である。16～18は**A類**とされる両口箸で、16～18は一方の端部を平らにし、もう一方の端部を細く尖らせたA_3類であろう。19は**D類**とされる尖端部のみを鉛筆先状に削りだしたものである。かんじきの枠の小孔に差し込まれる横木の可能性もある。20は尖端部の破片である。23は胴部の破片である。

串状製品（21・22・25～27）：基準はA′地区と同様である。いずれも上端部を欠損し、両端が腐朽・摩耗している。21は**B類**とされる断面形が長方形のものである。22の断面は三角形となり尖端部のみが削りだされている。25・26は**F類**とされる断面形が扁平な多角形となるものである。25の尖端部は一面削りで幅広に削りだされている。26の端部は平らに削りだされ、尖端部は腐朽している。27は**G類**とされる丸木材の尖端部のみを鋭く削り出したものである。尖端は極鋭角な二面削りである。

ピン状製品（24）：端部側から尖端部に向かって全面を粗く削りだしたものである。

丸棒状材（28・29）：28は丸木の上端部が平らに削りだされている。先端部は欠損し、表面に樹皮が残る。29は両端部欠損した丸木材である。上部に一本の刻目がある。下端部には摩耗してやや細くなった部分がある。魚突き鉤や回転式離頭銛の柄・棹の可能性がある。

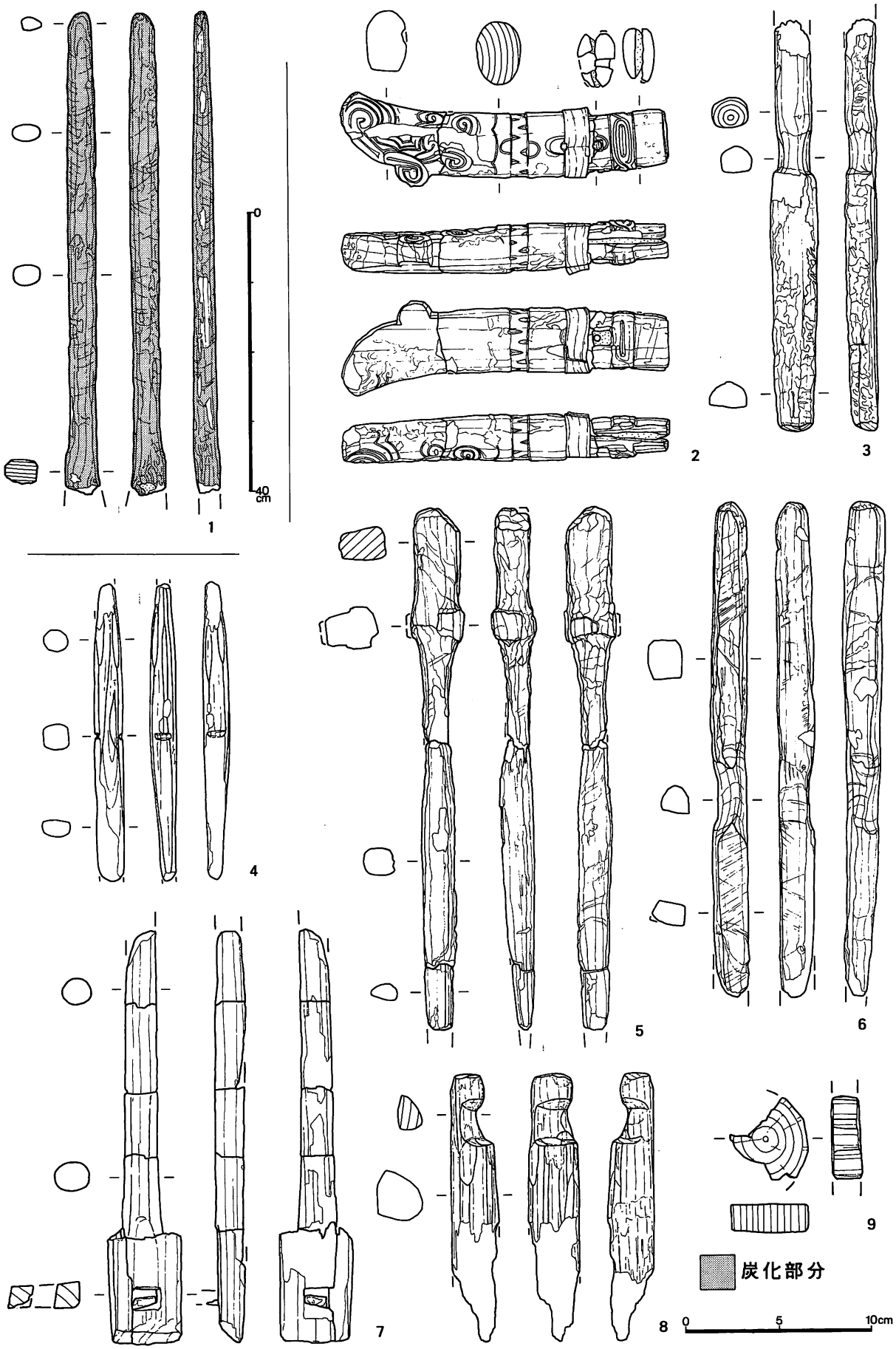
薄柾目棒状板材（30・31）：幅の細い柾目板である。曲物などの破片であろうか。

有孔角材（32）：丸木材の曲面を削り落し、角材としている。表面には削りに使用した切截具の斜めの刃傷痕が多数残る。上端部は平坦面がやや斜めに作出され、角孔が穿孔されている。下端部は同部に比べやや細くなり、欠損している。

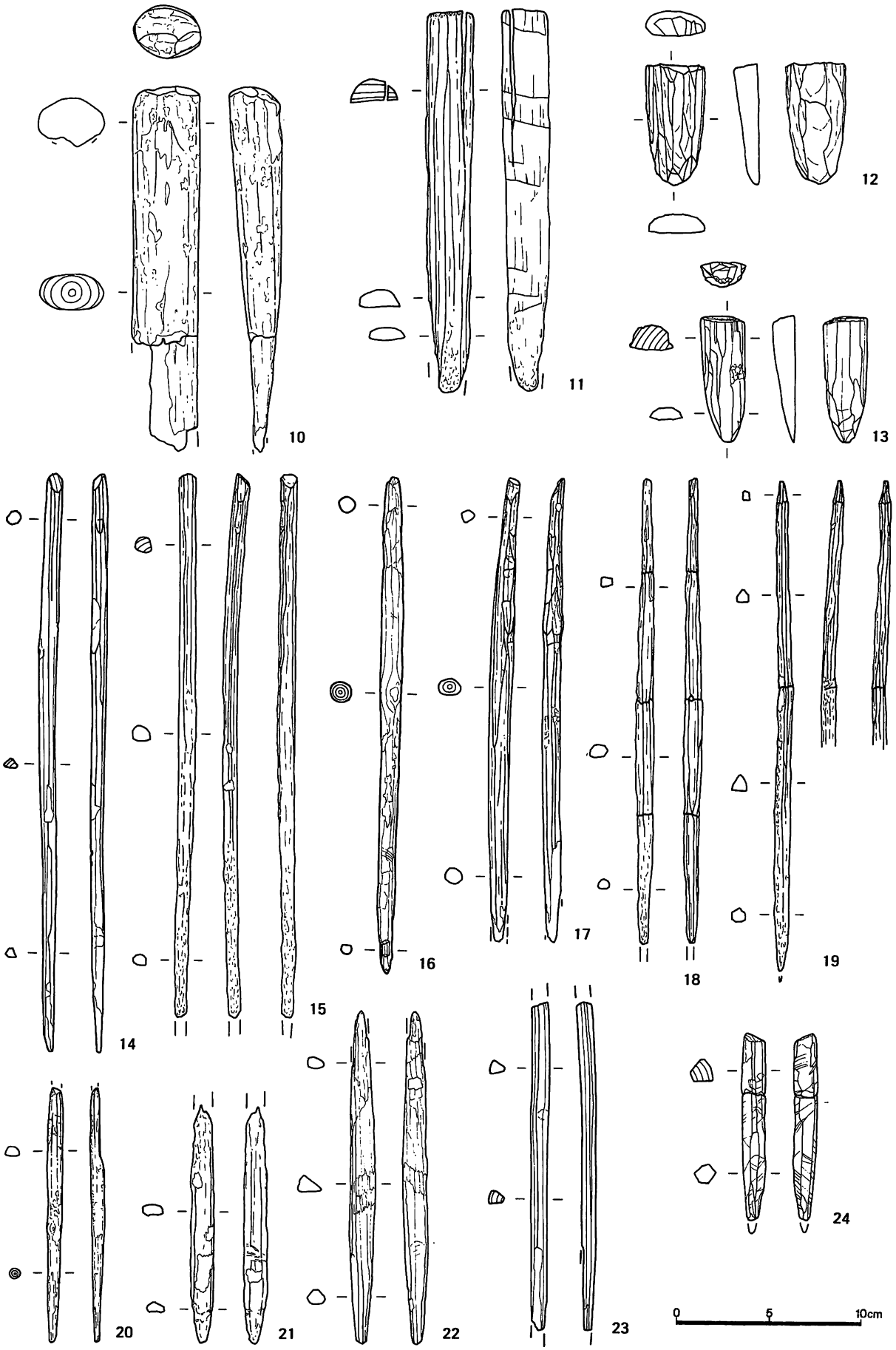
樽側板（33）：やや薄い板目の側板である。口縁部側と底部側で幅に差がないことから寸胴型に近い樽と考えられる。表裏面は腐朽が著しいため、蓋・底板の挿入された痕跡は不鮮明であるが、口縁部下にかすかに箍等が巻かれたように横走するつぶれが認められる。

板材（34・36）：34は柾目に近い板目取りの板破片である。36は板目取りの板片である。

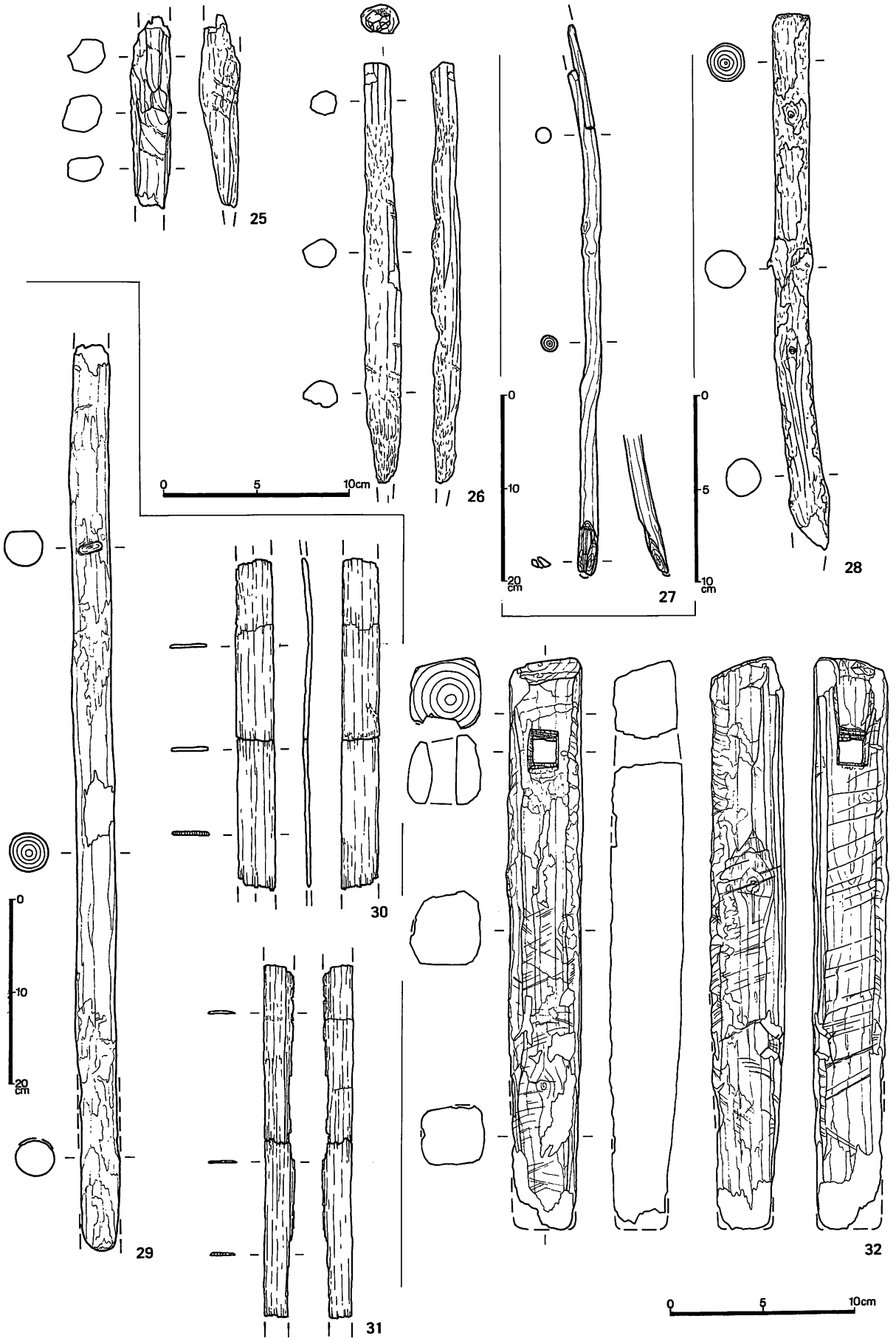
有孔板材（35・37～42）：35は板目板に3か所の角孔が当間隔に穿孔されている。上端と下端にも1か所ずつ角孔が存在したとみられ、計5か所の角孔が当間隔に直線的に並んでいたのであろう。板はその角孔部分から縦割れしたものと考えられる。板綴舟の側板破片であろうか。37は柾目板の上端側に小さな角孔が1か所穿孔されている。38は柾目板で腐朽が著しく、下端部が土圧によりつぶれ湾曲



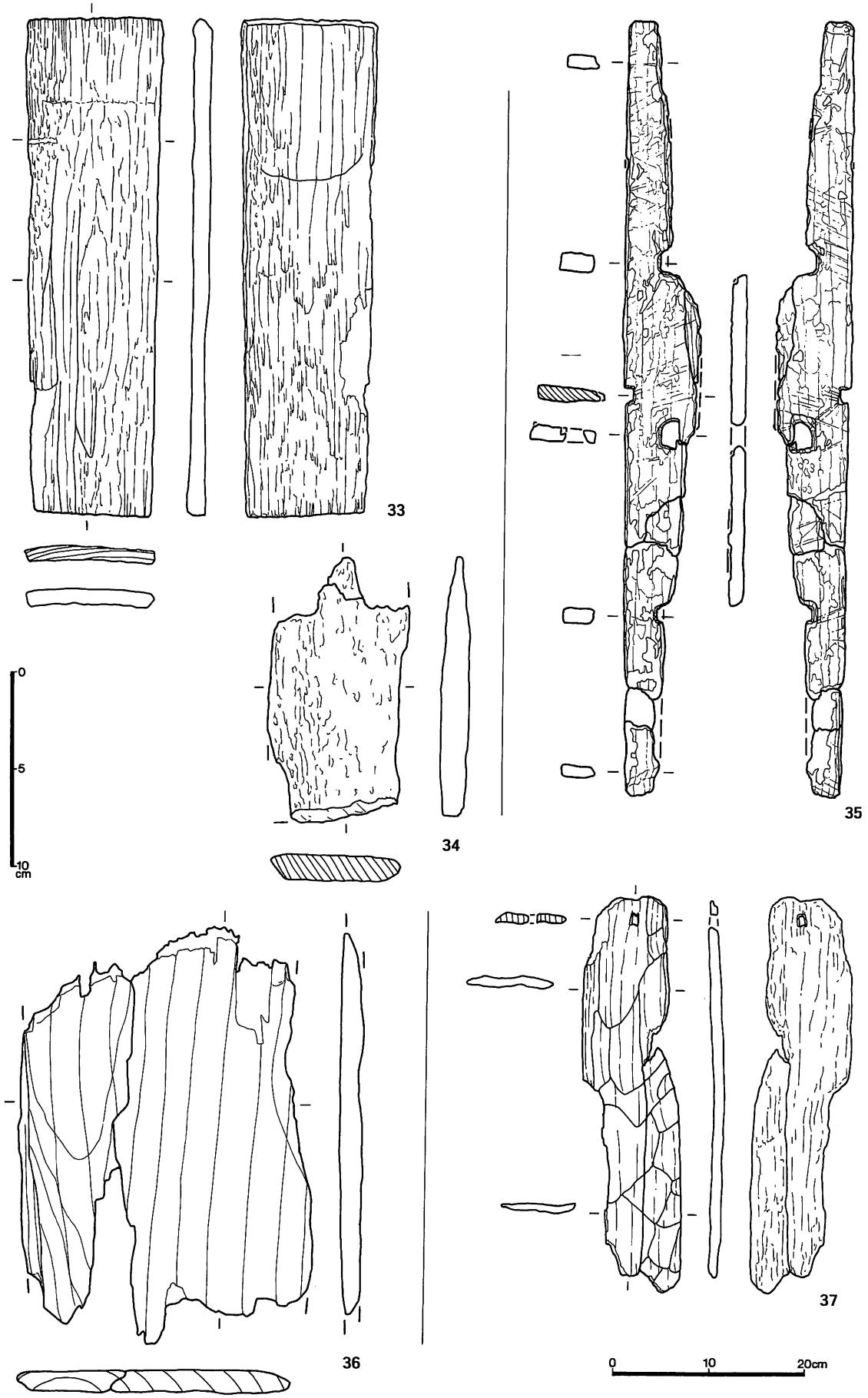
図Ⅴ－126　C地区Ⅰ黒層木製品 (1)



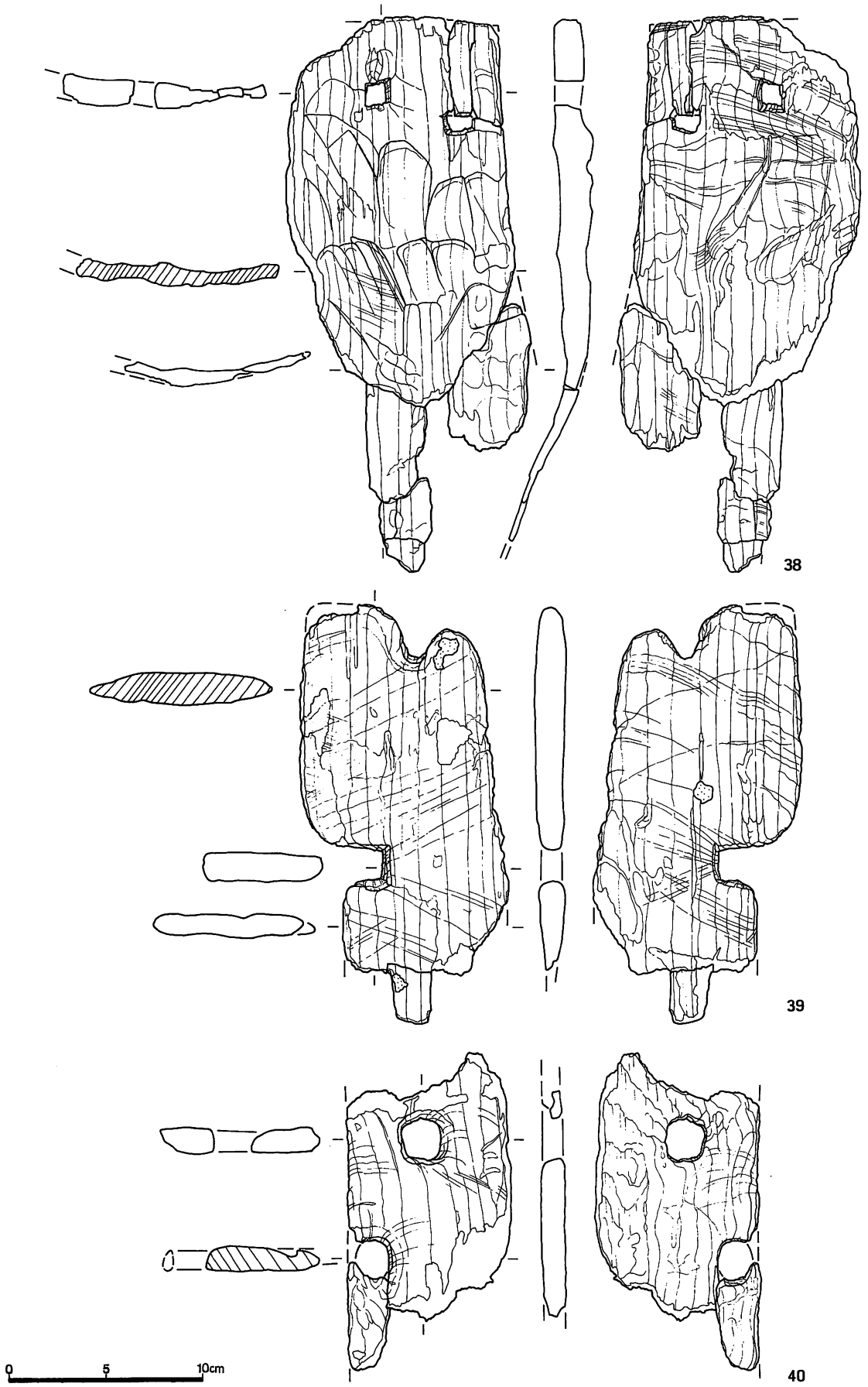
図Ⅴ－127　Ｃ地区Ⅰ黒層木製品 (2)



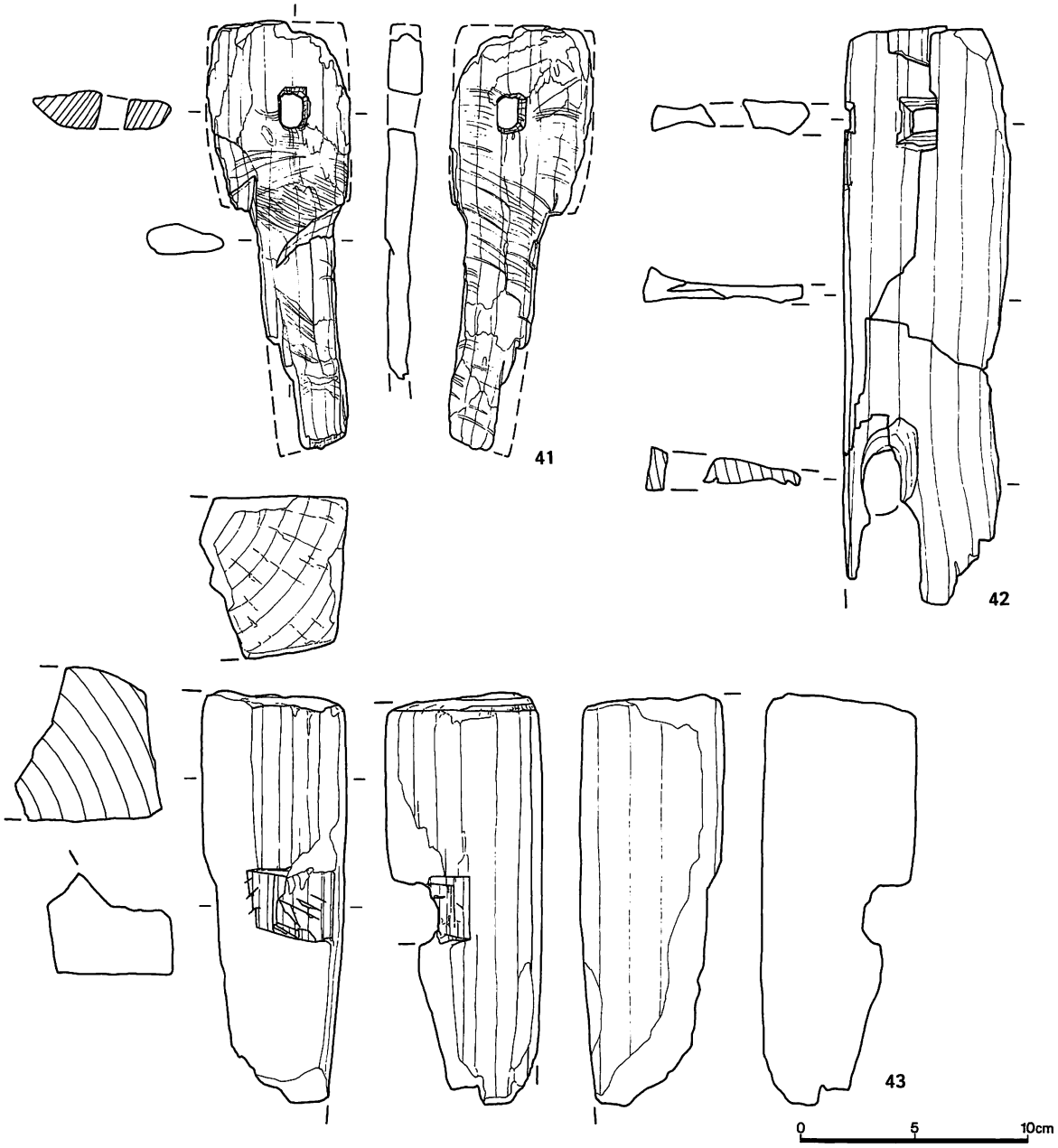
図Ⅴ－128　C地区Ⅰ黒層木製品 (3)



図Ｖ－129　Ｃ地区Ｉ黒層木製品 (4)



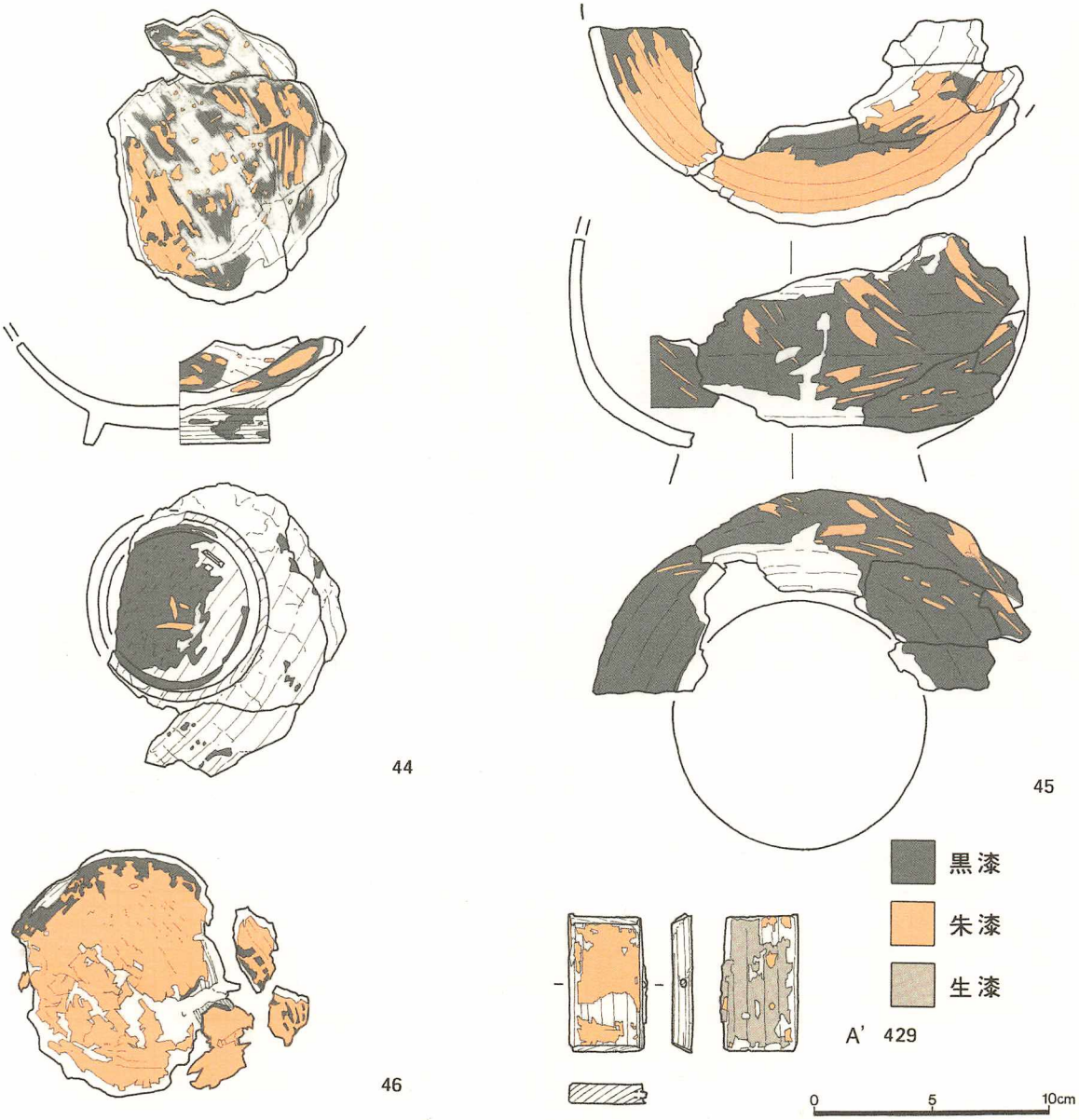
図Ⅴ－130　C地区Ⅰ黒層木製品 (5)



図V－131　C地区Ⅰ黒層木製品 (6)

している。上端部に角孔が2か所穿孔されている。39は板目板で断面が凸レンズ形となっている。上端部には「V」字上の抉りがあり、中央部やや下には破損した角孔が認められる。40は両端部を欠損した板目板で、角孔が2か所穿孔されている。角孔の縁は、紐などの結束により円形に摩耗している。41の頭部は方形に加工され、その中央部に角孔が1か所穿孔されている。断面は凸レンズ形となっている。42は柾目板で上端部は角孔が1か所穿孔され、そのすぐ横の側縁には角形の抉りがある。下端部側の角孔は紐ずれなどのより、上端に向かって斜めに摩耗した楕円形となっている。

抉入付角材(43)：上端部を平坦に削りだした角材の中央部が角形に抉られている。縦槌等が割れたものであろうか。



図Ⅴ－132　C地区Ⅰ黒層漆器(右下はA'地区)

漆器(44～46)：いずれも木質、漆膜とも遺存状態があまりよくない。44は漆塗りの椀の底部分である。低い高台がつき、漆膜は剝離が著しい。黒漆地に朱漆が塗られている。底には黒漆地に朱漆で漢字の「上」の文字が朱書きされている。45は漆塗りの鉢で、口縁部を破損したやや立ち上がる側縁部である。内面の漆膜の剝離が著しく、黒漆地に朱漆が塗られている。外面は黒漆地に朱漆で植物と思われる文様が描かれている。底部の欠損状態から高台がつくものと考えられる。46は木質の腐朽が著しく、土壌ごと取り上げたものである。漆塗り椀または鉢の底部である。内面は黒漆地に朱漆が塗られている。

（田口　尚）

表Ｖ－47　Ｃ地区Ｉ黒層掲載木製品

Ｇはグリッド取上げ。　＊は接合資料。　※は中間部をわずかに欠損する。数値は推定値。

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量(g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
1	8753	438	櫂柄部	c-67-81	481	(68.2)	4.9	3.5	627.0		○	板目	ｽｷﾞ?ﾋﾉｷ?	1	表面炭化。水掻部最上部を残して欠損。
2	8754	432	山刀柄部	c-67-81	510	17.5	3.9	2.4	95.0	○		板目	ｶｴﾃﾞ	1	片面に渦巻状の線刻。柄頭側に瘤状の突起。目釘。
3	8755	467	柄・棹との接合部	c-67-93	752	(21.7)	2.5	1.6	54.3			丸木	ﾔﾅｷﾞ	1	先端部欠損。帯状の抉りがある。
4	8756	440	回転式離頭銛中柄部	c-67-93	675	(15.9)	1.6	1.4	24.2			1/4割	ｱｼﾞｻｲ	1	中央部の断面角形。側縁に小さな抉りがある。
5	8757	449①	抉入付角棒状材	c-67-82	G	*(27.8)	2.6	2.2	60.4			板目	ﾓｸﾚﾝ	3	角形頭部に帯状の浮き彫りめぐる。
6	8758	465	抉入付角棒状材	c-67-93	744	(26.3)	1.9	2.1	70.0			板目	ﾅﾅｶﾏﾄﾞ	1	中央やや下に抉りがある。
7	8759	380	方形頭付丸棒状材	c-67-81	432	*(22.1)	4.0	1.6	58.4			板目	ｺﾅﾗ	4	方形の頭部に角孔を穿孔。孔に木片残存。
8	8760	384	抉入付半円棒状材	c-67-92	494	(14.4)	2.5	2.7	50.2			柾目	ｸﾙﾐ	1	端部はコケシ頭状。断面半円形。
9	8761	509	円板状材	b-67-04	656	(4.4)	(4.2)	1.6	15.6			木口		1	半分程を欠損。
10	8762	513	楔形製品	c-67-83	757	*(19.4)	3.6	2.7	94.0			丸木	ﾔﾅｷﾞ	2	正面は長方形。側面は細長い楔形。
11	8763	517	蒲鉾状材	b-67-03	571	(20.2)	2.4	1.2	39.0			板目		1	上部に亀裂がある。下端部腐朽。
12	8764	459	楔形製品	c-67-92	627	6.4	3.2	1.3	12.6			板目	ﾋﾉｷ?	1	先が丸い。削り痕顕著。
13	8765	508	楔形製品	c-67-92	660	6.7	2.3	1.3	9.9			板目	ﾈｽﾞｺ?	1	先が尖る。削り痕顕著。
14	8766	520	箸状製品	b-67-03	561	30.7	1.0	0.9	11.8			1/4割		1	B_4類。断面三角形。
15	8767	578	箸状製品	b-67-03	597	(28.7)	1.0	0.8	15.1			1/4割		1	B_4類。断面隅丸角形。
16	8768	435	箸状製品	c-67-93	745	53.0	2.3	2.3	158.8			丸木		1	A_3類。断面円形。下端部に抉りがある。
17	8769	518	箸状製品	c-67-93	714	(24.6)	1.2	1.1	17.3			丸木		1	A_3類。断面楕円形。下端部欠損。
18	8770	527	箸状製品	c-67-91	G	*(24.7)	1.0	0.7	9.4			板目		4	A_3類。断面八角形。下端部摩耗し欠損。
19	8771	463	箸状製品	c-67-83	G	(26.0)	0.9	1.0	9.5			1/4割		1	D類。尖端部のみ鉛筆状削り出し。断面三角形。
20	8772	516	箸状製品	c-67-92	535	(13.6)	0.9	0.7	4.2			丸木		1	尖端部破片。断面円形。
21	8773	535	串状製品	b-67-03	G	(12.7)	1.3	0.7	7.3			半割		1	B類。断面長方形。両端部が腐朽している。
22	8774	466	串状製品	c-67-83	786	(18.7)	1.3	0.9	11.0			1/4割		1	上端部欠損。断面三角形。
23	8775	536	箸状製品	c-67-93	676	(17.5)	0.9	0.8	7.7			1/4割		1	両端部欠損。断面三角形。
24	8776	515	ピン状製品	c-67-81	549	(10.0)	1.2	1.2	8.2			1/4割		2	尖端部欠損。断面三角形。
25	8777	449②	串状製品	c-67-82	G	(10.1)	2.2	2.2	23.6			板目		1	F類。断面多角形。尖端部破片。幅広の尖端で一面削り。
26	8778	464	串状製品	c-67-92	797	(22.3)	2.0	1.6	40.0			1/4割		1	F類。尖端部は腐朽。
27	8779	433	串状製品	c-67-82	733	*(58.7)	2.1	2.0	130.7			丸木		2	G類。細枝の先を二面削り。
28	8780	436	丸棒状材	c-67-93	750	(29.4)	2.5	2.4	83.1	○		丸木		1	上端部平らに削っている。

表Ⅴ－48　C地区Ⅰ黒層掲載木製品・漆器

図番号	木器No	仮No	名称	発掘区	取上No	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	湿重量(g)	樹皮	焼痕	木取	樹種	点数	備考
29	8781	437	丸棒状材	c-67-93	693	(96.6)	4.3	4.4	1244.0			丸木		1	上部に刻目がある。下端部に摩耗部分がある。
30	8782	511	薄柾目棒状材	c-67-93	747	*(35.2)	4.0	0.6	51.3			柾目		2	２点接合。
31	8783	514	薄柾目棒状材	c-67-83	763	*(37.9)	3.1	0.3	20.0			柾目	ｽｷﾞ	2	２点接合。
32	8784	439	有孔角材	c-67-93	674	(30.4)	4.0	4.0	331.5			丸木	ﾄﾈﾘｺ	1	上部に角孔がある。
33	8785	456	樽側板	c-67-83	728	25.4	7.1	1.5	121.0			板目	ｽｷﾞ	1	上部に箍の痕跡がかすかに見られる。
34	8786	512	板材	c-67-81	511	*(13.6)	(6.7)	1.5	80.6			板目		2	上端部欠損。
35	8787	434	有孔板材	c-67-83	765	*(79.2)	(7.7)	1.9	521.0			板目	ﾊﾘｷﾞﾘ	6	角孔が５か所（確定３か所）。
36	8788	528	板材	c-67-93	G	*(21.4)	(15.1)	1.2	232.0			板目		2	両端部欠損。
37	8789	442	有孔板材	b-67-04	756	*(40.6)	(10.0)	1.4	281.0			柾目	ﾓﾐ	2	上部に小さな角孔。
38	8790	441	有孔板材	b-67-04	781	*(28.0)	(11.1)	1.9	218.0			柾目	ｽｷﾞ	9	上部に角孔２か所。下部土圧により変形。
39	8791	510	有孔板材	c-67-81	509	*(21.3)	(9.8)	1.6	174.7			板目	ﾊﾘｷﾞﾘ	2	断面凸レンズ形。上部に抉り、側縁に破損した角孔。
40	8792	455	有孔板材	c-67-83	760	*(16.2)	(8.3)	1.4	83.0			板目	ﾊﾘｷﾞﾘ	9	両端部欠損。角孔２か所。
41	8793	462	有孔板材	c-67-93	713	(18.5)	(6.1)	1.7	77.5			柾目		1	角形の上部に角孔１か所。下部側縁を欠損。
42	8794	383	有孔板材	c-67-81	483	*(25.1)	(7.3)	1.9	121.5			柾目		5	角孔２か所。そのうちの１か所は紐ずれで楕円形。
43	8795	382	抉入付角材	b-67-03	514	(17.9)	(6.4)	6.4	376.6			1/4割		1	角形の抉り。
44	8796	445	漆塗椀底部	c-67-82	659	*(12.4)	(10.1)	(4.3)	(70.0)			横木	ﾌﾅ	3	内面の漆膜は劣化剥離。底面に「上」の朱書き。
45	8797	452	漆塗鉢側縁部	c-67-03	610	*(19.6)	(8.5)	--.--	--.-			横木	ﾄﾁﾉｷ	7	内面漆膜は劣化剥離。外面に植物の文様が描かれる。
46	8798	387	漆塗椀・鉢底部	c-67-81	448	*(10.3)	(8.5)	--.--	--.-			横木	ﾌﾅ	多	木質の腐朽著しい。漆膜は劣化剥離。

5)　自然遺物（表V－49）

掲載した遺物は、人力調査によって検出されたものである。遺物の時期は擦文時代～アイヌ文化期（1667年以前）である。遺物はI黒$_1$層から下層へゆくにしたがって種類数・量が減少していく。c－67－81、91、92、93に多い傾向は0黒層と同じだが、b－67－02、03、04にも検出されている。遺物の種類は木本が主体となる傾向は0黒層と同じである。あらたにヤマブドウが検出されている。ショウブ、ヒルムシロ、ハンノキ、など水辺や水湿のある低地に成育する植物がみあたらない。I黒層が形成されていた頃はC地区がわりと乾いていたことを示しているのかも知れない。また、A′•B•C地区の各地区、0黒層までまんべんなく出土していたカワシンジュガイ殻皮はC地区のI黒$_2$層からは激減する。

（鈴木　信）

表V－49　C地区I黒層自然遺物

名称	I黒$_1$層出土の自然遺物					
	b－67－03	b－67－04	c－67－80	c－67－81	c－67－91	c－67－92
甲虫片			15(0.01)	54(0.04)	70(0.02)	120(0.06)
カワシンジュガイ殻皮				16(1.10)	1(0.18)	25(3.54)
サルノコシカケ						
スギナ				1(0.04)		1(0.01)
ショウブ						
タデ科						
ヤマブドウ						1(0.01)
ミツバウツギ	14(0.10)					15(0.08)
スモモ						
コブシ	4(0.13)			4(0.27)		
コナラ	23(0.42)	22(0.22)		39(0.27)		15(1.36)
クルミ属			1(0.73)	1(0.38)/5(4.71)		3(1.59)

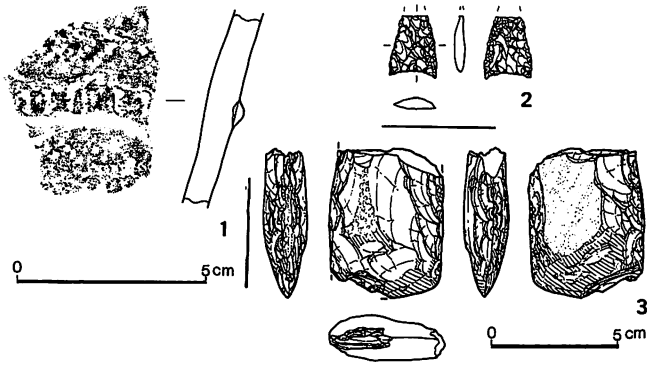
名称	I黒$_2$層出土の自然遺物				I黒$_1$層出土の自然遺物	
	b－67－02	c－67－80	c－67－92	c－67－93	b－67－03	c－67－82
甲虫片	80(0.03)					
カワシンジュガイ殻皮				3(13.76)		
サルノコシカケ					1(40.98)	
スギナ						
ショウブ						11(0.05)
タデ科						
ヤマブドウ						
ミツバウツギ	3(+)	3(0.01)		1(+)		
スモモ					1(0.17)	
コブシ	1(0.01)					
コナラ				5(0.24)	5(0.20)	
クルミ属			1(3.18)	1(0.79)		

(6)　第II黒色土層の遺物（図V 133、表V－50、図版V－59－2）

II黒層からは、土器が1点、石器が2点、礫が1点出土している。

1はコッタロ式に相当するもの。隆帯に縄端圧痕文が付く。2は黒曜石製の石鏃。凹基である。3は緑色泥岩の石斧、刃部側の破片である。扁平な転石を素材とした。側縁は剝離調整のままで、刃部を研磨したもの。

（鈴木　信）



図V－133　C地区II黒層土器・石器

表V－50　C地区II黒層掲載土器・石器

図番号	名称	発掘区	層位	備考
1	深鉢 胴部	c－67－90	IIB	Ib-2（コッタロ式）

図番号	名称	発掘区	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材質
2	石鏃	c－67－82	IIB	(27.0)×12.5×3.0	(0.6)	黒曜石
3	石斧	b－67－13	IIB	58.0×46.1×17.9	62.1	緑色泥岩

8　各種分析

(1)　美々8遺跡低湿部出土の動物遺存体

千歳市教育委員会　高橋　理

遺構および出土状況

報告する動物遺存体は、平成3年度（1991年）に㈶北海道埋蔵文化財センターによって行なわれた美々8遺跡低湿部C地区の調査において確認された、0F－1より検出された。この遺構は、直径約55 cm、短径約45 cm、深さ6 cmの不整楕円形プランを呈する土坑で、確認面は樽前a火山灰（Ta－a）下の0黒層と呼称する黒色土の上面である。

坑底は被熱して0黒層土が橙褐色化している。覆土は2枚の灰層で、上層にはサケ科魚類を主体とする動物遺存体が含まれ、下層には炭化物が少量混じる。下層に長径15 cm程の円礫が確認された。礫は被熱していない。

17世紀後半から18世紀前半の焼土遺構である。

出土動物遺存体

動物遺存体はすべて魚類であり、サケ科魚類を主体としニシン科およびコイ科魚類がこれに加わる（表1）。すべて被熱し白色化している。

脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
ニシン目	Clupeiformes
ニシン科	Clupeidae
マイワシ	*Sardinops melanostictus*（Temminck et Schlegel）
サケ目	Salmoniformes
サケ科	*Salmonidae*
コイ目	Cypriniformes
コイ科	*Cyprinidae*

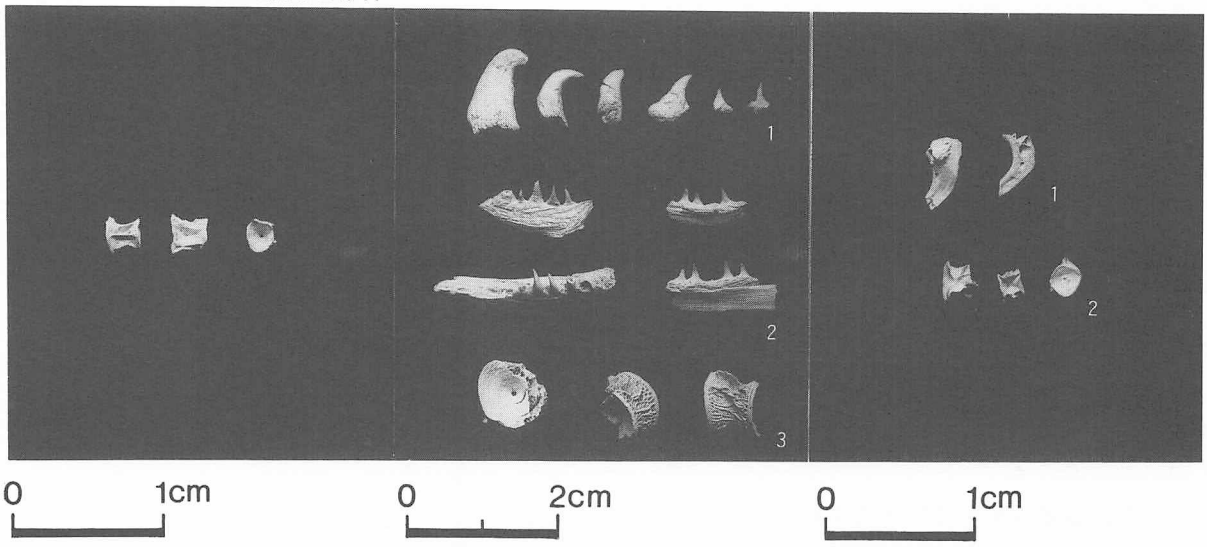
最も多く出土しているサケ科魚類は脱落歯、顎骨および椎骨である。また頭骨と考えられる部位の破片も少なからず検出されている。完形の椎骨はないが、大きさをある程度推定できる資料は3点（腹椎）ほどあり、標準体長530 mmのシロザケ（雌）の原生標本よりもいくぶん大きな個体である。ニシン科魚類は椎骨のみの出土であり、マイワシと考えられる。コイ科魚類の咽頭骨および椎骨（？）が検出されている。咽頭骨は細片化しているが、いずれも小型である。なお、学名表記は長澤・鳥澤（1991年）によった。

参考文献

長澤和也・鳥澤　雅編（1991）　「漁業生物図鑑　北のさかなたち」㈱北日本海洋センター

阿部宗明（1963）「原色魚類検索図鑑」　㈱北隆館

写真1　0F－1出土動物遺存体



1　マイワシ尾椎　　2　サケ(1.歯　2.顎骨　3.腹椎・尾椎)　3　コイ科(1.咽頭骨　2.椎骨・頸骨)

表1　C地区0F－1出土動物遺存体

魚　種	部　位	破　片　数	重　量（g）
サケ科	歯（脱落歯）	127	1.2
	顎骨（歯植立）	16	0.3
	椎骨	117+	5.8
	鰭棘　他	1341+	5.8
	頭骨破片（顎骨片も含まれる可能性あり）		5.7
ニシン科	椎骨	111	0.1
コイ科	咽頭骨片	5	
	椎骨（？）	6	
不明魚骨	椎骨	1	
	骨片		2.8

(2)　植物遺存体について

下に掲載した表はフローテーションによって遺構から出土した植物遺存体（種子）の一覧である。種名の同定は吉崎昌一氏に依頼した。今回は調査中なので属・種名だけを掲載した。

植物遺存体が出土した遺構の時期は、0F－1、0N－1、0C－1～8がアイヌ文化期(1667年～1739年)、IC－1～9が擦文時代～アイヌ文化期（1667年以前）である。

注目されるのは0黒層の遺構からアワ、ヒエ、アサの栽培植物が検出されたことである。また、知里真志保「分類アイヌ語辞典　植物動物編」平凡社（1976）や更級源蔵•更級　光「コタン生物記　Ⅰ」法政大学出版局（1976）によると、アイヌの人々にとっての有用植物も0黒層の遺構から出土しており、例えば、ヨモギ、ニワトコ、タラノキ、キハダ、ホウノキが薬として用いられるようであり、バラ属(ハマナス)、キイチゴ、マタタビ、キハダ、ブドウ、クルミは食べる植物である。またミツバウツギ、ホオノキ、クルミは材として用いられる。加えてキハダ、ブドウ、ミツバウツギ、クルミは人力調査によって包合層からも確認されており、積極的に利用されていたことがわかる。

0黒層において、種子の種類数の多い遺構は0C－4～7で、可食植物が主体となる。植物遺存体の種類数の少ない遺構は、0C－3•0F－1である。0F－1からはサケなどの骨が検出されておりこの遺構からは動植物両方が含まれていた。

Ⅰ黒層の遺構からは、IC－7で唯一栽培植物は検出された。有用植物はあまり検出されていない。そのなかではタラノキ、ブドウが比較的よく検出されている。植物遺存体の種類数の多い遺構はIC－5・7である。植物遺存体の種類数の少ない遺構はIC－1～3・6・8・9である。　（鈴木　信）

表1　美々8遺跡遺構出土植物遺存体

遺構名	層位	アワ(粒)	ヒエ(粒)	アサ(粒)	ナス科(粒)	タデ科(粒)	アカザ属(粒)	ヨモギ属(粒)	カヤツリグサ科(粒)
0F－1	0B	●							
0N－1	0B					●			
0C－1	0B			●	●				
0C－2	0B				●	●			●
0C－3	0B								
0C－4	0B			●		●		●	●
0C－5	0B								●
0C－6	0B		●		●	●			
0C－7	0B			●		●			●
0C－8	0B		●			●			
IC－1	IB1								
IC－2	IB1					●			
IC－3	IB1				●	●			
IC－4	IB1				●	●			
IC－5	IB1					●			
IC－6	IB1					●			
IC－7	IB1			●		●	●		
IC－8	IB2					●			
IC－9	IB2								

遺構名	層位	バラ属ハマナス(粒)	キイチゴ属(粒)	マタタビ属(粒)	ニワトコ属(粒)	タラノキ属(粒)	キハダ属(粒)	ブドウ属(粒)	ミツバウツギ属(粒)	ホオノキ属(粒)	クルミ属(粒)	不明種子(粒)
0F－1	0B						●					
0N－1	0B					●		●			●	
0C－1	0B					●		●				
0C－2	0B		●		●	●						●
0C－3	0B		●			●						
0C－4	0B	●	●	●				●				
0C－5	0B		●	●	●	●	●	●		●		●
0C－6	0B	●	●			●	●	●				●
0C－7	0B		●	●		●		●	●			●
0C－8	0B				●		●	●				●
IC－1	IB1							●				
IC－2	IB1							●				
IC－3	IB1											
IC－4	IB1				●			●				
IC－5	IB1			●		●			●			
IC－6	IB1					●						●
IC－7	IB1		●	●	●			●	●	●		
IC－8	IB2											
IC－9	IB2											

(3)　金属製品について

金属製品の材質調査は鉄鍋などの鋳造品を、岩手県立博物館の赤沼英男氏に依頼した。その結果、昨年度報告の0黒層出土の金属製品のなかで、カスガイ（図IV－17の10）の地金の材質に特徴があることが指摘されている。このカスガイは普通「平鋺」と分類されている。普通のカスガイに比べて刺さり込む部分が短く幅が広いことが特徴である。この形のカスガイがどのような機能を持っていたか、材質と形態を合わせて再考する必要がある。

その他に特筆すべきことは、C地区0黒層出土のキセル吸口についてである。今のところ、管見によれば北海道における出土例は確認されていない。材質は蛍光X線分析によって真鍮製ということが判明した。形態については前述したように古泉分類の吸口第I類Bの範疇に入る。製作技法は断面6角形の肩の上から狭義の吸口をかぶせており、吸口第I類の範疇に入るが、吸口第I類Bの製作技法とは異なっている。0黒層上面に近い層準から出土しており、年代についてはTa－a降下火山灰層（1739年降下）に近い年代が考えられる。古泉分類の吸口第I類は江戸において16世紀末から17世紀前半に編年されるものである。本遺跡においては0黒層（1667年～1739年）上層から出土しており、18世紀前後の廃棄年代が考えられる。

以上より、このキセルは伝世されていた可能性が高い。キセルが北海道に登場した初期においては江戸と異なる受入れかたをされていた可能性も考えられる。今後、類例の増加を待ちたい。

（鈴木　信）

(4)　樹種同定

樹種同定は平成元年度の木製品・自然木（加工部欠損木を含む）902点の同定で24科35属、平成2年度の木製品は134点の同定で15科19属が確認されている（不確定樹種を含む）。

平成3年度出土木製品の同定は、実測作業および写真撮影の終了した掲載木製品の中から加工度の高い製品を289点抽出した。今回は時間の制約から大型の建材群、立杭、箸状製品、串状製品等を除外しているが、今後の整理作業の中で同定を実施する予定である。掲載した樹種名はすべて属名である。

同定の方法は、試料から約5 mm×5 mmの木口、板目、柾目の極薄切片を片刃（または両刃）カミソリで採取したものを直接スライドガラスとカバーガラスに挟み、美々8遺跡（北埋調報69）同様に光学顕微鏡を用いて、無染色のまま顕鏡した。なお、同定に先だって、これまでの同定結果をもとに現世樹種の永久プレパラートを針葉樹6科8属8種、広葉樹24科35属42種作成し比較検討資料とした。

今回の同定では針葉樹4科6属、広葉樹20科26属が確認された。針葉樹ではカヤ属、クロベ属が追加され、広葉樹ではトチノキ属、シナノキ属が追加された。大部分の樹種は遺跡周辺に見られるものであるが、針葉樹のうちスギ属、ヒノキ属、クロベ属は本州材と考えられる。黒松内以北には自生しないとされるブナ属や小樽が北限とされるトチノキ属は本州或いは道南部からの移入品と考えられる。なお、不確定のためスギ属？と記載してきたものはクロベ（ネズコ）属の可能性があり今後注意を要する。当センターに導入された走査型電子顕微鏡等を使用して、他の不確定樹種と共に再同定する必要がある。

製品別に見ると曲物、折敷、桶・樽、薄柾目板等の50%以上がスギ属であり、ヒノキ属やクロベ属がそれに続く。箸状製品の45%はアジサイ属、36%がスギ属であり、他にイチイ属、ツゲ属等がある。串状製品ではスギ属が34%を占め、アジサイ属は13%程である。他にトネリコ属、イチイ属、カツラ属等の各種材が少量含まれている。アジサイ属以外の箸状製品や串状製品は割裂性の良いスギ属等の再加工品と考えられ、釘穴の認められるものは桶・樽を加工したものであろう。他に特徴的な樹種選択の認められるものには回転式離頭銛中柄や矢中柄がある。80%以上がアジサイ属であり、アイヌの民具例では素材としてアジサイ属のノリウツギ（アイヌ語名称ラスパ）が使用されている。回転式離頭銛中柄部をアイヌ語でラスパやラシュパと呼ぶのも樹種名からと思われる。魚突き鉤はカエデ属が多く、アジサイ属がそれに次いで多い。小刀柄・山刀柄はカエデ属が70%と多く、これも民具例と類似する。早櫂・車櫂はモクレン属が多く、他にサクラ属、ハンノキ属、コナラ属、ヤナギ属等がある。他にスギ属も同定されている。アイヌ民具の舟材には、カツラ、ヤチダモ、ハリギリ、ハコヤナギ等が使用され、それと同一の材で舟用具を製作したらしく材の選択には地方差が認められている。製作地等を検討する好試料と考えられる。昨年度のヒキリギネはスギ属であり、着火率が最も良い素材である。ヒキリ板はイヌエンジュ属、ヤナギ属の二種である。アイヌの民具例では素材としてハルニレ、トドマツ、コクワが使用されたらしく、今後の試料の増加が期待される。板材はハリギリ属とハンノキ属がやや多く、樹種の種類も多い。しかし、有孔の板材では50%以上がハリギリ属となったことが特筆される。他の製品については明確な樹種選択の傾向は認められていない。今後は特定の製品の同定点数を増やし検討試料としたい。

（田口　尚）

これまでに同定された28科41属名とその代表的樹種名を以下に列記する。

イチイ科：イチイ属 *Taxus*（イチイ）、カヤ属 *Torreya*（カヤ）

マツ科：モミ属 *Abies*(モミ・トドマツ)、トウヒ属 *Picea*(エゾマツ・アカエゾマツ)、カラマツ属 *Larix*（カラマツ）

スギ科：スギ属 *Cryptomeria*（スギ）

ヒノキ科：ヒノキ属 *Chamaecyparis*（ヒノキ・サワラ）、クロベ属 *Thuja*（ネズコ）

ヤナギ科：ヤナギ属 *Salix*（エゾノカワヤナギ・ネコヤナギ）、ハコヤナギ属 *Populus*（ドロノキ・ヤマナラシ）

クルミ科：オニグルミ属 *Juglans*（オニグルミ）

カバノキ科：ハシバミ属 *Corylus*(ツノハシバミ)、クマシデ属 *Carpinus*(サワシバ)、アサダ属 *Ostrya*（アサダ）、シラカンバ属 *Betula*（シラカンバ・ウダイカンバ）、ハンノキ属 *Alnus*（ハンノキ、ヤチハンノキ）

ブナ科：ブナ属 *Fagus*（ブナ）、コナラ属 *Quercus*（ミズナラ・コナラ）、クリ属 *Castanea*（クリ）

ニレ科：ニレ属 *Ulmus*（ハルニレ・オヒョウ）

クワ科：クワ属 *Morus*（ヤマクワ）

カツラ科：カツラ属 *Cercidiphyllum*（カツラ）

モクレン科：モクレン属 *Magnolia*（ホウノキ、キタコブシ）

ユキノシタ科：アジサイ属 *Hydrangea*（ノリウツギ、ガクアジサイ）

バラ科：サクラ属 *Prunus*（エゾヤマザクラ・シウリザクラ）、リンゴ属 *Malus*（ズミ・エゾノコリンゴ）、ナナカマド属 *Sorbus*（ナナカマド・アズキナシ）

マメ科：イヌエンジュ属 *Maackia*（イヌエンジュ）

ミカン科：キハダ属 *Phellodendron*（キハダ・ヒロハノキハダ）

ニガキ科：ニガキ *Picrasma quassioides Benn*（ニガキ）

ツゲ科：ツゲ属 *Buxus*（ツゲ）

ウルシ科：ウルシ属 *Rhus*（ヤマウルシ・ヌルデ）

ニシキギ科：ニシキギ属 *Euonymus*（マユミ・ツリバナ）

カエデ科：カエデ属 *Acer*（イタヤカエデ、ヤマモミジ）

トチノキ科：トチノキ属 *Aesculus*（トチノキ）

シナノキ科：シナノキ属 *Tilia*（シナノキ）

ウコギ科：ハリギリ属 *Kalopanax*（ハリギリ）

ミズキ科：ミズキ属 *Cornus*（ミズキ）

モクセイ科：トネリコ属 *Fraxinus*（ヤチダモ・アオダモ）、ハシドイ属 *Syringa*（ハシドイ）

スイカズラ科：ガマズミ属 *Viburnum*（ガマズミ・オオカメノキ）

イネ科：ササ属 *Sasa*（クマイササ・チシマザサ）、タケ等

ツル性植物：（ヤマブドウ等）

9　まとめ

(1)　遺構

検出した遺構は、建物跡や建材群、木組、立杭、杭穴、双礫、集石、焼土、自然遺物集中、炭化物集中であった。これらは表土層、0黒層、Ⅰ黒$_1$層、Ⅰ黒$_2$層の各層において検出できたことが今年度の成果である。この成果によって擦文時代中期から江戸時代中期にわたって遺跡が形成されていることが明らかとなり、それを細分してとらえることができるようになった。来年度以降の調査および整理では、細分した遺跡形成の過程を各時期ごとの遺構の配置を把握し、その上で遺構の機能を推定する行くことが必要である。遺構については、人力調査を行ったC地区を主に述べることとする。

建物跡：柱は腐朽した立杭の状態で検出し、かつ周辺には建材などが出土しておらず、上部構造は不明である。柱はA′地区で出土した建材群に比べると細く、面積も小さいことから作業小屋と考えられ、建材群に付随するものと考えることもできる。

木組：横木1本、立杭2本、杭状の材4本の出土状態から判断して、棚上の構造ではなく柵や物干しに近い構造が考えられる。周辺に箸状と串状製品がやや多く分布していることから生産加工にかかわる遺構とも考えられるが今後類例の増加を待たれる。

立杭：時期の細分は前年度までは不明であったが、今年度は残存していた上端部を確認した面が、立杭の所属する時期を示すことがわかった。立杭のほとんどは樹皮付きの丸木でありこの傾向は昨年度と同じである。分布・配列は0黒層において、建物跡や木組付近に集中し等高線と並行していることのほかは特に規則性はみられなかった。なお、調査においては、覆土による杭穴の時期別細分と杭先に付着した火山灰や杭先の直下の土の観察によって細分を試みた。

杭穴：覆土に含まれている火山灰によって時期を細別した。表土層、0黒層、Ⅰ黒$_1$層で確認できた。表土層、Ⅰ黒$_1$層では分布に規則性は確認できなかった。0黒層では直径と分布によって杭穴の性格が推定できたその結果同じ直径の杭穴が配列をもち0W－1のような遺構となることがわかった。

集石：0黒層から検出された。加熱や破壊は受けていないことから錘石と考えられるが、昨年度報告の集石よりも小型のものであるため、錘石の中にも複数の用途が考えられる。今後台地上の集石などとの比較を通じて性格を明らかにする必要がある。集石の礫はすべて搬入された礫であり、日高地方の河川から採取された可能性が高い。現地の河川に赴いて対照資料を観察・測定する必要がある。

焼土：0F－1からはフローテーションによって、サケ科、マイワシ、コイ科の動物遺存体が検出された。淡水棲魚類と海水棲魚類が同じ遺構の同じ層から検出されたことは、当時の人たちが海に赴いて漁を行っていたことを示している。同じ類例として平成元年度報告のH－1のHF－1・HF－3、H－2のHF－4、F－24がある。これらはカレイ、ニシン、ウバガイ、ホタテガイの海棲魚貝類を含み、イトウ、ウグイの淡水棲魚類も含む。また、0F－1からはアワ種子が検出された。栽培植物が見つかったのは初めてのことである。アワはヒエについで重要な作物であった。0F－1(炉？)は動植物の両方が検出されており使い方に特徴がある。

自然遺物集中：0N－1はクルミの殻がまとまっていた。このような残滓の集積は物送り場として考えられることもできる。

炭化物遺物集中：0黒層、Ⅰ黒$_1$層、Ⅰ黒$_2$層において検出した。とくに0黒層、Ⅰ黒$_1$層において検出したものは可食植物の炭化種子を複数種類含むものが多く、0黒層の炭化物遺物集中の中にはヒエ、アサの栽培植物を含むものがある。これらの結果、炭化物遺物集中は単に焚火の跡とはいえず、炊事場や物送り場とも考えられる。遺構の性格の推定には、炭化した大型の植物遺存体の中に薪用の材が含まれているかどうかも問題となろう。

（鈴木　信）

(2)　遺物

本年度は良好な状態で包含層が残されていたことから木製品・樹皮製品・繊維製品の質・量とも昨年度の調査以上に豊富となっている。遺物の内容は、先述の遺構同様に低湿部内において生活が営まれていたことを示し、これまで推測されていた遺跡の性格を補強するものであった。

遺物名称は、基本的に「アイヌの民具」（萱野　1978年）および一般的な和名を使用し、他に形態や用途をある程度考慮した独自の造語を使用している。アイヌ民具の可能性があるものには「アイヌの民具」のアイヌ語名称を（　）内に片仮名で付している。しかし、現状では民俗学や言語学における地域を考慮した系統的なものでないことから、不備や誤認が多々あると思われる。今後の遺物名称および分類については、平成4年度出土遺物の整理と合わせて再検討すべきと考えている。これまでに報告した遺物等について、先学諸氏のご指導、ご助言頂ければ幸いである。

平成元年度から3年度まで出土した遺物には次のようなものがある。

建築・土木材：受部のある柱、桁、母屋、垂木、杭、木組材、建材、板材、角材、丸木材、半割材、偏割材、カスガイ、釘等。

交通具：板綴舟（イタオマチㇷ゚）舷側板、祖印（イトㇰパ）の刻まれた櫂受軸部（タカマ）、車櫂（カンチ）、早櫂（アッサㇷ゚・サッカイ）、メカジキ（シリカㇷ゚）の線刻画が描かれた早櫂、イトㇰパの刻まれた櫂握部、舟のあか汲み（ワッカケㇷ゚）等。

運搬具：背負縄（タラ）あるいはおぶり紐（イエオマㇷ゚）等。

漁撈具：魚突鉤台部（マレㇷ゚ニピヒ）、回転式離頭銛（キテ）の中柄（ラシュパ）・柄（オㇷ゚）・手掛部（オㇷ゚ケシ）、ヤス、魚叩き棒（イサパキㇰニ）等。

狩猟具：弓（ク）、仕掛弓台（クワリ）、矢中柄（マカニッ）・矢柄（アイスㇷ゚）・矢筈（アイチャシ）、矢筒（イカヨㇷ゚）の翼部分、打棒（カンニ）等。

農耕具：鍬（トンカ）の風呂部、鉤型の木鍬（ニシッタㇷ゚）等。

住用具：炉鉤（スワッ）、ピン（シンニヌㇷ゚）等。

加工具・道具類：縦槌、横槌（トゥチ）、楔（センピ）、ピン類、織物の糸締め具（ペラ）、木製作業台、砥石（ルイ）、錘石（ピッ）、台石等。

切截具：小刀（マキリ）の柄、アイヌ文様の彫刻付きの山刀（タシロ）、山刀の鞘帯執部、シラカバ樹皮製の鞘（ケペシペ）等。

調理・食用具：箸（イペパスイ）、串（イマニッ）類、杓子（カスㇷ゚）、箆、団子箆（シトペラ）、内耳鉄鍋（ス）等、碗・皿・擂鉢等の陶磁器類。

容器類：漆塗椀（イタンキ）、鉢（ニマ）、盆（イタ）、膳（オッチㇶ）、曲物、桶・樽などの側板・蓋・底、樽の栓等。

燈火・暖房用具：ヒキリ板、ヒキリギネ、火口入れの蓋？、火打石（カㇲスマ）、先の焼けた燈火用シラカバ樹皮巻（チノイェタッ）、焚付用のシラカバ樹皮、燈火用樹皮挟木（スネニ）、薪の燃尻（アペケシ）および炭化材、燈明皿、石製火皿等。

喫煙具：煙管（キセリ）雁首・吸口等。

結束具：撚紐・縄類、組紐、挿入式や結束式の細帯状樹皮等。

祭祀具：上部に逆削り痕や連続する切り込みのある木幣（イナウ）のような棒状製品、捧酒箸（トゥキパスイ）、花矢（ヘペレアイ）、宝刀（イコㇺ）のミニチュア、箆のミニチュア等。

着用具：緒締・根付、下駄等。

装飾品：彫刻のある飾り板、ガラス玉、琥珀玉等。

銭貨：天禧通宝（北宋　1017年）、景祐元宝（北宋　1034年）、嘉祐通宝（北宋　1056年）、元豊通宝（北宋　1078年）、洪武通宝（明　1368年）等。

その他：木端、切片、枝切痕、炭化材、樹皮片、動物遺存体、植物遺存体、昆虫遺体等。

当遺跡では各種形態の櫂、櫂軸受部、あか汲み等の舟具が多数出土している。舟は交通具であるため採集地＝製作地とは考えにくいが、河川・湖沼・湿地などの環境によって櫂等の推進具に形態差があったと推定される。ここで櫂について若干述べる。

本遺跡出土の各種の櫂はTa－b層（1667降灰）とTa－a層（1739降灰）に挟まれた0黒層から出土したものである。形態は早櫂（サッカイ、アッサㇷ゚、アシナㇷ゚、アシナップ、アシナッポ等地域によってアイヌ語名称が異なる）と車櫂（カンチ）の2種に大きく分けられる。

早櫂は直接手で水を掻くパドルのような形態のものである。早櫂は水掻部の肩の張出したカナディアンカヌーのパドルような形態のものと明確な肩を持たない細長い水掻部の櫓や舵に似た形態のものに分けられる。通常は柄末端部に握部が装着されていたようであり、挿入された柄や目釘の残る「T」字形や「Y」字形の櫂握部が出土している。出土した完形の早櫂の柄部は長く、高い舷側板の舟に使用されていた可能性がある。

なお、早櫂水掻部にアイウシ文やメカジキ（シリカㇷ゚）の線刻画の描かれたものは、アイヌ民族資料には皆無である。メカジキの吻骨は回転式離頭銛先の素材にもなり、アイヌのメカジキ漁に深く関係する櫂と考えられる。この櫂は水上交通および漁撈活動に伴う精神生活の検討に欠かせない重要な遺物である。アイヌにとってメカジキは海の神様（レプン・カムイ）であり、数篇の神謡が残されている。メカジキは7月から11月にかけて胆振から日高沿岸を回遊し、噴火湾沿岸の白老から幌別沖が好漁場であったとされる。通常は漁場に向かうまでは車櫂で漕ぐが、メカジキを発見すると早櫂に変えたらしい。それは、車櫂の場合では漕ぐときに波音が立つため、その音でメカジキが逃げてしまうからであったと言われる。メカジキの肉は普通煮て食べるが、薄く切って乾燥させ保存食としたり、眼玉の皮や背椎の髄などを鉈でたたいて、これに眼玉の汁とアイヌネギを混ぜ合わせたチタタップという料理が特に珍重されたらしい。

車櫂には軸差込孔があり、櫂受軸（タカマチ）に差込んでオールのように漕ぐタイプのものである。軸差込孔の周辺はやや太く、孔は水の抵抗と回転運動のため楕円形に摩耗している。車櫂はすべて柄から軸差込孔にかけての部分や軸差込孔の周辺部の破片であり完形のものはない。軸差込孔が2か所穿孔されているものは、水の抵抗や水面の高さに合わせて回転軸の長さを変えるための構造であろう。車櫂の出土は、この地点まで板綴舟が往来していたことを示すものである。

早櫂・車櫂、櫂握部、櫂受軸部の樹種はモクレン属が多く、サクラ属、コナラ属、ハリギリ属、カエデ属、ハンノキ属、トネリコ属、スギ属、モミ属等の樹種がある。早櫂には握部と櫂本体の樹種が異なるものもある。櫂・櫂握部・櫂受軸部にイトゥパが刻まれているものは、アイヌの丸木舟や板綴舟の舟具であり、本州や道南の黒松内以南に自生が限られるスギ属のものは、アイヌの板綴舟を模倣した松前藩の縄綴舟や和舟の舟具であった可能性を考慮する必要がある。

アイヌの舟や櫂については蝦夷拾遺（山口高品　1786年）、蝦夷島奇観（村上嶋之丞　1799年）、蝦夷器具図式（谷　元旦　1799年）、蝦夷生計図説（村上貞助　1823年）等に写生や風俗画として詳細に記録されている。アイヌの丸木舟、舟の雛形・模型は各地の博物館、資料館に多数収蔵されており、特に雛形や模型は舟の細部構造・櫂等を詳細に復元したものが多い。しかし、他の民具資料同様に採集年代は明治時代以後であり、多くのものは採集地や採集年代が不明である。また、アイヌの丸

木舟に関する研究は少ないが、堀江敏夫氏（1971年）や犬飼哲夫（1969年）の論文に詳しい。しかし、櫂そのものにはあまり触れられていない。出土舟には、苫小牧市沼ノ端勇払川（苫小牧市教育委員会1966年）で発見された5艘の丸木舟や千歳市ママチ川出土のものがある。苫小牧市出土のものはTa－b層から発見されたものであり、本遺跡の櫂の年代に近い資料である。また、そのうちの2艇は舷側に穿孔された孔が連なる板綴舟であった。他の艇から発見された棹や櫂の端には本遺跡同様にイトゥパが刻まれており、櫂の長さや幅も本遺跡のものに近く興味深い資料である。

櫂や舟用具は「ユウフツ越」等の原形となる交通の拠点としての舟着場の存在を示すものである。メカジキの線刻画の描かれた櫂、回転式離頭銛などの漁撈具は内陸のアイヌの漁猟基地的性格を推測させ、河川・湖沼・海上での漁猟活動や他地域との交易が盛んであったことを示す貴重な遺物である。メカジキ等の漁撈期や海獣猟期にはここから太平洋に舟出したり、往来する和人に舟を誂え行程の道案内や荷役を行っていたのであろうか。交通利便地という立地条件や多種多様な遺物から、アイヌ対アイヌ、アイヌ対和人との交易拠点的な性格を持っていたとも推測でき、今後は北方地域との物質文化の関わりについても考慮する必要があろう。今後の調査ではアイヌ独自の生活用具、和人との交易による生活用具、和人の生活用具またはそれらの再加工品、北方との交易品等にできる限り遺物を整理し、複雑に絡み合った当遺跡の性格を検討する必要がある。また、アイヌ独自の生活用具については、製品の形態や樹種選択等および製品に付されたイトゥパを比較検討し、他地域のアイヌとの関わりや当時のイオル（生活・狩漁領域）の概念を再検討する必要がある。　（田口　尚）

引用・参考文献

アイヌ文化保存対策協議会編（1969）『アイヌ民族史　上』第一法規
伊藤裕満（1986）「白老地方におけるシリカヴ漁の事例(上),(下)」『アイヌ民族博物館だより No.11,12』
大塚和義（1981）「失われたアイヌの儀礼」『アニマ』
萱野　茂（1978）『アイヌの民具』すずさわ書店
久保寺逸彦（1977）『アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究』
古泉　弘（1985）「キセル」『江戸　都立一橋高校地点発掘調査報告』
佐藤三次郎（1938）『北海道幌別漁村生活誌』アチックミューゼアム
鈴木　信（1992）「美々8遺跡低湿部の調査」『考古学ジャーナル12』ニューサイエンス社
田才雅彦（1983）「北大式土器」『北奥古代文化14』
谷元　旦（1799）『蝦夷風俗図式』『蝦夷器具図式』〔大塚和義監修（1991)〕安達美術
千歳市教育委員会（1979）『ママチ川丸木舟遺跡発掘調査概要報告書』
苫小牧市教育委員会・市立苫小牧図書館（1966）『苫小牧沼ノ端丸木舟発掘調査概要報告書』
名取武光（1972）『アイヌと考古学（一）.（二)』北海道出版企画センター
林　善茂（1969）『アイヌの農耕文化』慶友社
プロジェクトシーズ（1989）『Projeict Seeds News No. 1，2』
㈶北海道埋蔵文化財センター（1986）『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北埋調報26
〃　（1989）『小樽市忍路土場遺跡』　北埋調報53
〃　（1990）『美沢川流域の遺跡群』XIII　北埋調報62
〃　（1991）『美沢川流域の遺跡群』XIV　北埋調報69
〃　（1992）『美沢川流域の遺跡群』XV　北埋調報77
村上貞助（1823）『蝦夷生計図説』〔河野本道・谷澤尚一解説（1990)〕北海道出版企画センター
村上嶋之丞（1799）『蝦夷島奇観』〔佐々木利和・谷澤尚一解説（1982)〕雄峰社
山口高品（1786）『蝦夷拾遺』

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第83集

美沢川流域の遺跡群　XVI

―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第2分冊

平成5年3月26日　発行

編集　財団法人北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011)561－3131

印刷　興国印刷株式会社

〒063 札幌市西区西町南13丁目1番40号

TEL (011)665－4155